

インクルーシブ社会研究 1
Studies for Inclusive Society 1

日中の戦後世代を対象にした
新たな東アジア型歴史・
平和教育プログラム開発
～国際セミナー「南京を思い起こす 2013」の
記録と HWH7 年の成果

开发以中日战后世代为对象的新型东亚历史与和平的教育方案
- 国际研讨会“记忆南京 2013”的记录和 HWH7 年的成果 -

An innovative Peace/History Education Program for the
Chinese and Japanese Post-War Generation:
Report on “Remembering Nanjing 2013” and Achievement
and Prospect of a Seven Year HWH Project

編集担当：村本邦子
Editor: Kuniko Muramoto

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた修復的支援の研究チーム

Translational Studies for Inclusive Society:

MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities.
Research on Restorative Support for Inclusive Society Team

2014 年 3 月

はじめに

2007 年より、アルマンド・ボルカス氏によって開発された HWH (Healing the Wounds of History) の手法に基づく体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発に取り組んできた。なかでも、2009 年、2011 年、2013 年、南京にて開催した 3 回の国際セミナーと、2012 年、京都にて開催した国際シンポジウムは、南京師範大学 (中国)、立命館大学 (日本)、カリフォルニア統合学研究所 (米国) との学術的協力関係に基づき開催されている。尚、本研究は、立命館大学と日本文部科学省科学研究費の助成金 (JSPS 科研費 23310189)、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連環型研究」の助成を受けており、これまでの経過は、

- 戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)
- 歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 人間科学と平和教育：体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から (<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)

として公開しており、本著は 2013 年セミナーの記録と 7 年間の成果の経過報告である。

私のもとには、国境を越えて平和を模索するメールが毎日のように届き続けている。今、日中の政治状況はかつてないほど厳しいものとなっているが、これまで手を携えて共に歩んできた私たちの確かな歩みを糧に、これからもひるむことなく前進していきたい。

2014 年 1 月 1 日 村本邦子

开头语

从 2007 年开始，我就致力于运用由阿芒德·沃卡思开发的 HWH (Healing the Wounds of History) 技法来开发历史·和平教育方案，这个技法是以体验心理学为基础的团体方法。已经完成的活动有，于 2009 年，2011 年，2013 年，在南京举办的三次国际研讨会，于 2012 年，在京都举办的国际研讨会。这些活动都是以南京师范大学（中国），立命馆大学（日本），加州统合学研究所（美国）的学术合作关系为基础，由立命馆大学和日本文部科学省的研究经费（JSPS 科研费 23310189），文部科学省私立大学战略性研究基础形成支援事业「Translational Studies for Inclusive Society」的支持而举办的。至今为止的过程是：

●战争加害引发的心理创伤以及其世代间连锁关系及和解修复的尝试：国际研讨会“记忆南京 2009”的纪录

(http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)

●历史心理创伤的世代间连锁与和解修复的尝试：“记忆南京 2011 年”的纪录

(<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)

●人类科学和和平教育：以体验心理学为基础的历史·和平教育方案的开发

(<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)

而本书是 2013 的纪录以及这 7 年的成果的经过汇报。

每天都有越过国境探索世界和平的电子邮件寄到我的案头。而如今，中日的政治状态比之前任何时候都要严峻，我希望能够以我们携手走过的这些历程将凝聚成一股能量推动我们继续勇敢向前。

2014 年 1 月 1 日 村本邦子

Introduction

Since 2007, we have been working on developing a history/peace education program that is based on *Healing the Wounds of History* by Armand Volkas. We held seminars in Nanjing in 2009, 2011, 2013, and an International Symposium in Kyoto in 2012 with the collaboration of Nanjing Normal University (China), Ritsumeikan University (Japan) and California Institute of Integral Studies (U.S.A) and with the assistance of grants by Ritsumeikan University and Japan Ministry of Education and Science Grants Aid for Research (JSPS KAKENHI Grant Number 23310189) and Translational Studies for Inclusive Society: MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities.

We have published the past reports as follows,

Generational Transmission of War Trauma and Efforts for Reconciliation
International Seminar: Remembering Nanjing 2009

http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html

General Transmission of War Trauma and Approaches to Reconciliation and
Restoration: Report on “Remembering Nanjing 2011”

<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>

Human Science and Peace Education: From a viewpoint of developing a
history / peace education program based on experiential psychology.

<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>

This booklet is a report of the 2013 seminar as well as the past 7 years of our research effort. Everyday I receive E-mails from my international colleagues who are in search of peace across borders. Japan’s political situation seems more tense than ever, but I would like to keep stepping forward fearlessly

with people who have come this far holding each others' hands.

January 1st, 2014 Kuniko Muramoto

目 次

はじめに	村本邦子	1
开头语	村本邦子	2
Introduction	Kuniko Muramoto	3

第Ⅰ部 「南京を思い起こす 2013」の記録

1. プログラム 国際セミナー「南京を思い起こす 2013」 — Healing the Wounds of History (歴史の傷を癒す) による平和構築 Part.3 —		10
2. 2013 年 9 月 17 日 (火)		11
3. 2013 年 9 月 18 日 (水)		16
4. 2013 年 9 月 19 日 (木)		23
5. 2013 年 9 月 20 日 (金)		29

第Ⅱ部 参加者レポート

1-1 南京セミナーに参加して	藤原佳世	32
2 Experiencing Nanjing		
2-1 回顾 2013 南京治愈战争创伤工作坊	沈瑜	34
2 Remembering Nanjing 2013		
3-1 シナリオ通りにいかなかったストーリー	金湖蓮	37
2 与剧本渐行渐远的剧情		
4-1 「南京を思い起こす 2013」に参加して	菅原悠治	41
2 参加“追忆南京 2013”之感想		
5 Some left words	Tao Lin-jin	44
6-1 礼节乎？真情乎？——回忆南京 2013-HWH 工作坊	程世利	45
2 礼儀か？真心か？～南京を思い起こす 2013— HWH ワークショップ		
7-1 怀着善意成长—工作坊感想文	陈宝安	50
2 善意を持って成長していこう～ワークショップについての感想		

8-1	南京との新しい始まり	奥本京子	53
2	New Beginning with Nanjing		
9-1	2013 中日戦争创伤工作坊之感	占丽娟	56
2	中日戦争トラウマを癒す 2013 ワークショップの感想		
10-1	記憶南京 2013	丁振伟	60
2	南京を思い起こす 2013		
11-1	2013 “回忆南京” 感想文	熊春燕	64
2	「南京を思い起こす 2013」 感想文		
12-1	戏剧治疗工作坊参后感	翁晶	69
2	ドラマセラピーワークショップについての感想		
13-1	“回忆南京 2013—HWH 工作坊” 之我感	燕振	75
2	「南京を思い起こす 2013—HWH ワークショップ」の感想		
14-1	2013 年工作坊感想	王新菊	80
2	2013 年 ワークショップへの感想		
15-1	忆 2013 南京中日戦争戏剧工作坊	王丽华	83
2	2013 南京日中戦争トラウマ・ドラマセラピーワークショップ		
16-1	参加“战争创伤”工作坊的感想	朱丹	89
2	「戦争トラウマを癒す」ワークショップの感想		
17-1	“回忆南京 2013” 工作坊感想文	滕心瑶	92
2	「南京を思い起こす 2013」ワークショップについての感想		
18-1	“回忆南京 2013”	劉豆	93
2	「南京を思い起こす 2013」		
19-1	随想	周俊君	96
2	HWH ワークショップの参加随想		
20-1	历史的伤痕 —为了和平构筑能做什么—	郑平阳	99
2	歴史の傷痕～平和構築のために何ができるのか		
21-1	南京戦争創傷感想	陳揚	102
2	南京戦争トラウマ活動の感想		
22-1	参加“回忆南京 2013” 的感想	高謹	104
2	「南京を思い起こす 2013」に関する感想		
23-1	南京セミナーの感想	馬潔	108
2	参加“回忆南京 2013” 的感想		

24-1	感想	村川升麻	111
2	Report		
25-1	「南京を思い起こす 2013」参加者感想	笠井綾	113
2	Remembering Nanjing 2013 Participant Report		
26-1	“回忆南京 2013” 国际研讨会的感想	羅萃萃	123
2	国際セミナー「南京を思い起こす 2013」の感想		

第 III 部 日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発 ～ HWH7 年の成果

1-1	“南京记忆”：中日和解的种子	张连红	140
2	「南京を思い起こす」中日和解の種		
2-1	「南京を思い起こす」7 年間の成果と今後に向けて ～歴史のトラウマと出会いのワークショップ HWH～	村本邦子	148
2	「回忆南京」7 年の成果和今后的展望 ～与历史心理创伤相识的工作坊 HWH～		
3	“Remembering Nanjing” Results from the last 7 years and our future plans HWH: A workshop focused on building new relations through examining history and its traumas		
3-1.	Healing Collective Shame and Guilt	Armand Volkas	185
2	集団的な恥辱感と罪責感を癒す		
4-1	南京を思い起こす 2011 参加者インタビュー経過報告	笠井綾	216
2	Remembering Nanjing 2011 Participants Interview		
5-1	直面创伤 共同成长	陶琳瑾	230
2	トラウマに直面しながら共に成長していく		
6-1	文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方	村川治彦	241
2	Cultural and National Identity and Responsible Subjectivity		
7-1	「南京を思い起こす 2013」に参加して	中村 正	261
2	参加「回忆南京 2013」		
3	“Remembering Nanjing 2013” Participant’s Report		
8-1	参加《回忆南京》项目随想	桑志芹	267
2	「南京を思い起こす」に参加した随想		

第 I 部

「南京を思い起こす 2013」の記録

1. プログラム

国際セミナー「南京を思い起こす 2013」 — Healing the Wounds of History (歴史の傷を癒す) による平和構築 Part.3 —

2013 年 9 月 17 日～9 月 20 日、中国南京市、南京師範大学にて

このセミナーは、異なった戦争体験と教育を受けた日本人、中国人が、日中戦争と南京の悲劇について共に学び、心を開き、お互いの声を深く聞く事を目的とします。参加者は、記念館見学、生存者の証言などを通して日中戦争と南京の悲劇について共に学び、感じる事を分かち合い、過去の戦争が現在の私達の社会や自己のアイデンティティーにどのような影響を与えているか、また、私達はそのような過去を越えて、平和な未来のために何ができるのか、ドラマセラピーや表現アーツの手法を使いながら、共に感じ、考えていきます。

9 月 17 日 (火)	9～12 時：オリエンテーション 13～18 時：南京記念館見学とシェアリング
9 月 18 日 (水)	9～12 時：HWH ① 13～18 時：生存者証言、HWH ②
9 月 19 日 (木)	9～12 時：HWH ③ 13～18 時：HWH ④
9 月 20 日 (金)	9～12 時：燕子磯での追悼式 午後：学術シンポジウム「戦後世代の歴史平和教育」

※ HWH プログラム -Healing the Wounds of History は、アルマンド・ボルカス氏自らがホロコースト生存者の 2 世であることから、葛藤を抱える民族間の和解の為に開発した平和教育プログラムです。HWH プログラムはクローズドで行ないます。

場所：南京師範大学、および関連施設

定員：日中からの参加者それぞれ 20 名程度

主催：立命館大学大学院応用人間科学研究科、南京師範大学心理学院、南京大虐殺研究センター、
CIIS 大学院

問い合わせ：立命館大学大学院応用人間科学研究科

村本邦子 muramoto@ss.ritsumei.ac.jp

※本企画は、文部科学省「科学研究費基盤（B）：日中の戦後世代を対象にした新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発」（課題番号 23310189）、および立命館大学研究推進プログラム（基盤研究）「平和教育施設を使った戦後第三世代の歴史教育に関する研究」の助成を受けて実施します。

2. 2013 年 9 月 17 日（火）

2-1 イン트로ダクション

村本邦子：みなさんお集りいただきましてありがとうございます。2007 年に初めて南京に来てから今回で七回目の訪問になります。セミナーの形では四回目になります。いつも温かく迎えてくださりお力添え頂いております張先生、羅先生、ずっと一緒にやってきたアルマンド先生、村川さん、笠井さん、集まってくださった参加者のみなさんに感謝します。今回は少し日本人の参加者が少なくして申し訳なく思っていますが、みなさま有意義な時間を過ごして頂けるよう願っています。

張連紅：尊敬するボルカス先生、村本先生、ご在席のみなさま、おはようございます。今はちょうど秋で金木犀の香りが漂い、南京としては一番素晴らしい季節です。村川先生やボルカス先生が作ってくださったこのワークショップが南京師範大学で正式に行なわれるのは三回目です。毎回やってこれたのは、村本先生、ボルカス先生及びみなさまのおかげです。心から参加者のみなさんに感謝します。

周知のように、人類の歴史の中では、戦争がたくさん起こりました。戦争は、政治家達が、自分の気持ちに従って起こしたり、仕掛けたりしたものでした。そういう戦争の影には、無数の亡くなった命や財産の喪失がありました。そういった戦争が人間の心にもたらすトラウマについて、今、目を向けるようになりましたね。実は今、人類社会の中で人々がかかる病気は、怨みや悩みと繋がっているものが多いのではないのでしょうか。心理から発生する病理が社会に様々な問題をもたらしました。そういったものに対して、心理学者はその源に目を向けるようになりました。ボルカス先生は、心理治療でそういったテーマを扱っておられます。そして村本先生がこのワークショップを立命館大学で研究課題としてできるようにしてくれました。

中日戦争が発生したのは1930年代、1940年代ですが、私達はその頃からの病気にかかっているのかもしれない。こういったワークショップに参加することで、自分の病気を治す、また社会にもこういったことを広げて行きたいと思います。第一回、第二回のワークショップの効果はとても素晴らしいと思います。ですから今回もより素晴らしい効果が得られるよう期待しております。三回目の行なわれる期間は、中国の仲秋節で、一家で団らんをする時期です。みなさんは世界各国から集まって、南京師範大学で一家のように団らんし、楽しい中秋節を一緒に過ごしましょう。三回目のワークショップが成功するようにお祈りいたします。



村川治彦：ボルカス先生は、カリフォルニア統合学研究所の教授であり、心理療法家であり、ドラマセラピストでもあります。ユダヤ人とドイツ人のワークを1980年代からはじめ、1990年代には、色々な国や文化間の葛藤をテーマに扱っていらっしゃいました。四日間、戦争という重いテーマですが、楽しいエクササイズも交えて楽しみながらやっていけたらと思います。

アルマンド・ボルカス：ここにお招き頂き、ありがとうございます。南京師範大学で私のスキルを歴史のトラウマを癒すために捧げることができるのはとても光栄です。張先生、このような集いを開催してくださり、ありがとうございます。また、準備のために尽力くださった同僚のみなさんに感謝します。

私はドラマセラピストであり、心理療法家であり、また演劇ディレクターでもあります。私はドラマをセラピー的、教育的に使います。このようなワークをするのが初めての方も多いと思いますが、最初は私がみなさんにやってくださいと言うことは少しくレイジーだと感じるかもしれません。しかしそれには目的があります。みなさんの自発性や想像力を引き出すためです。それは、みなさんが抱えていると意識している、または意識していない歴史を扱うために必要なことです。

ここにいる多くの人は戦争世代の3世にあたるでしょう。これが自分とどの

ように関係するのか、苦しみは自分に起こったわけではないと思われるかもしれませんが、しかし、ある世代の傷は癒されなければ世代を超えて連鎖するということがたくさんの研究を通して明らかになっています。ワークの目的の一つはみなさんが、普段意識していなくても、自分が抱えている、または抱えていないことを自覚することです。一步一步、テーマに近づくようガイドします。ドラマセラピーは遊び心に満ちていますが、普段ある心の壁を取り払う効果があります。みなさんは十分に自己ケアをして、もしやりたくないことがあったら、ノーと言ってください。穏やかにやって行きたいと思います。まずは、みなさんがお互いを十分に知り合って、そこでテーマに近づいて行くための安全な囲いを作ります。では説明はこのくらいにして、プロセスを実際に行なって行きましょう。

2-2 HWH ワークショップ

ウォームアップ

Name and Movement (名前と動き) :「自分の名前に動きつけて今の感じを表現してみてください。グループのみんなはそれをミラーリングしてください。」

Imaginary Object (想像の物) :「イマジネーションを引き出すエクササイズです。想像の物をまわしますので、どんどん隣の人にまわしてください。」

熱い焼き芋、手乗りインコ／てんとう虫、希望／絶望など

Magic Clay (魔法の粘土) :「3〜4人組になります。言葉を使わずに、粘土を好きなものに変えて、まずそれを使ってください。そしてそれを次の人にわたします。わたされた人はそれをまず使ってから、また粘土を捏ね直して好きな物を作り、それを使ってから次の人にわたします。」

Lightening Rounds (雷回し) :「また大きなグループの輪になって、音と動きをウェーブのようにまわします。」

Here to There (ここからあそこへ) :「部屋の端から端へ、好きなように移動し

てください。なるべく声や言葉を使ってください。」

Here to There in Pairs (ペアでここからあそこへ) :「今度は二人一組になってやります。突然何かのシーンを始めても良いです。事前に何をするか相談をしないで突発的にやってください。」



Role Play (ロールプレイ／ペアワーク) :「ドラマセラピーでは、役を付けたり落としたりするので、その練習をします。今から役を与えますので、その役になりきって 30 秒ほど演じてみてください。」

入国審査官／怪しい旅人

子供の交遊関係を好ましく思っていない親／好きに遊びたい子供

レポート書きに行き詰まっている学生／白紙のコンピューター又は原稿用紙
アルコール依存症の人／お酒

津波／日本

大気汚染／北京

Human Sculpture (人間彫刻／ペアワーク) :「一人が自分の体で彫刻を作ったら、もう一人はそれに対して関係した彫刻を自分の体で表現します。それを繰り返します。」

Imaginary Present (想像のプレゼント／ペアワーク) :「一人がある大きさや重さをしたプレゼントをパートナーに渡します。パートナーはそれが何であるか想像し、「ありがとう、素敵な○○!」と言って受け取ります。それを交代でくりかえしやってみてください。」

Role Play（台詞を使ったロールプレイ）：

ください／だめです

ひどいよ／ごめんなさい

小グループでのシェアリング

2-3 南京虐殺記念館見学と HWH によるシェアリング



3. 2013年9月18日(水)

3-1 HWH

Sound and Movement (音と動き) :「音と動きをします。みなさんは、それをミラーリングしてください。」

Mask (お面) :「お面をつけているかのように、自分の顔にある表情を作ります。それを取り外して、隣の人にわたしてください。受け取った人はそれをつけてみます。つけてみたらそれをまた外して、新たなお面を作ります。それをまた外して次の人に渡します。」

Reacting to the Word (言葉に反応する) :「今から、〇〇の言葉に反応してくださいと言います。そうしたら、自分の体を使ってその言葉に反応する彫刻を作ってください。周りの人を気にせず、イメージを自分の中に一旦取り込んで、それを体で表現する練習です。」

例：不安、葛藤、切望、渴望、平和構築、怒り、など

Checking in (チェックイン) :「この彫刻のエクササイズを使って、チェックインをします。今の感じを1文で表現してください。例えば私は『重さを感じる。』と言います。ホロコーストの子孫なので、南京とホロコーストの両方をホールドすることの重さです。みなさんは、私に共感して、先ほどのように体の彫刻で表現してみてください。みなさんは私の気持ちに反応しているのです。私の体験をミラーリングしてくださっているのです。私の体験を尊重しているのです。文を言った人は、みんなの反応をよく見て味わってください。」

Formative Moment (アイデンティティーの形成に影響を与えた出来事) :「自分の記憶を辿って、自分が形成される上で重要な出来事を思い出してください。例えば、私の出来事は、家の引き出しを空けたら、死体が薪のように積み上げられた写真を見つけた時です。また別の出来事は、中学生のときいじめっ子に突き飛ばされて、人種差別的なことを言われたことです。また別の出来事は父と戦争のドキュメンタリーを見ているときの、父の催眠にかかったような表情

を目の当たりにしたときです。これらが私のアイデンティティーの形成に影響を与えた出来事です。もしかしたら、歴史のクラスの中での出来事かもしれませんし、祖父母から聞いた話かもしれません。中国人、または日本人であることに対しての偏見的なコメントかもしれません。今からグループに分かれて、このような記憶について何か一つで良いのでシェアしてみてください。戦争の話でなくても構いません。私のいじめっ子の話は、直接的には戦争と関係していませんが、歴史や人種差別と関連しています。例えば自分のアイデンティティーに誇りを持った出来事でも良いのです。自分が自分のことをどんな風に感じるかということに、何が影響を与えているのか着目してみるワークです。3人組で一人5分くらいでシェアしてみてください。」



記憶をみんなで演じる：「誰か一人のお話を、みんなで演じてみてください。それをグループごとに発表します。」

全体シェアリング：「個人の体験は、皆さんのアイデンティティーの形成に影響を与えていることを理解するためのエクササイズをしました。みなさんと戦争はどのような関係があるのでしょうか。これから昼食をとって、午後は幸存者のお話をみんなで聞くわけですが、今からこのスカーフをまわしますので、今朝のエクササイズを通して感じたことや疑問に思った事があれば、自由にシェアしてください。」

3-2 幸存者証言

幸存者：この話を思い出すとすぐに悲しくなります。南京大虐殺のとき、私は6つでした。そのとき日本軍が南京にやってきました。まず空爆です。南京市民はみんな防空壕をつくっていましたので、飛行機がやってくるとみんな中

に逃げるのです。毎日毎日空襲がありました。とうとう日本兵士が南京城に入ってしまった。飛行機が来る時はサイレンがありましたが、日本軍が入って来た時はサイレンもなく、人々は洞窟に入りませんでした。日本軍は、入って来てすぐ、あちこちを焼き払いました。灰ばかりになり、人々は洞窟の中に入ってしまった。うちの家族はその時は5人でした。私の家族と一緒に隠れた洞窟は日本兵に見つけられました。その洞窟の中には100人くらいいました。今日は簡単に話します。本当に話し始めたら長い時間かかります。



日本兵は洞窟の中に人がいることを確認して、3人が入ってきました。私の家族は5人でしたが、その場で3人殺されました。日本軍が外から中を見ても暗くてあまり見えませんが、人がいると確認したので機関銃でそのまま30分くらい掃射したんです。その時、母ともう一人は向かい側に隠れて、私ともう一人がこちら側の死体の後ろに隠れていました。だから私はたまがあたりなかったのです。日本兵は5時までに戻らなければならないので、中に入って色々物を探しました。そのとき赤い物を着たおばあさんが動きました。日本兵は何度も何度もおばあさんを射ちました。そして足で蹴って動かなくなるのを確認しました。私は死体の後ろに隠れてじっとしてそれを見ていました。

五人家族、父、母、姉妹で洞窟に入っていましたが、私のおじいさんは別の所にいました。その時誰かがおじいさんに、日本軍が洞窟に入ったので、家族が殺されてしまったかもしれないことを伝えました。おじいさんは洞窟の中に入り、日本人は行ってしまっって、真っ暗で何も見えませんが、家族の名前を叫びました。当時の私の名前はターチャオ、3歳の妹はアーチャオ。おじいさんは「ターチャオ、アーチャオ」と呼びました。その声に答えておじいさんのところに行きました。父、母、一才の妹がどこにいるかわからないので探す、3人は抱き合うようにして死んでいました。3人で泣きながら家族の死体を見つけました。おじいさんは二人を洞窟の外に連れ出し、生きている人を探して中に入りました。お母さんと息子の親子を連れ出しました。お母さんは怯え、息子は精神的におかしくなっていました。またおじいさんは男性を連れ出しま

した。この人は銃に射たれて足が折れていました。そして、おじいさんは、男性をもう一人助け出しました。他にも生きている人がいたようですが、その時はそれ以上助けることができませんでした。その時の男の子は今でも生きていて86歳です。私と同じように、記念館などでも南京大虐殺のことを証言しています。

みんなでそこを離れて、近くの小屋に入りました。100人くらいの人が跪いていました。どこかから米を探してきてお粥を作りました。3歳の妹はお腹がすいて泣きました。周りの人は、やっと生き残ったのに、泣いたら日本兵に見つかってしまうから泣かないようにと言いました。私は妹に泣かないように言いました。みなさん、考えてください。両親が死んでしまった。しかしそれでも泣いてはいけないと言われて、本当に泣きたくて泣きたくても、泣けない。本当に辛かったです。

そのときまた日本人がやってきました。日本人にはいい鬼と悪い鬼がいて、いい鬼が来ました。「何をしているのか」と、みんなに訊ねました。二人姉妹の両親が殺されたことやさせられたことを伝えました。するといい鬼は薬を取り出して妹につけました。だから日本人が全部悪いものではない。おじいさんは翌日二人をお寺に連れて行きました。途中は死体が山のように、私達も周りもみんな血だらけです。私はその時、6歳でしたが、その日見たことをありありと覚えていて、全然忘れられない。

お寺の防空壕に行こうとしていると日本人が桶を持ってやってきました。そこに入っているのはガソリンです。その防空壕も日本人が機関銃で掃射したものです。まだ生きている人もおり、死体がたくさんあるので、ガソリンをかけて燃やしました。おじいさんが、向こうに行ってはいけないと言い、お寺に戻りました。洞窟の中には何百人もいたと思います。翌日また日本人がお寺に来ました。私達は怖くなって泣きました。おじいさんは、そのときそばにいた3人のおばあさんに、「もし自分が日本兵に連れて行かれたら、孫をよろしく頼む」と言いました。私達にも、「もし戻って来なかったら、おばあさん達の言う事をよく聞くように」と言いました。サイ、チョウ、カク、という名前のおばあさんでした。私の目から見ればおばあさんですが、祖父の目から見ればお姉さんです。おじいさんが、3人のおばあさんに、「3人のお姉さん、この子達の両親は殺されました。もし戻って来られなかったらお願いします」と言いました。

おじいさんは連れて行かれ、私達は周りの人に泣かないように言われ、とて

も辛い思いをしました。しかし、その日は運がよく、夜になったら戻ってきました。でもまた朝が来ます。そして命はありますが、食べ物がありません。どこかに行くにしても、死体を超えて行かなければならない。翌日になるとまた日本兵がやってきて、おじいさんを連れて行き、夜になると帰ってきました。三日目か四日目になってもおじいさんは帰ってきましたが、食べ物がないので、おじいさんは夜になると、物売りがいないかとあちこち歩き回りました。そのとき皮蛋を見つけました。その時は冬で大雪でした。その辺にある木材を拾って来て、それを燃やして皮蛋を焼いて食べました。

そのような状況で3~4日経って、一回目にやって来た日本軍が戻っていくと、日本軍はまたおじいさんを連れて行きました。私達が住んでいた所からそんなに遠くない別の家で、おじいさんは、帰る前にお風呂に入りたい日本人のためにお湯を沸かすことをさせました。ちょうどお湯を沸かしていた時に一人の日本兵に中国語で話しかけられました。「実は私は中国人ですが、日本に行ったので、日本軍にいます。私の部隊はもうすぐここを離れますから、あなたは私達と一緒に行かなければなりません」と言いました。おじいさんは、「私には二人の孫娘がいます。両親はあなた達に殺されました。私が戻らなければ二人は死んでしまう。連れて行かないでください」と、なんとか頼みました。その人は紙切れに何か書いて、次の日、日本軍が来たらそれを見せるように言いました。孫娘をはやくどこかに連れて行くように、今回の日本軍は殺すばかりでしたが、次回は何をするかわからない。そしてお金のようなものもくれました。

1回目の日本軍が荷造り、片付けをして行く前に、一緒に来いと指図しました。おじいさんは、孫がいること、その子達の両親が殺された事を伝えようとしたのですが、日本軍の人は表情でダメだと伝えました。おじいさんは、書いてもらった紙を見せました。日本軍はおじいさんを連れて行くのをやめました。次に来た日本軍は、またたくさん悪い事をしました。その時、南京には若い女性の姿は全然ありませんでした。若い人を見たら強姦してしまうんです。それだけでなく、殺してしまうんです。ですから若い女性の姿が全然ない。木材を燃やして灰になったものや、鍋底の煤を顔に塗ったり、髪をメチャクチャにして、醜い姿にしてどこかに隠れています。

2回目に来た日本人は1回目に来た日本人よりは少しましで、メチャクチャに人を殺しはしませんでした。でもそれでもやはりみなさん想像できないほどたくさん悪い事をしました。よく女性を見ては強姦しました。3人でも10

人でも、とにかく強姦してから殺してしまう、というような状態でした。南京の人々は逃げたり死んだり家もなく、おじいさんは私達を連れて、家のようなものを作り、もらったお金を3人のおばあさんに分けました。食べ物も拾ってきたり、なんとかしのいでいました。真冬に何とか拾って来た皮蛋を食べるのですが、そのまま食べると妹は口から泡が出て、口の周りがただれてしまいました。妹はお腹も口も痛くて毎日泣いていました。

2年後に8歳、妹が5歳になったとき、おじいさんが病気になってしまいました。おじいさんは、私達を心配して病床に呼びました。おじいさんは、今回の病気はとても重くて、どうなるかわからないので、3人のおばあさんにまた私達の世話を頼みました。私達は「捨てないで」と泣きました。おじいさんは、「捨てるのではないけど、どうなるかわからない。もし生きられたらあなた達を成人させて嫁に行かせる。でも、生きられなかったらどうしようもないから、人に頼むんだよ」と言いました。

私はコという家の嫁になるように決まり、妹は石さんの家に行くように決めました。ある日、妹と外で遊んでいたら、「早く家に帰りなさい。プレゼントを持って誰か来ているよ」と言われました。家に戻ると、その家の人々が、私達を嫁としてもらうためにやって来ていました。まだ子どもですから、私は泣きました。でも、おじいさんがもう長く生きられないかもしれないと言うので、仕方なく承知しました。私達はそのまま各家に連れて行かれました。コさんの家は子どもが7人いて、4番目の子どもが私の夫にあたる人でした。私はいつもみんなの最後にご飯を食べていましたから、いつも飢えていました。お腹いっぱい食べる事もないし、色々苦勞しました。

幸いおじいさんは死ななかったんです。おじいさんの家は、コさんの家からそんなに遠くないんです。おじいさんはいつも川に行って魚や蝦をとって生活していましたので、いつも家に帰って魚や蝦をもらって帰りました。南京のことがあってから、1日もいい日を過ごした事はありませんでした。その後、私は16歳になり、4歳上にあたる人と結婚することになりました。しかし、何も持っていないし、何もわからないし、ただ恥ずかしい。翌年17歳のとき、やっと結婚しました。

子どもも生まれましたが、私の生活は今でも苦しいです。息子が48歳ですが、それでも生活は苦しいです。生活はずっと貧しくて、上の息子は先月8月23日、61歳で亡くなりました。もともと基礎がありませんのでいい仕事につくことも

できず、誰よりも早く失業してしまいました。今は48歳になる末息子と生活しています。彼も体が弱く、病気だらけで、嫁も体が弱く、孫もあまり健康ではありません。私も心臓病で薬を持ち歩いています。とにかく生活は苦しくて、苦しくて、昔の記憶も大変です。昔の事を話しても誰も助けてはくれないし、話してもしようがないんです。とにかく南京で日本人がやったことをみなさんにお伝えしました。

私も82歳ですが、政府や周りの人々に少しずつ助けられ、8つの国に話をしました。日本へも行きました。そのとき一人の日本人のおじいさんと息子が来ました。実は、おじいさんは日本兵で、南京にいました。彼は自分の息子と孫と家族を連れて来て、私の前で跪きました。「悪いことをしてきましたが、これからなんとかおばあさんの苦しみを軽くするように何かしなければならない。中国人は復讐をしなかったので、恩返しをしなければならないよ」と話しました。私もみなさん若者に話したいです。特に日本の若者のみなさん、聞いてください。先輩のように人を殺したりしないでください。私は82歳ですが、国民党も共産党も経験しましたが、そのときの日本人ほど悪いものを見たことはありません。人を殺すときに瞬きもしないような、そういうやり方は絶対にしないでください。

今日はこれで終わります。心臓がまた痛くなりました。みなさんは若くて勉強中ですから、いいものを勉強してください。政治家になってから悪いことをしないでください。本当に人を殺さないように、いい勉強をして、悪いことをしないように。以上です。

参加者コメント、質問など

3-3 HWH

ボルカス：休憩時間に何人かに感想を聞くと、ショックや重さ、気持ちを表現したい、またはしたくないなど色々な感想がありました。ですから、また円になって、もし彼女に言いたい事があって、もしどんなことでも言って良いとしたら、何を言いたいですか。これは儀式のように行ないます。円になって歩きます。何か言いたい事がある人がいたら、椅子の前に来た時に前に出て話してください。歩く円はストップします。

ボルカス：シェアリングをしましょう。3～4人のグループになってください。その際に空の椅子を一つ置いてください。そのシェアリングの中で、何か気持ちが出て来たら、その椅子に彼女がいるかのように話しかけてみてください。

ドラマワーク：4人のグループで、日本人と中国人が旅に出て、日本兵、幸存者、賢者などに会う旅のドラマを作り、グループごとに演じる。



4. 2013年9月19日（木）

4-1 HWH

ボルカス：今日はもう少し皆さんに挑戦をしたいと思います。私達は今日行なうワークのためにしっかりと感情の容器を作る必要があります。今日のワークは少し強烈に感じるかもしれません。できる範囲でリスクをとり、また自分に必要なサポートを得るようにしてください。携帯は切っておいてください。誰かがワークをしているときは、隣の人とおしゃべりしたりせず、集中してサポートしてあげてください。ここにいる多くのみなさんは戦後3世にあたります。みなさんがどのくらい戦争の影響を受けたと感じているかわかりません。ですから今日はアイデンティティーを解きほどくエクササイズを行ないません。みなさんはどのようなメッセージを、メディアや学校や社会や家族から受け取って来たでしょうか。

ウォームアップ

Name and Movement（名前と動き）

Sound Ball（音の出るボール）：今、想像のボールを持っています。誰かにこのボールを投げます。音もついています。ボールを受け取る人は音も一緒にリ

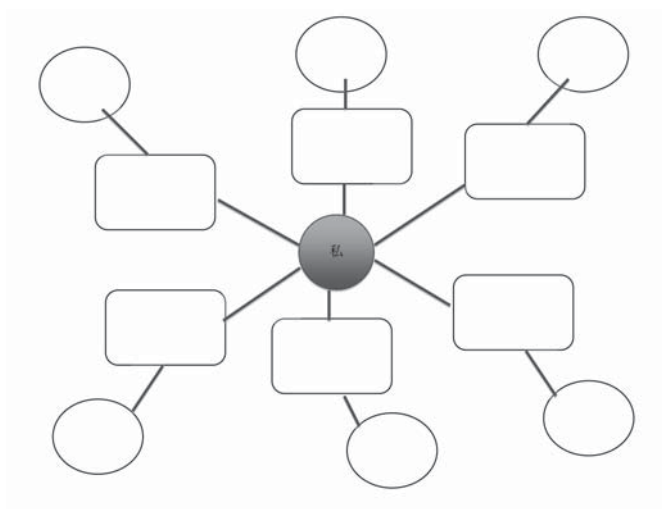
ピートしながら受け取ってください。その人はまた別の人に違う音を出しながらボールを投げます。ボールを受け取った人は音を出しながら受け取って、また次の人へ新しい音と共に投げます。受け取ったらすぐに投げるようにします。ボールは二つ、三つと増えて行きます。

Freeze! (フリーズ：ペア)：二人の人がシーンを演じます。フリーズ！と言ったら、とまります。そしてその体のポーズから連想されるまったく別のシーンを演じます。言葉も喋ってください。バナナの奪い合いをしている2匹のゴリラから始めます。

Chair Work in Group of 3 (3人グループでの椅子のワーク)：「今から南京大虐殺の話、または中国人であれば日本人に対する気持ちや、日本人であれば中国人に対する気持ちを話します。それを自分として話すのではなく、あなたの人生の中の誰か、親戚の人や、自分が知っている人、たまたま出会ったあるキャラクター。例をやります。この椅子に、私は自分の父親となって、ドイツ人に対してどう思っているか話します。『私はアウシュビッツにいた。ナチスのドイツ人に拷問された。酷く殴られた。でもドイツ人とナチスはいつも区別している。第二次世界大戦の時、フランコに対抗するレジスタンス戦に参加した。ドイツ人と一緒に戦っていたんだ。だからドイツ人に苦しめられたが、すべてのドイツ人が悪い訳ではない。』これは、私の父親です。あなたの知っている誰か、友達など。例えば、ドイツ人の『あのキャベツ頭どもめ』という友達とか、たまたま飲み屋であった人とか、あなたのおばあさんや、幸存者など、誰か別の人の視点から語ってみてほしいのです。例えば、記念館の中にはたくさんの人々が展示されていましたが、日本兵が言った事もありましたね。その言葉から、どんなことを考えていたのか、演じてみるができます。椅子に座って、少しの間そのキャラクターになって独り言を言ってみるのです」

Map of Messages (メッセージの地図)：「メッセージの地図というエクササイズをします。これは言葉で、または無言のうちに、あなたに自分のアイデンティティーや、また相手の国に対するどんなメッセージが伝わって来たかを見るものです。誰から、どんなメッセージが伝わって来たのか。両親や、近所の人、学校のいじめっ子などに言われて残っている事だったり、別れた彼や彼女が

言った事など。人だけでなく、メディアや、教育など、例えばあなたの国の教育システムがあるメッセージを持っていたとしたら、メディアはあなたのアイデンティティーにどのようなフィードバックをしているか、色んなメッセージがたくさんありますので書き出してみてください。これは、このダイアグラムのほんの始まりです。ここに書ききれない程のメッセージがあるはずですよ。これを作った後、中国人の地図と日本人の地図をそれぞれ見ていきたいと思います。私を例にやってみましょう。私はたくさんの文化アイデンティティーを持っています。私は米国人であり、フランス人であり、ユダヤ人、これは宗教的なアイデンティティーではありませんが、文化的には繋がっています。例えば米国人としてのメッセージを見てみましょう。ポジティブ、ネガティブのメッセージがあります。右翼のジョージ・ブッシュがここに立って『俺たちは世界一だ』と言っています。ニューヨークの港に立っている自由の女神がいます。詩が書いてあるのですが、米国は移民の国なので、とても理想的な移民へのメッセージです。『こちらに来なさい。あなた達を守ります。ここには自由があります』などです。これらは抽象的ですが、身近な所では私の父親がいます。『私達は難民だったんだ。米国は特に好きなわけではない。でも戦後受け入れてくれた。私達はどこにも属さない。故郷はない民なのだ。』これらは、私に影響を与えたメッセージです。このような何百ものメッセージが、自分が意識していなくても同時に色々なところから送られて自分に影響を与えています。10分程で、自分のメッセージの地図を書いてみてください。その後、2〜3人のグループになって、地図についてシェアリングをしてみてください。」



メッセージの地図

サイコドラマ



サイコドラマの後のシェアリング：「10分くらい小グループになって、どのような気持ちが湧いて来たか話をしてみてください。昼休憩の後にまた少しシェアリングをしますが、今、少しシェアをしてみてください。分析しない、アドバイスをしな、批判しな、質問をしな、ということに注意してください。彼女の経験と、似た経験をした部分があるあなたの中にもあるでしょうか。彼女のサイコドラマを見ていて、誰のことや、どんな出来事が、連想されましたか？サイコドラマは、変性意識を喚起しますので、プロタゴニスト（注：主人公）には、十分なケアとスペースを提供しましょう。」

4-2 HWH

「普段はサイコドラマの後、グループで全体シェアをしますが、その時間がなかったので小グループでシェアリングをしてもらいました。しかし新しいことを始める前に、リアクションや気持ちなど、伝えたいことがあれば、どうぞシェアしてください。マイクをまわしますので、言いたいことがある人は話し、言いたいことがない人は、次の人にマイクをまわしてください。先ほどのワークを完了させてから次に進みましょう。」

「もう一人分の時間があります。日本の文化背景を持っている人を中心にワークをしたいと思い、何人かの日本人に個人的に話をしますと、やってみることに躊躇しているようです。ですから、日本人のみなさんに、ここ南京で体験したこと、または人生の中の体験の一つで、印象深いこと、例えば記念館で日本人が証言するのを見たことや、子どもの頃、人が殺されるシーンを本で見てショックだったことなど。マイクを回しますので、言いたいことがあればどうぞ。」

全体シェアリング

「このような正直な気持ちを伝える勇気を持ってプロセスして行くことが大事ですので、このようなシェアリングの時間が持てて良かったと思います。」

休憩

「あと残り一時間ほどあります。明日は揚子江での儀式があります。その後少しプロセスをする時間があるかもしれません。明日の午後、このグループはいったんお別れして、午後にはシンポジウムがあります。最後にたくさんの箱を開きました。しかし良いファシリテーターの基本は、終わりになって新しい事を開かないということです。ですからこれからどのようなことをしようかと考えるところですが、直接対話することはまた各自やってもらうことにして、これからみんなで一緒に作りあげていくことをしたいと思います。」

Dramatic Reality (空想の現実)：「このエクササイズでは二人で一つの世界を作り上げていきます。**Dramatic Reality (空想の現実)**です。小川があるから、足を入れてみよう。など、空想してそれが現実であるかのように演じてみてください。それをペアで行ないます。山を作ったり、ジャングルを作ったり、好きな世界を作り上げていきます。」

「次に3人グループになってください。一つのシーンを演じて、「フリーズ！」と言ったらまた別のシーンを始めるエクササイズをしてきましたが、それと同じように。ただしフリーズ！という合図はありません。まず一つの現実を作り演じながら、3人でどんどん変容する現実を作りあげていきます。3人のうち誰でも自由にシーンを変容させることができます。また同時にこれまで扱って来たテーマも取り入れて遊んでみてください。何が起こるかやってみましょう。」

おとぎ話：「ペアになり、一人がパフォーマンスを行い、もう一人が証人になります。おとぎ話を演じます。昔々あるところに、でお話を作りながらそれを演じます、スイッチ！と合図をしたら交代します。」

夢を演じる：「次は夢を即興で作ります。今まで見たことのある夢ではなく、ここで作って行きます。自分の意識の流れを辿って、イメージネーションを使って、テーマに関するイメージをプロセスさせているわけです。おもしろおかしいイメージであっても良いですが、このワークに関わるイメージが浮かんできたらそれを自由に表現してみてください。それが終わったら、どのようなイメージが表現されていたか、パートナーとシェアしてみてください。」

儀式をつくる：「この後、メンバーの希望者は明日の追悼式をどんなものにするか話し合う時間をもちますので、そのためのエクササイズをします。プレイフルなエクササイズなので、明日これを直接使うことはできないかもしれないかもしれませんが、心の準備になるかもしれません。5～6人で一つのグループになって、誰かが音と動きを始めます。それを好きなように変容させていきます。」

最初は小グループで行い、それを繋げてだんだん大きなグループなり、最後には全員で一つのグループになって終了。



「みなさんの中に、遊び心を持った子供の部分がいきいきとしているのがよくわかりますね。これからまた、この楽しい雰囲気から、追悼式へと移行していきます。この後、追悼式のプランニングに参加できる人は残ってください。」

5. 2013年9月20日（金）

5-1 揚子江での追悼式



5-2 HWH

ウォームアップ

Human Sculpture (人間彫刻)：3人組で人間彫刻を作ります。ステージピクチャーのようなエクササイズですが、それを3人でやるのです。チェンジ！と合図をしますので、動作を変えて彫刻を変容させてみてください。」



Fluid Sculpture (動く彫刻)：「まずこの4日間を通して自分に影響を受けたことをシェアしてもらいます。それに共感し、尊重し、舞台側にいる5人がそれを演じます。そしてシェアをした人に贈り物としてお返しするのです。常に語り手の気持ちを音や動きで演じます。まず一人の人が前に出て、シェアしてもらったことのある部分を表現します。そして次々とそこに付け足すようにジョインして表現して行くのです。」

3～4人でのシェアリング

クロージング：「午後はシンポジウムがありますが、プログラムは一旦終わります。ひとことずつシェアをして終わらしましょう。」

シェアリング

親指の井戸：最後に一人ずつニックネームを言って終わります。

第Ⅱ部

参加者レポート

1-1 南京セミナーに参加して

立命館大学大学院 応用人間科学研究科修士課程 藤原佳世

今回、南京を訪れるまで、私は、中国はおろか日本以外のアジアの国々に、一度も行ったことがありませんでした。それは今まで私が放置してきた私の歴史でした。アメリカに長く住み、自分のことを根無し草のように感じ、2011年の12月に日本に移住して以来、根っこを探しに、どこから掘ってよいものか迷っていました。

南京を訪れる前に体験したサイコ・ドラマと実際に南京で体験したセミナーは私のこころの中に私以前の歴史を受け入れる穴を開けました。（アルマンド先生はウィニコットも使ったように「井戸」というもう少し洗練された言葉を使われたようですが）私はどちらかという時には落とし穴にもなる「穴」という言葉が何か中身がよくわからない私のこころの穴を表現するのにあっていると感じます。

その穴の中にはこころ温まる思い出もあれば加害の記憶もありました。歴史の中で一度加害者になったことを忘れた私は今も将来もただの加害者であり続けます。しかし自分の加害を認めることにより、自己を深く掘り下げることが可能になり、将来、自分の根っこが見つかるかもしれないと感じました。

現在私は犯罪被害者支援のNPOに関わっています。その団体はすでに傷ついている被害者が裁判の中で再び傷つくことがないように主に司法分野でのサポートを行っています。現在のところサポートの対象は犯罪被害者に限られていますが、将来、外国籍の人も含む二次受傷の可能性のある全ての被害者をサポートできるようになりたいと考えています。

1-2 Experiencing Nanjing

Kayo Fujiwara, Ritsumeikan University Graduate School of Applied
Human Sciences, Clinical Psychology major

The trip to Nanjing was my first time visiting China - or worse, Asian countries outside Japan - the part I have neglected in my life until now. Living in the US for many years made me think of myself “rootless”. Since moving to Japan in December 2011, I have been wondering where to dig in to search for my roots.

The introduction to psychodrama before going to Nanjing and actually attending the seminar in Nanjing opened a pit at the bottom of my heart to accept the history before me. The pit (although I have noticed Armand preferred to refer it as “the well” as Winnicott did – more refined way of expressing it, I rather call it “the pit”) is a rough undefined hole where you sometimes pitfall.

The pit contained nice heartwarming memories as well as the memories of being a mere perpetrator. By forgetting once becoming a perpetrator in the history, I become a perpetrator now and in the future. By acknowledging my history, I may be able to find my roots in the future, since I won't be afraid to dig in.

Currently, I'm involved in NPO to support crime victims. The organization is deeply involved in court procedure to support victims not to be victimized over and over again in the process of lawsuits. Although the target is limited to crime victims at this moment, I'm hoping we can expand the support to anyone who faces secondary victimization including foreign nationals proceeding in Japan.

2-1 回顾 2013 南京治愈战争创伤工作坊

沈瑜

这是我第二次参与 HWH 工作坊。第一次在 2009 年，而这次我同时也是以翻译者身份参与的。由于工作的原因，我仅参加了后面三天的工作坊。

对于深受其影响的两个民族的人们来说，战争这个主题包含了那么多的死亡，伤痛，不可碰触，不能提及等等的事实。这些伤口，成了所谓的情结，消耗我们大量的能量。或者从某种意义上来说，人们的行为就僵化了，只能用固着的方式去反应。

Armand 教授的做法是让我们的能量流动起来。虽然战争是个严肃的课题，却用玩乐的方式，去打破我们一直禁锢的能量，打破人们一本正经的那个模式，可能是发个声音，可能是做个鬼脸。并且，我们彼此回应表演者的行为。回到了每个人都有的人性上，我们开始了中日两方参与者的对话，不是在理性层面上表述那些对立或者各异的观点，而是在肢体，声音的感性层面来感受到对方和我一样是拥有各种情感的血肉之躯。

然后，我们才有可能去探索战争本身给我们个人带来的影响，分享参观大屠杀纪念馆或者其他与战争有关的事物给我们带来的感受。对于一直用惯头脑去评判分析的人们来说，分享表达感受是很困难的事，因此，Armand 教授不时地提醒我们，尝试唤醒我们去表达感受的能力。

在工作坊里，我也有机会将我的内心的各种声音用戏剧的方式表现出来。他们多数都与战争有关。当我看到代表我心中那些声音的参与者将它们都表现出来时，我能够确实的感受到其对我的影响。正是这种看到，有意识的觉察，让我可以有空间去作出新的选择，而不是无意识的去反应。同时，工作坊中也有表演寓言故事的活动，可以让我们去探索战争这样的经历的意义。最后，我们参加了追悼战争中死去的人的仪式。在尊敬逝者，全然接受他们给我们的传承中，我们可以开启新的生活。

我有幸体验了工作坊的魅力，并感受到 Armand 教授对工作坊中发生的一切带着智慧的全然接纳，因此，我内心一直洋溢着感恩和感动。从 2009 年参加工作坊来，我身上的变化，包括在这次工作坊中的收获，正是反映了工作坊的作用。

同时，我也看到了这次参与者中有打开心扉真实表露自己的，也有选择沉默的。虽然这次的参与者不能够代表整个中国和日本的情况，但我感觉这也是两国

现状的一个折射。对于中国来说，我们似乎太急着去忘掉过去，在中国，缅怀先烈的活动比较少，对祖先尊敬的那些仪式也消失了很多，内心的感恩就更少了。这样失去了与先辈的联接，我们成了没有根和力量的人。同时，正是由于回避过去的伤痛，我们心里怀着仇恨，没法放下过去，没有办法建设性的与邻国建立良好的关系。事实上，至少目前日本并没有在给中国制造什么伤痛。至于日本人，他们美化过去的行为也是一种逃避伤痛，害怕被指责，然而，这种逃避和害怕恰恰证明了那个指责的存在，那个指责的声音一直存在在日本人的内心，也深深地影响着他们。正如带着仇恨使得人们扼杀了生命力的一部分一样，带着害怕被指责是硬币的另一面，也是具有自我毁灭性的。

虽然我们的工作坊可能不能再继续，但我能够感受到它的力量，尤其是在我本人身上发生了很多变化。感恩所有促成它发生的存在。就像石子掉进水中一样，它的影响也会一圈圈散波开去。

2-2 Remembering Nanjing 2013

Iris Shen

This is the second time that I participate in HWH workshop. Last time it was in 2009 and this time I also attended the workshop as the interpreter. Since I had work at the first day, I joined the workshop for three days.

For two nations who suffer from the past war extremely, this issue has left us so many deaths and wounds with all the unspeakable and untouchable memories. These wounds have evolved into the so-called “complexes”, draining a great amount of our energies. To some extent, people have fixated reactions in response to this issue in a rigid way as a result.

What Professor Armand did was to encourage the participants to be more flexible. Even though this is a serious subject, there are methods applied in this workshop to initiate the playfulness in the participants so that the

energies flow freely and the rigid pattern of reaction can be broken. It could be done simply by asking the participants to express a sound or make a face. Moreover, the echo for these expressions touched the humanity. Then the conversations between participants from two nations really began, not rationally with opposing views but with the empathy that we are all human beings sharing same senses and feelings.

Then it is possible for us to explore how the war influenced us personally in the workshop. We shared the feelings that visiting the Nanjing Massacre Museum or other war related matters had brought us. It was difficult for us at the beginning since we are used to analyze and judge. Professor Armand had reminded us to use our ability of expressing emotions and feelings.

During the workshop I had the opportunity to express all the voices within me through psycho-drama. What revealed in the psycho-drama was mostly related to the past war. As I saw all the representatives acting out those voices, I became aware of how they had influenced me. This kind of awareness and consciousness allowed me to make new decisions and choices, instead of merely reacting unconsciously.

Further, we had the chance to explore more of the meaning and lesson that war has taught us by composing and performing an allegory. The ritual on the last day also helped us to show our respect for the ancestors. With full acknowledgement of their legacy, we can start a brand new life.

I experienced the powerful effects of the HWH workshop as well as felt the wisdom and unconditional acceptance from Professor Armand for whatever happened during the workshop. Therefore, I was immersed in warmth and gratitude during the three days. My transformation since the workshop in 2009 as well as what I gained this time verify the grace of this workshop.

Meanwhile, I noticed that participants had opened up to different extents.

Although the small and biased population cannot represent the situation between two countries, it shades lights on the status quo in some way. For Chinese, we are rushing to get rid of the past without deep grief and reflections. Nowadays, activities such as rituals for memorizing ancestors have been neglected, let alone the gratitude towards them. Losing connections with the ancestors, we have no roots and lack of power for growth. At the same time, avoiding being in touch with the past pains, we hold hatred in our hearts, cannot let go of the past and are not able to maintain good relationship with our neighbor country that is practically not doing any harm to us at present. For the Japanese, some of them rationalizing and beautifying the past war is just another way of not wanting to touch the old pains and face the accusation. This is actually the evidence for the fact that the voice of accusation does exist in the Japanese people's mind and has deeply influenced them. Just as holding hatred making people killing part of their vitality, being in fear of accusation is the other side of the coin and it is self-destructive.

It is a pity that the workshop may not continue in the future. However, I can feel its effects, especially what it works on me. I am grateful for everything that brings it happen and I believe that its effects will spread just like the ripples caused by a stone dropping into the lake.

3-1 シナリオ通りにいかなかったストーリー

金湖蓮

セミナーの二日目、生存者の証言を聞いた後のワークで、劇を創りました。私たちのグループは中国人2人と日本人との4人でした。与えられた時間が短かったことや、中国人学生の遠慮もあり、私たちが主導でストーリーを考えました。練習する時間がほとんどないまま演じてみると、演技が変わってしまし

た。日本人と中国人の2人が旅の道中、おばあさんと出会います。しんどくて歩けないおばあさんを2人が摩って介抱し回復して一緒に旅をするという内容でしたが、おばあさんが足を摩る日本人の手を払いのけ、背中を摩るとまた払いのけるのです。クライマックスでは宇宙人が現れ希望ある未来へと導くところでも、おばあさんは元気にならなかったし行きたがらないし、日本人に支えられているのを拒んでいるように見えました。劇の感想を話し合う時間がなく不安を抱えたままその日が終わりました。私たちが望むようにストーリーを創ったこと、希望に向かうということを簡単に言ってしまったこと、考えれば気になることだらけでした。翌日4人で話してみたら、生存者の証言を聞いた直後だったので、おばあさんの思いが演技にでてしまった。手を払いのけたのもおばあさんの気持ちを感じて自然にそうなった。苦しかったけど最後に希望の明日がみえてほっとしたと演技を通して感じたことを語ってくれました。私たちだけで考えすぎずに直接聞いて、話し合えたことを喜び合いました。

HWH セミナーには、大きな期待がありました。このセミナーを自分の問題と重ね合わせていました。中学生の時に、あるTVのドキュメンタリー番組を観ました。それは、第二次世界大戦時のナチスドイツ側の子孫達と、迫害されたユダヤ人の子孫達が同じ部屋で一つの輪になり、お互いの苦しみや悲しみを話し、抱き合っているのです。衝撃でした。私は在日コリアンと日本人とを重ねて観ていました。私たちにもこんな日が来るのかも知れないと希望を感じました。そんな記憶が、このセミナーに引き寄せてくれました。

在日コリアンである私は、日本人にも中国人にも属さない自分の立ち位置に不安定さを感じていました。セミナー中、日本人も苦しんでいることをあらゆる場面で感じその心に触れました。その反面、被害にあった側の苦しみは現在も続いているのだから同じように苦しんど、私の中の加害性が現れます。そんなことを言うてはいけないという自分、もう誰も悲しい思いをしてほしくないという自分もいて、三者が私の中に存在します。同じ戦争で日本人も傷ついた犠牲者だったということが悲しかった。「何をみても私は加害者側で、申し訳ないという罪悪感しか出てこない」と言っていた日本人の言葉に、加害国に残された悲しすぎる深い傷があると感じました。いっそのこと日本人が傷ついてなかったら、私の傷や悲しみを吐き出し、ありったけの怒りをぶちまけ、ネ

ガティブに生きてきた息苦しさを味わってほしいと当事者だったら言っていたかも知れません。言いたいことを吐き出さないと前には進んでいけないのです。参加者みんなの物語をもっと知りたかったし、日本人も親や周囲からどんな影響を受けてきたのかを聴けなかったのが残念でした。

在日の友達が、背伸びして知ったかぶりした反日感情に、どこか違和感を感じながらも、そういうものなのだと思っていました。私自身も日本人をよく知りもせず反日感情がからだに沁みついていきました。家族から体得すること、学校教育、日本社会、どれも噛み合っていないように見え、嘘でも真実でも総てのものが私の中でしっくりきませんでした。私の友人の多くは日本人です。民族学校に通っていた時は日本人との交流はなく、日本人は共に暮らす対象ではありませんでした。社会にでて、私の中の噛み合っていなかったものを噛み合わせるために、たくさん学びました。そして日本人と一緒に創り上げる場所をみつけては飛び込んでいきました。共に歩み尊重しあえるということを、未来ある子ども達に示したかったのです。

セミナーに参加できて、たくさんのお会いがあって、感謝しています。文化は違って、その文化をもつ人たちが自分たちの言葉で語っていけば、戦争の傷を癒し合えると思いました。7日間、みなさんと、アートワークやシェアリング、食事買い物と、合宿のように楽しく参加できたことは、何より安心してセミナーに参加できたことにつながりました。

3-2 与剧本渐行渐远的剧情

金湖莲

在讲座的第二天，听了幸存者的证言后，创作了剧本。我们小组是由2个中国人和2个日本人组成的。时间有限，加上中国学生的客套，就由我们领衔构思了剧情。在没有充足时间练习的情况下试演了一下，结果发现演出走了样。演出的内容是1个日本人和1个中国人在旅途中，与一位老奶奶相遇，2个人服侍累

得走不动的老奶奶帮她恢复，并和她一起踏上旅途。但老奶奶甩开了帮她按摩腿部的日本人的手，日本人想帮她按摩背部又遭拒绝。就连高潮处外星人出现，要带领他们去充满希望的将来时，老奶奶也提不起精神不愿前往，似乎颇为抗拒日本人所给予的帮助。于是这一天就在没有剧情交流，满怀不安的气氛中结束了。到底如何创造出我们所期望的剧本，是否过于简单地表现了迎接希望这一部分，仔细想来有着诸多的问题。第二天我们4个人交流下来，觉得老奶奶是因为刚听完幸存者的证言，所以将情绪带到了演出中。甩手这一幕就自然而然地反映了老人家的情绪。对此我们不假思索地去问了老奶奶，她告诉我们其实起初自己很痛苦，但最后看到了充满希望的明天最终有所释怀，她通过演出切身地感受到了这一切。最终我们和老奶奶谈到了一起，欣喜之情不溢于言表。

对 HWH 活动我非常期待。这个活动让我能结合自己的问题去思考。大学时代我看过一个纪录片。讲的是第二次世界大战是纳粹德国的后代们和被害方犹太人子孙在同一个屋子里，拧成一股绳，互相倾吐悲伤，互相拥抱鼓励的故事。看后极为震惊。当时我是和同为在日的韩国人以及日本人一同看完的。我们顿时感受到了或许有一天我们之间的这一天也会到来的希望。这次的活动不禁让我回想起来这段回忆。

我作为在日韩国人，既不是中国人也不是日本人，这样的尴尬处境让我有点不安。在活动中我时时能感受到日本心中的苦闷，心为之动容。而另一方面，我觉得被害方至今仍持续着痛苦，日本人也该一起尝尝看这种痛苦，我有着这样的加害心理。“不行，不能这样想，我们应该一起携手共创未来”，我的身体里还存在着这样的我。我身体里存在着三个我。同一个战争中，日本人也有许多牺牲者，就这点看他们也是可悲的。“无论如何我都是加害方，我的心理充满了无限的罪恶感”从一位日本人口中说出这段话里，我能感受到作为加害国一方留存在内心深处的所受的伤害。假使日本人没受到一点伤害，我想当事人一定会把所有的苦都说出来，倾吐一切愤恨，让加害方也尝尝暗无天日的生活的绝望。不说清楚想说的话就不能向前生活。还想再了解多点参加者的故事，作为日本人从家人和朋友当中又受到了怎样的影响，没能了解更多，实在遗憾。

在日本的朋友们大家装的好像很了解反日感情，虽然觉得哪里有点不对劲儿，但想想觉得也就这么一回事了。我也是，虽然不太了解日本人，但反日情绪却深

入骨髓。从家人那里了解的一些事,对于学校教育,日本社会,看起来都不能习惯,所有的事情都难以适应。

我的朋友中许多是日本人。还在上民族学校的时候,基本和日本人没什么交流。不会想到和他们一起生活。出了社会后,为了让自己更快适应起来我学习了很多。随后找到了和日本人的相处之道,之后就一切游刃有余了。相互尊重,共同进步,希望能给拥有无限未来可能的孩子们一点启发。

参加这次活动,和许多人相识,我心存感谢。虽然文化有差异,但拥有各自文化的人们用母语来叙述的话,战争带来的伤害就一定能消除,愈合。7天里和大家一起外出活动,分享心情,出门购物,吃饭,如同合宿般的生活非常开心。这些都使我能更安心的参加好这次活动提供了帮助。

4-1 「南京を思い起こす 2013」に参加して

立命館大学大学院 経済学研究科博士課程前期課程 菅原悠治

概観

私は今回で2009年、2011年と三度目の参加となる。まず今回のセミナーにおいて感じたことを大まかに書いていきたい。第一に日本人学生が少なかったこと。これは昨今の日中情勢を鑑みれば致し方ないことかもしれない。しかし、そのような状況であればこそ、民間交流においてはその結束を強めようという意志を持った人が集まることを期待したのだが、少し残念であった。私自身は昨今の日中情勢に関してこのセミナーや日々の留学生との交流から、さほど問題ではないと思うようになっていたので、むしろそこまで深刻なのかと驚きすら感じた。

第二に中国人学生の意識と求められているものの変化を、2009年、2011年に増してアカデミックに踏み込んだ内容、もしくは一般的日本人の歴史観などを聞きたがっているのではないかと感じた。これは自分もまた彼らも心理学畑以外の人間だからかもしれないが、あくまでこのセミナーの目的と違うのでそ

の流れを御し切れたのかという疑問を持った。

第三に文化の違いというものは、どこかで一度すりあわせをするべきではないかと考えた。やはり今後も活動を続けていく上で避けては通れない道であると思う。ドイツ・ユダヤ間の同じ神教の文化とは違って日中間は近くて遠い遠くて近い国であり、同じことと違うことそれは礼儀から考え方までいろいろあると思う。しかし、心情を深く掘り下げていくセミナーだからこそ、下準備として必要なのではないかと思った。

自己の変化

自分自身の変化は前回のプレイバックシアターよりは鮮烈ではなかったものの、日本人として日本がかかわった戦争への捉え方という部分では自らの心情の吐露という形で大きく進展したかと思う。平素日本にいては感じることでできない、感じる事が出来てもそれは空襲や疎開、孤児、引き揚げ民など被害者としての一面しか見えてこない戦争の歴史であるが、戦地にいた日本人をクローズアップすることで加害者でありまた被害者でもあったことを強く感じるようになった。

詳しく説明すると、加害者意識が強くなると同時に、ここでも日本人は死んでいるという意識が強まりやるせない気持ちになってしまった。戦争という狂気がどのようなものかは自らが経験しているわけではないので理解出来ない。だが、日本兵も特に一兵卒の方々は死にたくない一心だっただろうと考えてしまう、そう思うと同情せざるを得なくなってしまった。しかしながら、ようやく和解のための席に座れたのではないかと考える次第である。

戦争映画のヒロイズムに毒されている現代人の我々だからこそ、考えるべきことが多いのではないかと帰国後は自問自答する日々を暮している。

結論

三度目ということで慣れてきたという可能性もあるものの、今回は翻訳できる方が多くいたということもあって打ち解けるまでに時間はそうかからなかった。しかし、その分余計にもう少し長く深く話し合いたいと思わざるを得ない終わり方だったと思う。

今後どう進展するか私は予測できないわけだが、大規模と小規模で分けるという形であったとしても出来る限り参加していきたいという所存である。

最後に、外部の者であるにもかかわらず三度目の参加を認めてくれた村本邦子先生はじめ、関係者各位に深謝して擱筆したい。

4-2 参加“追忆南京 2013”之感想

立命馆大学大学院经济学研究科 菅原悠治

概観

继 2009 年、2011 年，这是我第三次参加“追忆南京 2013”的研讨会。首先，我想粗略写一下在这次研讨会上的感受。

第一，参加活动的日本学生少。鉴于近来中日形势之紧张，或许这也是没办法的事。但是，正因为是这样的情况，我才期待在民间交流上聚集那些怀着加强团结意识的人，但有些遗憾的是参加的日本学生很少。我自身从参加研讨会以及每日同留学生的交流中，开始认为近来的中日形势并不是多大的问题，我甚至惊讶地觉得有那么严峻吗。

第二，关于这个活动，我认为大家想问的难道不是这些吗？中国学生的意识以及他们所寻求的东西变化、2009 年、2011 年活动中更加学术的透彻的内容、或者普通日本人的历史观等问题。或许因为无论是我还是他们都是心理学领域外的人，所以与这个研讨会的目的完全不同，我对研讨会的整个流程是否在掌控之内持有疑问。

第三，我认为文化差异这种东西是不是应该在某个地方磨合一次，并且，我想这同样也是以后活动持续中无法避免的。我认为，与德国、犹太之间信奉同样的一神教文化不同，中日两国间是说近又远说远有近的关系，从礼仪到思维方式，都有各种各样相同的和不同的东西。但是，我想，也正是有了这样可以将心情深掘的研讨会，作为准备工作，这种磨合是必要的。

自己的变化

我自己的变化虽然说起上次的回放剧来说并没有那么强烈，但是我认为，作为日本人，在对与日本相关的战争看法这部分，倾吐自己的心情的方式上有了很大的进展。平时在日本无法感受到的东西，即使感受到，也仅仅只是看到空袭、

疏散、孤儿、遣返民众等，作为被害者的一面的战争的历史，但是，如果给战地日本人以特写，我强烈的感觉到，他们既是加害者，也是受害者。详细来说，加害者意识变强的同时，日本人死去的意识也会加强，这样就产生了不愉快的心情。战争这样疯狂的东西，因为没有亲身经历所以无法理解。但是，我猜想日本军人特别是那些士兵们也都怀着不想死的心态吧。这样一想，就不得不同情他们。总之，我想是因为好不容易坐在了为了和解的座位上才这样想吧。

在归国后，我在每日的生活中自问自答，正是被战争电影和英雄主义毒害的现代人的我们，值得去思考东西才更多。

结论

虽然说因为已经是第三次参加这个活动可能已经习惯了，但也因为这次能翻译的人很多，所以融入这个活动并没有花费很多时间。这样一来，反而想着要更持久深入地交谈下去了。

虽然说今后将怎样进展我自己也无法预测，但无论是大规模还是小规模的形式，我都打算尽可能的参加下去。

最后，搁笔之际，想要对以村本邦子老师为首的相关人员表示感谢，感谢大家认可我这个外来者第三次参加到研讨会中。

5. Some left words

Nanjing Normal University Tao Lin-jin

When I searched for some reference about war/history wound in CNKI, I found few articles concerning this topic from psychological perspective, instead, those researches were more from the perspective of literature, politics or history. Just one study has said, the further studies should be valued the intergenerational transmission of domestic collective trauma, such as the culture revolution and wars (林瑶, 2013) .

While, these years of connecting with HWH, I sensed my growth and becoming more and more rational. So I came to believe that the workshop of

HWH is deserved a bright future, and that the perspective of psychological approach to healing wound of history will be a valuable one.

However, there remains a dilemma yet to encounter. That is, how can psychology cross the gap between two peoples because of the different political culture and position? It seems to go back to the beginning of the HWH study. Of course, It's not the same as the confusion at the very beginning of my attending this study. I seemed to close to the answer and saw the light when I joined the HWH, yet now, the current un-optimistic international situation drives me in more worry about the future of our effort.

Even so, I think there are difficulties everywhere and anytime, the most important thing is that we will find ways to cope with them, though not really resolve them. With the workshop coming to an end, our effort is just at a new beginning.

Reference

林瑶, 吴和鸣, 施琪嘉, . 创伤的代际传递 [J/OL]. 心理科学进展,
<http://www.cnki.net/kcms/detail/11.4766.R.20130801.1343.036.html>

6-1 礼节乎？真情乎？——回忆南京 2013-HWH 工作坊

南京师范大学 社会发展学院 程世利

在参加这次工作坊之前，我就从张连红老师和已经毕业的学长们口中理解到工作坊活动的相关内容，在得知能够参加 2013 年度工作坊的时候，我十分开心和激动。

2013 年 9 月 17 日活动开始至 20 日活动结束，这段经历成了我人生中很特别的一段回忆，中、日、美、韩等各国友人欢聚在南京师范大学，在 Armand 教授的引导下我们很快消除了由于国籍、性别、年龄等差异所带来的距离感，我们被他所倡导的戏剧疗法所震撼，是的，疯狂，我们刚开始觉得很疯狂，但是正是这

个疯狂让我们彻底打开心灵的防线，敞开心扉进行倾诉，我们共同见证了郭秀兰老人对日军暴行的倾诉，参观了大屠杀纪念馆，也去了燕子矶悼念南京大屠杀中的遇难者，每次活动后我们都通过戏剧表演或倾诉等方法去宣泄，用很特殊的方式交流我们的感想和看法，活动期间我还度过了人生中最特殊的一个中秋节。很感谢来自日本的友人、Armand 教授和张连红教授联合举办的这次活动，感谢南京师范大学、南京航空航天大学及日本立命馆大学的同学和老师对我的指导与情感分享，发自内心的谢谢你们。

谈到感想，其实远在活动还没有结束的时候我就被一个问题困扰着，在一次情感分享的活动中，日本友人清水谈到自己的感想时说到了自己的担忧、矛盾和顾虑，她说中国的学生当着她们的面很热情的招待我们，中国人背地里会不会谈到她们的时候会成为另一种样子，当时我一下子被她的话震惊了，但是仔细一想还是能够理解他的感受的，我在想我们的留学生或者在日本参加这个活动的中国人不也会产生这个想法吗，在中日友人间这应该是个很普遍存在的问题。

在我们工作坊的闭幕式上，Armand 教授、张连红老师也都提到了这个问题，到底中国学生的友好是出于礼仪呢，还是真的发自内心？我想我回答不了这个问题，我也不想去争辩什么，我只是想谈一谈自己关于这个问题的想法。这个问题我思考了很久，我觉得出于礼仪是肯定有的，中国自古就是礼仪之邦，注重礼节和友好，我们的血液里流淌着老祖宗的这些传统，但是这些东西与真心相比究竟能占多大比重呢？礼仪是出于礼貌，它不是法律，没有强制性，如果一个人发自内心不想讲究礼仪，你也不能将他定罪入狱，而且有些礼仪是可有可无的，你做了别人可能会说你很有涵养，但你没做很多人也根本不会在意和评价，这些可有可无的礼仪是否更能反应一个人的真心呢？我想多数人会持肯定态度。

这个礼节或真心的问题困扰我很久，但是在中秋节那天，看到张连红老师在百忙之中提着月饼出现在活动现场时，我突然有了些想法，他没有忘记我们的朋友，将所有的参与者都当做家人，张连红老师到达活动室后一直在门口耐心的等待，直到一个半小时左右活动结束后张老师才跟开始讲话祝福，我在想假如张连红老师不出现，我们当中有谁会指责张连红老师呢？而且事实是他在中秋节当天出现了，如果不是出自内心，他为什么放弃在家休息和家人团聚的日子而专门来到活动现场呢？我们不能把真情简单的用礼节去抹掉。

再说一说我们中国的学生，第一天活动结束后我们就盛情邀请部分朋友一起去酒吧，想跟他们做进一步的了解和交流，第三天中秋节我们又真心的邀请了大部分的友人共同来庆祝这个家人团聚的日子，中国人把中秋看成一个很重要的

节日，这是家人团聚赏月的日子，我们本没有义务去邀请日本方面的友人加入我们，我们本是应该跟我们自己的舍友同学欢庆，我们不用“必须做”，但是事实上我们盛情的邀请了我们的朋友，并叫上了我们自己的舍友朋友，一同来欢度中秋。酒宴上，我们每个人都尽情的畅谈饮酒，说着彼此之间相互祝福的话语，我们真的很愉快的度过了一个不同寻常的中秋。礼节？或者真情？谁占的比重大？这个辩题已经没有任何意义了。

总之我想说的是，出于礼节我们可能会做一些事情，但出于真心我们一定会做很多事情。假如我们有幸能够去日本参加活动，相信日本方面的友人也会真心的对待我们，既然我们都期待中日友好，真心希望中日双方都予对方彻底的信任和尊重，没有信任，交流活动进行的再多又有什么意义呢？

6-2 礼儀か？真心か？～南京を思い起こす 2013 — HWH ワークショップ

南京師範大学社会発展学院 程世利

今度のワークショップに参加する前に、張連紅先生、卒業した先輩たちからこのイベントの内容を教えてもらって知っています。2013年度のワークショップに参加することができると知った時に、私は非常に嬉しくて感激しました。実は2013年9月17日に始まって、20日に終了したこのワークショップで体験した経験は私の人生の中で特別な思い出になると思います。

中、日、米、韓など、多国の友人が南京師範大学に楽しそうに集まり、アルマンド教授の指示に従ってすこしエクササイズをしたら、国籍、性別、年齢などの違いによって生じた距離感がすぐ消えてしまいました。私は最初から、アルマンド教授が提唱するドラマセラピーの療法効果に驚かされました。

はい、狂気なことだ。初めは、みんなは、ワークはとても狂うことだと思っていました。しかしながら、この狂気に満ちたワークこそ、参加者たちの心の防衛線を徹底的に取り外し、人々の心をオープンさせ、そして、思いきって訴えるようになりました。その後、参加者の皆さんは一緒に日本軍暴行を訴えた郭秀兰おばあさんの証言を聞き、共に大虐殺記念館を見学し、共に燕子磯で南

京大虐殺の遭難者を哀悼しました。一つ一つのワークが終わるたびにみんなでドラマやアーツなどの手法を通じて胸にたまった憂鬱を発散し、ユニークな方法で互いの感想と意見を交わします。さらに、イベントの間に、私は人生のなかで最も特別な中秋節を過ごしました。ほんとうに心から日本からの友人、アルマンド教授と張連紅教授が共同でこのイベントを主催したことに感謝します。また、南京師範大学、南京航空航天大学および日本立命館大学の学生と先生方のご指導に感謝します。さらに、感情を分かち合ってくださった皆さんに誠に感謝したいと思います。

感想というと、実は、ワークがまだ終わっていない時からすでに一つの問題に悩まされていました。それは、ある感情を分かち合うワークの中であったことです。日本の友人の一人は自分の感想を言うときに、自分の心配、葛藤と戸惑いなどいろいろと話しました。

彼女は、「中国の学生は私たちの前ではとても親切な態度で接待してくれたが、裏でわたしたちのことを話すときに、どんな態度だかわからないですね。」と言いました。いきなり彼女にそう言われて、愕然としました。しかし、後でよく考えてみたら、彼女の気持ちが理解できるようになりました。中国人留学生や、日本でこのような活動に参加した中国人も同じ思いをするのではないかと思ったからです。こんな問題は中日友人の間に多くあるのでしょうか。

実はワークショップの閉幕式で、アルマンド教授と張連紅先生もこの問題に言及しました。つまり、中国人学生が示した友好はいったい礼儀か、真心からかとの問題です。この問題に、私も答えられないし、弁解したくもありません。ただ、ここで、自分の感じたことを話したいだけです。

この問題についてももう長く考えていました。まず、礼儀だと言われてもいいと思います。なぜなら、中国は昔から「礼儀の邦」とされ、礼儀と友好をずっと大切にしています。私たちの血に祖先のこのような伝統的な要素が流れています。しかし、このような伝統的礼儀は真心と比べて、一体どれぐらいの比率を占めていますか？礼儀は客さんを大事にする気持ちによる行為で、法律ではないので、強制的ではありません。もし、人が心から礼儀作法を施したくなければ、この人を処罰して投獄することはできません。してもしなくてもどうでもいい礼儀作法もあります。すれば礼儀正しい人間だと言われるかもしれないが、しなくてもほとんどの人がまったく気にせず、批評もしないと思います。こういったどうでもいい礼儀作法によって自ら行う行為は、もっと人の真心が

反映できるのではないか。多くの人がこの見解に賛成するのではないかと思います。

この礼儀か、真心かの問題に長く悩まされ、戸惑っている私は、中秋節の日に、張連紅先生が忙しい中に、月餅を提げてワークの現場にやって来たのを見かけました。そのとたんに、頭に新しい考えが出てきました。張先生は私達と日本友人のことを忘れず、すべての参加者を家族としているのではないか。実は、その日、張先生は現場に到着してからずっと玄関でワークの終了まで待ちました。一時間半ぐらい待ちました。ワークが終了したと見て、張先生がはじめて祝福の挨拶をしました。

その時、私はそう思いました。仮に、張先生が現場に現れていなくても、誰一人、張先生を非難する人はいないでしょう。しかし、事実上、彼は中秋節当日に、ワークの現場にやって来ました。真心でなければ彼は、なぜ、家族との団欒の日に、家族を後にしてわざわざ、現場にやってきたのでしょうか。張先生が中秋節の日にわざわざ現場にやってきたという真心を込めた行為を単に礼儀だと言い切っているのでしょうか。

また、私たち中国側の学生のことを話しましょう。実はワークの初日に、活動終了後、私たちは日本の友人と一緒に飲みに行こうと思って何人かの日本の友人をバーに誘って行きました。彼らとさらなる理解と交流を深めたいこともあります。さらに、三日目の中秋節の日に、私たちは、また、真心を込めて多くの日本の友人を招いてみんなで家族団欒の日を祝っていました。

実は、中国人は中秋節を大事な家族団欒の祝日としています。この一家団欒で月見を楽しむ日に、もともと、日本側の友人を誘う義務はなく、自分の寮のルームメンバーと一緒にどこかで祝うつもりでした。私たちにとっては「やらなければいけない」というわけではありません。しかし、私たちは熱心に日本側の友人を誘って一緒に中秋節を楽しく過ごしました。食卓でみんなは思いきって歓談したり酒を飲んだりして、お互いに祝いの言葉を交わしました。本当に特別で楽しい中秋節を過ごしました。私たちの誘う行為は礼儀か？真心か？どちらの比重が大きいか？という問題をめぐって弁論してもなんの意味もないと思います。

要するに、私が言いたいのは、礼儀の必要で、いろいろなことをすべきかもしれないが、しかし、真心を込めたら、わたし達はもっともっと多くの事を喜んでもできるようになります。もし、いつか、私達が幸いに何かのイベントで日本

へ行くことができれば、日本側の友人もきっと真心を込めて私たちを接待することを固く信じます。私たちはともに中日友好を願っている以上、中日双方は徹底的に相互信頼と相互尊重を期待する以上、内心から互いに信頼しなかったら交流活動をいくら行っても意味はないのではないかと思います。

7-1 怀着善意成长——工作坊感想文

南京师范大学 社会发展学院 陈宝安

我算是一个好奇心很强的传统的读书人，在此之前，我与一个学日语的学生交流时无意中了解到日本国民和日本对于战争的理解并非我头脑中原先想象的那样，于是在工作坊再次开展工作时我便抱着极大的好奇心参与了进来。通过这次活动使我意识到战争使无论是加害者还是被害者都遭受了巨大的损失，在战争中没有真正的胜利者，中日两国需要更多的善意的交流以治疗战争带来的创伤。

这次活动有许多细节引发了我的思考。其一是关于村本先生在工作中发现许多家暴追溯到源头都和战争有关，这使我意识到那些战争中的施暴者及其家人在战后都或多或少的成为了战争的受害者，战争在不知不觉中以潜移默化的方式扭曲了人们的心灵。其二是在南京大屠杀幸存者叙述自己的悲惨历时现场沉默而悲伤的气氛。老人们的观点很朴素，她认为大家应该争取做个有节操有底线的好人，即便穷苦潦倒也不能去杀人放火、挑起战争。

其实按照我个人的想法，南京大屠杀到底死了 20 多万人还是 30 多万人，这可以作为学术问题，以事实为根据去辩论。但更重要的是南京大屠杀确实发生过、侵略战争确实存在过，这需要中国人牢记，也需要日本人民牢记。我们希望日本人民牢记这个事实的目的是为了珍爱和平、拒绝不义战争而不是为了加深仇恨和愧疚感。

黑格尔在《历史哲学》中批评当时欧洲史学盛行的“历史教训”论时曾感慨全部历史留下的最大教训就是没有任何君主、政府和政治家，从历史经验中得到任何教训。我也曾悲哀的发现，和平女神一次又一次的倒在血泊中，战争一次又一次的被心怀恶意的战争贩子们挑起。中村老师和罗翠翠老师在活动中也多次表示战争并非如我们想象的那么遥远、中日之间面临的问题太多太多。

但令人欣慰的是，随着时代的发展，越来越多的人正认识到和平的可贵与战争的可怕，越来越多的人保持着清醒的态度，尝试着用善意的交流来避免战争的发生、事态的恶化。比如在 19 号晚上中日学生之间的聚餐活动中，双方的关系便很融洽很和谐。这让我想到医治战争创伤的最好的药物不是时间而是和平，即便中日之间目前由于种种原因无法正常的交流，至少我们可以做到的是在内心坚定对和平的信念，同时让更多的人知道已经发生过的战争的真相、增加善意的交流，这样才能促使更多的人站出来维护和平、拒绝战争，才能避免更多的人遭受战争的创伤。

“士不可以不弘毅，任重而道远”，我们是历史的参与者，更是历史的创造者，希望在将来的史书中我们不是以施暴者、战争的帮凶的身份亮相而是以和平的缔造者、创伤的治疗者的身份出现。

7-2 善意を持って成長していこう ～ワークショップについての感想

南京師範大学 社会発展学院 陳宝安

私は好奇心の強い伝統的な書生です。前から、日本語を勉強している学生と交流する時に、日本国民や日本の戦争に対する認識は私の想像したものと違っていることをはじめて知りました。それがために、ワークショップ活動が再開することを知って、強い好奇心を抱え、参加させてもらったのです。今回のワークを通じて、戦争は被害者だけでなく加害者にも多大な損失をもたらしたことを認識しました。戦争において本当の勝者はないので、中日両国にとってもっともっと友好に交流するのが必要で、それで、戦争のトラウマを癒すべきだと思います。

実は、今回のワークショップから、いろいろと考えさせられる細かいことが多く出ました。

一つは村本先生が話してくれた自分の経験です。つまり、お仕事の中で多くの家庭内暴力事件を取り扱って、それらの源を遡ってみたら、多くは戦争に繋がっていることに気がついたことです。私は、このことから、戦争中、暴力を

ふるった者及び彼らの家族は、戦後になって多かれ少なかれ戦争被害者になってしまうということを意識したのです。戦争というものは知らず知らず人間性を歪めてしまったのでしょう。

もう一つは南京大虐殺生存者が悲惨な体験を話してくれる時、会場は沈黙で悲しい雰囲気包まれたことです。生存者の老人の考え方はとても素朴なものです。彼女は参加者に努力してよい人間になって悪いことをできるだけしないようにしてほしいだけです。また、たとえ貧しくて落ちぶれても、絶対殺人・放火等の悪事をしてはいけない、戦争を引き起こしてはいけないと言っただけなのです。

実際、私個人の考えとしては、南京大虐殺で遭難者の人数、一体20万人か30万人か、これは、学術問題として事実に基づいて議論すればいいのですが、もっとも重要なのは、南京大虐殺は確実に起こった事実であること、侵略戦争は確実に発生した事実であることです。このことこそ、中国人はしっかり覚えなければならないし、日本人もしっかり覚えなければならないことです。でも、日本人にこの事実を記憶してもらう目的は、憎しみや悔しさを深めることではなく、平和を大切に、不義な戦争を拒否するようになるためです。

ヘーゲルは、当時、『歴史の哲学』で、ヨーロッパ史学界で流行した「歴史の教訓」論を批判し、また、すべての歴史に残った最大の教訓はいかなる君主、政府また政治家も、歴史の経験から教訓を心得た人は一人もいないということを感じ無量に指摘しました。

私もかつて平和の女神は何回も何回も血まみれに倒れ、戦争は何回も何回も悪意のある戦争屋たちに発動されたということに気づいて悲しく感じたことがあります。中村先生も羅萃萃先生も、ワークの中で戦争などとは想像しているような遥かにあるものではないということを何度も話してくれました。確かに中日間にある、直面しなければならない問題はまだまだたくさんあると思います。

それにしても、好ましいことに、時代の発展につれて、平和の大切さと戦争の恐ろしさを認識するようになった人がますます多くなり、冷静な態度で好意的な交流をもって戦争の発生や事態の悪化を止めようと試みる人が増えてきます。例えば19日の夜、中日の学生は会食をし、その時の雰囲気はとても和やかで、双方の関係は友好でした。その光景を見て、戦争トラウマの苦痛を癒す最高のものは時間ではなく平和そのものだとしみじみに感じました。たとえ、

中日は様々な原因によって正常な交流ができなくても、少なくとも私たちの内心は平和への信念を固めることができ、同時に多くの人に戦争の真実を知ってもらって、好意的な交流を増やしていくことができると思います。そして、これで、もっと多くの人に立ち上がってもらい、平和維持、戦争拒否をしてもらうことができると思います。これこそ、もっと多くの人を助け、戦争の傷をつけないようにすることができるのでしょう。

「士としては、弘毅をしなければならず、任重くして道遠し」です。私たちは歴史の参加者であり、歴史の創造者でもあります。願いとしては、将来の史書に私たちは、戦争の加害者や共犯者として載せられるのではなく、平和の創始者、また、戦争トラウマの治療者として記載されてほしいです。

8-1 南京との新しい始まり

大阪女学院大学 奥本京子

ここ数年のあいだ、平和・紛争解決学を研究・実践しながら、南京という場所に勝手な思いを寄せてきました。精神的な準備をし、ようやく今回の訪問する機会を与えていただき、人生初めての南京滞在が叶ったというのが実感です。たくさんの感情・考察のつまった数日間を可能にくださった皆さんに心から感謝します。この感想文を書いている現在は、南京から帰国してすでに1か月が経ったところです。もうずいぶん前の過去のような気がします。しかし、昨日のことものようにも思えたりもします。

私は、台風の関西接近のために予定の1日遅れで、他の参加者の皆さんを追いかけるようにして南京入りしました。その後の4日間の重厚な日々は、一参加者としてすっかり充実したときとなりました。普段、イベントやワークショップを企画・運営したり、ファシリテートしたりすることが多いので、参加者度を100%満喫するという体験はとても新鮮でありがたいことでした。ヴォルカスさんをはじめ、サイコドラマ分野の先輩諸氏に大いに学びながら、知見・感情・手法・ファシリテーションの様々な側面について吸収させていただくことに集

中できました。私自身の研究・実践では、平和学の立場から芸術アプローチの手法の開発に力を入れていますので、とても貴重な経験でした。

しかし、なんといってもここ数年のプロジェクトで、南京と関わり続けてこられた皆さんのご努力には頭が下がります。その過程の中できっと限界や可能性を発見され立ち向かってこられたのでしょう。また、日本からのグループを歓迎し支援して下さった南京の皆さんの懐の大きさ・深さにも思いを馳せます。私が勝手に寄せてきた「南京への思い」とは、歴史的コンフリクトの加害者としての自身を、どんなふうに南京という場に置くか、その方法が分からなかったという単純なものかもしれません。また、歴史的コンフリクトによるトラウマの被害者という側面を併せ持つ自身のあり方を、南京の人々の被害と、どのように重ね合わせることができるのか、「えいやっ!」とばかりに、その懐に飛び込む勇気が湧いてくるまでに時間がかかっただけなのかもしれません。

今回のプログラムの後、個人的に4日間ほどさらに南京に残り、南京に存在する平和系 NGO の事務所をいくつか訪問したり、南京大学において学生たちに2度講義をさせてもらったりしたことも、今後の南京との関わりを模索するよい機会となりました。平和ワーク（平和構築）・紛争解決・和解や調停といった鍵概念を軸に、今後も続く（続けたい!）息長いおつきあいがやっと始まったような気がしています。このタイミングを与えてくださった皆さんに、深謝の意を捧げたいと思います。謝謝。ありがとうございました。

8-2 New Beginning with Nanjing

Osaka Jogakuin University Kyoko OKUMOTO

I have been embracing one-way sentiment for a place named Nanjing for the past several years, studying and practicing peace studies and conflict resolution. After having prepared mentally, this opportunity to visit the place was given at last. I am thankful to you, from the bottom of my heart, who made possible several days with much emotions and considerations.

Now that I am writing this report, I realise that one month has already passed since we all came back from Nanjing. It feels as if it was a long time ago, and at the same time, it also feels as if it was just yesterday.

For a typhoon was approaching to Kansai, my flight schedule got delayed unexpectedly by one day, and I finally arrived in Nanjing to catch up with other participants. Then, there came a time of substantial and complete fullness that as a participant I enjoyed of the profound four days. As for myself, I usually plan, organise and facilitate events or workshops. This experience of participating 100% was very fresh for me. I could concentrate on my being allowed to absorb various perspectives of knowledge, emotions, methods and facilitation, learning from senpai (先輩) of the psychodrama field including Prof. Volkas. The learning was precious, since I research and practice the arts-based approach in the field of peace and conflict.

However, on top of all this, I do admire the people who have been involved with this project for restoring Nanjing-Japan relations for past several years. I am sure that in the long process, you must have discovered limitations and potentials, and you must have challenged all that. Moreover, my deepest thoughts are driven also to the width and depth of hearts of the people of Nanjing welcoming and supporting people from Japan. "One-way sentiment for Nanjing" that I have carried all these years might have been a simple thing that I did not know how to put myself as a historical offender of historical conflict in the place, Nanjing. Or, I simply did not know how to collaborate with the victims of Nanjing Massacre also as a victim of historical trauma caused by historical conflict. It might have been just taking me some time to take courage to jump into the bosom of people of Nanjing.

After this program, I personally remained in Nanjing for about four days more. I visited some NGO groups that are working for peace in Nanjing and China, and also had opportunities to give two lectures to students of Nanjing University. They were full of wonderful encounters, and I now begin to see that all these experiences and encounters are just a new beginning of

my relation with Nanjing for a longer time (I hope!) . As a peace worker in the field of conflict resolution, reconciliation and mediation, I would like to cherish this and deeply send my gratitude to the people who gave me those precious opportunities once again. 謝謝 and thank you very much.

9-1 2013 中日战争创伤工作坊之感

南京师范大学 心理学院 占丽娟

在参加工作坊之前，我曾两次参观过南京大屠杀纪念馆。第一次最大的感受是震撼，愤怒，参观完后心情十分抑郁。第二次参观，便能够以一种更为理性的视角来看待这整个事件，也开始注意到馆中日本战犯的证词，从中感觉到战争的无奈，无论是战争的发起方，还是受害方，双方人民对战争发生的无奈。无奈之中，又包含无情，无助，无力。

带着略微复杂的心情参加了这次的工作坊。阿曼德老师用他独特的暖身活动慢慢的带我们互相认识，互相熟悉。语言的不通第一次让我感觉到了交往障碍，但大家脸上善意的微笑又让我感觉到很温暖。日本朋友的拘谨使我意识到：我们是东道主，我们有义务创造更加轻松的氛围，更加包容的场，让他们感受到我们的善意，因而我也放松下来，投入活动中。随着活动的进行，参观大屠杀纪念馆，雕塑，表演，幸存者的证言，慢慢的，场内的气氛变得有些奇怪。一系列的活动，似乎是撕开了我们的伤疤，过去的记忆，无论是我们的，还是他人灌注给我们的，慢慢的鲜活了起来。杀戮，逃难，死亡，流血这些原本离我们很远的意象一次又一次的暴露在我们面前，虽与我们无关，但又总感觉有人在提醒你这些与你密切相关。我有意识的多与同伴交流，使自己“出戏”，以避免承受太重的心理压力。

在第二天的一个表演活动中，老师让我们在小组里分享自己跟战争的联系，并选择一些情节表演出来。我们小组挑选了我奶奶给我讲的战争中避难的场景来展现。阿曼德老师看了我们所塑造的那个场景，觉得没有现实的人物在其中，便给我们增加了一个表演，让我和同伴表演我奶奶给我讲这个故事的场景。于是我迅速转变角色，扮演我自己的奶奶。在表演展现的过程中，我再一次深深的体验到了无辜的战区老百姓的无力感，心情变得尤其沉重。下午幸存者来做证言，我

看着年迈的奶奶，颤颤巍巍的走进我们的会议室，讲述多年以前的遭遇。奶奶刚开始还能比较平静的叙述，但当说到一些太过悲恸的场景，还是忍不住哽咽掉泪。我突然特别的不忍心，不忍再让奶奶翻出 70 多年前的恐怖经历，让战争又一次以另外一种方式去伤害她。奶奶一直过得都不好，现在也还是很贫困。然而，无论个人的处境多么艰难，年迈的奶奶都会出席各式的场合，给大家讲自己战争的经历，希望用自己亲身经历，用血淋漓的记忆，去告诉当代的年轻人，过去发生过怎样的惨剧，今天的幸福多么值得珍惜，奶奶的话很朴实，她对于当下日本青年的希望也很朴实：“要做一个好人，做好事”。

为期四天的工作坊中，每一天都有不同的感受，值得说的也很多，但是，第三天的下午，却是让我受益最多的时候。这一次，也是第一次，大家在小组里面的讨论。很多人都说出了自己的心里话。日本朋友坦诚了自己当前的很矛盾的处境，自己内心的挣扎，中国朋友也说出了自己对过去的战争的看法，更有日本朋友提醒我们，当前两国紧张的局势。这一次，大家放下了顾虑，开始了真正的交流，虽然有些话语听起来不是很愉快，但是，这是真正的心对心的交流，也让我们中日双方都真实的认识到了现状，这也让我们感觉到了真正交流的开始。

很遗憾，在真正的交流开始没多久，真正意义上的工作坊开始没多久，我们就必须跟大家道别，日本朋友要回国，我们也要回归日常学习工作。但是，对于过去的战争事件，对于中日两国的现状，对于中日两国关系的思考才刚刚开始。我开始第一次开始关注国际新闻，开始了解国际形势。我有些担忧，是否在不远的将来，中日会再次爆发恐怖的战争？中国人民吃了太多的战争苦，日本人民又何尝不是。而为了避免战争的再次发生，我们能做些什么，是我们最应该思考的问题和努力的方向。

希望还能够有这样的活动，在当前的形势下，这样的中日直接交流尤其意义非凡。在这次活动中，我受益颇多，衷心感谢活动的组织者，感谢阿曼德老师。

9-2 中日戦争トラウマを癒す 2013 ワークショップの感想

南京師範大学 心理学院 占丽娟

このワークショップに参加する前に、南京大虐殺記念館を二回見学したこと

があります。一回目の最大の感じは強烈なショックと怒りでした。そして、見学後、とても憂鬱な心情に陥ってしまいました。二回目は、もうすこし理性的な視点をもって事件全体を見るようになり、また、日本戦犯の証言も記念館に展示されたことに気づきました。そして、そこから、戦争に直面した時の無力感を感じました。実は、戦争の発動国も、被害国も、戦争に巻き込まれた双方の人民は戦争に対して、みんなどうしようもない思いをしたのでしょうか。そのどうしようもない思いに、情けなさ、助けのもらえない無力感を含められたと思います。

ちょっと複雑な気持ちを抱えて今回のワークショップに参加しました。はじめは、アルマンド先生のユニークなウォームアップエクササイズによって、私達は互いに知り合い、親しみあいませんでした。そんな時、言葉が通じなかったため、スムーズにコミュニケーションができないことをはじめて痛感しました。それでも、みんなの顔に好意の微笑みが浮かび、とても暖かく感じました。ただ、日本の友人がちょっと気遣っている様子を見て、私たちのほうはホストだということを強く意識し、もっと安らかな雰囲気、もっと包容の場を作り、友人にこちらの好意を感じてもらうのは私たちの責任だと考えました。すると、自分自身からリラックスして、ワークに投入するようになりました。

ワークが一つまた一つのステップの順を踏んで進むにつれて、参加者は、ともに虐殺記念館を見学したり、プレイバックをしたり、パフォーマンスをしたり、生存者の証言を聞いたりしていました。プログラムの進展に従って、会場の雰囲気は、ゆっくりと、奇妙に変わっていきました。その一連のエクササイズのワークは、我々の心についた傷跡を引き裂き、過去の記憶を呼び出しました。それらの記憶は、自然についたものもあれば、他人から詰め込まれたものもあり、でも、すべて、ゆっくりと、いきいきと蘇えてきました。虐殺、避難、死亡、血まみれなど、それらもともと私たちから遠く離れたイメージは、繰り返し繰り返し目の前に浮かびあがってきました。私たちと関係はないと思ったのですが、なんだか誰かから、あなたと密接に関連しているよと注意されるような感じがしました。重すぎる心理的な圧力に堪えられないことを避けるために、もっと多くの仲間とコミュニケーションをしよう、もっと「芝居」を演じるようにと意識しながら努めました。

翌日のアーツセラピーのワークで、先生は小グループでそれぞれの戦争との繋がりを分かち合いなさいという指示を出しました。それから、小グループから

いくつかのストーリーを選び出して、それをパフォーマンスするようにと指示しました。すると、私たちのグループは私の祖母が話してくれた戦争中の避難シーンのパフォーマンスをしました。

アルマンド先生はこのパフォーマンスを見て、そのストーリーに出ている人物には現在の人がいなくて感じて、もう一つのパフォーマンスを作りなさいと指示しました。すると、私とグループのメンバーは、おばあさんが私に戦争の話をしてくれたシーンを演じることにしました。すると、私はすぐ、元の役を変えておばあさんの役を演じました。パフォーマンスをしている過程で、私は再び戦域における無実な一般庶民の無力感をしみじみに体験して、気持ちがとても重くなりました。

その日、午後のステップは生存者の証言を聞くことでした。あの年寄りのおばあさんはよろよろと会場に入って、そして、昔の被害経験を話してくれました。昔のことを訴えるおばあさんは、はじめの時は、比較的平静な口調で話していたが、あまりに悲惨な話をする時に、悲しくて悲しくて耐えられずに、咽せながら涙がポロポロとこぼれてきました。これを見て、私も急に堪えられなくなり、おばあさんに70数年前の恐怖体験をもう一度思い起こしてもらうこと、戦争がまたもう一回別の形でおばあさんの心を傷つけることに忍べなくなったのです。

実は、あのおばあさんは、今でも、あまり良い生活ではなく、ずっと貧しい生活をしているそうです。それにもかかわらず、個人の生活はどんなにつらくても、年寄りのおばあさんは、根気強く様々な会場に出席しては、みんなに戦争の体験を話します。彼女は自分自身の体験、血まみれの記憶で現代の若者に過去にどんな惨劇が起こったか、今日の幸福はどんなに大切かを教えてくれます。おばあさんの言葉はとても質素で、今の日本の若者に対する期待も、とても質素で、ただ、彼らに「いい人間になり、良いことをしてほしい」だけです。

四日間にわたったワークショップから得た感じは、毎日違います。言うべきことも多い。とりわけ、三日目の午後の収穫が一番多かったのです。その日、はじめて、大グループで討論を展開しました。多くの人はみんなの前で、本音をすべて明かしました。日本の友人も自分が直面している、もつれ込んだ立場や、内心のものがき、苦しみを素直にみんなに発露しました。中国側の皆さんも過去の戦争への考え方や気持ちを訴えました。さらに、日本の友人から、目下、両国関係はとても緊張しているよと注意されました。今度こそ、皆さんは本当に互いに警戒

をほぐして、本格的なコミュニケーションをするようになったと感じました。たとえいくつかの耳障りの言葉が聞こえてきても、これこそ、本当の心と心のコミュニケーションだと思います。これは中日双方の参加者に中日が直面した現状を切に認識し、本当のコミュニケーションが始まったと感じました。

残念なことに、本当のコミュニケーションがはじまってほどなく、本格的なワークショップが始まったところに、もう、皆さんと別れなければならない時が来ました。日本の友人は帰国しなければならないし、私たちも学習や仕事に戻らなければなりません。でも、過去の戦争や中日両国の現状に対して、中日両国関係をめぐる思考は始まったばかりだと思います。

今の私は、国際ニュースに関心を持ち始め、国際情勢を知ろうと思うようになりました。やはり少し心配することがあります。つまり、近いうちに、中日間に再び恐しい戦争が爆発するのではないかという心配です。中国人は戦争の苦しみをあまりに舐め尽しすぎた、普通の日本人も同じでしょう。戦争の再度爆発を避けるために、私たちには何ができるのか、これこそ、最も考えるべき問題で、向かっていく方向でしょう。

これからもこんなイベントを行うことを期待しています。現在の形勢において、こんな中日間の直接交流が特に意義が大きいと思います。今回のイベントで、本当に収穫が多く、よい勉強になったことを心から主催者に感謝し、アルマンド先生に感謝します。

10-1 记忆南京 2013

南京师范大学 社会发展学院 丁振伟

作为南师大中国古代史专业的学生，非常荣幸能够有机会参与此次“记忆南京 2013”的活动。在这四天的活动中，我深刻体会到了戏剧、情景治疗法的作用，但是“矛盾”这两个字却始终环绕在我的心头。

对于中日两国的关系，我心中早就存有一种矛盾之感。因为我本科是日语专业，所以在大学的学习中，对日本渐产生了一些好感。但是，另一方面，中日之间在战争、领土上存在许多争议，又让我对日本产生了一种警惕之感。正是这种

矛盾的心理，使我在考研时，毅然决然地选择了中国古代史，避开了那段较为敏感的历史。怀抱着这样一种矛盾的心情，我开始参与此次的活动。在刚开始的时候，在与日本人交往时，我既不希望自己表现得过于热情，也不希望自己表现得过于冷漠，总觉得自己就像戴着一副面具，一直以假面示人。但是在参观南京大屠杀纪念馆，看到那一幕幕的惨剧后，在听到幸存者的证言后，我心中感到无限悲痛与愤慨，一种民族气节油然而生，想好好一抒己见。但是，又想到在此中日关系紧张之际，这些日本人能有勇气来到南京，致力于和平，心中不禁又敬佩万分，只能继续敷衍下去。之后，通过 Armand 教授的戏剧治疗与情景治疗，我们大家一起讨论各种话题，一起扮演各种角色，我渐渐地摘下了面具，敞开了心扉，与日本人建立起了友谊，大家求同存异，各抒己见。

在与日本朋友的交流中，我心中不禁又产生了一个新的矛盾——为什么日本朋友对于侵华的战争的看法与我们有很大的差别？对于这个问题，以前我一直以为是日本政府在意减少对侵略的回顾或是两国文化背景的不同所导致的。但是，通过这次与日本朋友进一步交流，再加上老师们的分析，我渐渐了解到了真正的原因之所在。在日本国内，对于战后第二代的多数人而言，他们自小接受的教育，便是要求以一种解放东亚人民，以一种救世主的身分来看待日军的侵略战争，即自己是一种正义的“解放者”；对于战后第三代的多数人而言，要么对于日军的“解放战争”知之甚少，要么就只知道本国所受到战争创伤，即自己亦是战争的受害者。他们不认为这是场侵略战争，甚至现在已经渐渐淡忘了。令我印象最深刻的是，当 Armand 教授希望通过戏剧的形式来展示一下自己获取有关战争信息的内容与方式时，十分遗憾的是，日本朋友们因为种种原因都予以放弃。

在整个活动中，这些日本朋友们表达了对于日军侵略战争的反对，特别是在面对幸存者时，亦有通过下跪的形式来表达自己心中的悲愤。同时，我们大家亦各自表达了对中日友好的祝福，对和平的渴望，对战争的看法。但是，每晚一回到宿舍，打开新闻，就会发现中日钓鱼岛争端仍在持续发酵，两国的关系仍处于低潮。对此，当我白天再次听到中日和平友好时，心里不禁自问——中日还会友好吗？新的战争创伤还会降临吗？日本朋友对此也表示担忧。令我印象深刻的是，日本老师曾说日本在二战时期制造飞机、轮船的企业，现在仍然在加紧赶造飞机、轮船；中国老师亦说现在中日的情势有点像二战前的态势，战争并不是那么遥不可及的事。遗憾的是，这个矛盾有点超出本次探讨的话题，故而未能予以解决。

中日两国是“一衣带水”的邻邦，同属中华文化圈。我相信只要大家“不忘历史，忘记仇恨，求同存异”，旧的战争创伤将会治愈，新的战争创伤将不会出现，

中日の友好必定能够世代传承下去。

10-2 南京を思い起こす 2013

南京師範大学 社会発展学院 丁振偉

南京師範大学の中国古代史を専攻する学生として今回「南京を思い起こす 2013」ワークショップに参加できることをとても幸いに思います。四日間にわたったイベントの間に、ドラマセラピーやプレイバックという治療法の役割を深く体験しました。しかし、それでも、「矛盾」という二文字はずっと私の心に付きまとしてなかなか払拭できませんでした。

日中両国の関係について、早くからずっとある種の矛盾感があります。大学時代の専門が日本語なので、日本語を勉強しているうちに、日本に好感を持つようになりました。しかし、一方で、中日間にかつて起こった戦争や、現在も、領土をめぐる多くの紛争が起こっていることがあるため、日本に対して警戒を持たざるを得なくなります。この矛盾の心理があるから、大学院に進学する際に、断固として中国古代史を選択して、あの敏感な歴史を避けたかったのです。

今回、このような矛盾した気持ちを抱え、イベントに参加させてもらったのです。はじめの時に、日本人に会ったら、あまり熱心な態度を示さず、また、冷たい態度を見せないようにしておこうと考えました。だから、はじめは、なんだか自分は仮面をかぶっていて仮面人のように日本人と付き合っていたことを感じました。でも、南京大虐殺記念館を見学している時に、あそこのたくさんの悲惨な写真を見て、また、生存者の証言を聞いた後、限らない悲しみと怒りが湧いてきて、ある種の民族の気骨が立ち、思いきって自分の気持ちを訴えようと思いました。しかしながら、中日関係は、今のように緊張が高まっているところを、勇気を持って南京にやってきた日本の皆さんはすべて平和活動に取り組んで尽くす人々ではないですか。こんな日本人のことを思い出すと、思わずとても敬服せずにはいられなくなったので、ワークのエクササイズをする時に、なんとなく自分の気持ちをこましながらいい加減に続けてやっていったのです。

その後、アルマンド教授のドラマセラピーやプレイバック治療法を受けたあとで、皆でいろいろな話題をめぐって検討したり、いろいろな役を演じたりしているうちに、私もだんだん自ら仮面を外し、心をオープンにし、日本人と友情を築きあげるようにしました。みんなも異なる意見をもちながら、共通点を求め、思い思いのことを話し合うようになりました。

それにも関わらず、日本の友人と交流しているうちに、内心からまた、新しい矛盾が生じてきました。それは、なぜ侵略戦争について日本の友人の見方は私たちと桁違いなほどかなりの格差があるのかという矛盾です。この問題にたいして、前は、日本政府は侵略の歴史への回顧をなるべくしないせいか、あるいは両国の文化背景が違うせいかとずっと思っていました。しかし、今回、日本の友人とコミュニケーションをして、それに、先生方の分析を聞いてから、だんだん本当の原因がわかってきました。つまり、実は、日本国内では、戦後の第2世代の日本人はほとんど、小さいころから、東アジア人を解放する救世主の立場に立って日本軍の侵略戦争を見ろというような教育を受け、要求されてきたようです。つまり、日本人のほうこそ正義である「解放者」だと習わされたようです。

第2世代に対して、戦後の第3世代の多くの人にとって、「解放戦争」をした日本軍のことにについてさっぱりわからないか、あるいは、自国も戦争によって多大な損失を受けたとしかわからないか、とにかく、第3世代の多くは、日本人こそ、戦争の被害者だと思っているようです。彼らはその戦争が侵略戦争だとぜんぜん思わないどころか、甚だしきに至っては、今はもう忘れてゆくようです。一番印象的なのは、アルマンド教授から自分が戦争とのつながりをプレイバックを通じて示しなさいという指示を出しても、非常に残念なのは、日本の友人は様々な原因でプレイバックで表現することをやめてしまったことです。

ワークショップの初めから終わるまで、日本の友人は日本軍の侵略戦争に対してずっと反対の態度を示し、特に生存者に直面する時、跪いた姿で内心の悲しみと怒りを表しました。それと同時に、みんなはそれぞれ中日友好を祝福し、平和への切望や戦争についての見方を語り合いました。

それにしても、毎晩、寮にもどって、テレビをつけてみたら、中日の尖閣諸島をめぐる紛争がエスカレートし、両国関係は依然として氷点下だというニュースがまた、流れてきました。それに対して、昼間になって再び日中平和

友好の声が聞こえてくると、思わず中日友好は本当に続いていくことができるのか、新たな戦争のトラウマはまたも、生まれてくるのではないのかと自問してしまいました。実は日本の友人のみなさんも、同じような心配をしているようです。特に日本の先生が話したことをとても印象深く覚えています。先生の話によると、今の日本では第二次大戦時期にゼロ戦闘機や軍艦を製造した企業は、今でも戦闘機や軍艦を急いで製造しているそうです。

中国の先生も、現在中日関係の態勢は第二次大戦爆発直前の時とよく似ていて、戦争ははるかにあるものではないと言っています。残念なことに、この矛盾は今回の検討話題ではないので、これをめぐって議論して解決することはできないのです。

中日両国は「一衣帯水」の隣国で、中華文化圏に属しています。みんな「歴史を忘れず、恨みを忘れ、異議を保ちながら共通点を求めよう」ということをしていけば、古い戦争のトラウマはきっと癒され、新たな戦争のトラウマは生じてこない、中日友好はきっと世々代々傳承されていくことができると確信します。

11-1 2013 “回忆南京” 感想文

南京师范大学 心理学院 熊春燕

回想4天的工作坊，仿佛是一场漫长的梦。梦里有痛苦、有难过、有崩溃，也有快乐、有感动、有治愈、更有转化。短短4天的时间，来自天南地北，来自不同国度的我们一步一步地走向了对方；又好像是长长的4天，4天里我们一起去了大屠杀纪念馆，一起打开心心相互分享，一起真诚地接纳对方的眼泪和欢笑，一起看见了历史、诉说了现在也展望了未来。

今天的生命是无数先烈用鲜血和生命换来的。我终于深刻地理解了从小学到的这句话。当看到纪念馆万人坑中的深深白骨时，我忍不住在脑海中一遍又一遍地试图描绘当时的场景，当时的人们是怎样的一种心情？这种想法几乎要将我击溃，因为我知道无论我如何想象，也永远不会得到答案，我所有的想象也不及现实的五分之一。当那位奶奶和我们讲述她当时的遭遇时，全场所有的人都陷入了深深

地悲痛与同情中，同时我又深深地庆幸自己是生活在一个如此和平的年代，我根本无法去想象要是自己生活在那样的年代会怎么样。于是所有那些关于珍惜和平的话语都不再是空洞的字句，而成为了有意义的珍宝。

老奶奶的讲述是这次工作坊中第二次让我几乎情绪崩溃的场景。战争所造成的那些毁灭性的破坏，我们要如何重建？战争留下的那些永远都无法愈合的伤痕，我们要如何抚平？坏掉的房子可以重建，而腐烂的伤口真的可以痊愈如初吗？现如今，作为战后第三代，我知道的关于战争的信息实在是少之又少，我或许知道历史上那个年代大致发生了些什么，但在老奶奶之前，我从来没有这样详细的了解过战争年代中某一个人的故事，他或许是一个年轻的士兵，或许是一个调皮的孩子，或许是一个憧憬未来的少女，或许是辛苦的农民，或许是垂垂老矣的老人，或许是你和我。这种连接变得真实和深刻，因此也就更加地难过和无力。所有的言语似乎都变得苍白，变得没有分量。我从来没有像那一刻那样，觉得自己了解的实在是太少，做过的事情也实在是太少，我几乎要为自己的这种无知感到无地自容。正因为如此，珍惜现在和平的生活，牢记那些鲜活的个体（作为活生生的同我们一样的人而不是历史上一个个铅字！）是我们必须去做的事。

治疗现在才开始。这是在第三天的工作坊（也就是正式工作坊的最后一天）快要结束的时候 Armand 老师说的一句话。当时的情况是日本参加者首先说了自己真实的感受，随后中方参与者也表达了自己真实的情绪，有愧疚也有愤怒，那是一个真实的时刻，所有人因为那些真实的情绪表达而连接在了一起，这是多么珍贵的瞬间。正如 Armand 老师说的那样，我们所在的是这样一个空间，这个空间能够容纳所有的情绪和感情。在 4 天的工作坊中，我时刻为所有参与者的投入与坦诚所感动。不论是暖场时做的那些看似有些愚蠢的肢体动作还是在雕塑时充满感情的动作，因为所有人的真诚，这所有的一切都变成了最棒的场景。

我印象最深的是大家在听完老奶奶的讲述后，通过小组分享，最后要表演成一个小故事。因为语言和时间的限制，我们没有办法构造出一个完整的故事，实际上，我仅仅知道的自己的角色和上场的时刻。但美妙的是，正因为这样，我们借着角色表达了自己最真实的情感，也从自己的角度获得了某些体会。我扮演的是一个中国老奶奶，在逃难的途中遇到了结伴的中国人和日本人，最后被他们一起救了。在表演的过程中，我几乎没有经过思考，就自然而然地表达出了对日本人的恐惧与排斥，但是故事的结局（被中国人和日本人所救）又让我因为听了幸存者故事而难过的心情获得了某种程度的治愈。使我震惊的是，过了一天我才知道，和我同组的日本参与者因为我的表演而受到了伤害，她们因为我的恐惧和排斥而苦恼、

伤心！这是我怎么也没想到的情况。参与了同一个故事的我们，在同一个场景中的我们，感受竟然是如此的不同！是什么样的背景文化，什么样的不同遭遇造成了这种差异？

我想，这或许就是及时、有效而真诚沟通的重要性。而当前，从小的方面来说，人与人之间的相处需要沟通，从大的方面来说，中日两国之间也需要更多的沟通。我想，不论是面临什么样的场景，处理的是什么事，人与人之间的互动是最重要的，我们最该重视的也是人与人之间珍贵而平凡的相处。

牢记历史并不是要延续仇恨。就像有同学在分享时说到的，也许目前中日两国青年在战争历史这个话题上的矛盾还无法得到真正的和解，但这并不会妨碍我们的沟通和交流，我们强调牢记历史、正视历史并不是要延续仇恨，而是要以史为鉴、正视历史、面向未来，珍爱和平、维护和平。只有这样，那些至今还未痊愈的伤痕才有治愈的机会。

感谢中日所有参与者们及 Armand 老师在 4 天工作坊中的坦诚与包容！

11-2 「南京を思い起こす 2013」感想文

南京師範大学 熊春燕

四日間にわたったワークショップのことを顧みると、まるで長い夢のようです。夢には苦痛、辛さ、崩れもあれば、喜び、感激と快方もあり、さらに変化もあります。ただ四日という短い時間に、違う国からまた、津々浦々から集まってきた私たちは、一步一步と相手に近づいていきました。四日はまた、長いように思われます。四日の間、みんなで一緒に大虐殺記念館を見学したり、互いに心を開けて喜怒哀楽を分かち合い、互いに相手の涙と笑いを素直に受け入れ、さらに、一緒に歴史を顧みながら現在のことや未来への展望をめぐって語り合いました。

「今日の生活は無数の犠牲者が自分の命と血で換えてくれたものだ」。この言葉は小学校から教えられた言葉ですが、今、やっとこの言葉の意味を深く理解できたと思います。記念館にある万人坑に深く埋められた白骨を見たときに、私はこらえきれずに虐殺当時のシーンを頭の中で繰り返し繰り返し想像して見

ました。殺される直前の人たちはいったいどんな気持ちを持っていたのでしょうか？この考えは私を潰そうとしました。なぜかという、いくら考えても、決して解答を得られず、どんなに想像しても、当時の状況の万分の一に及ばないだろうと知っているからです。

あの生存者のおばあさんが昔の悲惨な経験を語ってくれる時、会場にいる人々は、みんな深い悲しみと同情に陥ってしまいました。それと同時に、私は自分が今のような平和な時代に生まれて暮らせることをとてもありがたく幸いに思います。もし、あの年代に生きたら、どう暮らすのかとても想像できません。それで、その時から、平和を大切にしろなどの言葉は、絶対、意味のない空しい文字ではなくなり、もうとても意義ある宝物のような文字になりました。

おばあさんの証言に現れたシーンに、私は二回目に潰そうになるのを感じました。戦争がもたらした絶滅的な破壊をどのように再建するのですか？戦争の残したおびただしい、いつまでも治れない傷をどのように癒しますか。破壊された建物が再建できても、めちゃくちゃにされた傷口は本当にもとのように全快できますか？今、戦後の第3世代として、知っているその戦争についての情報はあまりに少なすぎると思います。おばあさんの話を聞く前に、歴史においてどの年代に何が起こったかは、大体知っているのですが、しかし、戦争時代に生きていた一人のストーリーを詳しく知ったのは今回が初めてです。戦時中の人、もしかしたら若い兵士、あるいは、いたずらのやんちゃな子、あるいは、夢を見ている少女、あるいは、辛い野良仕事をする農民、あるいは、だんだんと老いていく年寄りかもしれない、さらに、もしかしたら、あなたと私かもしれない。それらのシーンは、だんだんと真実なもののように浮き彫りされて、かえって、胸を痛め、無力を感じさせられました。こんな時になると、どんな言葉も、白くて無力で心情を表すことができません。その時のように、自分が知っていることや、やったことはあまりにも少なすぎる感じたことはありませんでした。こんなほとんど無知な自分はとてもいたたまれなくなってしまいました。だからこそ、今の平和な生活を大切に、それらの生きた個体（一つ一つ歴史のページに記された活字ではなく、我々と同じような人間）を覚えていくことは、今の私たちがやらなければならないことだと思います。

「治療は今からだよ」。これは三日目のワークショップが（つまり正式のワークショップの終日）そろそろ終わる時に、アルマンド先生がおっしゃった一言です。当時の状況はこういうようなシーンです。まず、日本側の参加者が自分

の実感を話し、それに継いで、中国側の参加者も自分が真実に感じたことを話しました。みんなの話には、悔しさもあれば、怒りもあります。そのひとときは真実な時でした。みんなは、その真実的感情表現で一体になりました。あの時はほんとうに貴重な瞬間だと思います。まさにアルマンド先生がおっしゃったとおり、その時、私達がいる空間はあらゆる感情を受け入れられる空間です。

四日間にわたったワークショップの中で、私はずっと、すべての参加者の無我夢中の投入と素直な姿勢に感動させられていました。ウォームアップエクササイズをするときも、一見とてもおかしい身ぶりのエクササイズをするときも、あるいは、感情をこめたプレイバックをするときも、いずれも、みんな真心でやるものなので、会場で行われた、すべてのワークはなによりも最高の光景だと思います。

一番印象的なことは、おばあさんの証言を聞いた後、みんなは小グループでそれぞれ感じたことを分かち合い、それから一つの短いストーリーをパフォーマンスしたことです。言葉と時間が限られて、私のグループはまとまったストーリーが作れませんでした。私も、ただ、自分の演じた役と、舞台に上がった時のことだけ覚えています。それにしても、素晴らしいことは、これこそ、私たちは役を通して自分の最も真実な感情を表したり、自分の立場からいくつかの経験を獲得したと思います。

私が演じた役は中国人のおばあさんです。彼女は避難途中で中国人と日本人の連れ合いに会い、彼らに助けられました。パフォーマンスをしている間に、私はほとんど考えないまま、自然に日本人に対する恐怖と反発の感情を表しました。しかし、あの物語の結末（中国人と日本人に助けられた）によって、私の生存者の証言を聞いて切なくなった気持ちは、ある程度癒されたと感じました。意外で驚いたことに、私の演技で、同じグループの日本側の参加者が傷ついたことを翌日に聞きました。彼女たちは、私の恐怖と反発の感情に悩まされたそうです。本当に悲しいこと！これは私はとても思ってもないことです。

共に、一つのストーリーを演じたのに、同じパフォーマンスに身を置かれた私たちの感じたことはこんなにも違ってしまったのです！どのような背景文化によって、どんな境遇によってこんな違った格差が生じたのでしょうか。

おそらく、これこそ、タイムリーで、有効で素直にコミュニケーションをすることの大切さだと思います。今、小さなことから言えば、人と人との間のコミュ

ニケーションが必要で、大きなことから言えば、中日両国も、もっと多くの交流が必要です。どんな場面に直面しても、どんなことを取り扱っても、人と人のインタラクティブは最も重要で、最も重視すべきことは、人と人の間にあって大切に平凡な付き合いではないかと思います。

歴史を銘記することは恨み続けることではない。まるで、体験を分かち合う時にある学生が言ったように、現在、中日両国青年は戦争の歴史という話題における矛盾は完全に和解できないかもしれないが、私たちの疎通とコミュニケーションに少しも差し支えません。歴史を銘記し、真正面から見ることは恨みを抱き続けるのではなく、歴史を鑑として、真正面から見るのは、未来に向かい、平和を大切にし、平和を守るためです。このようにしていけば、まだ、治っていないトラウマが癒される機会が訪れてくると思います。

最後になりますが、中日の参加者に感謝します。また、四日間にわたったワークショップの間にずっと誠実で包容してくださったアルマンド先生に心から感謝します！

12-1 戏剧治疗工作坊参后感

南京师范大学 心理学院 翁晶

参加这次的戏剧治疗工作坊，还是有不少收获的。虽然表面看来，我们只是在做一些看着很简单的事，比如发出声音，做个表情，演个雕塑等等。但一次次行为的完成，却在不知不觉中推动着我们靠近自己的内心，趋向整合。包括我现在在这里梳理我参与工作坊后的感想，其实，也是再一次通向内心探索与整合的体验。我希望我能够诚实面对自己的心。

第一天，在简单的开幕致辞之后，开始了我们与戏剧疗法的第一次亲密接触。我们的第一轮开始了，是一个“烫土豆”的传递，感觉好新奇，每一个人都那么投入，整个现场的氛围好一致，当每个人都进入那个状态的时候，真仿佛中间有个烫土豆在传递。有种奇特的感觉，众人顿时变成一人，大家都是一样的，目标都是一致的。虽然互不相识，却顿时拉近了彼此的距离，隔阂也随之消除，没有年龄的差异，也没有国界、学校、时代、文化、性别的差异。现在回想起来，感

觉更加强烈了，原来戏剧疗法在第一轮体验中，就已经彰显了她独特的魅力。当然，毕竟是陌生的群体，当涉及到一些个人形象的问题，当我们开始顾忌周围人的评价时，就会出现放不开的情况。不得不承认，自己就有好几次，在完成某些要求的动作时，就没有“进入”，用我们沙盘游戏课的老师的话来讲，就是从那种高峰体验的状态中“出来”了，一旦出来，就会受到各种评价系统的干扰，以至于做起动作来也会很别扭。

接下来就不按着时间顺序逐一回顾了。我想说一下自己最深刻的一些体验吧。

首先是对于战争创伤的理解，因为是中日战后的第三代，又因为自己很少跟爷爷奶奶去了解这方面的信息，因此可以说对战争没有什么体验。只是从影视作品或者图书资料中了解到一些关于战争的信息，但好像基本上没有与自己产生过连接。只是也会跟着那个年代的老百姓，说日本人是日本鬼子。但自从信仰基督之后，知道每个人都是需要去爱的，从那以后好像国界、文化不再限制自己，也不会跟着大家这样地去评断日本人，因为判断人的不是我们，是神。这次的工作坊，让我意识到，虽然战争发生在那个年代，但那个时代的创伤还是会影响到这个时代的人。当我们回顾那段历史的时候，能够同感到那个耻辱、痛苦、无力、愤慨……看到一同参与这个工作坊的年轻人，在表达自己的情感时所用的词或句子，就知道，战争所带来的阴影仍然蔓延在这个世代的人心里。宽恕真不是那么容易做到的，我们好像可以对工作坊中的那几个真诚的日本老师做到宽恕，可以对与我们建立了友好关系的日本人做到宽恕，但谈到整个日本民族的时候，我们会更多使用负性的表达，宣泄的更多是负性的情绪。前面说的那个宽恕，仍然是有条件的，建立在有安全感的基础上的。

因此，几乎没有人能做到无条件地宽恕。戏剧治疗的意义体现在哪呢，是要带领我们走向宽恕吗？好像更多是看重受冒犯者个人的负性情绪的宣泄与表达，受冒犯者个人的整合与释放，那么，我们可以试着来想，当一个人的负性情感释放出去了，达到整合了，能够更加平和了，重新来看这段历史的时候，是不是更能平静地去面对，以至于更能趋向宽恕呢？当然这只是我个人的推导，或许中间仍要经过一些其他的过程，才能让受冒犯者走向宽恕。或许以后也可以做这方面的研究。

其次是我对戏剧治疗本身的一个认识，回顾整个过程，阿曼德乃是逐步地带领我们向前推进。先是个人声音、表情、动作、情绪的传递，再是个人或两人在某段路程中的情景展示，然后是两两之间言语信息与非言语信息的交流，接着是对他人情绪情感状态的共情，用做动作或发出声音、言语的形式来共情，渐渐地

开始以小组形式共同表演一个静态的场景，最后进入一整个完整戏剧场景的表演。一开始，我对戏剧治疗的认识是，肯定是以戏剧的方式来展示个什么东西，但参加过这次工作坊之后，我很庆幸，阿曼德没有一开始就让我们以小组形式讨论表演。前期的铺垫可以说每一步都是不可少的，而且期间在有一些环节上提供了重复温习的机会，比如没早晨都会有一些基本动作、声音的传递，再开启新的一天，每一次结束都有手指同心圆的总结，对过去的一天有个交待。

自己经历了从不那么能放开的拘谨状态，到豁出去啥也不管的自由状态，当然，期间还是有反复，特别是期间请了一整天的假，回来以后，又经历了一些适应的过程。我想至少我体验过那种高度放松的状态，虽然工作坊结束了，我个人的体验仍然可以继续，那种状态下的感觉为我提供了参考，我希望在自己的体验中，我能够找到通往那个高峰状态的钥匙，让我随时能进入那种 play 的状态。

最后衷心感谢组织这次工作坊工作的那些老师们，也感谢在这次工作坊中结识的那些朋友们，让我的眼界、思维都更开放了。希望我们都能找到属于自己与内心连接的模式，或是“戏剧治疗”，或是沙盘，或是别的，总之是能通往自己的高峰体验状态的。

12-2 ドラマセラピーワークショップについての感想

南京師範大学 心理学院 翁晶

今回のドラマセラピーワークショップに参加して得た収穫は多いです。表から見れば、私達はただいくつかとても簡単なワークをやっていたと見えるだけです。例えば、声を出したり、作った表情を見せたり、プレイバックなどのパフォーマンスを示したりしただけです。しかし、一つ一つのワークが完成するにしたがって、私たちの心はいつの間にか押されて自分の胸のそこに迫り、統合されたように感じました。ワークショップに参加した感想をまとめている今も、実は、もう一度内心を探求し、統合する体験だと思います。自分に素直に直面できるように期待しています。

初日に、簡単な開会挨拶の後、すぐ、ドラマセラピーに親密に接触し始めました。最初に行われたエクササイズは「熱いジャガイモ」のリレーでした。新

鮮な体験でとてもおもしろかったのです。誰も彼も一生懸命にこのリレーに投入しました。会場の雰囲気は一体になったように一致していました。すべての人が同じ状態に投入したら、まるで一つの「熱いジャガイモ」はみんなの手によって投げ回されるように見えました。

その時、ある奇特な感じがしました。まるでみんなは同じで一人の人間になって、おなじ目標に向かっていく感じでした。お互いに面識がなかったのに、その瞬間、互いの距離感が急になくなり、間に立った壁も消えてしまいました。また、年齢の差も、国境も、学校も、時代も、文化の差も、さらに性別の差もなくなったようです。今にして、思い出して考えても、そんな感じはもっと強くなりました。

ドラマセラピーという治療法は一つ目のエクササイズを体験ただけで、すでにその独特な魅力をしみじみと感じました。もちろん、ワークショップをするグループのメンバーは、皆、互いに面識のない人同士で、個人のイメージに関わると、周りの人の評価を気にすると、あやしいエクササイズをする時に、周り構わずにすることができないことがあります。認めざるを得ないことは、私自身は何度も、いくつかの動作をする時に、要求通りにやらなかったのです。つまり、状態に「投入」していなかったのです。地形の模型ゲーム授業の教師の話で言えば、そのピーク体験の状態から「出てしまった」という状態です。一旦、その状態から出てしまったら、さまざまな評価システムに妨害され、要求される動作をする時も、違和感がしてできなくなります。

次から、時間順序に従って振り返りながら、感じたことを話しましょう。ここで、最も深い印象の体験をいくつか話したいのです。

まず、戦争トラウマについての理解です。中日戦争後の第3世代として、自らおじいさんとおばあさんにこの方面のことを教えてもらったことはとても少ないので、戦争体験というものはほとんど持っていません。戦争についての情報は、ただ、映画などの作品から、あるいは図書館の資料からをすこし知っただけで、自分と直接に繋がったことはなかったように思います。でも、やはりその年代の人々について、日本人を日本鬼子と呼んでいました。しかし、キリスト教を信仰してから、すべての人を愛すべきだと教えられてから、国境や異文化に制限されなくなり、他人にしたがって日本人のことを判断することもなくなりました。というのは、判断を下す人は私たちではなくて、神だと思いつから。

今回のワークショップを通して、私は、戦争はあの年代に起こったことだが、その戦争につけられたトラウマはこの時代の人に影響を与えてしまうことを意識するようになりました。あの歴史を振り返るとき、その恥、苦しみ、無力、怒り……などを共感することができます。このワークショップに参加した若者が自分の感情を表す時に使う言葉や文章を見て、戦争がもたらした暗い影は、今でもこの世代の人々の心に広がっていることがわかります。

許しというのは、本当に容易なことではありません。我々はワークショップを主催する誠実な日本の先生、我々と友好関係を結んだ日本人を許すことができるが、日本民族全体のことを言及する時に、やはり多くのマイナスな表現をしてしまい、訴えたのは、相変わらずマイナス的な感情です。このことから、前に言った許しは、やはり条件がついたものなのでしょう。つまり、許しは安全感という基礎の上に成り立つことだと思います。

したがって、ほとんどの人は無条件に許すことはできないでしょう。ドラマセラピーの意味はいったいどこにあるのでしょうか。私たちを率いて許しという道に向かっていこうというのでしょうか？しかしながら、なんだか、今の治療のポイントは侵害された個人個人のマイナスな感情の発散と表現にあり、侵害された個人個人の内心の統合と釈放にあるように思われます。

もし、そうだとすれば、考えてみましょう。個人のマイナスな感情が発散してしまい、統合に達して、もっと和やかになり、そうして、この歴史を改めて見直すようになる時に、もっと落ち着いて歴史に直面するようになり、もっと許す態勢になっていくのでしょうか？もちろん、これは、ただ私個人の推定だけです。治療はまだまだ、いろいろな他のプロセスを経るかもしれません。それらのプロセスを経てはじめて侵害された者を許す道に行かせるようになります。これから、このような研究をしていくべきかもしれません。

次は、私自身のドラマセラピーへの認識です。今回の治療全過程を振り返って見て、アルマンド先生は、私たちを連れて徐々に進んでいくことがわかりました。

まずは、一人から一人への声、表情、動作、感情のリレーのステップです。次は、一人や二人で、ある道中のシーンを演じるステップです。それから、二人でペアにして、言語や非言語のコミュニケーションを行うステップです。その後、他人の感情状態への共感を、身振りや声、言葉で表現するステップです。ワークショップはこのように進み、だんだん、小グループの形で静的なプレイ

バックをパフォーマンスするステップになり、最後のステップは、全員で一つのまとまった劇を演じる形になるものです。

ドラマセラピーを受ける前に、ドラマセラピーとはおそらく芝居の形で、何かを見せてくれるだろうと思ったが、ワークショップに参加してみて、とてもありがたく感じました。アルマンド先生は初段階において小グループの形で、討論やパフォーマンスをみんなに要求しなかったのです。初段階でやった一つひとつのウォームアップのエクササイズは一つも欠かせないと思います。しかも、ステップの間も、繰り返して復習するチャンスもくれました。例えば、毎朝、必ずいくつかの基本的動作や声のリレーをします。それらのエクササイズをして、新しい一日を開け、また、一日の終了作業として、必ずみんなで、指で同心円を作って一日の活動を終え、その同心円で、過ぎ去った一日のワークショップの活動を確認します。

私自身も、最初は緊張して、あまりオープンにできなかった状態から、何も構わずに自分を投げ出したように自由自在な状態になった過程を経験しました。もちろん、その間には、繰り返しがありました。例えば、一日の休暇を取ったことがあり、戻ってから、またも、いくつかの適応過程を経験しました。

今、ワークショップが終わったのですが、私個人の体験はまた継続していくことができると思います。というのは、少なくともその高度なリラクスのピーク状態を経験したことがあるから、その状態の感覚はこれからの参考になると思います。自分の体験で、あのピークに達する鍵を見出し、いつでもそんなplayの状態に入れることを期待します。

最後になりますが、今度のワークショップを主催した先生方に心から感謝します。また、今回のワークショップで知り合った友達みなさんに感謝します。みなさんのおかげで、私は視野がもっと広くなり、考え方ももっとオープンになりました。

これから、みんなが自分特有の、自分の心と接続モードを見つけることを期待します。この接続モードはドラマセラピーか、地形の模型か、あるいは、別の形かもしれません。とにかく、自分をそのピーク状態の体験へ導くものです。

13-1 “回忆南京 2013—HWH 工作坊”之我感

南京师范大学 社会发展学院 燕 振

为期四天的“回忆南京 2013—HWH 工作坊”活动已经结束，参加活动的日方朋友和美方朋友都已回到了自己的祖国，想必此时大家的感受都一样，既对新结识的朋友念念不忘，又对 HWH 工作坊项目的结束有些遗憾，心情十分复杂。作为工作坊的一员，我的内心感受以及对 HWH 工作坊的认识从参加工作坊活动之前到工作坊活动结束都发生了几番转变，下面我将大致谈一下参加完工作坊之后的内心感想。

我之所以参加本次工作坊，有几方面的原因：首先，我是一名中国人，我的国家在近百年间遭受到了日本国的两次侵略，我的祖辈都是战争的亲历者，同时也是受害者，作为受害国的国民，我十分想通过这次工作坊能够加深对日本的了解，特别是对真实的日本人的认识。其次，我是一名中国近现代史专业的研究生，对近代历史上中日两国之间发生的两次战争历史，特别是第二次中日战争的那段历史有较为浓厚的兴趣，希望将我所了解的那段历史能与参加工作坊的日本友人一起分享，并了解一下他们是怎么看待那段战争历史的。

再次，对 HWH 工作坊十分好奇，因为通过戏剧疗法治疗战争心理创伤这种尝试在中国很少见，对此我感到十分好奇，想通过实际参与了解一下国外的此项研究进展情况。

最后，我从之前参加过 HWH 工作坊活动的师兄那里听说这是一次非常有意义的活动，通过参与活动既可以深入的与日本青年学生进行交流，同时也能够对中日两个“对立”民族的战争心理创伤产生积极影响，因此我决定参与到本次 HWH 工作坊活动中来。

活动正式开始的那天真正到来时，心中竟有些忐忑与不安，因为参与活动的大部分成员都相互不熟悉，由于国籍、文化及语言的不同导致沟通较为困难，而且阿尔曼德教授的戏剧疗伤方式较为新鲜，我担心自己不能够很好的投入进去。当工作坊开始之后，我忐忑的心情有所释怀，这种新颖的心理减压与创伤治疗方式十分奇特，它就像一个魔咒，使参与者逐渐的放松心理上的戒备与拘束，不自觉的投入到其中，而且使自己变得更加开放，十分迫切的想在活动中打开心扉，既让他人认识我，同时我也能够通过这种方式了解他人。

当第一天的工作坊结束之后，大家渐渐的熟悉起来，也逐渐能够较为放松的

分享自己有关中日战争的经历与伤痛，为接下来三天的工作坊奠定了一个较好的基础。随后三天的活动除了工作坊之外，主办方还安排了参与者一同参观南京大屠杀遇难同胞纪念馆、倾听南京大屠杀幸存者郭秀兰老人的讲述、到长江边燕子矶大屠杀遇难同胞纪念碑祭奠亡灵等活动。

这种安排在我的理解看来，是想让参与者更够更加近距离的接触那段战争，使自己的内心能够与战争亡灵有一个交流与感应，从而能使自己在工作坊中更加真实、深刻的表达自己的内心感受。

在中日双方参与者真实表达自己情感与想法的过程中，我可以感觉到不同人的不同想法，大部分日本参与者之前对中日战争理解甚少，在得知真实情况后，他们对本国政客与军人发动的那场战争感到遗憾，对中国战争遇难者感到惋惜与悲痛，但是他们因对中国以及中国人不够了解，内心担心中国人想要的就是他们的道歉与谢罪，因而内心很矛盾，负担较重。大部分中国参与者因为祖辈的战争受害经历以及国家的宣传与教育，对日本发动的那场侵略战争以及近期中日两国关系的紧张局势都十分愤慨与痛心，心情也十分复杂。

而我的心情在这短短的四天时间里也变得起伏不定，工作坊刚开始时，我觉得大家都较为放松，也能够较为开放的相互交流，当逐渐涉及到战争这个敏感话题后，我感到每个人的内心都开始产生戒备感，特别是当认识到部分日本参与者心中始终抱着中国人想让其谢罪的担忧时，我真的感到非常遗憾，想必大家的内心没有得到真正的释怀与放松，可能是中日参与者真的对对方国家文化与性格不够了解，因而在工作坊中有时会出现类似于冲突的感受，这可能也会影响工作坊的成效。

当工作坊即将结束时，我的感受就更为复杂，一方面，工作坊在加深中日青年了解上有一定的效用，能够使参与者放松内心，真切去沟通；但是另一方面，由于双方对彼此国民的性格了解不够，因而在涉及战争的话题时大家内心上又开始有些焦虑与负担。所以，我感到工作坊在医治中日两个民族的战争创伤方面的努力大家有目共睹，日本学者与日本青年对构筑中日和平友好的行动我也感到非常钦佩，但是我觉得 HWH 工作坊还应该在一些方面有所改进与提高，比如：开展工作坊之前，最好能让参与者真正了解工作坊的目的，也能够让参与者更全面、深入的了解中日双方参与工作坊的目的以及期望，避免在工作坊当中因误会而影响工作坊的科研效果；同时我也希望工作坊更够在更大范围推进下去，特别是能让更多日本友人参与到其中，了解中国、认识中国人。

13-2 「南京を思い起こす 2013—HWH ワークショップ」の感想

南京師範大学 社会発展学院 燕振

四日間にわたった「南京を思い起こす 2013—HWH ワークショップ」イベントが終わって、日本側の参加者の友人及び米国側の友人は、みんな祖国に帰りました。今は、みんな同じ気持ちを抱えているだろうと思います。つまり、新しく知り合った友人への懐かしさ、ワークショップが早く終わったことに対する残念さ、さぞ心情は非常に複雑でしょう。ワークショップの一員として、ワークショップに参加する前と参加した後の、私の内心の感じ、また、HWH ワークショップに対する認識は、何度も転換しました。次に HWH ワークショップに参加した後、感じたことを話します。

今回のワークショップに参加させてもらった理由はいくつかあります。まず、私は中国人であることです。祖国は今から 100 年の歴史を振り返ってみてわかるように、日本に二回も侵略され、私の祖先はみんな戦争の経験者であると同時に、被害者です。私は被害国の国民として、今回のワークショップを通して日本という国を詳しく知りたいし、特に本当の日本人を認識したいのです。

次は、私は中国近現代史を専攻する大学院生です。近代歴史における中日両国間に発生した二回の戦争の歴史に興味をもち、とりわけ、二回目の中日戦争の歴史に強い興味を持っているからです。また、私が知っているあの歴史のことを同じワークショップに参加する日本の友人と分かち合いたいし、そして、彼らはどのようにあの戦争時代の歴史を見ているのかを知りたいのです。

それから、HWH ワークショップに非常に好奇心を持っています。ドラマセラピーという手法を通して、戦争トラウマを癒すという試みは、中国でとても珍しいことだから、HWH ワークショップのことを珍しいことだと思っているのです。それに、実際に参加することによって、このような研究が国外において進捗している状況も知りたいのです。

最後に、前に HWH ワークショップに参加したことのある先輩から、この HWH のイベントはとても意義あるイベントだと聞いたからです。このイベントに参加することを通して、日本の若い学生との交流を深めることができるし、同時に、中日という「対立」している民族の内心についた戦争トラウマの治療に積極的な影響を与えられるから、今回の HWH ワークショップに参加するこ

とにしたのです。

それにしても、HWH ワークショップが本格的に始まる日を迎えた時に、やはりちょっとドキドキして不安でした。イベントに参加したメンバーはほとんどお互いに知らない人同士だから、国籍、文化や言葉の違いのせいで、コミュニケーションは困難で、しかもアルマンド教授のドラマセラピーという療法は新鮮で、自分は活動にうまく取り組むことができないのではないかと心配していたからです。

意外のことに、HWH ワークショップが始まったら、不安な気持ちがすぐにくらなくなりました。この斬新な心理療法は本当に非常に奇特で、まるで魔法のように、参加者たちの心理に構えた警戒や絆を少しずつほぐして、みなさんをリラックスさせ、さらに、一つ一つのエクササイズに無意識的に投入させました。参加者の皆さんも、もっとオープンにするようになり、切にイベントで心の扉を開けて、他人に自分のことを認識してもらいたくなり、同時に自分も同じように他人のことを早く理解したくなったのです。

一日目のワークが終わってから、みんなは互いにだんだん親しくなり、そして、穏やかな気持ちで中日戦争の経験と苦痛を分かち合うようになって、これから行う三日間のワークショップのために良い基礎を打ち立てました。あとの三日間の活動はワークのほかに、主催者は、参加者全員に南京大虐殺遇難同胞記念館を見学させたり、南京大虐殺生存者の郭秀兰老人の証言を聞かせたり、揚子江の岸にある燕子磯大虐殺遭難同胞記念碑のところで遭難者亡霊を哀悼させたりで、いろいろな活動を手配しました。

このようなプログラムの意図は、私の理解からみれば、参加者全員をその戦争にもっともっと近づかせ、自分の心を戦争の亡霊と交流させ、亡霊のことを感じさせ、そうして、ワークを行う時に、もっと素直に自分の本当の感情や本音を示すことができるためだと考えています。

中日双方の参加者が素直に自分の感情や見解を示している過程から、違った人の持っている異なる見解を知るようになりました。実は、はじめの時に、ほとんどの日本側の参加者は、中日戦争についてあまり知らなかったようで、でも、真相を知ってから、彼らは自国の政治家と軍人が発動した戦争にとっても遺憾に思っていたようです。さらに、日本側の参加者は中国の戦争遭難者のことを惜しんだり悲しんだりしました。それにしても、彼らは中国および中国人をあまり理解していないから、内心で中国人からの謝罪要求を心配して葛藤して

重荷を背負っていたように思われます。それに対して、中国側の参加者は、ほとんど祖先の戦争被害経験や国の宣伝と教育によって、かつて日本が発動した侵略戦争に、また、最近の中日両国関係の緊張に怒りや心の痛さを感じて、気持ちもとても複雑でした。

私の心情もこの短い四日の間で反復して不安定でした。ワークショップが始まったばかりの時、みんながリラックスして、わりとオープンにして、お互いに交流していたように思われたが、その後、敏感な戦争話題に触れたら、すべての人の内心は、次第に警戒するようになった感じがしました。とりわけ、日本側のある参加者は、中国人に謝罪させられることをずっと心配している気持ちをみんなに訴えてから、私はほんとうに遺憾に思っただけで堪えなかったのです。なぜかというと、みんなは本当の安心感とリラックスを得られないからでしょう。実は、中日双方の参加者は相手国の文化と性格をあまり理解していないことで、ワークをする時に、衝突のような感じがして、それは、もしかすると、ワークの効果を妨げたかもしれないと思います。

ワークショップがそろそろ終了を迎えるにあたり、私の気持ちはよりいっそう複雑になりました。中日青年の相互理解を深めるワークの効用が効いて、参加者は心からリラックスでき、真心をもってコミュニケーションをすることができるようになりました。一方、お互いに相手国国民の性格への理解は不足なため、戦争に関わる話題に触れると、なんだかみんなの内心から、また、少し焦りや心配な思いが湧いてきたようです。だから、HWH ワークショップが中日両民族の戦争トラウマを治療する努力を誰もが認め、日本の学者と日本青年が中日平和友好の基盤を築くという行為に私も非常に敬服します。それにしても、HWH ワークショップの仕事はいくつか改善や向上するところがあると思います。たとえば、HWH ワークショップを行う前に、参加者にその目的を十分理解してもらうことです。そうすれば、参加者は、中日双方とともにワークに参加してもらう目的、期待をもっと深く理解することができると思います。それで、ワーク中に発生する、誤解によって科学研究効果に影響することを避けることができます。そのほかに、この HWH ワークショップをもっと広い範囲で進めていき、もっと多くの日本の友人に参加してもらって、中国のことや中国人のことを知ってもらうことを期待します。

14-1 2013 年工作坊感想

南京师范大学 社会发展学院 王新菊

通过参加为期四天的“2013 回忆南京”工作坊活动，我收获了许多，阿尔曼德先生通过戏剧疗法，让所有与会者打开了自己的心扉，表达他们对中日战争的看法，这一做法非常有意义。下面我谈一下自己参加完这次活动的经历和感想。

我是怀着极大的好奇心参加这次交流会的，因为是第一次参加，所以第一天我感到有些拘束，当阿尔曼德先生让我表演一些动作的时候，我觉得有些放不开，但是随着大家了解的逐步加深，彼此之间都放下了思想包袱，这个会议的气氛融洽了很多，中国人和日本人好像都超越了国界，在一个大家庭中成长、交流。在会议的第二天，工作坊邀请大屠杀的幸存者郭秀兰奶奶来讲述她的经历时，我被她的坚强意志深深的感动了，同时她说的一句话也让我印象深刻，郭奶奶说，我们要做个好人，这句话是对我们这一代年轻人最好的鞭策。会议进行到第三天的时候，阿尔曼德先生组织与会者进行心理剧表演，然后发表各自的看法，大家都把自己的真实想法说了出来，我想这也正是阿尔曼德先生希望看到的。晚上的时候，中国人、日本人和美国人大家一块过了中国的传统佳节——中秋节，一幅幅令人感动的场景难以让人忘怀。第四天，参加工作坊的同志一块到燕子矶纪念大屠杀遇难同胞，当我站在纪念碑前的时候，想到当年的五万同胞葬身于此的时，我控制不住自己的情绪，悲伤的泪水似泉涌般的流了出来。

下面，谈一下自己参加这次活动的感想。

首先，我个人对日本人的看法。我是第一次和日本人面对面的交流，在此之前，我对日本人的印象是从教科书、新闻媒体等渠道获得的，总体而言，我对日本人的印象是不怎么好的，尤其是对于一个历史系的学生而言，更清楚的知道日本人在历史上对中国老百姓所犯下的滔天罪行。从某种意义上讲，日本对中国的侵略延缓了中国的近代化进程。但是，通过这几天的交流下来，我发现日本的学者如笠井綾、中村 正、村本 邦子、村川 治彦等承认了历史的真相，他们在尽自己最大的努力来促成中日和平，这让我看到了希望，同时也在心灵上感到了一丝的安慰。毕竟，战争一旦爆发，无论对于中国的老百姓也好，对于日本的老百姓也罢，带来的只能是无尽的痛苦。

接下来，我对中日教科书的问题的看法。在中国的教科书中，我们国家承认了历史真相，1840 年以后中国承受着帝国主义列强的种种侵略一步一步走过来的，

直到 1945 年抗击日本胜利，才大大的增强了中国人民的民族自信心。通过这次交流活动我了解到，在日本的教科书中，日本的人民也是受到外国的侵略不断成长起来的。我在想如果日本右翼势力不能很好的正视教科书问题，有意抹杀日本侵略中国的一些事实，那么这对日本年轻一代的教育是不利的，照这样的形势发展下去，中日两国的历史遗留问题还是不能得到有效的解决。所以，只有中日两国共同正视历史真相，承认历史事实，才能更进一步促进中日关系的发展。

第三，我对活动本身的看法。目前，在中日两国关于钓鱼岛问题关系如此紧张的情况下，日本学者来到中国进行工作坊活动，我觉得这本身是一件非常了不起的事情。但是，所有参加会议者一共只有 34 个人，中国方面参加会议的人的身份大致是相同的，我想关于中国与与会者方面，可不可以挑选身份不同的人参加这一会议，如中学生、大学生、教师、战争幸存者的第三代，可能效果会不一样的。

总之，战争是残酷的，为了不让悲剧重演，中国人和日本人都要很好的总结经验教训，鉴往知来，共同谋求中日两国的和谐发展。

14-2 2013 年 ワークショップへの感想

南京師範大学 社会発展学院 王新菊

4 日間にわたった「南京を思い起こす 2013」のワークショップに参加することによって、いろいろ勉強になりました。アルマンド先生はドラマセラピーという手法を通して、すべての参加者の心をオープンにさせ、中日戦争をめぐる見解を表させました。このやり方は非常に意味があると思います。次に今回の活動に参加して得た体験や感想を話したいと思います。

実は、強い好奇心を抱えて今回のイベントに参加させてもらったのです。はじめてなので、一日目には少し窮屈な思いがしました。アルマンド先生にいくつかの身振りを演じなさいと言われた時、気が引けて自然に動けなかったが、お互いに交流を深めるにつれて、双方とも、ずっと掛かったプレッシャーもなくなり、ワークショップの雰囲気も和やかになってきました。中国人でも日本人でも、まるで国境を超えたかのように、大家族の中で成長し、交流していました。

ワークショップの二日目に、大虐殺の生存者である郭秀兰おばあさんが自分の経験を語っている時、私は彼女の強い意志に深く感動させられた。その時、彼女の一言から、感銘を受けました。つまり、我々はいいい人間になるべきだという言葉です。郭おばあさんの一言は私たちのような若者に最高の鞭撻だと思っています。

三日目に、アルマンド先生は司会をして参加者に心理的芝居を演じさせ、そして、それぞれの見方を発表させました。その場で、参加者はみんな本当の気持ち打ち明けました。これもまさにアルマンド先生が一番見たいことだろうと思います。晩になって、中国人、日本人、アメリカ人は一緒に中国の伝統的な中秋節を過ごしました。一つ一つのシーンはすべて忘れられないほど感動的なものでした。

四日目は、ワークショップのメンバーは、一緒に燕子磯へ行って大虐殺遭難同胞が哀悼しました。遭難者記念碑の前に立った時、虐殺時に五万人もの同胞はこの場に死んだことを思い出すと、自分の感情を抑えきれずに悲しい涙を流しました。

次は、今回のワークショップに参加した感想を話します。

まず、私個人が受けた日本人のイメージについて話します。私にとって、日本人と直接コミュニケーションをすることは、今回がはじめてです。今まで持っている日本人のイメージは、ほとんど教科書、ニュース、メディアなどから獲得したものです。総じて言えば、私の脳にある日本人のイメージはあまり良いものではなかったのです。特に、歴史学部の学生として、歴史において日本人が中国人にたいへんひどい罪を犯したことを詳しく知っています。ある意味では、その侵略行為は中国の近代化を遅らせたと言えます。しかしながら、ここ数日のコミュニケーションを通して、笠井綾、中村正、村本邦子、村川治彦のような日本人学者は歴史の真相を認めて、それに、中日平和を促進するのにできる限りの努力を尽くしていることを知りました。このことから、希望が見えてくると同時に慰めを感じました。あくまでも、戦争が爆発したら、中国人にせよ、日本人にせよ、すべて、限らない惨めな苦難に巻き込まれてしまうでしょう。

次に、中日教科書問題についての見解を話しよう。中国は教科書の中で、歴史の真相を認めています。1840年以降、中国は、帝国主義列強からの様々な侵略に犯されながら、一步一步と辿って、やっと1945年の抗日戦争の勝利を勝

ち取ったところまで辿り付きました。この勝利によって中華民族は自信が大いに強くなりました。今回のワークショップを通して、日本の教科書に記載された日本人民の成長史は、やはり、外国の侵略を受け続けながら成長してきた歴史だということが分かりました。もし、日本の右翼勢力が教科書の問題を正視することはできず、中国を侵略したという事実を抹殺しようとするれば、日本の若い世代への教育にはとても不利なことだと思います。また、今のような形勢はそのまま続いていったら、中日両国間に残った歴史問題をうまく解決することはできないに違いない。だから、中日両国はともに歴史の真相を正視して、歴史の事実を認めてはじめて、中日関係は良い傾向に発展していくことができると思います。

第三は、私なりのワークショップについての見解を話しよう。現在、尖閣諸島問題によって中日両国の関係は非常に緊張が高まっているところを、日本人の学者は中国にやってきてこんなワークショップを行うことはすごく偉いことだと思います。しかし、参加者はたった34名しかなかったです。中国側の参加者の身分は大体同じでした。もし、中国側からも、身分の違った人にこのワークショップに参加してもらい、例えば、中学生、大学生、教師、戦争生存者の第3世代のような身分の人に参加してもらったら、効果も違うかもしれないでしょう。

総じて言えば、戦争は残酷なことです。悲劇を繰り返さないために、中日両国の人々は歴史の教訓をよくよくまとめ、歴史を鑑み、未来を展望し、共に中日両国の協調的發展していくことを図りましょう。

15-1 忆 2013 南京中日战争戏剧工作坊

王丽华 南京师范大学 心理学院

记得最初接到工作坊的通知时，我的内心深处有种十分渴望参加的冲动。工作坊开始前，我仔细思考过为什么，大概是因为从小形成的战争情结吧。因为祖父辈在我出生前就已去世，所以我出生后家里没有直接经历战争的亲人。记得小时候，我所在的家乡经常放战争年代的电影，幼小的我也只是模糊地知道过去有

战争，不知道它有多残酷、对当时的中国人带来多少苦难。直到小学三年级，一次偶然的机会，我和妈妈看了关于中日战争的一部电影《731 部队》（关于日军的细菌战）。当时恐怖的喊叫声、黑屋子、恐怖的老鼠让我非常害怕，可以说在我幼小的心灵埋下了战争的阴影，第一次我感受到世间有那么残酷的角落，那么残酷的人和事。

后来初中、高中、甚至大学，我被迫在课堂上反复学习这段战争史，不知不觉对日本及日本人形成刻板印象——“野蛮、残暴”。直到参加工作坊之前，我还在想，现在的日本人到底是什么样子，不管是什么样子，想起他们的前辈对中国人做过的残暴事情，我就没有好感。我要忠实于自己的内心，工作坊带给我什么我就记录下什么，不会去迎合和讨好。

总的来说，四天的工作坊过程紧凑，丰富多彩。Armand 老师帮助我们揭开关于战争的伤疤，但是通过戏剧的方式让我们把内心的感受宣泄出来，再加上中日双方的沟通交流，让我们增加了理解，最后又轻轻地抚平伤疤，让它在和谐中慢慢治愈。第一天上午，Armand 老师让我们做了很多有趣的热身练习，仿佛一下子带我回到童年，感觉心在逐渐打开并慢慢融入，但是还是会感到与日本的朋友有隔阂。下午去南京大屠杀纪念馆参观后，突然觉得自己内心很矛盾，很不舒服，因为过去日本对中国的伤害是不争的事实，我们之间明明存在仇恨，即使那是上一辈留下的，内心深处其实不想对他们笑，不想表现地那么友善。可是出于理性的尊重，我还是压抑了内心真实的感受。第二天感触最深的是幸存者讲述的故事以及后来的活动，幸存者的现场讲述刺激我想象，记忆仿佛回到 1937 年那个黑色的 12 月。我感到现场的气氛很压抑，因为我们不知道如何处理这种矛盾，面对施害者的后代，作为被害者后代的我们究竟该持什么样的心理状态。我感觉那个下午我的矛盾或者不舒服的情绪似乎达到极点，甚至不想去面对那些。后来 Armand 老师通过空椅子技术和感受意象雕塑技术帮助我们表达出了这种感受，我感觉自己表达出那种敌意和矛盾的心情后很放松，因为不用再带着面具参加工作坊。

第三天几乎是工作坊的高潮阶段，上午除了热身、中日小组交流（通过空椅子和角色扮演），还有自我探索的部分。我对中方的表现者印象深刻，当她所有的重要他人角色同时对她讲话时，我仿佛感受到了她内心的凌乱、挣扎、痛苦和希望。尽管角色中有中国人、日本人，但是文化和语言都不是障碍，心灵的感受都是相通的。尽管我不明白戏剧疗法的作用原理，但是事后和那位表现者交流时，她说自己的内心受到很大的震撼，以至于结束后感觉浑身无力，需要时间整理自

己的情绪和感受。我猜测玄机就在于这吧，把凌乱的东西用清晰的戏剧表达出来，让当事人体会、梳理，反思和梳理中蕴藏着治愈和转化。下午原本要请一位日本人士做展示，意外的是由于种种原因，没有人想展示。但是我很意外地听到了一些故事，原来来访的几位日本友人基本是战争第二代，家人有关于战争的创伤体验。这些故事和感受再一次触及我内心柔软的部分，激起我很多思考。在随后的交流中，我了解到中日在战争的这段历史方面接受的教育完全不一样，所以内心的感受也完全不一样。从某种程度上讲，我们都被历史教科书欺骗了。日方的教育是掩盖史实，逃避诘难；而我们中方的教育是潜移默化中埋下仇恨的种子。也就是说，双方都没有理性地看待战争。这是造成我们作为战争二代或三代存在隔阂很重要的原因。在大家慷慨激昂的言词中，我感受到了友好、真诚、包容、误解的冰释。我也积极表达了自己的感受：第二天下午当幸存者讲完故事，对面的日本老师双膝跪地紧握老人双手时，我哭了，同时内心的某种东西也崩塌了，也许就是那种仇恨突然离我远去，让我很感动，很释然。

最后一天，让我感触最深的是，Armand 教授及几位日本朋友都讲述了自己的关于战争的经历和感受。通过这些，我对工作坊朋友有了更深的了解，我突然明白大家都是战争受害者的后代，不分国籍，我们的感受都是相通的。

我非常喜欢 Armand 老师带给我们的生动有趣的活動，他让我们这个团体充满活力。我也非常感谢有这样一个机会，让我安静地打开内心深处的战争情结，关注它，审视它，并试着与它积极地和解。另外，我也很开心有机会了解日本同龄人对战争及中日关系的看法，凡事沟通过才有和解的可能性，否则就是令双方感到不舒服的症结。

希望中日可以做一家人，希望和平的曙光一直指引我们走下去！

15-2 2013 南京日中戦争トラウマ・ ドラマセラピーワークショップ

南京師範大学 心理学 王丽华

ドラマセラピーワークショップの知らせを受けて、心からとても参加したい衝動が湧いてきた。ワークショップが始まる前に、なぜ、こんな衝動が湧いて

きたのかとよくよく考えた。多分、小さい頃から形成された戦争へのコンプレックスだろうか。祖父母は私が生まれる前にすでに亡くなったので、家族には戦争を直接に体験した人がいないのだ。小さい頃、故郷では、よく戦争テーマの映画が公演された。それで、幼い私も過去に戦争があったことだけは漠然と知っていたが、しかし、あの戦争はどんなに残酷で、当時の中国人にどれほどの苦痛をもたらしたかについてはまったく分からなかった。小学三年生の時、私と母は偶然に中日戦争についての映画『731 部隊』（日本軍部隊の細菌戦に関する）を見た。シーンに映った恐ろしい叫び声、黒い部屋、人をぞっとさせるネズミなどを見て、怖くて怖くてたまらなくなって、戦争の暗いイメージが子供心に深く焼き付き、そして、世の中にはこんな残酷なこと、ひどい人間がいることを初めて痛感した。

その後、中学校、高校、大学で、中日戦争についての歴史を余儀なく勉強させられてきた。知らず知らずのうちに、日本及び日本人のイメージは、「乱暴、残虐」というステレオタイプが形成されてきた。今回のワークショップに参加するまで、今の日本人はどのような様子だろうかと考えていた。でも、どのような様子になっても、中国人にあんな残虐な事をやったことを思い出すと、やはり、よい感じがしていなかった。だから、自分の心に忠実にし、ワークショップから得たことを事実のままに記録しておきたく、人の意向に合うことや、ご機嫌を取ることをしないことにした。

総じて言えば、四日間にわたったワークのプログラムはとてもコンパクトで多彩だった。アルマンド先生の助けによって、みんなの心の底に傷ついた戦争のトラウマは捌かれ、そして、みんなはドラマの形で、本当の感を訴え、さらに、中日双方はコミュニケーションをして、お互いに理解を深め、最後、それぞれの傷跡が、柔らかに撫でられ、穏やかな雰囲気の中でゆっくりと癒されてくるように感じた。

一日目の午前、アルマンド先生にいろいろな面白いウォーミングアップのエクササイズをさせられ、みんなは子供の頃に帰ったような感じがした。そうして、心がすこしずつ開かれ、柔らかくなってきたようだ。それにしても、日本人の友人との間にあるギャップが消えなかった。その日の午後、南京大虐殺記念館を見学した。見学してから、また、急に、葛藤して気分さえも悪くなった。というのは、昔の日本が中国を侵害したことは弁解できない事実なので、私たちの間に恨みがあることは明らかなことだから。そこで、この恨みは先代の人

が残したものであっても、やはり、心から、目の前にいる日本人に笑いたくなく、友好を示したくなかったのだ。それにしても、日本の友人を理性的に尊重すべきであるため、私は依然として本当の感じを抑えていた。二日目、最も深く感銘したのは生存者が自分のストーリーを話した後のワークだった。

生存者の会場での訴えによる刺激で私にいろいろと想像させた。記憶はまるで1937年12月に戻ったようで、重苦しい雰囲気は会場にこもった。なぜかという、私たちは、直面する矛盾をどのように処理するかはまったく分からなかったから。加害者の子孫に面会して、被害者の子孫として、どのような心理状態を持つべきなのか。あの午後、私は葛藤や不愉快な心情が、もう限界になったと感じ、これらのことに直面したくなくなるほどだった。アルマンド先生は、椅子を利用する技法やイメージ彫刻を感じる技法を通じて、みんなが、こんな気持ちを訴えられるように助けてくれた。すると、敵意を持っている葛藤した気持ちを吐き出してから、直ちにリラックスできた。なぜなら、これから、仮面をつけてワークショップに参加することは必要ではないからだった。

三日目は、ワークショップがクライマックスに達したと思う。午前、ウォーミングアップ、中日双方は、小グループの形で、コミュニケーションした（椅子の技法とロールプレイを通して）。それに、自己内心を探るステップもあった。それについて、中国側のある参加者の表現に深い印象が残った。彼女にとって重要な人々を演じたキャストが同時に彼女に話しかけた時、彼女の表現から、彼女の内心の混乱、もがき、苦痛と希望を身にしみるように感じた。それらのキャストを出演した人には、中国人もいれば、日本人もいた。それでも、その時、文化と言葉が違って、コミュニケーションにぜんぜん差し支えはなかった。心の感じは同じだったのだ。ドラマセラピーの工作原理がわからなくても、後で、参加者と交流したら、内心があまりに強く振動させられて、終わった後は体中の力が抜かれたようだから、自分の気持ちと心情を整理するのに時間がかかると教えてくれた。そうだ。この療法の秘訣は多分ここにあると考えた。まず、雑然としたことを明晰なドラマの形で示して、参加者にそれらを体験させ、整理させ、反省させる。それから、それらのことで、トラウマを癒し、別のものに転換させる。

三日目の午後、もともと、一人の日本人が自分のストーリーをドラマにしてみんなに展示する予定だったが、様々な原因で、誰ひとりも展示しようとする人はいなかった。意外なことに、何人かの日本人から、いくつのストーリーを

聞いた。実は、南京訪問に来た日本の友人はほとんど戦争の二世代で、家族には戦争トラウマのついた体験者がいるそうだ。彼らのストーリーを聞いてからの感じは、またも、私の内心の弱いところに触って、いろいろと考えさせられた。

そのあとのコミュニケーションで、中日戦争の歴史について、中日の人々は全然、違った教育を受けたからこそ、お互いの気持ちも全く違ってしまったということが分かってきた。ある意味から言えば、我々はそれぞれ歴史教科書を騙されてきたと言えようと思った。日本側の教育は非難を避けるために真実を隠した教育に対し、中国側の教育は人々の心に、知らず知らずのうちに憎しみの種を埋める教育だと思う。つまり、双方とも、戦争を理性的に見ていないということだ。それは戦争の二世代や三世代としての我々には、ギャップが存在する重要な原因だと思う。みなさんの強い感情を込めた声から、友好、誠実、包容の態度と誤解を解こうという気持ちを感じていた。私も、積極的に自分の気持ちを訴えた。実は、二日目の午後、生存者が自分のストーリーを話した後、向こうにすわっている日本人の先生が跪いて老人の手を握りしめたシーンを見て、私も泣いてしまった。それと同時に、心に強く付いたあるものも崩れてしまった。そのものは、おそらく、恨みというもので、その時から、急に遠いところへ行ってしまうように感じた。その時の私は、とても感激して、納得してほっとした。

最後の日に、感無量に覚えたことは、アルマンド教授と何人かの日本人が戦争についての経験と感想を話したことだった。これらのことを通して、ワークショップの参加者をより深く理解した。私たちみんな戦争被害者の子孫だと目からウロコが落ちるように急にわかった。国籍を問わず、我々の感じが通じるものだ。

私はアルマンド先生がもってくださった面白いワークが大好きだ。先生のおかげで、私たちのワークショップ・グループはずっと活気に満ちていた。また、今回のチャンスを得て、ほんとうにありがたく感じた。このイベントのおかげで、ずっと内心についた戦争のコンプレックスを静かにほぐし、そして、注目するように、見直すように、そして、積極的に和解に向かうようになった。そのほか、同世代の日本人と、戦争や中日関係をめぐる考え方を交わすことができることをありがたく思う。どんなトラブルであっても、コミュニケーションを通せば、和解する可能性がある。そうしなければ、きっと、お互いに不愉快な思いをさせるしこりになってしまいうに決まっている。

中国と日本は一家族のようになり、平和の光は我々を導いて未来へ歩んでいくことを期待している。

16-1 参加“战争创伤”工作坊的感想

南京师范大学 心理学院 朱丹

参加“战争创伤”工作坊是一种偶然，也是一种缘分。

这是我第一次亲身接触日本人，他们对人的真诚、对事业的执着让我无比感动。这之前我对日本人了解的途径主要有三个，一个是教科书，通过教科书了解的日本人无疑跟二战是分不开的。通过媒体了解的日本人就多种多样，清纯、贤惠的日本女人；礼貌、勤奋的日本男人；卡哇伊的日本小孩；干净美丽的风景。还有书籍，本尼迪克特的《菊与刀》，因为在二战时期，日美战争中日本人令美国人捉摸不透，才有了这样的研究日本人的研究报告；村上春树的《挪威的森林》是我去读大学前的那个暑假读的一本小说，那是我第一次看到这么大胆的性爱描写，但是却让一直接受保守性教育的我觉得自然、不淫邪，反而让我想更深入的思考很多。工作坊提供这样一个平台能让我跟日本人一起做一件事情，让我觉得既好奇又期待。我把那些个已经存在我脑海中的对日本人的看法放一边，只想去了解我看到，我听到，我感受到的真真切切的日本人。

Amand老师戏剧治疗也是让我眼前一亮，耳目一新。中国人的文化倾向于含蓄，加上工作坊开始时，大家的关系还没有建立，看到日本友人在活动中那么夸张、形象的表演，完全可以拿奥斯卡奖的演技，我只有羡慕的份了。我尝试着去放开自己的感受，大胆的表达自己。几天的努力，我尝到了一点甜头，恰当且完全表达的感觉很棒。

恰当的表达帮助了我更好的共情，而不是压抑自己的感受。在南京大屠杀幸存者，那个已经年迈的老奶奶在其女儿搀扶下出现在会场中时，我瞬间就有种想哭的欲望。会场中年轻人在和平的年代快乐的打闹着，而奶奶仿佛是伤痛的化身，穿过时间，带着战争年代满满的伤痕，这是让人想哭的强烈对比。奶奶的讲述跟教科书上描述的是一模一样的，虽然我早已了解那些事实，可是那些残酷的事实是发生在活生生的人的身上的事实让我不太能接受。村川治彦教授也很难受，他

握着老奶奶的手，跪在她身边，感到很抱歉。那时候我感觉我跟老奶奶的感受是相通的，我看到老奶奶的手在抖，泪水不住的往下流，我也很感动很激动。村川教授下跪的动作对我有很大的冲击，无论受害者是否对日本国宽恕，但是村川教授那么真诚的抱歉让人温暖，让人觉得你的苦难是受到了加害人的理解，你不是一个人，你们是一起的，这非常难能可贵。虽然村川教授不代表官方，也不能全权代表二战中作为加害角色的日本国，这对他个人太沉重，也是不合理的。但是村川教授所作所为由内而外散发着人性的光辉，值得尊敬。在对待南京大屠杀的战争史实的态度上，我觉得几位日本教授所表现的人格都值得尊敬。只是有一点小遗憾，感觉才刚刚开始，工作坊就已经结束了。

最后，很高兴认识这么多这么好的日本朋友，希望中日永远友好和平相处。

16-2 「戦争トラウマを癒す」ワークショップの感想

朱丹

「戦争トラウマを癒す」ワークショップに参加することは偶然なことで、一つの縁だと思う。

実は、私にとって、日本人に直接触れ合ったのは、今回が初めてでした。しかし、彼らと付き合う時の誠実さ、事業への執着は、とても感動させられることです。これまで、日本人を知る道は、主に三つでした。一つは教科書です。教科書を通じて知った日本人は、ほとんど、第二次世界大戦と関わっています。もう一つはメディアです。それを通じて知った日本人は多種多様です。単純で優しい日本人女性、礼儀正しい勤勉な日本男性、可愛い日本の子供、またほかに、清潔で美しい風景です。それから、書籍のベネディクトの「菊と刀」です。第二次世界大戦中、日米戦争中、読み取れない日本人はアメリカ人を悩ませたから、こんな日本人を深く研究した研究報告書ができたそうです。村上春樹氏の『ノルウェイの森』という小説は、大学に入る前の夏休みに読んだ小説です。初めてこんなに大胆に性愛を描写するものを読んだ。しかしながら、ずっと保守的教育を受けてきた私は、それをとても自然に受け入れ、淫邪などと全然思わず、かえって深く考えさせられました。

今回のワークショップは日本人と一緒にワークする場を与えてくれて、とても好奇心と期待をもって待ちわびました。それまでの脳裏にある日本人に対する見方をしばらく置いて、できるだけ、自分が見たり聞いたりした日本人、自分の体で感じた、目の前に立っている日本人を知りたかったのです。

アルマンド先生のドラマセラピーは、ほんとうに、目をぱっとさせるほど新鮮なものです。中国人に染み込んだ文化は含蓄的なものだし、また、ワークショップがはじまる前に、みんなは、互いの関係がまだ建てられていなかったから、イベントにおいて、日本の友人が大袈裟な手振り身振りをしたり、生き生きする演技を見せたりするのを見て、アカデミー賞でももらえそうな演技だなあと、私は羨ましいばかりでした。その後、私も自分を投げ出すようにワークに投入して、大胆に表現してみました。何日間の努力をして、自分もできるようになり、適切かつ完全に表現できた感じはとてもすばらしかったのです。

適切な表現のおかげで、自分の気持ちを抑えずにみんなと共感するようになりました。南京大虐殺の生存者、もう年を取ったおばあさんは娘に支えられて会場に現れたとたんに、私はなんだか、堪えられずに泣きそうになりました。会場では、若い人々は平和の年代で楽しそうにふざけていて、おばあさんはまるで苦痛のシンボルのような存在で、時間を超えて、戦争時代の傷跡だらけの体をもって、会場にやってきたように思われました。あの光景は泣かずにはいられない強烈な対比の光景でした。おばあさんが話してくれた惨めな戦争体験は教科書に記載されたものとそっくりです。それらの事実を、早くから知っていたが、残酷な事実が目の前にいる人間の身の上で起こった確かな事実だと分かったら、とても、受け入れられずに苦しくてたまらなかったのです。村川治彦教授もとても苦しそうに、おばあさんの手を握って、彼女の前に跪いて、申し訳ないと言わんばかりにいました。

その時、私の気持ちはあのおばあさんの気持ちと通じたと感じました。おばあさんの手が震えていて、涙がぼろぼろと止まらずにこぼれているのを見て、感激で感動でたえなかったのです。村川教授が跪いたアクションを見て大きな衝撃を受けました。被害者は日本国を許すか否かに関わらず、村川教授の真心を込めたお詫びから、とても、温かさを感じ、苦難を舐め尽くした気持ちは加害者に理解されたと思ったのです。また、こちらは一人ではない、双方は一緒だ、このことはとても、ありがたいことでしょう。

村川教授は政府を代表しない、第二次大戦の加害者である日本国を全権代表

することもできない。それは、個人にもあまりに重い重荷で、また、個人に背負わせるのも不合理です。それにしても、村川教授の行為を見て、彼の内心から放ち出している輝かしい人間性を感じ、尊敬に値するものです。また、南京大虐殺という戦争史実にたいする態度において、日本の教授の方々の人格はすべて尊敬に値すると思います。ただちょっと残念に思ったのは、ワークショップは始まったかと思うと、もう終わってしまったということです。

最後、こんなに多くの素敵な日本の友達と知り合ってとてもうれしく思います。また、日中関係は永遠に友好的に平和になっていくことを希望します。

17-1 “回忆南京 2013” 工作坊感想文

滕心瑶

通过这次的“回忆南京”工作坊的活动，让我感触最深的还是沟通的重要性。

此前，虽然我是一名日语专业的学生，对日本或多或少有着一些了解。但我从未与日本的大学生就历史方面就行过交谈，所以并不了解他们的想法。参加了此次工作坊之后，我了解到，日本的学生并不像我们想象中的那样讨厌中国，但也因为从小接受的教育，他们认为历史的责任不应该由自己来承担。在这次的工作坊中，我们虽然讨论了很多沉重的话题，但是更多的时候我们是在做游戏，是在以一个年轻大学生的身份进行交流。所以，我还是希望两国的民间人士能够抛开政治上的影响，以普通人的方式进行沟通交流。

但是在我们工作坊进行的同时，中日的政治关系却又不见好转，日本国内的右倾氛围似乎更加浓重。在参观了大屠杀纪念馆之后我发自内心觉得今日的和平来之不易。所以希望两国领导人能够好好的进行一场对话，不要让历史再次重演。

17-2 「南京を思い起こす 2013」 ワークショップについての感想

藤心瑠

今回の「南京を思い起こす」ワークショップに参加して、感無量に感じたのは、やはりコミュニケーションの大切さです。今までは、日本語を専攻している学生として、日本のことを多かれ少なかれ知っていると思っていましたが、ワークショップに参加するまで、歴史について一度も日本の大学生と意見を交わしたことはなかったのです。だから、彼らの考え方を全然知らなかったのです。今回のワークショップに参加した後、日本の学生は私たちの想像したように中国嫌いではないが、小さい頃から受けてきた教育によって、自分たちが歴史の責任を負わされるべきではないと思っていることを知るようになりました。

今回のワークショップで、私たちはたくさんの重い話題をめぐって検討していましたが、もっとも多くやったのはゲームでした。ゲームの形で、若い大学生の間でコミュニケーションが行われました。だから、両国の民間人が政治的な影響を受けずに、一般人の形でコミュニケーションをしたいと切に期待します。

残念なことに、ワークショップが行われている間に、日中の政治関係は全然好転せず、日本国内の右翼の雰囲気はさらに濃くなっているようです。南京大虐殺記念館を見学してから、今日の平和はほんとうに容易にできたものではないと痛感し、両国の指導者にちゃんと会話をして歴史の悲劇を再び起こさないように願っています。

18-1 “回忆南京 2013”

劉豆

九月中旬我和同学一起参加了“回忆南京 2013”活动，我虽然只参加了两天并没有体验到活动的全过程，却也感慨颇深。

我的家人中几乎没有与中日战争有所关联的，因此之前只想通过这次活动能进一步接触日本人并与他们进行交流，完全没想到那些深刻严峻之事。第一天便感觉跟自己所预想的略有不同。在南师大的宽敞的会议室中，中国人也好日本人也好，都跟随一位美国的心理学家从做简单的动作开始，到玩一些渐渐复杂起来的游戏。与其说这个过程中几乎没有对话，不如说此情此景对话根本就不需要对话。那时候我对战后心理创伤治疗一事还不太明白，只觉得大家都很亲切温和地交流着，完全没有涉及到什么心理创伤。

然而，之后参观了南京大屠杀纪念馆，倾听了战争受害者的诉说，随着相互之间的交往，大家渐渐显露出了各自的感情。我也终于明白了每个人都有着隐藏着过去、伤痛以及自己的想法。特别是不辞辛劳特地来到南京的日本友人们似乎有着更痛苦的感情，我虽然如此觉得却也感受到了日本人特有的距离感。无论对哪个国家的人而言，战争都是无法抹去的伤痛，人们潜意识地对和平、希望、未来、梦想之类的积极性的词语感到憧憬，并强烈地期盼着。战争问题是谁都不想谈到却又无法回避的问题。尤其是对于历史，我们没必要一直拘泥于它，却绝对不能忘却。前车之鉴后事之师，我再一次确认了这一点。

说起来，在活动中我认识了一位日本女生，我们互相留了联系方式，到现在也还保持着联系，经常分享很多有趣的事。这是我第一次交到日本朋友。不知道像我们这样渺小的女孩子之间的友情，有朝一日是不是能成为国家之间的牵绊呢。

18-2 「南京を思い起こす 2013」

劉豆

九月中旬にクラスメートと一緒に「南京を思い起こす」というワークショップに参加した。二日間しか参加しなかったのですが、全プロセスを体験していても、感慨深かったのです。

私の家族は中日戦争に関わったことがほとんどないので、このワークショップに来る前は、ただ、このイベントを通じて日本人と接触し、コミュニケーションしたいと思っただけで、深刻なことを全然考えなかったのです。

実は、初日のワークをして、すでに、想像したこととちょっと違うなと感じ

ました。南師大の大きな会議室で、中国人も日本人も、一人のアメリカの心理学者に従って、シンプルな動作から、だんだん複雑になったゲームまでやっていました。その間、会話がほとんど行われていなかったと言うより、その場では会話はまったく必要なものではないと言ってもよいでしょう。その時になっても、私は、やはり、戦争のトラウマを癒すとは何であろうか、まだ、わからなかったが、ただ、皆さん親切で、みんなで和やかにコミュニケーションをしているだけで、トラウマ治療なんか誰も言及していなかったのです。

ところが、その後、南京大虐殺記念館に見学したり、戦争被害者の訴えを聞いたりお互いにコミュニケーションをしたりしてから、皆さんは少しずつ心情を発露するようになりました。皆さんの話から、みんなの心の底に過去、傷の痛み、自分なりの考えを秘めていることがやっとわかりました。特にわざわざ南京に来られた日本人の方々がもっとつらい感情をこめているのだとおもいました。

しかし、私はそう思っている、日本人との間に特別な距離があると、まともや感じていました。戦争はどの国の人にとっても消せない傷の痛みで、人たちは心から、平和、希望、未来、夢などのプラスの言葉に憧れ、それを切に願っていると思います。

戦争という問題は、誰も避けたくて、誰も避けられない問題だと思います。特に歴史に対して、いつまでもこだわる必要はないが、忘れることは絶対許されません。前車の鑑は後事の師となる（前の人の失敗は後ろの人の戒めとなる）という言葉の意味を改めて認識できたと思います。

ワークショップをしているうちに一人の日本人の女の子と知り合って、お互いに連絡先を教えてもらいました。今でも、時々メールで連絡して、面白いことをいっぱい分かち合っています。日本人の友達ができるのは今回が初めてです。私たちのような女の子の間で結ばれた友情は、いつか国家間の友好の絆になれるかなと思います。

19-1 随想

周俊君

很抗拒写这篇文章，因为想好好把它写好，可是总觉得自己懂得的太少，下不了笔。但总是要写的，无论观点正确与否都是我二十多岁幼稚的头脑想表达的东西。

一 深感无知

这是我的第二次 HWH，每次参加都会加深自己的愧疚感。愧疚于自己的无知。对历史、对这个世界的无知。

第一次去燕子矶，我哭了，现在想想不知道是为什么而哭。或许是被哭泣的日本人所感染。这次去，我和南师大学历史的新菊大师姐一起到纪念碑前献花，新菊师姐走到碑前跪下了，突然大哭起来。当时我是没有心理准备的。也不知如何是好。把她扶起来，走到碑后我才明白；因为了解，所以心痛。我的木然和新菊师姐的悲痛形成了对比。不是不知道这里发生了什么，而是没有去真正地了解这段历史，所以我只是浮于表面的伤悲。新菊师姐是学历史的，她知道这里的每一幕残忍和凄惨的故事，所以她痛彻心扉。在这之后，我观察了来献花的日本人。邦子老师和綾子姐哭得很伤心。她们是来了很多次的，但每次来都会带着愧疚的泪水。我见犹怜。或许她们也希望这碑后滔滔的江水能带走一点她们内心的挣扎与不安吧。我想她们是确实确实懂得这段历史的。

参加这次活动的也有来自中国的在日留学生，他们给我的感觉是：会主动过滤、逃避对那段历史的回忆或者是了解。包括我在内的一大批中国青年对历史的了解很浅薄，缺乏自主性理性的思考。而日本的青年甚至是老年人不会主动去了解这段历史，或者是逃避面对这段历史。所以我们没有相互理解的前提，有也只是浮于表面的理解。这或许也是中日交流的一个障碍。我想阿曼德的治疗活动是适合对于战争历史都彻底了解而产生心理疾病的人们的，对于对战争印象模糊采取漠然态度的人来说这个活动可能带来的是另外的收获。而非心理治疗。

二 打开心扉

有一位居住日本十多年的中国长辈，他有一次对我们说，虽然在日本生活了这么多年，但仍旧没有归属感，融入不到日本的社会。日本人很有礼节，但是很

难对人敞开心扉。总有一种疏离感。对于热情好客的中国人来说是很难理解的。

参加了两次活动的我也有同感。即使是在要分离的那一刻，我们相识一笑。那笑意里是友好，但却少了心意相通。参加这次活动人员的构成很特殊，中方是一群涉世未深的对历史或了解或不太了解的青年研究生。日方则是有资深研究经验的教授们。我想他们的立场更多的是来观察这项活动，我们成了被观察者。这可能也给双方打开心扉造成了困难。

很友好的双方都很难打开心扉相处，更何况带有仇恨、带有战争记忆的双方呢。我想这就是这个活动继续下去的意义所在。

19-2 HWH ワークショップの参加随想

周俊君

実は、この文章を書くまで、こんな文章を書くのに、とても抵抗がありました。なぜかという、よい感想文を書きたいほど、知っている知識があまりに少なすぎて、なかなかペンを取って書き出せなかったからです。しかし、書かずにはいられないから書き出したのです。書いた見解が正しいかどうかはともかく、すべては、私の20歳という単純な頭で考えて出てきたものばかりです。

一 無知を痛感

今回のワークショップは私が経験した二回目のHWHワークショップです。ところが、参加するたびに、胸のそこから湧いてきた申し訳ない思いが深まり、自分の無知なことを恥ずかしく感じました。この世界の歴史に、あまりに無知だと痛感したからです。

初めて、燕子磯へ参りに行った時に、私は泣きました。どうして泣いたのかと、今にして考えれば、恐らく、日本人の泣いた姿を見て、影響を受けて泣いたかもしれないと思います。

今回、私と南京師範大学の歴史学部の王新菊先輩と一緒に記念碑に献花しました。新菊先輩は記念碑の前に跪いたら、いきなり大声で泣きだしました。その時、何の心構えもしていなかったから、どうしたらいいのかわからずに戸惑っ

てしまいました。彼女を支え起こして、石碑の裏に回って見てから彼女の泣くわけがわかりました。つまり、知っているからこそ、切ない思いをしたのでしょう。私の呆然と新菊先輩の悲しみと、とても対照的なものとなりました。実は、何が起こったかを知らないのではなく、この歴史の深いことを実にまだ理解していないからこそ、私の悲しみは表に浮び、表情も呆然となったのです。新菊先輩は歴史を専攻している方なので、彼女はかつてここに起こったことはいずれも残忍で惨めなことだということをよく知っているから、彼女の悲しみと痛さは心を刺すほどのもので、彼女は堪えられずに泣いてしまったのでしょう。そう思って、石碑に献花している日本人を観察してみました。邦子先生と綾さんはとても悲しく泣いていました。彼女たちは何回も、記念碑のところにこられたそうです。それでも、訪れるたびにたくさん悔しい涙を流しました。その泣き姿はとても胸が痛くなるものです。もしかすると、その石碑の後を滔滔と流れている揚子江の水で自分の内心のものがきと不安を流したいと願っているかもしれない。彼女たちは、新菊先輩と同じようにこの歴史のことをよく知っている方々だと思います。

今回の HWH ワークショップ参加者には日本に留学している中国人留学生もいました。彼らへの印象といえば、過去の歴史を自ら、なるべく、濾過してしまおうか、あるいは、避けようとして知ろうともしない人々というイメージです。実は、私を含め、多くの中国の若者は歴史についての理解はとても浅薄で、独自ので理性的な思考はとても足らないと思います。それに対して、日本の若者だけでなく、年寄りまでも、自らその歴史を知ろうとはせずに、かつての歴史に直面したくなさそうです。このような人々と、相互理解の前提はない、あるいは、あって、表面的な交流しかできないでしょう。これも中日交流の障害となるものだと思います。

アルマンド先生のドラマセラピーは、おそらく、戦争の歴史を徹底的に知って、それに、トラウマのある人々に適する方法かもしれません。また、歴史に起こった戦争に関する印象がもやもやして、漠然か曖昧な態度をとった人にとって、HWH ワークショップというイベントから得た収穫は別のものとなり、心理治療を受けた効果はないでしょう。

二 心の扉を開けてほしい

ある日本に十数年も居住していた中国の年寄りにこう言われたことがあります。つまり、日本で長年生活していても、帰属感がなくて日本社会になかなか溶け込めない、また、日本人にはマナーが多いが、互いに、あまり本音を吐くことはないの、よく疎外感がしていた。このことについて、「客好きな中国人にはあまり分かりづらだろう」ということです。

私は、二回にわたってこのイベントに参加してから、その年寄りと同じ感じがしました。たとえ、別れる際に、知り合った日本の友人と見合ってちょっと笑ったが、相手の笑顔から示した友好はこちらに伝わってきたが、やはり心がまだ通じていない感じがしました。

ところで、HWH ワークショップ参加者の構成が独特でした。中国側はほとんど歴史や社会に浅い若者の大学院生や大学生で、日本側はシニア研究経験の教授が多かったのです。教授方の立場はおそらくこのイベントを観察するもので、私たちは観察の対象となりました。これも、お互いに心の扉を開ける妨げとなったかもしないと思います。

もともと、仲良しの友達同士でも、お互いに心の扉を開けて付き合うことは難しいとされていて、まして、中日双方の人々は心に戦争による仇や記憶があるのだから、心の扉を開けて付き合うのはもっとむずかしくなるのでしょう。これこそ、HWH ワークショップを続けていく意味だと思います。

20-1 历史的伤痕 —为了和平构筑能做什么—

立命馆大学 应用人类科学研究科 修士1年级 郑平阳

从9月17到9月20历经三天，在南京师范大学举办了战后心灵创伤治疗的工作坊。作为在日本留学的我来说，怀着很复杂的心情参加了这次活动。复杂的心情指的是我心理对日本的感情的矛盾。为什么这么说，以前中日两国之间发生过战争，直到现在为止，因为战争还饱经痛苦的人还有很多。想像一下这些人们的心情，我觉得很难原谅日本人曾经做过的事情。可是另外一方面，作为还在日本

留学の我在日本受到过很多热情善良的日本人的帮助。来到日本，一次令人痛苦的经历都没有的我，很想把日本是多么优秀的民族，日本人又是多么的好，在日本我又学习到了什么，经历到了什么，给更多的中国的友人们去介绍。

但是，最近在中国又发生了反日暴动。新闻报纸上报道了暴动的场面，有的人破坏日本的车，还有人破坏日本人经营的超市以及工厂。因此，我深深感受到的就是，在日本和中国之间，两个国家的关系还是那么敏感，。那么，我们必须要考虑的就是，虽然微薄的力量能作些什么呢。

值此战后心灵创伤治疗的工作坊召开之机，也让我为深思了很多。其中最为感受深刻地就是比起过去我们应该更重视现在。虽然以前发生过战争，人们在某个特定的历史背景下，也许会失去自我，人格也会受到不同程度的扭曲。本来应该是充满了爱的人间，变成了屠杀与血的世界。在这种特定的历史形态中，处在现代社会当中的我们应该很难理解。那么，我们的这种受害者心情应该持续到什么时候呢？过去无法改变，珍惜现在的和平，面向未来的更好的关系的建造只靠一方的努力肯定还很不够吧。

在阿鲁安德老师的工作坊中，我怎们也融入不到气氛当中。我的脑子里不停的想的是在这样的对过去的纠结中，能面向未来作些什么。包括虽然也参观了南京大屠杀纪念馆，虽然觉得日本人很过分，但是，仇恨以及厌恶能解决什么呢？会不会对方都多一点彼此原谅的心情会对两国的友好有作用呢？

20-2 歴史の傷痕～平和構築のために何ができるのか

立命館大学大学院 応用人間科学研究科 修士1回生 鄭平陽

9月17日から20日まで4日にわたって、戦後トラウマの治療というセミナーが南京師範大学で開かれていました。日本で留学している中国人の私たちは複雑な気持ちを持ちながら参加させていただきました。複雑な気持ちというのは日本への感情の心の中の戦いです。なぜかという、昔日中戦争がありまして、

今でも戦争を経験して苦しい思い出を持っている人がたくさんいると思います。これらの人々の気持ちを想像してみると、許せないという感情があります。一方、私のような日本で留学している学生は日本で多くの親切で優しい方々にお世話になっています。日本に来てから、一度も悲しい経験をしたことがない私にとって、日本はどれくらい優秀な民族で、日本人がどれくらい素敵な人種で、日本で勉強してきたことがどれくらい自分自身を変えたのかという感謝の気持ちを多くの中国人に伝えたいと思います。

しかし、つい最近反日デモがまたありました。日本のメーカーの車を壊したり、日本人が経営している工場やスーパーを壊したりしていたことが多くの報道機関で報道されていました。そこで、私たちはまた気づいていました。日本と中国の間で、まだ敏感な関係を持っているのではないかと感じています。どのように少しでも、両国の平和のために何ができるのかを考えていけないといけない問題です。

このたび、戦後トラウマのドラマセラピーというセミナーに参加させていたいただいたチャンスで考えさせていただきました。過去より現在だと思います。昔戦争がありまして、人間というのは生物が狂っている世界で、人格も変形していると思います。本来愛があふれるべきである人間世界が虐殺や血の世界になれば、人間もおかしくなることはおかしくはないと思います。特定の歴史の出来事は現在の私たちの想像を超えていると思います。私たちは被害者としての気持ちをずっと持っていて、本当にいいのか考えるべきだと思います。過去は変えられないですが、現在の平和を大事にして、将来のより良い関係づくりをするのは一方的な努力がやはり足りないと思います。

アルマンド先生のワークの中で、私はなかなか場に入れなかったです。ずっと頭の中で、過去にここまで執着する必要があるかどうか、将来に向けて、何ができるのかに過去のことを思い出す必要があるかどうかずっと考えていました。今も、その時の写真を見て、心が重たかったです。南京虐殺記念館を見学して、戦争に対して確かに「ひどすぎる」と思います。しかし、やはり、恨みや嫌いでは何も変わらないと思います。どのように許せる心が持てるかがこれからの日本と中国の平和構築に必要なものだと思います。

21-1 南京戰爭創傷感想

立命館大學大学院應用人間科學研究科對人援助專業 M2 陳揚

2013年九月在南京師範大學舉行了南京戰爭創傷的工作坊，這是我第二次參加阿爾曼德老師的工作坊。去年在立命館大學學習了阿爾曼德老師的藝術表現手法和藝術治療法的理論。這次在南京現場我們看到藝術療法的具體作用。

這次的活動舉辦地，南京師範大學是一所所有百年歷史的大學，在戰爭時期，南京師範大學作為避難所起到了很大的作用。在這樣具有歷史文化意義的地點，我們更深刻的感受到了戰爭帶來的影響。

本次的活動主要包括：戲劇療法和藝術表現手法的工作坊，倖存者證言，以及去南京大屠殺紀念館和燕子磯舉行的紀念活動。由於活動安排的原因，有部分活動我沒有參加，對此十分遺憾。

南京活動中，阿爾曼德老師說，為了進行歷史性的對話，需要我們突破歷史禁忌，也就是說營造共鳴的文化氛圍是很重要的，禁忌這個詞在阿爾曼德老師的教學中不斷被提起，戰爭創傷這個詞對中國，日本的人民來說本身就是一個禁忌，為什麼要突破這樣的禁忌？我們在從小的教育和文化氛圍影響下，我們對戰爭下了定義。這本身就給我們帶來了創傷。在南京大屠殺倖存者的證言中，我們意識到了即使在正義愛國的前提下依然會給人帶來創傷。我們在尋找治療方法的同時必須認識到，歷史的創傷和現在的創傷有密切關係。在中日關係越來越惡化的今天，這樣的尋找是十分必要的。

在偏見和民族的前提下，加害者和受害者，在加害的過程中都會受到創傷，我們在找尋共存的方法的時候，必須意識到在過去和未來的問題已經聯合在一起，作為我們必須認識到真實和責任的重要性。同時在今天生活的我們也被歷史約束著，戰爭即使過了六十年依然對我們的生活帶來了重大的影響，中日關係目前的惡化和這種歷史文化影響也有很大的關係。

在活動過程中我作為在日本留學的中國留學生深刻體會到兩種文化的衝突，在南京大屠殺紀念館的不舒適感愧疚感，和面對日本友人的憤怒感，兩種感情在這段時間一直存在著

。同時也認識到，在語言文化的衝突下，想要解決這個問題，藝術表現手法會是一個好辦法。

在和日本友人的朝夕相處中，也留意到對方在對待戰爭歷史問題的時候的沉

重感、和倖存者の証言中說到的一樣，我們在面對戰爭創傷的時候怎樣清算是很重要的，是報復清算還是背負沉重繼續活下去，對生活在現在的我們這是戰爭對我們個人最直接的影響。

今天的教育中，戰爭是很重要的部分，而且在面對戰爭的論述中，都會從自身的立場上進行解釋，那麼在和平教育中我們應該如何選擇，這是被歷史影響的人們需要直接面對的問題。

今天，在直接面對戰爭的前提下，才可能承擔和解決戰爭帶來的影響。

21-2 南京戦争トラウマ活動の感想

立命館大学大学院 応用人間科学研究科対人援助学 M2 陳揚

2013年九月、私たちは南京師範大学で南京戦争トラウマセミナーに参加しました。これは自分の二回目で、昨年、立命館大学でアルマンド先生から芸術表現手法とドラマセラピーの理論を勉強しました。今回南京の現場で私たちは具体的な使い方を見ました。

南京師範大学は百年の歴史がある大学です、戦争のとき、南京師範大学は避難場として大きな役に立っています。このような文化歴史がある場所で、私たちは戦争からの影響を深く感じました。

今回の活動は、劇場面療法、芸術表現手法、生き残った方たちの証言、南京大虐殺記念館と燕子磯の記念活動、時間の原因で、ある部分の活動は参加できませんでしたが、これに対して、非常に残念でした。

南京での活動中、アルマンド先生は、「歴史対話のために、歴史のタブーを乗り越えることが必要です」と言いました。つまり、同じ文化の雰囲気が必要です。タブーという言葉はアルマンド先生の授業中でよく出てくる言葉です。戦争トラウマは中国、日本の人たちにとって元々はタブーでした。ではなぜこのタブーを乗り越えることが必要なのでしょう？私たちは子供からの教育と文化の中で、私たちは戦争に対して定義しましたが、この定義自身からトラウマはありました。南京大虐殺を生き残った方たちの証言の中で、私たちは意識しましたが、正義と愛国心の前でもトラウマがある。治療方法を探すと同時に、

歴史と現在のトラウマは統一化しました。現在の日中関係もこのトラウマの影響によって悪化しました。だから、トラウマの治療方法を探すのはとても必要です。

偏見と民族の前提で、加害者と被害者両方は加害の過程でトラウマを受けました。共存の方法を探す時、過去と未来も繋がりました、私たちにとって真実と責任の重要性の認識がとても必要です。同時に、現在私たちの生活も歴史の束縛があった。六十年経っても、現在の生活に大きな影響がありました。この共存の方法は日中関係にも大きな意味がある。

活動の中で、私は日本に留学している中国人学生として二つ文化の対立を深く感じました。南京大虐殺記念館の不愉快感、罪悪感と日本の友人に対しての怒り、この二つの感情はしばらく存在しています。同時に、言語、文化によって、この問題を解決するため、芸術表現手法はとても良い手法であることが分かった。日本の友人も戦争歴史に対しての重い態度は生存者が言った様に、私たちは戦争トラウマにたいして、計算、報復とか、この重さを引き受けたまま生き続けるとか、現在に生活している私たちにとって、これは直接の影響です。

現在の教育の中で、戦争はどこの国でも重要な部分でしたが、戦争に対する論述は、全部自身の立場から解釈しています。では、現在の平和教育の中で、戦争に対する私たちの選択は現在の歴史に影響する人たちにとって重要な問題です。現在、直面することは問題を解決する唯一の方法と考えています。

22-1 参加“回忆南京 2013” 的感想

立命館大学大学院応用人間科学研究科対人援助専業 M2 高謹

抱着对于戏剧疗法学习的好奇心，以及想要了解对于战争不同国家的不同解读，我参加了今年度9月份在南京师范大学举办的“回忆南京 2013”的活动。在此次活动中，我们参观了南京大屠杀纪念馆，听了幸存者的证言，还去了燕子矶举行了追悼式。即使作为中国人，这也是我的初次体验。同时，在阿曼德老师的戏剧疗法中，中日双方的参加者通过塑造雕像等表现手法，关于中日战争问题，有了深入的探讨和交流。

其实关于战争，我的了解并不是不多，可能是因为生长在当今这个和平的年代，总觉得战争是相当久远的事情。在初高中的教科书里，我们有学习到关于二战，中日战争，南京大屠杀等事件。当时看到书中所描绘的情形，战争中哪方战胜，哪方战败，多少人伤亡，多少房屋建筑被摧毁，脑海中浮现出来的两个字就是“惨烈”。一直到今天，我仍旧没有想明白的是，为什么世界上会有战争；究竟战争的意义在于哪里。

初高中时作为学生，我对于历史学就很不擅长。家里，我的父亲对于历史是比较有深究的，家中有很多关于历史的书籍，而且有关战争的电视剧，他也都表现的很有兴趣。我曾很好奇的问过他，历史都是已经发生过，并且不会再重复的过去了，为什么你会对于过去的东西这么关注。他的回答是，你可以看看过去，了解一下现在的生活是在怎么样演变下得来的，历史中有战争，有厮杀，我看历史，并不一定是要去探究谁对谁错，其实在战争中本来就没有真正的战胜方，不论哪个国家都有伤亡，都有损失。所以我在看历史的过程当中，了解到的就是现在这个和平的年代来之不易，从而更加要维护和平，更加要珍惜生命。也许是在父亲这样的教导方式下成长起来的，我看待问题通常不去分析事物本身中的错与对，而是从事情的整体入手，看能否得到一些正能量，从而比较积极的继续生活。因此，在这次的活动中，看到了很多南京大屠杀时遗留下来的照片，听到经历了南京大屠杀的场面幸存下来的老人所讲述的证言，我很遗憾也深表同情，与此同时，还是对与现在幸福来之不易的感慨。

作为一个在日本留学的学生，对日本社会以及当代人的了解其实远远大于对于历史日本人的了解。其实我很清楚，在面对中日关系当中，不论是中国人还是日本人，有一部分是会抱有敌视的态度去看对方国家以及国民。这也就是为什么中日关系总是不能走的太近的原因吧。通过这次的活动，虽然我并不能完全的体会到战争中受迫害的人民的感受，但是我也产生了一些自己的想法。不同国家的教育体系是不同的，我们在教科书中学习到的内容不见得对方的国民也知道。譬如说南京大屠杀。历史是事实，这是不能被湮灭的。祖先受到的苦痛也是不能忘怀的。但是不能忘怀不见得是不能释怀。这次活动的关键应该是要我们去想办法如何维护和平，而不是加深对于曾经敌对方的仇视程度。真正应该被关注到的人群是那些经历过痛苦的人们，他们的伤害如何被平复。而对于没有过类似经历的我们，我相信时间是最好的良药，随着时间的流逝，以及现如今各个国家之间的开放交流，我们看到的一定是现实生活中真实的对方，这样的我们才能够更理性，客观，全面的去评价对方，同时在双方达成一致的情况下，才能更好的维护

世界和平。

22-2 「南京を思い起こす 2013」に関する感想

立命館大学大学院 応用人間科学研究科対人援助学 M2 高 謹

ドラマセラピーの表現アーツの手法に対する好奇心を持っていて、また国や文化により、戦争に対する認識の差異を理解するために、今年度9月南京師範大学で行われた「南京を思い起こす 2013」というプロジェクトに参加した。今回のプロジェクトを通じて、私たちは南京記念館を見学し、幸存者証言を聞き、そして燕子磯で追悼式を行った。同時に、アルマンド先生のドラマセラピーの指導で、中日両方の参加者は彫刻などの表現アーツの手法に通じ、中日戦争問題について深い討議と交流を行っていた。

実を言うと、戦争に関して、私の了解はあまり多くないと思います。たぶん平和な年代に成長しているので、戦争ということはかなり久しいことだと考えている。中学・高校の教科書により、我々は第二次世界大戦、中日戦争、南京大虐殺に関する事件を学んできた。その時に、テキストで述べている戦争中にどちらが勝った、どちらが負けた、いくらの人民が死傷してしまった、いくらの建築物が破壊されてしまったということを読んで、頭の中に浮かんできたのは「悲惨」という言葉であった。実は、今でも、私がずっと分からないことは、なぜ世界中に戦争があるのか、戦争の意義はいったい何なんだろうかということです。

中学・高校の時に、学生として私は歴史がかなり苦手であった。私の父親は歴史に対して深い興味があるので、家の中にたくさんの歴史に関する書籍が置かれている。そして、戦争に関するドラマに対しても、父親も興味を持っている。好奇心があるので、父親に質問をしたことがある。歴史はもう起こったことであり、繰り返せない過去であるが、どうしてお父さんは過去のことに對してそんな注目しているのか。彼からの答えというのは、過去のことを振り返って、現在の生活がどのように変遷してきたかを理解できると思う。また、歴史の中に、戦争があり、殺害があるのに、私は歴史を見ると、誰が正しいか、誰が間

違えたのかということを探究するわけではない。実は、戦争中に本当の勝ちがなく、どんな国家でも死傷や損害があるだろう。だから、私は歴史の過程中に、現在の平和年代に達成できる難しさを理解してきた。それにより、私たちが知ってきたのは、平和を守ることと生命を大切にすることがもっと大事なことになるだろう。このような教養方式の下に成長してきた私は、どんな問題に対しても、事物それ自体の正しさと悪さを分析することをせず、いつも事物の全体から着手して、ポジティブなエネルギーを探して、また積極的に暮らしていく。したがって、今回のプロジェクトで、たくさんの南京大虐殺から残されてきた写真を見て、南京大虐殺の場面に体験し、生き残った老人の証言を聞いた私は、残念、同情の気持ちを持ちながら、当年代の幸福に達成できる難しさに気づいた。

日本に留学している学生として、私は現在の日本社会及び日本人に対する理解は歴史中の日本に対する理解をはるかに超えている。実を言うと、日中関係ということについて、中国にも日本にも、相手の国と国民に敵視の態度を抱いている人は依然として存在していると思う。これは日中関係があまりうまくいかない原因となるだろう。今回の活動を通じて、私は戦争中の被害者に対してまだ完全に共感していないと思うけれども、その中に個人的な考えが出てきたと思う。国により、教育が違うし、私たちが教科書で勉強してきたものは相手の国民が勉強されていないかもしれない。例えば、南京大虐殺のこと。歴史は事実で、消えないことだと思う。祖先は体験した苦痛も忘れられないと思う。

しかし、今回のプロジェクトの目的は、どうやって平和を守っていくかだと考える。相手の国に対する敵視程度を深めていくことではない。したがって、注目されるべきことは苦痛を体験していた人々である。彼らの傷がどうやって快復されるのかは大事なことだと思う。その他に、そのような経験がない私にとって、時間は一番有効な薬である。時間に伴って、また各国家の相互交流により、私たちは絶対に現実生活中的の真実の相手が見える。そのように、私たちはもっと理性的、客観的、全面的に相手のことを評価することができると思う。そして更に、両方の国は一致に達したら、世界平和を維持することがもっと簡単に達成できていくだろうと考えられる。

23-1 南京セミナーの感想

立命館大学大学院 応用人間科学研究科 M1 馬潔

今回の南京の活動を通して、もう一度あの惨めな歴史をこの身で振り返りました。南京大虐殺記念館を見学したり、生存者の証言を聞いたり、燕子磯での追悼式をしたりするなど、そして、HWHの団体治療に参加し、参加者の皆さんの日中関係についての発言を聞かせて頂きました。大いに収穫がありながら、少し残念さもあった4日間でした。

最初、実際にセミナーに参加する目的はHWHの団体治療でした。自分もドラマセラピーを勉強しているので、アルマンド先生はどういうふうに団体治療を行うか、これと教わった方法の何か違うかなどにとっても興味がありました。しかし、参加してみると、想像よりセラピーに入りにくかったのです。これは自分が戦争に関する体験が少なかったこととも関係があるのだと思います。実は、本当に体験したことや直接経験者から戦争当時の状況を聞いたことがなくても、普段のマスコミや、記録映像などから受けた刺激によって、ある程度のトラウマになる可能性があります。

しかしながら、このような刺激から生まれた感情は少し違ったのです。例えば、この感情は、恨みと同情ばかりではなく、「抵抗しない行為への怒り」であり、すっきりしてお互いへの敵視をやめて平和平等で共に生きていく気持ちであり、色々あります。参加者の中に、中国の三世の若者たちは大体このような思いを持っています。そして、日本の参加者の若者たちは、この戦争中どんな大惨事が中国で起きたのかほぼ知りませんでした。彼らは戦争があったということしか分からなくて、内容は日本国内の状況に限られていました。逆に考えてみると、中国人の私たちも自分の国のことしか教えられなかったのではないのでしょうか。侵略された方であり、戦場にされた方であり、これによって私たちは自分の母国がとんでもないひどい目に遭ったことを痛いほど知っています。当時の日本軍隊は他国に人間らしくないことをたくさんやっていた、ということを日本の教科書に載せていないと同様に、中国人がこの災難に遭うときに、軍国主義にさせられた日本人の一般民衆はどんな苦痛を感じられていたかを中国の教科書にも載せていません。ジブリの映画『火垂るの墓』の通りで、お互いはピラミッドの最下層にいる百姓として、同時に様々な形で戦争の傷害

を受けていました。

団体治療の話に戻ります。参加者は、日中の三世の若者だけでなく、戦争を経験した一世と親が経験者である二世もありました。なので、それぞれは戦争に対する理解や感覚が違いに決まっています。一世と二世の参加者たちは若者の軽そうな態度を見るとイライラする気がとまらない一方、三世の若者たちは年長者たちの心配とイライラする感じを理解することも簡単ではないのです。年長者の感じがわかっているような若者がいるにもかかわらず、感覚ではやはり微妙な差があると感じられます。そのため、参加者の間にお互いへの共感度の差があると自分は思います。そこで、団体治療のプロセス中に、吐き出さざるをえない感情があって自発的に表現するのではなく、要求されたことに合わせて可能な感情を探り出すことになりました。要するに、かなり受動的な感じでセラピーに入りにくくなったのではないだろうかと思います。そして、自然に感情を表現するどころか、知らないうちに本当の気持ちを沈める可能性もあると考えます。

この感覚はドラマセラピーにとってあまりいい結果と言えないと思います。が、褒めるしかないより、少しマイナスでも本当の考えのほうがドラマセラピーの発展にもいいだろうかと考えています。しかし、今回の活動で他の人が日中問題について、そして戦争についてどう思っているかがわかってとても勉強になります。国とは関係なく、皆がとにかく戦争の影から抜け出したい気持ちや、平和への努力をしたいなどの気持ちがあるということは希望であり、このために頑張る動力であり、非常にいいことだと思います。今後もこれに関する活動やセミナーにもっと参加したいです。

23-2 参加“回忆南京 2013”的感想

立命館大学大学院 応用人間科学研究科 M1 馬潔

通过这次南京的活动，又一次亲身回顾了那段惨痛的历史。参观南京大屠杀纪念馆，听幸存者的证言，在燕子矶悼念死去的亡灵们，以及参加战争创伤的团体治疗，并听到大家对中日关系的各种看法。可以说是收获颇丰的几天，也是稍

有遗憾的几天。

一开始参加的目的其实是这次的团体治疗。因为自己是在学习演剧疗法，所以对于 VOLKAS ARMAND MAURIC 先生会怎样进行这次的团体治疗，和平时自己学到的方式是不是有不同，这些方面比较有兴趣。但是真实参加起来，比想象要难以投入许多。也许跟自己确实缺乏相关的战争创伤体验也有关，虽然即使没有亲身经历过，或者直接听经历者描述过战争时的情况，但是平时从各种媒体、纪实性的影片、照片等所接受的相关刺激，其实也是会造成一定程度的“创伤体验”的。

但是由这样的体验产生的情感的视角却会有些不一样，不再一味只是仇恨和同情，还有“怒其不争”或者就此释然，比起互相敌视厌恶，更期望能和平平等的共处。参加者里来自中国的年轻的第三代们，大多抱着这样的想法，而来自日本的年轻人们更是对这场战争中到底在中国发生了多么惨无人道的事情，可以说完全不知道。他们知道有战争的事情，但是内容只限于日本国内的情况。其实反过来思考一下，作为中国人的我们又何尝不是只了解了当时中国国内的情况，因为是被侵略的国家，因为是被当作战场，所以我们非常痛彻的知道自己国家遭受了多少伤害。就像日本的教科书没有告诉他们当时的日军对其他国家做出了多么没有人性的事情一样，我们的教科书其实也没有告诉我们在日本受难的同时，被迫军国主义化的日本民众当时是在受怎样的苦。就像吉卜力的电影“再见萤火虫”里面演的一样，其实在这个金字塔低层的人民不论中日，都一样的因为战争遭受着不同的伤害与苦难。

回到团体治疗的话题上来，因为参加者不光有中日的三代的年轻人，也有经历过战争时期的一代，或者父辈亲历过战争的二代的参加者，所以在这些体验和感受上大家各不相同。一代和二代的参加者们会焦虑于三代的年轻人们的看似轻松的态度，而三代们却有点难以理解长辈们的担心着急。即便是能懂长辈们的焦急心态的三代年轻人们，但是在感受上也好像有着微妙的差别。因此相互之间的共情度个人觉得总是有些温差存在，于是在整个治疗过程中，不是自己有什么样的感情想要抒发而能主动参与各种活动，而是为了迎合团体治疗所提出的要求，必须要求自己去想应该表达出什么样的东西，感觉十分的被动。所以会感觉难以投入到这个治疗中，比起开放自己的想法感受，反而更加将真实感受压下去了。

我想这种感受对于演剧疗法来说不一定是好的结果，但是比起只是夸赞，也许负面的真实感受对于疗法的改进也有帮助，所以还是决定直接提出来。但是不可否认的是，在这次的活动中能够了解到其他人对于中日问题，以及战争的看法与感受，还是很有帮助的。至少知道了大家更多的还是期待能摆脱战争的阴影，

和平友好的共处这件事，就是一种希望，就有了为此而努力的动力，这一点上觉得非常好，今后希望能更多参加相关的对此有帮助的活动。

24-1 感想

ノースウェスタン大学 村川升麻

今回は、通訳として南京のワークショップに参加させていただきました。通訳という立場だったので、ワーク自体には他の参加者と比べて、直接参加する機会が少なかったです。しかし、ワークを外から見る側として、色々学ぶこともあると思いました。例えば、参加者がワークをしている時、アルマンドと二人で周りながら少しずつ話を聞く事で、どういう感情がグループ全体において目立っていたかとか、もっとグループ全体の経験を客観視することができたと思います。また、その場で様々な文化、そして歴史を持つ人々の間に立てることが自分にとってすごく大事な経験になりました。

まず、このように対立している二つ集団がお互いの歴史、立場、感情を理解し、心の底からお互いを許し、尊敬するような方向に持って行くプロセスを見ることが自体が貴重な経験だと思いました。それに加え、その感情や物語を直接語りかけられる立場として、グループの中の一人一人の個人的な感情を直々に感じ取ることで、ちゃんと人の感情に向き合い、理解する機会に恵まれたと思っています。グループワークや南京大虐殺の体験者の話、平和記念館の訪問を通して、中国の人、日本の人、韓国の人が自分の意見を正直に話し、お互いを理解していける場がどれほど貴重な場所か思い知らされました。

両側の政府の圧力や偏見のせいで、喋る前から色々なステレオタイプが存在している今の社会情勢の中、そういう壁を乗り越え、本当にお互いを理解しあえるこのような場所というのはすごく稀だと思っています。私が今勉強をしているノースウェスタン大学でも、色んな文化や歴史的背景を持つ生徒が集まる中、すぐに人種というくりに縛り付けられるから、お互いの交流の機会が減っていると思います。なので、学生に限らず、色んな人がこのように正直に話し、お互い理解しあえる場を提供するというのは素晴らしい試みだと思います。そ

して、この先日本と中国だけではなく、世界中の人があのような形で過去の歴史をきっちり理解し、受け止めた上でお互いの事を知り、友好な関係を築いて行く事が必要だと思いました。

また、今回はこのような場に呼んで頂けたことを心から感謝しているのに加えて、南京のワークショップを通して出会えた人、受け入れてくれた人に感謝の気持ちを伝えたいです。

24-2 Report

Northwestern University Shoma Murakawa

This time I participated in this workshop as a translator. For that reason I was not as involved in a lot of the work that was done in this workshop. However, I felt as though there were a lot of things to learn even as a person watching from the outside. In addition to this, being able to stand between people of various cultures and backgrounds was an experience that I will never forget. Through listening to the various conversation during the group work, the stories of the survivors of the Nanjing massacre, going to the Peace Museum in Nanjing, I realized the importance of creating an opportunity like this where Japanese, Chinese, and Koreans could all come together and talk about their opinions honestly and get to truly understand each other. I also felt that this sort of opportunity is not only needed between China and Japan but also for people all around the world. Thank you for letting me be part of an unforgettable experience and I would just like to thank everybody there that I was able to open up to and get to know.

25-1 「南京を思い起こす 2013」 参加者感想

California Institute of Integral Studies
East West Psychology Program 笠井綾

今回ワークショップに参加しながらこのテーマと自分の個人的な関わりについて振り返っていました。私の生まれ育った広島では、「原爆の悲劇が繰り返さないよう、たくさんの人に知ってほしい。」というメッセージがいたる所がありました。日本の加害、南京のことについて中学と高校で学び、家族も被害と加害両方の戦争体験があります。戦争の歴史は割と身近なところにありながら、長い間どちらの歴史も遠い昔のことと思っていました。自分も過去の歴史から繋がる「今」の当事者であると改めて認識したのは、米国に高校留学した時です。アーミッシュの人々の生活に興味があってペンシルバニア州を希望したら、U.S. Army War College（陸軍士官学校）がある町にホームステイする事になったのです。米軍と安全保障の関係にある様々な国の軍や自衛隊の人達が、戦略を学ぶため家族ごと一年間駐在します。私はそういった家庭の子供達と一緒に高校に通いました。十数カ国の高校生はみんな仲が良く、毎日誰かの家に遊びに行ってお母さんにその国のご飯を作ってもらったり、色んな国の行事にみんなで参加したり、とても楽しい日々でした。軍人のお父さん達はみんな優しく温かくて、戦争を学ぶのはこんな普通の人々なのかと、当たり前のことを不思議に思ったものです。

高校では米国史の授業が必修でした。第二次世界大戦の章で、広島原爆のことについて数行の記述があり、6万人が即死したとありました。即死に限れば6万人なのかもしれませんが、あまりにも軽く扱われていることに疑問を持ち、歴史の先生に「私の祖母は被爆者です。クラスで話す時間を10分ください。」と言ったら、「その必要はありません。」と言われました。英語の不由由な生徒のテスト時間を延長してくれる優しい先生だったので「生きた歴史に触れる機会なのになぜだろう」と不思議に思いました。その後一年上のベルギー人の友達が世界史のクラスで広島を研究課題として発表するから、そこで話してくれと言われ、私は声を出すことができ、歴史のストーリーは国によって違うこと、広島のことについて話せる場所と話せない場所があることを知りました。

高校には模擬国連クラブがあって、参加高校が集まって国連のような会議を

します。大会へ向かう列車の中でオーストラリア人の友人に広島の話をしてと言われ祖母の話をしていたら、しばらく聞いていた米国人の同級生が顔を赤くしてパールハーバーについて激しい口調で語りはじめました。それまで原爆については祖母の話「核の被害を繰り返さないために多くの人に知ってほしいこと」とは思ってもあまり感情を意識したことがなく、はじめて同級生から個人的に感情をぶつけられ、私達の世代にも歴史に対するこんな激しい感情があるのかと驚きました。それから、原爆について感情的な反応を持つ様々なアイデンティティの人々に会い、日本で受けた歴史、平和教育が断片的なものであったことを体験的に理解しました。

カリフォルニアに住むようになってからは、毎年8月に灯籠流しをしたり反核の声をあげている米国の人がいることや、自分達の掘ったウランが原爆に使われたことを悲しみ、広島に来て謝罪を表現した北米先住民の人がいることを知り、広島の被害から見ると加害側の国に、強い哀悼の感情を持っている人がいることに驚きました。彼らは今でも自国で核開発や軍事拡大が進められていることに憤りや悲しみを感じています。元米軍の人に手紙をもらったこともあります。私は自分が直接的な被害者ではないので少し複雑な感じを抱きながらも、そういう人達がいってくれることをありがたく思い、少しホッとしました。

原爆について語りにくいはずの米国で、広島の声に耳を傾ける人々がいてくれることは自分がこのテーマに向き合う時の助けになっています。でも戦争で痛みを感じたのはもちろん広島だけでなく、痛みに区別はなく世界中に無数にあります。その中で自分は誰のために「耳を傾ける人」になれるだろうかと見回した時に、自分の祖父や祖母が加害側であった中国や朝鮮やフィリピンの友人達がいました。毎日の職場や一つ屋根の下での生活を共にする仲間達です。

今から10年くらい前、ボルカス氏のプレイバックシアターで広島の祖母の話をしていたら、広島の痛みもあるけども、日本が苦しみを与えたすべての人々の痛みに共感する気持ちが同時に沸いて来て、私はその場でその気持ちを素直に伝えました。それは謝罪の表現でした。自分が広島のことについて誰かに口を封じられることがあったように、自分も無意識に誰かの口を封じたり、沈黙を強要していたり、広島の被害だけを強調して押し付けたり、悪気がなくてもそういう風潮、文脈、構造に加担していることがあると実感したのです。イベントの直後、会場を出ようすると、たくさんのアジア人に囲まれて感謝され

驚きました。その後いくつかの試みを通して、私のような個人でも歴史の痛み
に耳を傾けて、感じたことを素直に表現すればそれが助けになると感じる人々
もいるのだと実感しました。共感と表現の力はコミュニティの自己治癒力の
一つであり、アーツはその役に立てるかもしれないと思いました。

「耳を傾ける」ワークを深めることで戦争という集団トラウマの記憶をどの
ように扱えるのかに興味を持ち、2007年に南京で行なわれた日中共同のシンポ
ジウムと追悼式に参加しました。祖父が中国で憲兵をしていた加害と向き合い、
中国の被害者の声に耳を傾けようと思ったのです。シンポジウムでは、画家で
活動家の小田まゆみさんが、多くの戦争は大地やその中にあるエネルギー資源
を支配するために行なわれるものであり、戦争のたびに女性に対する性暴力が
繰り返されるのは、大地としての女性の体を支配するという戦争の側面がある、
という意味のことを言われていてとても印象的でした。戦争体験世代である小
田まゆみさんや、書道家の棚橋一晃さんが、記念碑へ登る階段に白い布を敷き
詰めて、私達は靴を脱いでそこへあがり、それぞれ謝罪や追悼の気持ちを表現
しました。戦争加害に対して心を込めて向き合っている戦争世代がいてくれる
こと、そしてその後もこの試みを率いてくださった戦後二世、そして三世にあ
たる私と同世代の、数世代に渡る「耳を傾ける」仲間達と出会ったことにとて
も勇気づけられましたし、何より南京のみなさんが本当に温かく向かえてくだ
さったことが胸に響きました。

加害の子孫というアイデンティティーを背負って戦争に向き合うことの難し
さも感じて来ました。加害に向き合うことで狭窄する心身の容器で、戦争の残
虐性に対する自分の拒否反応をうまく消化することができないのです。2007年
は、気功やエネルギーワークに長けた方々が一緒に参加していて所々で体を使
ったワークをしてくださったことは助けになりました。ドラマセラピーのよう
な体を動かして行なうアプローチが助けになるのではないかということで、
これまで三回南京でドラマセラピーを使ったワークショップが行なわれてきま
した。

時には通訳、時には企画やファシリテーターの補佐や、参加者インタビュー
をしながら、自分も参加者でもあったわけですが、自分の中にまだプロセスが
足りない部分や、参加することの難しさも感じて、ここ数年はトラウマを扱う
身体的アプローチや、仏教がベースとなったコンパッションのワーク、アイデ
ンティティーの多層性にアプローチするワークなどを学ぶようになりました。

HWHのワークショップではエクササイズを通して心や体を開いてテーマに近づいて行き、感情や感覚を体験する場が設けられます。それぞれがセルフケアしながら、やりたくないことはやらない、という安全のためのガイドラインがありますが、それでも自己調整しながら参加するためには、様々な資源が必要です。ファシリテートを考えると、知のワークと感情のワークのバランス、安全性、アイデンティティーの多層性や共依存性などを意識的に扱いながら、参加者の年齢層や教育背景を考慮したアプローチを毎回柔軟に練っていかねばならないことを痛感し、タスクの大きさに圧倒されそうになりますが、アプローチやアイデンティティーの異なる複数のファシリテーターがコラボレートすることによって可能になるのではないかと考えています。

記念館を訪れるのも、生存者のお話を聞くのも今回で4度目でした。人間の残虐性を目の当たりして無力感を感じると、私は人がいないところに行きたくなくて、山や川や海が恋しくなるんですね、と、その時の素直な気持ちを言ったら、萃萃さんに、「綾さん、ぜひ私達のことを山や川や海だと思ってくださいませんか。」と言われました。今回私はファシリテーターでも通訳でもなかったので、日本からの参加者や、何度も一緒に中国側の方達にも感じたことを割と率直にシェアしていました。加害者側として参加していると思うと、そんな甘えが許されない感じも拭えませんが、そのくらい遠慮がなく対等な感じがすることは、参加者としての私にとっては良いことのように思います。

結局いつも米国に戻ってから、こういったテーマに興味を持つ国籍のルーツが多様な「耳を傾けてくれる」友人達と色々と話しあうことでサポートを得ています。そこでますます考え込んでしまいます。20年間日本の外で、「アジア人」というアイデンティティーの括りや、人種的マイノリティーとして不利も恩恵も受けて生活をしている自分がファシリテートを学ぶ際の自分の立ち位置についてまだ意識化していないことが多いのではないかとと思うのです。国籍ルーツの多様なコミュニティや対人援助の職場で、歴史的にも社会的にも不利な状況にある人々の立場に立って考えようとするとき、日本人としての抑圧構造への加担や恩恵に意識的であること、時々浮上して来る戦争のテーマや葛藤を受け止め「耳を傾ける人」でいようとすることは、ここで多種多様な人々と共に生きていくために身につけざるを得なかった術の一つでもあります。このようなダイバーシティーをベースにしたソーシャルチェンジの連帯性の中でのサポートを自分も相互に得ることができるから向き合えたり、声をあげたりでき

る部分も多いのではないかと思います。

色々考えてわからなくなると、物事のシンプルな側面を思い出します。2007年の時、南京の街でタクシーに乗りました。運転手にどこから来たのか訊ねられ、日本からですと言うと、彼は指で首を切るジェスチャーを何度もして怒りの表情を浮かべました。私達は紙にありったけの漢字を並べて「私達は南京大虐殺のことについて学ぶための国際会議に来ました。」と筆談で伝えました。すると男性は穏やかな表情になり、タクシーを降りる時には笑顔で握手をしてくれました。興味を持ち、痛みや怒りに寄り添う姿勢は、時に怒りを握手に変えることもできます。

今回夜の粘土のセッションで、陶さんが船を作って私にくれました。2009年の粘土のセッションで、私はひび割れたハートを乗せた中国に行く船を作りました。陶さんが、そのことを覚えていてくださったかどうかわかりませんが、その船が陶さんを乗せて戻ってきたような気がしてとても嬉しく思いました。私達の個人的な繋がりはとてもシンプルで温かい。こうしてこのプロジェクトを通してできた中国の友人達との繋がりとは、萃萃さんのおっしゃるように、山や川や海のように感じるができます。

メッセージの地図のワークを何度もしているうちに、自分と中国の関係の一番最初の記憶も思い出しました。3歳くらいの自分が「ワンさん」という中国人の男の子と一緒に遊んでいる風景です。スコップとバケツで土遊びをした楽しい思い出です。5歳くらいの中国人と、3歳の日本人が、言葉も通じないのに二人でベチャクチャおしゃべりをしながら遊んでいるのを父が撮った写真がアルバムに残っています。ワンさんは突然いなくなりました。親の話によると、ワンさんは近所の家にほんの数日滞在していた中国からのお客だったそうです。彼は中国に帰ったと聞かされて、一か月くらいの間、広島のを飛ぶ飛行機を指差しては、「あれはワンさんの飛行機？」と言っていたそうです。

これを書いている2013年11月、メディアは日中間の空と海の緊張を伝えるばかりです。ワンさんの飛行機の飛んだ空が、いつまでも皆さんに会いに行ける、戦いのない空であるよう、海はハートを乗せた船が行き来できる、争いのない海であるようお願います。様々な出会いと学びの機会を与えていただいたこと、これまで参加して下さったすべての方々に感謝し、これからもこの祈りを自分なりの行動にしていけたらと思っています。

25-2 Remembering Nanjing 2013 Participant Report

California Institute of Integral Studies
East West Psychology PhD Student Aya Kasai

As I attended the workshop, I was looking back on my personal connection to the theme of war, memory, and conflict experienced by later generations. In Hiroshima, I grew up receiving spoken and unspoken messages from schools, media, children's books that told me, "We have to let the world know about what happened to us in Hiroshima so that the nuclear tragedy may never happen again!" I also learned about the Japanese war perpetration and Nanjing in junior high school and high school. But for a long time, this history was just something that happened a long time ago. During high school I realized that history affects us and that I am a participant of the present that continues from the past. I was interested in learning about Amish people, so I requested to be placed in Pennsylvania and I was sent to a town where the U.S. Army War College resides. I went to school with children of military officers from ally nations around the world, who had come to study military strategy for a year. I became friends with more than a dozen international students and went to their homes often to eat meals and participate in events and celebrations from different countries.

In high school, U.S. history education was mandatory. In the text book there were just a few lines about the atomic bomb and it said that 60,000 people died instantly. It may be true that 60,000 people died instantly but I was puzzled that it was treated so lightly. So I said to my history teacher, "My grandmother is an atomic bomb survivor. Please give me 10 minutes to talk in class." My teacher said, "That won't be necessary." My teacher was a very kind teacher who extended exam time for ESL so I was puzzled that he did not take the opportunity to expose his students to live history. Later on, a Belgium student invited me to his world history class to give a talk as part of his project and I learned then that there are places that I can talk and

places that I cannot talk about Hiroshima.

In high school, there was a model UN club. Students gather and have a conference just like United Nations. In a train heading to a conference, my Australian friend asked me to tell her about Hiroshima so I was telling her about my grandmother. Then a student who had been listening for a while started to talk excitedly about Pearl Harbor. Until then, I was thinking of my grandmother's story as something that I should tell many people about so that nuclear atrocities may be prevented in future, but I never considered how I felt about it so it was surprising to me that someone of my age could present such a strong feeling toward history. After that first experience, I met many people who had different feelings about Hiroshima and I realized that the history and peace education I received in Japan were only a fragment.

When I started living in California, I met people who commemorated Hiroshima and Nagasaki, with a lantern festival every year, as well as native Americans who came to Hiroshima and apologized because they felt sad that the uranium they mined was used for the bombs. I was surprised to meet people who felt strong sorrow in a country that acted as a perpetrator to Hiroshima. I have also received a letter from a veteran. I felt uncomfortable because I was not directly affected by the bombing. But I felt glad that they were there and felt a sense of relief.

When I meet people in the United States who listen to my voice from Hiroshima, it helps me to face this difficult history that is hard to talk about in this country. Of course the pain is felt not just in Hiroshima, there are countless war pains all around the world. I looked around myself and wondered whom I could be an ally for. There were Chinese, Korean, Pilipino and other Asian people. They are my colleagues or friends whom I lived with.

About 10 years ago, I told a story about my grandmother at a playback theatre presentation. As I felt sad about Hiroshima, I also felt empathy for people who were affected by the Japanese perpetration. I spoke my feelings. It was a feeling of apology. I realized that I somehow participate in the

atmosphere, narrative and structure that silenced the other, or forcing the story of Hiroshima at times, even when I do not realize that I am doing so. After the event, when I tried to leave the venue I was surrounded by Asian people thanking me. I realized that when an individual person like myself empathizes with the pain of history and can communicate feelings, it is helpful to some people. Empathy and expression can be a tool for community healing.

I became interested in what “listening” (as an ally) can do for collective trauma and participated in a 2007 gathering that took place in Nanjing. I wanted to face the fact that my grandfather was a military police officer in China and to listen to the survivor’s voice. In the symposium, a Japanese Artist Mayumi Oda spoke about how war is often for the pillaging of the land and the energy that it holds, and sexual violence/exploitation of woman happening in every war all around the world is an expression of that as well. Mayumi Oda and a zen calligrapher, Kazuaki Tanahashi spread white cloth on the steps toward the memorial monument and each of us expressed various feelings such as apology and mourning. I was glad to meet the war generation who faced the war perpetration so earnestly, as well as the second generation who lead the projects from then on, and the third generation who are my generation. It was encouraging to be in a truly inter-generational group who were committed to listening to the other. I was so moved that people in Nanjing also greeted us so warmly.

I also experienced the difficulty of facing the war history with a perpetrator identity. With my body container that constricts when facing the perpetration, it is difficult to digest the feeling of repulsion. In 2007, there were many participants who practiced chi-gong and other energy work. They sometimes offered us exercises for self-care. Since then, three gatherings using drama therapy were conducted in Nanjing to help the participants to process things with the body.

I was a participant as well as a support for the organizers and facilitators. I also conducted interviews with the participants. Many things were extremely helpful but I sometimes felt my own difficulties in

participating and different parts of my experience needed further processing. So for the past few years, I have been studying somatic based trauma healing work, Buddhist based compassion work, and approaches that deals with the layers of my identity. In Remembering Nanjing, HWH offers an exercise that gradually opens our hearts and our bodies as we get closer to the theme. Participants are encouraged to take self care and they do not have to do anything they do not wish to. Still, participants need many resources in order to be able to self regulate their own experience. When learning to facilitate, I feel overwhelmed by all the elements that need to be held; balance between intellectual and emotional work, safety, layers of identity, our inter-dependency, to name a few. These elements need to be carefully blended to fit the age and educational background of the participants every time. I imagine several different facilitators with different approaches and identities collaborating together to support one another.

This was the fourth time I heard the survivors stories. When I encounter the cruelty of human beings, I want to escape to nature and go to the mountains, rivers and ocean. I wasn't a facilitator or an interpreter this time so I shared my feelings openly with the other participants. Later, Ms.Luo said to me, "Aya, please think of us as your mountains, rivers and ocean." When I consider myself as an off spring of the perpetrators, it feels bad to be so dependent on Chinese people in the workshop. But when I felt like I was on an equal ground, it felt good as a participant. I felt free.

After I return to the U.S., I share my experiences with my friends who are of various cultural backgrounds and they give me support. Then it makes me think. For the last twenty years, I lived here as an Asian and I take both the advantage and disadvantage as a minority person. I still feel that there are many facets of my standpoint that I am not fully aware of. For example my workplace is very diverse. When I try to serve people who have been through social and historical hardships, I have no choice but to be aware of how I participate in the structure of oppression in the world as a Japanese woman. Often the theme of war and conflict surface's, even in

clinical relationships where I am a helper to people of Asian descent. So my attempt from a “listener’s” stance is something of a survival skill that I am trying to learn to coexist with people in my community. In this community, I also have people who support me by listening to my struggles. So my personal resource in facing history is to be among culturally and nationally diverse groups of people who are committed to social change and giving mutual support. The young Japanese and Chinese participants do not necessarily have this kind of resource living in their countries and I wonder what kind of support they need to maintain their multi layered nature of identity and our interconnectedness.

When I think too much and feel confused I always try to remember simple things. In 2007, I took a taxi in Nanjing. The driver asked us where we were from and we told him we were from Japan. He repeated the gestures of chopping the head off and looked angry. We wrote Chinese characters on a piece of paper to communicate that we came to Nanjing to learn about the Nanjing Massacre at a conference. The man’s facial expression changed to that of peacefulness. When we got off the taxi, he was smiling and shaking our hands. To be interested and to have a stance of being with the pain and anger can sometimes change anger to a handshake.

In the clay session at night, Ms.Tao made me a boat. In 2009, I made a boat to Chin with a broken heart in it. I don’t know if Ms.Tao remembered my boat but to me it felt like that boat came back to me. Our connection felt simple and warm. The connection that I made with my Chinese friends through this project feels like the mountains, rivers and ocean as Ms.Luo said.

As I created a map of messages many times, I also remembered my first memory with China. It is me at age of three playing with a boy named Wang. A five year old Chinese kid and a three year old Japanese kid are playing and talking to each other loudly even though we do not speak each other’s language. I still have a picture my father took in my album. Wang disappeared suddenly. When we learned that he had gone home on a plane, I pointed to every plane I’d see in the Hiroshima sky and say, “Is that Wang’s

plane?” My parents told me later that he was a guest at my neighbor's and stayed only for a little while.

It is now November 2013. As I write this, news media broadcast the tension in the sea and the sky between China and Japan. I wish that the sky that Wang's plane flew in and the ocean that the boat with a heart traveled could always be without war and conflict. I truly appreciate the encounter and the learning opportunities that this project has given me, and I wish to do the best I can to turn my prayer into an act of peace building.

26-1 “回忆南京 2013”国际研讨会的感想

南京航空航天大学 羅萃萃

始于 2009 年并开展三次的“回忆南京 2013”工作坊，是尝试性地对代代相传的历史遗留创伤进行修复并达成和解的国际研讨会，今年是最后一次。如果将 2007 年南京大屠杀 70 周年之际举办的国际研讨会及 2012 年进行的采访该工作坊参加者的活动算在内，我幸运地体验了五次。体会是非常多的，整个体验是我今生中一段珍贵的回忆。同时，如果这种戏剧心理治疗方法，四天为一个疗程的话，可以说我经历了由前后五个阶段疗程构成的一个完整疗程。作为一名治疗对象，该研讨会给予我一个难得地人生体验，再次表示由衷的感谢。

不过，每当想到与通过六年相处彼此亲密起来的老师和参与者们要暂作分别，且不知何时还能相遇，便十分地不舍，不觉潸然泪下。

毕竟该研讨会是抚平历史创伤的戏剧心理治疗工作坊，历经六年完成的该工作坊，可以理解成完成了一个戏剧心理治疗的全过程。我的感受实在是太多了，不知怎么样才能将纷繁错综的感受归纳整理并写出来，为此着实费了很多脑筋。

其实，自从参加该工作坊以来，随着每一个试验阶段的进展，我自己的身份和心情也随之发生变化。同时，看待每一位参与者的视角也在不断变化。最终感到只有从这些不断变化的立场和视角来写感想，才能将自己所有的感受写出来。即，日语翻译的立场、大学日语教师的立场、日本归国华侨的子女并且是治疗对象的立场、曾经的中日友好协会地方官员的立场、“回忆南京”工作坊参与者的

立场等。由于时间原因，在此，仅从日语翻译的角度，依次写自己的感受以及所见所闻。

1) 当翻译以来的崭新体验

“回忆南京”工作坊是由立命馆大学研究者主办，阿尔曼德教授指导的工作坊，我作为该工作坊的翻译之一，得以参加了工作坊的每一项活动，用中国俗话说，对我来说真是个“三生有幸”的机会。并且，得到该研究项目研究者们的信任，实在是荣幸，在此表示由衷的感谢。

实际上，自从大学毕业后，至今为止，做了无数场各种场合各种形式的翻译工作。但从未有过类似“回忆南京”工作坊这样的翻译工作。首先，该工作坊的参与者身份特殊。其次，该工作坊翻译内容史无前例。比如，阿尔曼德教授是戏剧心理治疗研究专家，他主持并指导的集团精神疗法工作坊，所以有许多该精神疗法方面的专用术语，此外还有历史专家关于研究成果的报告、有不识字幸存者的证言哭诉、有参与者们发自内心的复杂心情表露、有戏剧台词等等。加上译者本身每天的心情也很复杂。我从未有过抱着如此这般奇妙心情进行翻译工作的经历。

更特殊之处是，所有参与者都是中日战争敌对双方战后第二代、第三代后代，他们直接或间接受到了战争经历者的影响。而且，他们几乎不懂对方国语言，不了解对方国文化，几乎没去过对方的国家。不仅如此，很多人多少还带着不信任、仇恨、怀疑等心情，总之，彼此之间没有好感。更甚者，翻译的会话内容很多是长期积压在心底并像火山喷发般地、直接向对方国倾述的自己长期怀有的不信任、仇恨、指责和怀疑等。

尽管翻译工作有上述种种特殊性，身为翻译，我也要和参与者们一样做着各种各样配合心理治疗的、古里古怪的项目动作。每天随着治疗活动的一步推进，自己的身份也在不断变换，有时是戏剧演员，有时是几组人体雕像，有时作为故事主人公对大家讲述自己的故事等等。随着身份的变换，进行翻译时的心情也是时而害羞、时而困惑、时而悲哀、时而开心、时而愤怒喜、时而兴奋。

这是极其崭新且奇妙的翻译经历，跌宕起伏如此剧烈的翻译过程还是少有的学习经历。

下面说一下我作为译者的感想和心理变化。

2) 好奇心

2009 年受南京师范大学张老师之托接受“回忆南京”工作坊翻译任务时，我以为只是为期四天的一般的中日文化交流活动。当问及具体工作内容时，怎么听对方的说明还是摸不着头脑，没弄懂是怎样回事。实际上，这是因为说明人自己对该项目的具体内容也是稀里糊涂的。询问了心理学院的专家，他们也只是回答说，听说过有这么一项研究，但不知具体是如何操作的。

归根到底，心理治疗工作坊对于解释的人和听的人都是从未见闻过的新鲜事物，要想彻底了解它，看来只有亲身参与其中而别无他法了。这一来，反而大大激起了我的好奇心，开始抱着探险般的心情急切地等待工作坊的开始。

3) 半信半疑

自 80 年代以来，我做了无数场中日友好交流的翻译工作。但是，至今的中日交流双方，基本都是积极地向对方表示友好，尽量用温和的口吻进行交流。而口译人员只要尽量地将双方寻求友好的心情传递出去，交流就能够圆满成功了。

可是这次工作坊的工作是个例外。交流双方不仅不了解对方国家的内情，年龄层和身份都不一样。而且，几乎都抱有敌意、仇恨、不满、不信任、指责，甚至恐怖等的心情。作为口译，必须将双方长期压抑在心底的想法，尽量彻底地传达给对方，寻求对方的理解。最后达到抚平遗留双方心灵深处的战争创伤，双方得以和解的目的。

最初，我深感这次翻译工作非常有意义。不过，此项研究是崭新的，要采用闻所未闻的心里治疗手段进行试验，况且，一个疗程只有四天时间。这种治疗手段果然能奏效吗？对此，对此我是将信将疑。另外，治疗过程几乎都是在双方的会话和互动活动中完成的，作为沟通交流双方的桥梁，口译的好坏是否会直接影响到最终的疗效。这样一想，我顿时担心起自己的口译水平了。

4) 担心

2009 年第一场工作坊的首日，果不出所料，担心之事接踵而来。

首先，是心理学家们劈头盖面说出来的一连串有关戏剧心理疗法的、生疏的外来语单词。从热身活动开始，就出现了一系列闻所未闻、即使有所说明也想象不出是什么样儿的古怪动作要求。如果不能准确、及时地将这些工作坊训练项目指令传达给中方参与者，中方参与者将跟不上团队的步伐。不仅如此，口译人员

不仅想象不出下一个集团精神治疗法的动作是什么，自己还不得不跟随团队，按照阿尔曼德先生不断下达的指令，手舞足蹈地做着形形色色、奇里八怪的动作。

如此这般，为了能够准确地翻译这些戏剧心理疗法的术语，让大家跟得上一个接一个进展着的活动，作为口译，我绷紧神经，竖起耳朵，睁大眼睛，一边盯着阿尔曼德先生比划着的动作，一边跟着模仿，并发动所有的脑细胞来搜索这些动作的含义并翻译成中文。有时，为了让中国同胞们理解得透彻些，我还得硬着头皮夸张地比划着那些怪异的动作。

第一天的工作坊翻译工作就这样糊里糊涂地结束了。这一天，无论是翻译者，还是参与者，大家都在一头雾水中，在极其兴奋中，度过了一天莫名其妙的心理疗伤生活。

即便如此，我开始更担心我这样的翻译是否能行。毕竟整个工作坊都是在中日双方参与者通过言行举动的互动中完成的。

5) 安心

第二天，因为有了第一天的教训，即使没有预习的时间，多少增加了一些心理准备。而且，最重要的是，我从各位参与者的眼神中获得了自信。人们互相对视的眼神，和前一日不同，都是那么亲切和温婉。甚至看懂了阿尔曼德先生他那主持集团精神治疗的指令。这一来，诸如全体照镜式模仿一人、想象物的模仿接力、声音接力、声音球的相互投递、目光对接表情模仿、30秒剧场、对象角色扮演、走独特线路、社会经济圈、再现记忆、再现自身价值观形成的社会圈、寓言接龙、共享经历、互动人体雕塑、一人一故事剧场等等，一个接一个下达的闻所未闻、难以想象的指令，能够一边模仿着做一边进行翻译了。

就这样，通过自己参与戏剧心理疗法的一系列活动，即，戏剧心理治疗是从发单一声音开始的，接着是简单的二人会话，再后来是编复杂的故事、在小组内讲自己经历的故事，最后一起编剧演出。而身体的动作则是从相互模仿单纯的动作，到表演人体互动雕塑，最后展示每个人故事的戏剧表演。不仅逐渐掌握了集团精神疗法的专业术语，那些开始感到非常单调生疏的外来语单词，现在一提起它们，脑海里便浮现出一幅幅生动的活动场景，并通过亲身参与记住了大部分HWH工作坊的活动进展程序。

如此一来，参加第一次工作坊时，我怀着将信将疑的心情，一个劲儿地跟着每个阶段的指令做着练习动作，在团队的冲击下机械地做出反应，根本没有时间

反省自己的变化，当然更谈不上观察别人的变化。到了第二次工作坊，已多少熟悉了整个工作坊程序，也开始观察成员们的变化了。到了第三次，已经可以冷静地反省自己的变化了。不仅能够深入理解成员们的心情和想法，开始超越口译职责，积极地讲述自己的故事，想与成员们分享自己的故事。

至今，已经历过四次工作坊的活动，不仅那些外来术语在我脑海里转变成了一幅幅生动的画面，并且，想到那些画面，感动、感慨、怀念之情便油然而生。

特别令我感到踏实的是，眼见着年轻的翻译们在工作坊活动中成长起来。中日两国的年轻翻译们，通过这样的活动，成长为理解对方国家人们的翻译。原本我觉得，只有像我这样归国华侨子女，才能体会中日双方参与者们痛苦且复杂的心情，并在此基础上进行翻译。并且，年轻翻译们要达到这种程度，需要经历很多过程。但是，活跃在这次活动中的年轻翻译们，通过亲身参与工作坊，能够很快地理解双方成员们的心情，并且，在此基础上进行准确的翻译。

事实上，对于熟知中日两国情况的年长的翻译者来说，给那些只接受了战后战争受害教育，不了解对方国家的历史、文化，不了解对方国家国情的中日两国年轻人做口译，是一件让人着急的事。因此，年轻翻译们的成长，无疑意义重大。因为，世界的未来是年轻人的，只有年轻翻译们更能理解中日双方年轻人的心情和想法并进行翻译，他们的成长对中日友好交流很重要。

中日双方的年轻人，通过这次工作坊活动，了解了彼此国家战后教育的实际情况，从而更加能够互相理解。尽管时常出现一些当一方向对方表示了友好，却招致对方误解，认为是虚伪的不可信的情况。大家还是努力地站在对方的立场理解对方的心情。工作坊会场的气氛越来越祥和，无论是谁，都能畅所欲言。全然不担心是否会被对方误解，是否会被对方憎恨，是否会失去对方的信任。总之，大家都毫无顾忌地争先恐后地尽情地说出想说的话。那是一幅幅非常可喜的场面。

对于翻译者来说，特别难能可贵的是，可以完全放松了心情去翻译。这是因为，中日关系历来微妙，译者们在翻译时，唯恐出错。担心由于自己的不慎引起出乎意料的国际争端。因此，翻译时，都小心地一边揣度双方的想法，一边选择适当的词语进行翻译。更不要说，当下中日关系极为僵冷且紧张了。

但在戏剧心理治疗工作坊会场，没有这方面的担心，也不要费心思遣词造句。参与者双方都将长期压抑在心灵深处的不信任和疑惑等一吐为快，译者也毫不粉饰地如实翻译出讲话内容。这是多么痛快且彻底的互动交流啊。

6) “无力（改变现实）”这一同感令人担心

每次工作坊的最后一天，就是共享感受的阶段。这次，村本老师在说感想时，说了一件前一天晚上出现奇妙幻觉的事情。也就是在回日本前一天晚上，她去银行 ATM 机上取款，不知是否按错了密码，插进了银行卡别说取不出钱，连卡也出不来了。可是那银行卡插入口竟然还在一个劲儿地一闪一闪的，好像催人赶快插卡。急得直跺脚却非常无助的村本老师，看着那无情的插入口，开始出现了奇妙的幻觉：那个张着大口对着自己的插入口，好像在逼着自己说：“将日本抢走的东西全部还回来，快点还来！快点还来！”那时，她甚至还联想到日本整齐街道，美丽的景色都是用抢来的财物修建的。感到之所以今晚遇到这样倒霉的事，都是日本以前所做坏事的报应。

听到村本老师的这个遭遇，真感到很心痛。如果她不做这项研究，不了解二战时期南京的灾难，遇到 ATM 吞卡这种常有的普通事故，就不会在那个黑夜产生恐怖的幻觉。一个日常琐事即联想到了日本以前的侵略罪行，这不正是刺伤心灵的战争创伤在作祟吗。

听说村本老师得知南京大屠杀真相，只是七年前的事。即便如此，残酷的真相还是在她心里留下了如此深的战争创伤，之所以这样，还是因为那场大屠杀实在是太惨不忍睹了。

实际上，自 1982 年中国实行改革开放政策以来，已有成千上万的日企去江苏省的苏州、无锡、常州等地开展事业。唯独作为江苏省省会的南京，进驻的日企很少。问起日企们为什么不愿意来南京，原因还是因为日军曾经在南京制造了惨绝人寰的大屠杀事件。提起南京，令一些日本人毛骨悚然，感到莫名的恐惧，所以他们不愿意来。

有个日企社长曾对我说过这样一种情况，去南京出差的人员，都可以领到特别津贴。这种津贴原本只有去特别危险的地方出差才享有的。在中国，南京市最适宜人类居住，是自然灾害最少的地区。怎么成了危险之地了呢。

有一年，我去立命馆大学访问时，听了日本大阪广播电视台某先生的讲座。讲座结束后，我礼节性的主动去讲台表示感谢。可是，当我刚自我介绍说，“我是南京来的——”。话音未落，那位先生即回答说：“南京？那是什么地方？我不知道啊。”便慌慌忙忙地走掉了。我这人很耿直，别人说什么都信。当时我就楞住了，感到不可思议，心想：“南京这么有名，他怎么可能不知道。日本不是也有‘南京豆’（花生）之类的以南京命名的东西吗。”

其实，有很多日本人，压根就没来过南京。却不知为什么，一听到南京，就产生莫名的恐惧，害怕南京人，将南京视为忌讳之地。

不仅如此，即使出生于和平年代，追求和平的日本年轻人，也有这种想法的人。在我们这个工作坊里，就有初来咋到的日本年轻人，晚上不将佛珠放在枕头底下，就恐怖得睡不着觉的人。如果没有烙在他们心底的战争创伤，怎么会出现萦绕不散的恐怖感呢。

如果连不知二战时期南京发生的事，一心追求和平的日本年轻人都因战争创伤患上了南京恐怖症。那么，抗日战争结束 76 年后的中国人，仍然牢记着南京大屠杀的遇难者，一天也没有忘记被 731 部队当做“圆木”杀害的成千上万的遇难者，这说明战争创伤是多么深、多么牢固地烙印在中国人心底。这样的战争创伤到底怎么样才能抚平呢。

在参观南京大屠杀纪念馆时，每当看到那些受害人的表情，每当看到扬子江畔成千上万年人的累累尸体，每当想起那些被当做“圆木”抬上 731 部队手术台上的成千上万受害者，就禁不住地想到，对着即将砍下的屠刀，他们都想些什么啊。他们的父母知道了是多么地悲伤啊。我想，每位去南京大屠杀纪念馆参观的人，都会和我同感的。

特别是最近，每当看到教室里单纯且幸福地学习着的中国大学生时，身着空军服、乘在 731 飞机上，一脸狰狞笑容的安倍首相的照片就浮现在课堂上。每当看到南京美丽的城市风景，南京上空就会浮现一幅幅 76 年前的景象：日军的刺刀、堆满尸山的南京街道、倒在扬子江畔的几十万遇难者、731 细菌实验手术台上的受害者。

尽管，通过演示自己的故事等，大家将压抑心底的想法尽情倾述出来，并得到对方的理解，所有参与者都能很好地了解影响彼此成长时期所受到的影响，并能够很好地地上演相关角色，彼此感到心灵的相通，这实在是令人感动和感谢的事。但是，在工作坊结束前夕，听到最多的感慨还是对现状的“无能为力”、“只能尽力”这些词。

美国的阿尔曼德先生自己也有悲惨的经历，但是，为了不让历史悲剧重演，他呕心沥血研究让曾经的敌对双方和解的方法，不辞劳苦地奔走于世界各地。日本的村本老师和小绫、村川先生以及各位学者们，还有友好并积极参加工作坊的参与者们，他们为了和平，不顾周围怀疑且不满的目光，毫不动摇地一直坚持研究本课题。真是令人非常佩服。每当想到他们，不禁肃然起敬。

还有日本的年轻朋友们，像佳代，悠治他们，不顾亲人的警告、顶着朋友远离而去的压力，为了了解真相、为了让自己释然，一次又一次地来到陌生的南京，真是令人敬佩。

最后，本次工作坊结束了。但是，她将作为和平之旅的新起点，为了让普通国民的呼声变得有力，让笼罩在HWH工作坊上空那对现状“无能为力”、令人担心的气氛彻底遁迹，让我们两国民众齐心协力，共同努力吧。各位HWH工作坊成员，大家辛苦了。我们还会再见面的！

26-2 国際セミナー「南京を思い起こす 2013」の感想

南京航空航天大学 羅萃萃

歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試みとする国際セミナー「南京を思い起こす」ワークショップは、2009年に始まって三回にわたって行われてきて、今回は最後になりました。もし、2007年の南京大虐殺70周年の国際セミナーと2012年のワークショップ参加者インタビューを含めたら、私は、幸いに、五回も体験させていただきまして、受けたものが多くて本当に良い思い出になりました。それに、もし、四日間の一つの治療コースとすれば、私は、合わせて五回にわたった治療全コースを体験させていただけたといえるのでしょうか。一人の治療対象として、本当によい人生体験をさせていただき、とても感謝しております。

それにしても、六年にわたって付き合ってきて親しくなった先生方と参加者のみなさんと別れて、また、いつ会えるかわからないと思っては、涙ぐんでしまうほど名残惜しくなります。でも、あくまでも歴史のトラウマを癒すワークショップですから、六年間をかけて行われてきたこのイベントが終了したことは一つの治療コースが終わったと理解してもよいでしょう。

本当に感じたことが多いので、どうやって複雑で絡まっている感想をちゃんとまとめて書いていったらいいか、戸惑って整理にちょっと時間がかかりました。

実は、このワークショップに参加して、一つ一つのステップの進展に従って

私自身の身分や気持ちが次々に変わり、また、このワークショップや参加者を見る立場も変わっていったので、よく、考えたすえ、次々と変わっている立場から感じたことを分けて書かなければ自分の気持ちを全部表すことができない。即ち、日本語通訳として、大学日本語教師として、それから日本から帰国した華僑の子孫である治療対象として、かつての中日友好協会の役人として、さらに、「南京を思い起こす」プロジェクトの参加者としての立場です。でも、時間の関係で、ここでは、とりあえず日本語通訳としての立場から感じたことと見たことを書きましょう。

1) 通訳としての新鮮な体験

立命館大学の先生方が主催し、アルマンド先生が指導するこの「南京を思い起こす」ワークショップの一人の通訳として、このワークショップに参加させていただいたことは、私にとって、中国語では「三生有幸」で、ほんとうに幸いなことです。また、プロジェクトの先生方に私のことを信用していただいて本当にありがたいことで、ここでお礼申し上げます。

実は、大学を卒業してから、いままで、いろいろな場所、場合で、様々な仕事内容の日本語の通訳をしてきたが、今回のような通訳をしたことはありませんでした。一つはこのワークショップの参加者の身分は特別でした。もう一つは、このワークショップのような通訳内容は前例のないものです。例えば、ドラマセラピー心理治療法研究者であるアルマンド先生のサイコドラマ的ファリシテーターの言葉の他に、歴史専門家の研究成果の発表、文字の読めない生存者の泣きながらの証言、参加者たちの複雑な気持ちを込めた本音、芝居のセリフなどです。さらに、通訳である自分自身も、毎日、複雑で、奇妙な気持ちで通訳したことはなかったのです。

さらに、参加者はすべて、日中という戦争敵対両国の戦後二世代と三世代で、戦争経験者から直接、間接にその影響を受けてきた人々だけでなく、相手国の言葉や文化をほとんど知らず、しかも、相手国に行ったこともあまりなくて、多かれ少なかれ、相手国に対して、不信、憎み、疑惑などの気持ちを抱えていて、好感をあまりもっていない人が多かったようです。その上に、通訳した会話内容の多くは、ずっと胸に抑圧されてきて、活火山が噴火するように、一気にずばりと相手国に対する不信、憎み、批判、疑惑などを訴えたものが多かったのです。

それにも関わらず、通訳者である私自身も、ドラマセラピーの一つ一つの、不思議で可笑しいエクササイズをさせられながら、毎日、芝居の俳優、プレイバックの人体彫像、物語の主人公として自分の物語をみんなとシェアリングする治療対象など、ステップが進むにつれて、次から次へと自分の身分を絶えずに変え、そして、身分が変わるに従って、心情も恥ずかしかったり、戸惑ったり、悲しかったり、嬉しかったり、怒ったり、興奮したりするように変わりながら、感情を込めた通訳をしていたのです。

これは、なんと新鮮で奇妙な通訳体験でしょう。なんと万丈波乱で勉強になった通訳体験でしょう。

それでは、次から通訳者としての感じや心理変化を話しましょう。

2) 好奇心

2009年に南京師範大学の張先生に「南京を思い起こす」ワークショップの通訳の仕事をお願いされた時に、これはただ四日間にわたる普通の中日文化交流のイベントだと思いました。具体的な内容をちょっと聞いたら、その説明をいくら聞いてもピンと来なくて首を傾げていました。なぜかという、実は、説明してくれた人自身も、そのプロジェクトの具体的な内容について、もやもやしているし、心理学院の専門家に聞いても、ただ、聞いたことがあるようだが具体的ににははっきりわからないという答えをもらっただけなのです。あくまでも、話し手にとっても、聞き手にとっても聞いたことも、見たこともない新鮮な心理治療実験的ワークショップですから、これを理解するには、この身で参加しながら勉強するしかないと覚悟して、かえって、好奇心に大いに駆られて、探検のような気持ちでこのワークショップの始まる日を首を長くして待っていたのです。

3) 半信半疑

80年代から、いままで、数え切れないほどの中日友好交流の通訳をしてきました。しかし、今までの中日の交流双方はほとんど、相手に友好か好意を積極的に示そうとして、なるべく穏やかな口調で交流する人々なので、通訳者は、できるだけ、双方の友好を求める気持ちを相手に伝達すれば交流は円満にできるのです。

けれども、今回の仕事は例外です。なんだか、交流双方は、わりと相手国の

ことを知らないし、年齢層や身分もさまざまでした。しかも、ほとんど相手に対して、敵意、憎み、不満、不信、批判、恐怖さえもある、などの心情を持っています。通訳者は、このような双方の心の底に抑圧されてきた気持ちをなるべく、徹底的に通訳して、相手に伝えて、相手に理解してもらって、最後、双方の戦争トラウマが癒され、和解に達するという仕事だそうです。

初めは、この仕事は意義あると思ったが、その新鮮で、見たことのない不思議な心理治療の実験手段、さらに、四日間しかない治療コースで、果たして理想的結果に達することができるのかと、とても半信半疑だったのです。また、治療コースはほとんど双方のコミュニケーションで完成するので、交流の架橋である通訳の如何は、治療結果の如何に繋がるでしょう。そう思うと、とても心細くなったのです。

4) 心配

2009年のワークショップ、すなわち一回目の初日の通訳を試みたら、案の定、心配したことは出てきました。

まずは、ドラマセラピー心理治療法をめぐる新しい外来語の単語が次から次へと話されたことです。ウォームアップの活動から、見たこともない、聞いたこともない、説明されても、すぐにはピンと来ない、イメージの想像できないワークショップの一つ一つのエクササイズの説明を正確にタイムリーに通訳しなければ、中国側の参加者は、みんなについていけないし、次から何か新しいサイコドラマ的な指示が出されるかは予想もできません。その上に、通訳をする人もみんなと一緒に、その次から次へと出された指示に従って怪しい手振りや身振りをしなければなりませんでした。

それで、ドラマセラピー心理治療法の専門用語をちゃんと、一つ一つのステップの進展に間に合うように、通訳である私は目も耳も体も緊張して、アルマンド先生の身振り手振りを見ながら、彼の真似をしながら、最大限に頭を動かしてそのステップの内容を理解して中国語に訳したり、時には、わかりやすく説明するために、可笑しい動きをもっと大げさにしなければならなかったのです。

初日の通訳は、このようにモヤモヤしているうちにやってしまったのです。通訳も、参加者も、みんな五里霧中（中国語では「一头雾水」）の中を、興奮の中を、心理治療のわけもわからない一日を過ごしたのです。それにしても、ほとんど、コミュニケーションを通じてワークショップを進めていくので、

私のような通訳はほんとうにいけるのかとますます心配するようになりました。

5) 安心

その次の日、前日の教訓があっても、具体的な予習ができなくても、心理的にはいくらか構えているようになりました。それに、何よりも、大切なのは、参与者のみなさんの目つきから、自信を得たことです。みんなの目つきは、前日と違って、とても親しくて、柔らかくなったのです。アルマンド先生の穏やかでサイコドラマ的ファリシテーターも、なんとかわかるようになりました。そこで、全員ミラーリング、想像のリレー、台詞の繰り返しや声のボール、アイコンタクト、30秒のシアター、ロールプレイ、ラインレベティション、ソシアリング、記憶のオブジェ、アイデンティティーのワーク、アレゴリー、シェアリング、インタラクティブな彫刻、プレイバックシアターなど、続々と指示された一連の見たことも聞いたこともイメージできないエクササイズをやりながら通訳するようになりました。

このように、口は、単純な声を出すことから、簡単な会話、複雑な物語作り、さらに、自分自身の物語をみんなに話す。体は、簡単な手振り身振りの真似、それから、プレイバック、さらに、ストーリーの芝居を演じるまで、サイコドラマ的な難しい外来語の単語は、自分自身の参与によってだんだん、様々な光景に変わり、そうしているうちにHWHワークショップのステップを大半覚えるようになりました。

それで、一回目は、半信半疑、一つ一つのステップのエクササイズに一生懸命で、周りからの衝撃ばかり受けて反応して、自分自身におこった変化を反省するどころか、周りを観察する暇もなかったが、二回目ははすでになれたので、他人を観察するようになった。三回目は、自分自身におこった変化を反省できるようになりました。他人の気持ちをだんだん、深く感じ理解できるとともに、通訳の身分を超えて自分の物語を積極的に話したくなり、みんなとシェアリングしたくなりました。

四回にわたってやってきた今では、それらの外来語の単語を言うと、すぐ、一つ一つ生き生きしている光景が浮かんできて、そして、それらのシーン思い出しては、感激したり、感動したり、懐かしんだりする心情になります。

一番安心できるようになったのは、何よりも、若手通訳者の成長です。両国

の若手通訳者はこのようなイベントを通じて、相手国の人々の気持ちを理解できる通訳者に成長してきたことです。私は、もともと、私のような日本から帰国した華僑の子孫である通訳者こそ、中日双方の参加者のみなさんのつらくて複雑な気持ちがよくわかったうえで通訳できると思い、そして、私のようになれるのは、かなり時間がかかると思っていました。でも、このイベントの若手通訳のみなさんは、ワークショップに参加することによって、中日双方の参加者の気持ちをよく理解できるようになり、そして両方の気持ちや考え方をちゃんと理解した上で通訳できるようになりました。

実は、戦争の被害教育を受けながら育ってきた、また、相手国の歴史、文化、実情をあまり知らない中日両国の若者たちの会話を通訳することは、両国のことをよく知っている年配者の通訳にとって、ほんとうに、人を苛立たせることです。若い通訳者の成長こそ、意義重大なことです。世界の未来は若者の世界ですから、若い通訳者こそ、中日双方の若者の気持ちがよく理解でき、そして、ちゃんと中日双方の若者の気持ちを理解した上で通訳できるのです。ですから、若い通訳者の成長は、中日友好交流にもっと意義があると思います。

中日双方の若者は、このイベントを通じて互いに戦争や戦後教育の実情を知ることになり、互いに理解しあえるようになりました。時には、こちらは友好を示しても、相手からは、それは建前で信用できないと思われることさえも多かったが、双方とも、努力して相手の立場に立って相手の気持ちを理解しようとしていたのです。会場の雰囲気は、和やかになり、誰でも、言いたいことを思う存分に言い切って、誤解されるとか、憎まれるとか、不信されるとか、みんな、構わずに、とにかく、言いたいことを、思う存分に、我勝ちに言ってしまうしました。本当に望ましい光景でした。

特に、通訳者にありがたいことは、通訳するときに、とても、リラックスして通訳できるようになったことです。なぜかという、中日関係はもともと、微妙で、通訳をする時に、何か不注意で言い間違ったら、思ってもない政治事件を引き起こすのではないかと、通訳者はみんな注意深く相手の気持ちを読み取りながら、適当な言葉遣いを考えながら通訳してきています。むしろ、今の中日関係は冷え込んで、緊張している最中です。でも、HWHワークショップの会場では、こんな心配と言葉選択の工夫は不要でした。参加者の双方は、ずっと抑圧されてきた不信、疑惑などを「一吐为快」だったら、通訳者も、何も加工せずに言われたままに通訳してしまったのです。なんと、痛快で徹底的なコ

コミュニケーションでしょう。

6) 無力だという共感への懸念

今回のワークショップの最後の日には、互いの感想をシェアリングするステップです。そのときに、村本先生は自分の不思議な妄想をした話を語りました。つまり、帰国する前の晩に、銀行のATMで、キャッシュカードを挿入口に入れて、お金を取ろうとしたら、お金どころか、パスワードを間違えたかと、いくらキーを押してもカードさえも出てこなくなりました。ひどいことに、あの挿入口の信号ランプは、まだ、ひっきりなしにパチパチと光って、次のカードの入れるのを催促しているように見えるそうです。焦っている先生は、その時、奇異な妄想をし始めたそうです。大きな口を開けているあの挿入口は、自分に向かって、日本に奪われたものを、全部返してくれ、はやく返してくれ、返してくれと迫ってくる妄想でした。戦後の日本の町並みは、とても綺麗に整然にできたのは中国から奪ったお金のおかげです。今、中国に来てこんなひどい目にあったのは、やはり、昔、悪いことをやった報いだと先生はそう考えていたそうです。

私は、先生の妄想話を聞いて、とても、胸が痛くなりました。もし、先生は、このプロジェクトを研究しなければ、戦時中の南京のことを知らなければ、こんなカードが出てこないというごく普通の日常のことにあっても、あんな恐ろしい妄想をしないでしょう。日常にあるちょっとしたことでも、すぐ、戦争、しかも、日本侵略罪とつながって思ってしまうのは、やはり、戦争トラウマがあまりに心に固く付いているせいだと思います。

話によれば、村本先生が南京大虐殺のことを知ったのは、たった七年前（2007年）からのことです。それでも、こんなひどい戦争トラウマが心に付いてしまうのは、やはりあの虐殺はあまりにも悲惨すぎるせいでしょう。

実は、中国では1982年から改革開放政策を実行してきて、蘇州、無錫、常州などに、何千何万の日系企業が行っているが、江蘇省首府としての南京だけには、日系企業はあまり来ていない。その訳を聞いたたら、ほとんど、昔の大虐殺事件と関係があるそうです。日本人は、南京と聞くと、なんとなく名状のできない恐怖感がしてしまうので、行きたがらないそうです。ある日本企業の社長の話によると、南京に出張に行く社員に必ず特別手当をあげると言っている。このような手当は特別危険な地に行く人にあげるお金だそうです。南京は中国

で、一番住みやすく、自然災害の少ない地です。なぜ特別危険な地になったのでしょうか。私は、ある年、立命館大学で、日本大阪放送局のある方の講座を聞いたことがある。講座が終わってから、礼儀としてその方にお礼を言うために、教壇に行ったのです。「私は南京からきたもので、——」、自己紹介しようとしたら、あの方は「南京って、どこですか。わかりませんよ」と言いながら慌てて行ってしまったのです。正直な私は、その時、「へえ、南京って、かなり有名なところじゃないですか。日本でも、南京豆とか、あるでしょう」と不思議に思ったのです。日本の多くの人は、南京に来たこともないのに、なぜ、南京と聞くと、恐ろしい気がして、南京の人を怖がって南京という地はタブーのところになっているのでしょうか。

それだけでなく、平和時代に育った、平和を求めている日本の若者さえ、そうです。HWH ワークショップで南京に初めて来た日本の若者に、念仏用の念珠を枕の下に入れないと、夜、怖くて眠れないメンバーがいたそうです。中日戦争のトラウマがなければ、なぜ、こんな無名な恐怖感がしていたのでしょうか。

戦争のことを知らず、平和を求めている日本の若者さえ、そうだから、中日戦争の76年後の今も、南京大虐殺の遭難者のこと、731部隊によって殺された何千何万の丸太のことなど、一日すら忘れたことのない中国人の心に、ずっと焼き付いた傷跡は、どんなに固くて深いことでしょう。こんなトラウマはどうやって癒すことができるのでしょうか。

虐殺記念館で、あの悲惨な虐殺場面の写真を見ては、被害を受けている人々の顔を見ては、揚子江の畔におびたたく積み重ねた多くの若者の死体を見ては、また、手術台に乗せた丸太たちのことを思い起こしては、彼らは、殺される直前に何を考えていたのでしょうか。彼らの両親はどんなに悲しくてつらかったのでしょうか。見学に行った人々はみんなそう思っているのではないかと思います。

特に、最近、大学の日本語教室で、単純で幸せに勉強している中国大学生を見ては、731の飛行機に乗っている空軍服の安倍首相の恐ろしい笑顔が浮かんできたのです。そして、美しい南京の街を眺めては、元日本軍の銃剣、大通りにあるおびたしい死体の山、揚子江の畔に倒れた何千何万の遭難者、731の手術台と、次々と南京の空に浮かんで来てどうしようもないのです。

みなさんは、ストーリーを演じることなどで、互いに抑圧されてきたものを

訴え出して、相手に理解してもらえ、また、参加者は、みんな、ちゃんと互いに、それぞれのアイデンティティーの形成に影響した役を上手に演じたのは、やはり、互いに心が通じたおかげでしょう。このことはとても、感激で感謝したいことです。

それにしても、ワークショップの最後に、よく耳にした声は、現状に対する「無力感」とか、「できる限りのことをするしかない」という声です。

アメリカのアルマンド先生は自分の苦しみより、これから、歴史の悲劇が再び起こらないように、一生懸命、いろいろな敵対双方を和解させる手段を研究し、苦労を問わずに世界各地を走り回っています。また、村本先生をはじめ、綾さん、ハルさん、日本の学者の皆さん、好意を持って積極的に、このワークショップに参加したメンバーのみなさんも、周りの同胞の不審不満な目に睨み付けられながら、信念を揺らさずに、ずっと、友好と平和へ向かっているこのプロジェクトを研究し続けていることに、感心してたまらない。みなさんのことを思い出しては思わず敬礼をしたくなるのです。

また、日本若者のメンバーの皆さんは、佳代のように、悠治のように、親戚に警告されても、友達が遠ざかっていっても、真相を知るために、自分を納得させるために、知らない南京の旅を何回もしたことも、感心すべきことです。

最後ですが、今回の HWH ワークショップが終了することを平和への新しい道のスタートとして、普通の国民の声が有力になるように、HWH ワークショップ会場にこもった無力だという共感への懸念雰囲気はなくすように、両国の国民は協力し合いながら頑張っていきましょう。HWH ワークショップメンバーのみなさん、いままで、お疲れ様でした。また、会いましょう。

第 III 部

日中の戦後世代を対象にした新たな
東アジア型歴史・平和教育プログラム開発
～ HWH7 年の成果

1-1 “南京记忆”：中日和解的种子

张连红

进入 21 世纪后，中日关系持续动荡。在日本，极右势力不断发起钓鱼岛“国有化”、竭力否定侵略历史、污蔑性暴力受害者、质疑东京审判的公正性等一系列活动，一些右翼政客也乘机推波助澜，鼓吹中国威胁论，参拜靖国神社。在中国，因领土纠纷、文化差异、东海油田等引起的反日游行不时上演，中日关系由此进入战后最为复杂的冰冻期。但即使在中日关系最为紧张的情况下，仍有许多致力于中日友好的和平人士，孜孜不倦寻找中日和解的良策，自 2007 年开始的“南京记忆”国际研讨活动，在南京每两年举行一次，特别是自 2009 年开始的由村本邦子教授策划、阿芒德教授主持的历史创伤治疗工作坊一直如期举办，至今已成功举办三届，参加工作坊活动的中日韩三国年轻人多达 100 余人次，并出版了三本工作坊活动的成果，取得了十分丰硕的成果，令人深受鼓舞！

在中日关系日益紧张的情况下，特别是在 2005 年发生全国性反日示威游行之后，在中国举办以“和解”为主题的中日学术交流活动，其实承担了不少的压力。在高昂的民族主义情绪之下，致力于通过战争创伤治疗来促进中日和解活动很难得到民众的理解与支持，主动报名参加工作坊的志愿者并不踊跃，绝大多数志愿者都是因为老师的发动或者专业研究的需要而参加，起初有一些志愿者参加后也不愿意公开自己的真实姓名，大多数参加者可能都是希望通过参加工作坊来了解日本年轻人真实的想法，对于中国年轻人而言，他们无法理解日本仍有人不承认侵略中国的历史，不承认南京大屠杀。同中国一样，我想在日本招募志愿者也并非易事，一方面年轻人越来越少关注过去的侵略历史，另一方面要鼓起勇气来中国倾听受害者的悲惨故事，反省自己祖父辈的罪恶，这一定需要一颗非常强大的内心。因为过去的战争，中日两国至今仍都笼罩在战争创伤的阴影之中。

令人不安的是，由战争创伤而导致的社会心理疾病并没有引起社会各界的高度关注，但其对中日关系未来走向具有不可估量的影响。记得 1999 年 12 月，我第一次去日本参加有关中日战争赔偿国际学术会议时，在会议之余我曾邀请参加会议的日本友人到南京访问，但他们大多数回答竟然都是因为心里恐惧而不敢前往南京。作为日本人，面对过去的战争，背负着十分沉重的负担，甚至有作为日

本人耻辱的念头。作为日本年轻人，虽然都没有经历过中日战争，但他们都不同程度继承了二战历史的战争创伤记忆，尽管内心深处很难认同自己慈祥的祖父是战争罪犯。他们一方面从内心深处极力回避战争话题，甚至希望能找到证据来证明其祖父辈没有在中国犯罪。另一面对中国人的战争追究感到厌倦、恐慌。中日两国由于战争创伤而带来的后遗症，在日本右翼的不断挑衅下，其危害越来越大。

历史无法改变，但我们可以通过努力改变自己，从而把握未来。2000 年 11 月 4 日，通过美国著名华裔作家张纯如女士的介绍，在美国旅居的日本艺术家、世界和平组织成员棚桥一晃（Kazuaki Tanahashi）和 Joan Halifax Roshi 来我们中心访问，棚桥先生说他的父亲曾经参加过上海战役，后负伤回国治疗，他认为作为原日本军人的后代，他也有战争责任，他希望能通过自己的力量做下面三件事：一是将中国人和日本人安排在一起进行交流沟通，以化解冲突，他说曾组织世界和平人士在奥斯威辛集中营门口进行过五天祈祷。二是能募捐一笔基金，以资助幸存者。三是在南京举办一次和平画展。其后我们多次通过电子邮件进行交流，他也曾专程来南京数次，积极策划募集援助幸存者的基金，招募美国社会心理学专家来南京开展幸存者精神创伤治疗，虽然最后由于受到不可抗因素，都未能如愿以偿。但是，2007 年 11 月 22 日我们一起合作成功召开了以“南京记忆”为主题的活动。举办了性暴力女性论坛，聆听了幸存者证言，举办了棚桥先生的个人和平画展、上演了渡边义治夫妇主演的话剧《地狱的十二月——悲哀的南京》，并在长江边的燕子矶遇难纪念碑举行了祈祷仪式。此次活动不仅给许多中国参加者以心灵振撼，而且深深触动了许多日本参加者的心灵，播下了许多立志于中日和解的种子。当年参加活动的村本邦子、村川治彦、笠井绫等沿着“南京记忆”的路，坚定地走了下来。

2007 年 11 月，村本教授第一次来南京参加“南京记忆”活动时，她应邀在女性论坛上做了报告，但由于时间匆忙，我们未能有机会深入交流。我印象中到了 2009 年 8 月，苏州大学心理系黄辛隐教授给我打来电话，称村本教授一行将来南京商谈 HWH 工作坊，8 月 28 日，黄教授及其女儿小戴陪同村本教授、笠井绫博士来到南京，深入交流了在南京举办 HWH 工作坊的计划。由于当初同棚桥先生交流时，曾计划邀请国外专家来对幸存者进行心理治疗，但一直未能如愿。村本教授是立命馆大学临床心理学教授，长期致力于研究虐待、性暴力、家庭暴力等以女性和孩子为对象的暴力问题。由于她曾参加由村川治彦先生组织的“用心灵

和身体理解历史研究会”，在来南京之前，她在立命馆大学参加过由美国加州综合学院 Armand Volkas 阿芒德教授主持的场景再现剧《战后一代继承的亚洲战争》，认识到 HWH 的重要意义。因此她所提议的工作坊，虽然创伤治疗的对象不是幸存者，而是着眼于年轻人，但其宗旨志趣相同。我们很快一拍即合，因此在南京有了延续至今的三次 HWH 工作坊。

从心理学的角度而言，也许第三者的出现对冲突双方的调解具有不可替代的作用。2007 年召开“南京记忆”女性论坛时，我们请了德国人 Joan Halifax Roshī 来主持，她是世界和平组织成员，佛教禅宗研究专家。她的主持让报告者讨论的语境站到人类文明的角度来批判性暴力。2009 年以来的三次 HWH 工作坊，村本老师也邀请了 HWH 的创始人阿芒德教授来充当主持者，虽然中日两种语言之外又增加了英语，给参加者的交流增加了不少障碍，但阿芒德教授犹如圣诞老人一样（他的长像也特别酷似圣诞老人），不仅给来自中日参加工作坊的年轻人带来心理上的放松，而且其如魔术般创造的情景剧十分有效地使得参与者发泄了内心的苦闷，从敌对情绪中能迅速转换角色，从而能从内心深处理解、宽恕对方，并最终获得共鸣。

从 2009 年 11 月到 2013 年 9 月，虽然举办了三次 HWH 工作坊，每次时间也只有匆匆的四天，每次参加者最多也只有 40 余人，但从参加者发表的感言来看，工作坊的成效十分巨大。几乎所有参加者的心理前后都出现了巨大变化，从双双封闭、猜疑到相互坦诚、接纳，最后成为依依不舍的朋友，并渴望保持永久联系。2013 年工作坊活动期间正值中国传统中秋佳节，中国学生热情邀请与会日本学生共赏明月、共同品尝象征团圆的中秋月饼，其乐融融，亲如一家。一些日本参加者真正从战争创伤的阴影中走了出来，他们由于背负了其祖父辈侵略中国的沉重的心理包袱，一直生活中作为日本人而感到耻辱的阴影中，经过工作坊活动后，认识到自己也可以为中日和解的重要成员做出自己的贡献，从而感到作为日本人也深感骄傲的转变。

以“南京记忆”为主题的 HWH 工作坊，也许作为学术课题的研究告一段落，但作为中日和解的种子已经发芽。

「南京を思い起こす」—中日和解の種子—

張連紅

21 世紀に入ってから、中日関係は不安定になったままである。日本においては、極右翼勢力が尖閣諸島「国有化」をいそぎ、侵略の歴史を必死に否定、また性暴力の被害者に対する侮辱や、東京裁判の公正さを質疑するなど、一連の動きがみられる。右派政治家は、その勢いに乗って「中国脅威論」を吹聴したり、靖国神社を参拝したりしている。中国においては、領土紛争、カルチャーギャップ、東シナ海埋蔵石油などによる反日デモが、繰り返して行われている。これらのことによって、中日関係は戦後以来、もっとも複雑な冷却期に入っている。しかしながら、中日関係がかくも緊張した情勢におかれても、中日友好活動に力を尽くしている多くの平和主義者は、相変わらず弛まずに中日和解の良策を求め続け、2007 年に、「南京を思い起こす」国際セミナーのイベントを始めた。その時から、2 年ごとに、南京でこのイベントは行われる。とりわけ 2009 年に始まった、村本邦子教授が企画、アルマンド教授がファシリテートする HWH ワークショップは、いつも計画通りに実行され、今年まで三回も成功裡に実施された。このワークショップに参加した中国、日本、韓国の若者は 100 人あまりに達し、三回の成果をまとめた三冊の研究書も、タイムリーに出版されて、素晴らしい成果を収めた。ほんとうに喜ばしいことだ。

実際、中日関係がますます悪化している中、特に 2005 年に勃発した全国的反日デモの直後、中国で「和解」をテーマとする中日学術シンポジウムを催すことは、ほんとうに、大きいプレッシャーが押し掛かることであった。ナショナリズムが高揚したムードの中を、戦争トラウマを癒すことによって中日和解を促進するイベントに取り組み、更に周囲の人々に理解・支持してもらうことは、ほんとうに難しいことだった。はたして、このワークショップに自ら積極的に申し込んだ人は、あまり多くなかった。参加者の多くは、教師の勧めか、あるいは、専攻研究テーマの必要によって、応募して来たのだ。しかも当初、中国側からの何人かの応募者は、自分の本名を隠してオープンにしなかったのである。実は、中国参加者の多くは、このイベントを通じて、日本の若者の本音を知るために、このワークショップに参加したのであった。なぜかとい

うと、中国の若者にとって、これらは極めて理解し難いからである。すなわち日本には、中国を侵略した歴史を否定し、南京大虐殺の存在を否認し続けている人がまだいるという現状を、信じられないからだ。日本側でも中国と同じように、HWH ワークショップ参加者の募集は難しかったようだ。一つは、今日の日本では、若者は侵略の歴史に関心を寄せないようになったこと。もう一つは、勇気を出して被害者の悲惨な語りを聞き、祖父世代による戦争犯罪の事実を反省しに中国に来るとのことそのものは、とても強い心構えが必要であるからだと思う。というのは、過去の戦争によって生じた戦争トラウマという暗いムードは、現在でもなお、中日両国の到る処に立ちこめているからである。

非常に不安にさせるものは、戦争トラウマによって生じた社会的心理的な病気である。この病気は今でも、社会各分野においてあまり注目されていないが、しかしながらこれからの中日関係の動きに対して、計りきれない悪い影響力があると思う。

1999 年 12 月のことだが、私は中日戦争賠償国際シンポジウムに参加すべく、初めて日本に行った。会議後、参加者の日本側の学者を南京訪問に誘ってみた。思いがけないことに、誘った参加者の多くは、怖いから南京へは行けないと答えた。

事実、日本人として過去の戦争による重荷を背負い、恥を感じている人もいると聞いている。それがために日本の若者は、たとえ中日戦争を経験したことはなくても、内心から自分の優しいおじいさんたちが戦争犯罪者である事実を認めたくなくても、多少なりとも、おじいさんの世代から戦争の歴史や戦争トラウマになる記憶を受け継いでいるはずだ。そこで彼らは、戦争の話題を心の奥底では必死に避けたり、甚だしき場合に至っては、おじいさんたちが中国で犯罪した事実はないという証拠を、探し求めたりしている。一方、中国人が戦争責任をしつこく追究し続けることを嫌がり、怖がっている。ともあれ中日両国間に、戦争トラウマによって、すでに重い後遺症が生じてきた。そしてこの後遺症は、日本右翼が絶えず続ける挑発事件によって、ますます危険になっている。

歴史を変えることはできない。しかし、私たちは自分自身を変える事を通じ

て将来を把握することができる。2000 年 11 月 4 日に、アメリカの有名な作家アイリス・チャン女士の紹介で、在米の日本人の芸術家であり、世界平和グループのメンバーである棚橋一晃氏、及び Joan Halifax 老師が、南京師範大学南京大虐殺センターを訪問された。棚橋氏の話によると、彼の父親はかつて上海戦に参加し、負傷の治療のために日本に帰ったそうだ。彼は旧日本兵の子孫として、みずからにも戦争責任はあるとする。また自分の力で、三つのことを成し遂げたいと語った。第一に、中国人と日本人を一堂に誘い、双方にコミュニケーションを進めてもらい、ごたごたしてきた紛争を解決すること。また彼は、かつて世界の平和愛好者をアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所正門に呼び寄せて、5 日間もかけて祈り続けたと話してくれた。第二に、サバイバーを援助するために募金すること。第三に、南京で平和をテーマとした絵画展示会を催すこと。その後も私は、棚橋氏とメールで多く交流したし、また彼も何回もわざわざ南京に来られたこともある。その他に彼は、サバイバー援助の募金イベントや、アメリカ社会心理学の専門家を南京に招いて、サバイバーの戦争トラウマを癒すプランを企画した。しかし、それらのプランは、乗り越えられない困難で、なかなか思うとおりに実現できなかった。だが 2007 年 11 月 22 日、私たちは協力し合い、「南京を思い起こす」をテーマにイベントを円満に催した。そのイベントの間に、性暴力女性論壇、サバイバーの証言を聞く会、棚橋氏の平和絵画展示会、渡辺義治夫婦が出演した「地獄の十二月～悲しみの南京」という芝居の公演会、さらに、揚子江畔の燕子磯遭難者記念碑の前での哀悼式などを実施できた。あのイベントによって、中国側参加者の多くは胸を打たれて、日本側参加者の多くは心に強いショックを受けたようだ。こうしたイベントは、中日和解を目指す種子をたくさん撒いたと思う。また、あのイベントに参加した村本邦子・村川治彦・笠井綾たちは、その後も「南京を思い起こす」路を変わずにずっと歩み続けている。

2007 年 11 月、村本教授は「南京を思い起こす」というイベントに参加するために、初めて南京に来たが、私たちの招きに応じて女性論壇でスピーチもおこなった。しかしその時は、時間の関係もあり村本教授と深い交流ができなかった。その後、おそらく 2009 年の 8 月のことだと記憶するが、蘇州大学心理学科の黄辛隠教授から電話をもらった。近いうちに村本教授一行は HWH ワークショップの相談のため南京を訪問するという内容だった。そうしてその年の 8

月28日、黄教授と娘さんは、村本教授・笠井綾博士と一緒に、南京に来られた。そして南京でHWHワークショップを催すプロジェクトについて、深く話し合った。

実はもともと、棚橋先生と交流するときに、外国の専門家を招いてサバイバーのトラウマを治療する計画を立てたが、ずっと実行できなかった。村本邦子教授は立命館大学臨床心理学の教授で、長年にわたり虐待や性暴力、家庭内暴力など子どもや女性に対する暴力問題を研究している。また村川治彦先生が指導する「こころとからだで歴史を考える会」に参加したこともあったし、さらに南京に来る前に、立命館大学で開催されたアメリカ・カリフォルニア統合学院のアルマンド教授がファシリテーターを務めた「戦後世代が受け継いだアジア戦争」というプレイバックシアターに参加したこともあったから、HWHワークショップの重要性をよく認識している。それがために、村本先生が提案したワークショップのトラウマ治療対象は、サバイバーではなくて若者である。それにしても、先生の目指すところと私たちの目的は一致していると思った。よって相談はすぐ合意に達した。その後、HWHワークショップは計画通りに、三回にわたって南京で行われたのである。

心理学的視点から言えば、衝突者双方にとって、第三者の斡旋は欠かせない役割があるとされる。2007年に「南京を思い起こす」女性セミナーを開催する際に、アメリカ人のJoan Halifax 老師を招いて、ファシリテートしていただいた。Joan Halifax 老師は世界平和グループのメンバーであり、仏教禅宗研究者でもある。彼女のファシリテートのもと、そのセミナーを人類文明という視点から性暴力を批判するセミナーにすることができた。

2009年からいまで、三回にわたって行われてきたHWHワークショップは、村本先生がHWHの創立者であるアルマンド先生を招いてファシリテートしていただいたワークショップだ。中日両国の言葉のほかに、英語を用いなければならぬので、参加者のコミュニケーションに不便をもたらしたが、アルマンド先生はサンタクロースのような存在で（実は彼の顔付きもサンタクロースにそっくり）、ワークショップに参加する中日両国の若者に心理的リラックスを与え、魔法使いのように様々なドラマを監督して作って、参加者の人々に、内心にたまってきた悩みや苦しみをとても上手に訴えさせた。彼のおかげで参加者はすべて、敵対感情から速く脱出して新しい身分に置き換えた。だからこそ、

中日両国の参加者は、互いに、相手を内心から許しあったり、理解してあげたりするようになり、最後によりやく共同認識に達することができたのだ。

2009 年 11 月から、2013 年 9 月まで、HWH ワークショップは、ただ三回にわたって行ったが、毎回は四日間しかないうえに、参加者人数も多くとも 40 人しか参加できなかった。それにしても、参加者の感想から見れば HWH ワークショップは、やはり大いに成功したとすることができる。全ての参加者は、参加前と参加後の心理は大いに変わったと言っている。中日双方の参加者は、参加前の互いに閉鎖した、疑う状態から、参加後の互いに心底オープンにする、受け入れる状態になった。さらに別れる際に、名残惜しくていつまでも連絡しあおうと約束するほどの友人となった。2013 年のワークショップを行う期間は、ちょうど、中国では一家団欒の伝統的祭りである「中秋節」の期間だった。中国側の若い学生達は、熱心に日本側の学生を誘って共に月見をし、一緒に一家団欒をイメージする月餅を食べた。ほんとうに親しい家族のように、和やかな雰囲気にはれていた。日本側の参加者の多くはよりやく戦争トラウマの暗い影から抜け出したそうである。いままで、彼らは、おじいさん輩のせいで、ずっと中国侵略という心理的重荷を背負い、日本人としての恥を感じながら生きてきていたようだ。しかしながら、このワークショップのおかげで、彼らは、自分自身でも中日和解事業に貢献できる日本人になれると認識して、日本人としての誇りを感じはじめるようになった。

いま「南京を思い起こす」をテーマとする HWH ワークショップは、学術研究課題として、一段落を告げたが、中日和解の種子として、すでに芽を吹き出していると思う。

2-1 「南京を思い起こす」7年間の成果と今後に向けて ～歴史のトラウマと出会いのワークショップ HWH

立命館大学 村本邦子

1) 経緯

臨床心理士として、虐待、性暴力、DV など暴力被害者と関わるなかで、個々のケースを通して問題を遡ると、親世代の暴力、もう一世代遡ると、過去の戦争に行き着くことに着目してきた。暴力の世代間連鎖を断ち切るためには、ミクロレベルのトラウマを、マクロな社会的・歴史的記憶とつなげて修復する必要があると考えるようになった。2007年、村川治彦を通して、HWH (Healing the Wounds of History) と出会い、南京虐殺70周年記念の国際会議に参加するために、初めて南京を訪れた。日本軍がやったことを直視し、それが自分と無関係ではないことを実感し、日本の仲間たちと一緒に犠牲者への追悼と謝罪をした。南京の人たちは私たちが暖かく受け入れてくれ、学生たちは、「もっと日本の若者たちと交流したい。事実を認めてくれて話をしたら、友達になれる。次は是非、立命館の学生たちを連れて来てください」と言ってくれた。そのエールに応えなければと思った。

ひとつだけ懸念があった。二次受傷である。自分たちの先祖がやったあまりに残忍な事実と直面することで、頭痛、高熱、吐き気、体の痛みなど、私たちにさまざまな身体症状が表れた。日中の若者が安全に出会えるよう、次は、アルマンド・ボルカスによる HWH の手法を使ったワークショップを企画することにした。前段階として、京都で小さな定例の勉強会を重ね、2008年7月、京都にて、4日間にわたる平和教育プログラム (IMAGINE21 による「地獄の DECEMBER ～哀しみの南京」の上演とアルマンドによる HWH 「こころとからだで考える歴史のトラウマ～アジアの戦後世代が継承する戦争体験」を、2009年3月には、サンフランシスコにて、HWH 「壊れた橋を修理する～第二次世界大戦の遺産に直面する日本と中国の文化」を開催した。そして、2009年10月、南京での初めての HWH が実現した。

笠井綾とともに、2010年10月トロント、2011年8月蘇州にて、私たちの試みに関するプレゼンテーションやデモ・ワークショップを行った。2011年には南京にて2回目の HWH、2012年には京都にて HWH と国際シンポジウム、

2013 年 9 月には南京にて 3 回目の HWH を開催した。この間、立命館大学の研究助成と文部科学省の科学研究費助成を受け、今年は、最終年として成果報告が期待されている。2012 年 9 月から 2013 年 7 月にかけて、評価のためのインタビューも実施した。分析はまだ途中で、ごく一部ではあるが経過報告をしたい。

2) 関係性の破壊としての歴史のトラウマ

2012 年に京都で行った国際シンポジウムでは、私たちがやってきたことは何であると定義できるのかを問い、セラピー、教育、運動、研究というそれぞれの観点から振り返った(村本、2012)。小田(2012)は、それぞれの参加者が、自分や他の参加者との関わりを、そしてその結果浮びあがってきた国境や世代を越えた物語を語り、互いに関わりあいながら、つむぎ出されていく平和が「縁起」していく様を、ポリフォニック(多声的)に編み上げ、「物語のタペストリー」として提示するような研究をと提起した。また、HWH があらかじめ含みこんでいる「トラウマ仮説」に対する批判も出されたが、今回はこれらを受ける形で、トラウマを再定義しておきたい。

実際のところ、トラウマを定義することは容易ではない。公式にトラウマを定義してきたものの代表として、アメリカ精神医学会による DSM(診断と統計マニュアル)があるが、これにしても、何をもってトラウマとするかには大きな変遷がある(Muramoto, 2002)。DSM(1952)は「大ストレス反応」として、戦闘と市民生活上の破局(火事、地震、爆発など)を挙げ、DSM-II(1968)は「成人生活の調整反応」として、抑鬱と敵意を伴う望まぬ妊娠、戦闘で脅えた兵士、死刑執行に直面した獄人を挙げた。PTSD が初めて現れる DSM-III(1980)は、ベトナム帰還兵の症例に基づいて、「はっきりとしたストレスは、ほとんど誰にでも重要な症候群を引き起こす」とし、トラウマ反応が特定された。「ポスト・トラウマ」の語は、トラウマの前後を区別し、出来事と反応の間に明確な因果関係を置くことになった。トラウマとなる出来事について、DSM-III-R(1987)は、生命や身体の安全への深刻な脅威ほか、「人間経験の範囲を超えたもので、ほとんど誰にでも著しい苦痛をもたらす」としたが、「戦闘体験やレイプは人間経験の範囲を超えたものなのか」が議論となり、DSM-IV(1994)では、「人間生活の範囲を超えたものであること」を必要としなくなり、恐怖、脅威、危険の主観的認知が強調された。その曖昧性は再度批判を

受け、現在の DSM5 (2013) では、「死、重傷、性暴力などにあう、あるいはあいそうになることへの曝露」と明確化され、それに付随する症状が問題とされている。

PTSD 概念の成立には戦闘帰還兵の問題があった。20 世紀以降の戦争は、一般市民を巻き込むようになったところに特徴がある。第一次世界大戦では死傷者の 5% が市民だったものが、第二次世界大戦では 50%、ベトナム戦争では 80% を越えた。これは、社会を支配するために恐怖を利用するようになった結果であり、標的は領土より人、心理的戦争が中心的な要素となった (Summerfield, 1995)。かくして、戦争によるトラウマは、帰還兵の問題だけでなく、一般市民のものとなったのである。戦争が人間生活の範囲を超えるものなのか否かは、社会・文化が決めるだろう。

その反応についてはどうだろうか。トラウマの影響は PTSD に留まらず、解離、鬱、心身症などさまざまな形で現れる。文化差も指摘されており、西洋以外では、解離と身体症状が顕著に表れるとするものもある (Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996)。精神障害の帝国主義化を批判する Watters (2013) は、2004 年、津波がスリランカを襲ったとき、どんなふうにアメリカのトラウマ・セラピストが欧米の PTSD 観を押しつけていったかを描写する。コロボ大学の教授陣は、生存者の体験を「心の傷」だけに絞り込み、彼らを「心理学的な犠牲者」として単純化する見方をしないよう、トラウマは脳内で自動的に起こる生理的反応ではなく、むしろ文化を伝える情報であると訴えた。スリランカ人にとって、トラウマは社会的関係性を壊すものであり、恐怖体験に後まで苦しみ続ける人は、社会的つながりから孤立した人や、親族のなかでうまくやっていけなくなった人である。欧米の PTSD 観においては、トラウマが精神的ダメージを引き起こし、結果として社会的問題が起きると考えるが、スリランカ人にとって、集団のなかで自分の立ち位置を見つけれなくなるのが苦しみを引き起こすのであって、自らの心の問題に起因するわけではないとする。

阪神淡路大震災のあった 1995 年の日本でも、類似のことが起こっていたかもしれない。1997 年、神戸で災害とトラウマに関する国際シンポジウムが開催されたが、そこでの議論は、日本では PTSD と診断された割合は非常に低かった (2.5%)、その理由として、岩井 (1999) は、トラウマを受けた日本人は、侵入的思考より身体的なレベルで症状化しやすいのではないかと、PTSD を特徴

づける要因が、震災後、それほど影響を与えなかったのではないかと、通常、最大の要因は無力感と孤立感から生じるが、大都市で起こった震災だったため、被災者たちは一体感を持ち、全体からサポートされている感覚を持っていたためではないかという仮説を提示した。他方、マックファーレン（1999）は、用いられたアセスメントの方法が不適切だったのではないかとコメントしている。

トラウマを精神障害としての PTSD と結びつけ、個人の心の問題にしてしまうことへの警戒は、実は、文化を越え、虐待や DV、性暴力などを扱うフェミニストたちからも提起されているものである。私自身、長くトラウマの臨床に関わりながら、トラウマ概念に葛藤を感じてきた。日本は、敗戦後の建て直しをひたすら経済復興に向け、行き着いた果てにバブルがはじけて、デプレッション（経済不況と抑鬱）の時代を迎えた。1995 年以後、トラウマや PTSD の概念が導入され、心理主義化が加速している。これは危険なサインである。個々人が内閉的な自己の世界に眼を奪われていくなれば、いつの間にか特定の誰かの利益のために社会が導かれていっても気づかないことになるだろう。

そこで、コミュニティのトラウマ、歴史のトラウマという概念を置いてみた。これは個人の心を社会や歴史に開く可能性を持つと考えたからである。2009 年、南京で最初の HWH を実施する際、「マスレベルで起こった暴力は、コミュニティを破壊し、コミュニティの在り方に否定的なインパクトを与える。これらがそのまま放置されれば、そのインパクトは世代を越えて引き継がれ、社会全体が歪んでいく可能性がある」とした（村本、2010）。暴力は物理的な破壊だけでなく、関係性の破壊をももたらす。トラウマのトラウマたる所以は、恐怖体験に伴う圧倒的な無力感と孤立無援感である。歴史的暴力によって、何より加害者側と被害者側の関係性が破壊される。共有不可能な非人間的経験を抱えてしまった者は、他者との関係、社会との関係、世界との関係を破壊されるだろう。Herman（1992）は、トラウマからの回復の最終段階を「共世界（commonality）」の回復と置いている。

このように、暴力が関係性にもたらす否定的インパクトをトラウマと呼ぶことにする。トラウマからの回復、あるいは歴史のトラウマの修復とは、破壊されてしまったさまざまな関係性を紡ぎ直すことである。暴力の世代間連鎖を断ち切るためには、切り離された個を社会や歴史と再びつなぎ直す必要があるだろう。私たちの取り組みは、南京虐殺という歴史的暴力によって破壊されてし

まった関係を紡ぎ直すための出会いのワークショップであったとここで再定義したい。

3) 想起される歴史のトラウマと関係の紡ぎ直し

「南京を思い起こす」というテーマのワークショップを通じて、戦後世代に歴史のトラウマが影響を及ぼしている様が浮かび上がってきた。もっとも多く見られたのは、中国側の不信感、疑惑、怒り、日本側の不安、恐怖、緊張である。これらの否定的感情は、つねに、ワークショップを振り返った時の肯定的変化と対の形で表現された。たとえば、2009年 HWH 最終日の振り返りで、中国の戦後世代は、「これまで私は、日中両国は和解できるか、できないかもしないと思っていました。でも今回の活動を通じて、日中両国の間の和解の希望が見えました」(#10-55) ※、「今までは日本に好感は持っていませんでした。でも、何時間も日本の皆さんと交流しているうちに、日本の人々の中には、とても心の優しい良い方々がたくさんいるんじゃないかと感じました」(#10-56)と表現した。

日本の戦後世代は、「ここに来る前に感じていたのは不安の気持ち、どうなるのだろう、全然知らない中国の土地で、中国の方がどんなふうになっていくのだろうという、すごく不安な気持ちでした。そして今思っている感じは、それとは真逆の、すごく安らかな気持ちです。それは、皆さんとの出会いがあったからだと思います」(#10-58)、「南京に来る前、正直怖かった。オーストラリアに留学している時に、15歳の中国人の男の子に出会って、日本人は嫌いだし帰れと罵られたことがあって、それがたぶんトラウマになっている部分があって、南京に来るのがとても怖くて、また罵られたりするんじゃないかと思ったりしながら来たんですけど、中国人の方が、日本が凄惨なことをしてきたなかで、それにも関わらず、心を開けて入らせてくださったことに感謝していますし、町に出た時も、町の人たちが温かくて、顔もほんとに日本人と全然変わらなくて、温かい気持ちでいっぱいになりました」(#10-60)と言った。

張連紅(2010)は、現代のスポーツ観戦、消費者調査、国民感情アンケートなどにも70年前の戦争の影響が深く残っていることがうかがわれ、日本の軍国主義を想起させる出来事が報じられるたびに、中国の人々のなかにボイコットやデモなど強烈な反応が引き起こされることにもトラウマの痕跡が見られるのではないかと指摘している。そして、HWHの効果測定のために、尖閣諸島

の問題に対する参加者の態度を調査してはどうかと示唆している(#F-7)。実際、2012 年秋、尖閣諸島の問題が浮上し、日中関係に大きな摩擦が生じたときに、私たちはインタビューのため南京を訪れたが、過去の参加メンバーがあちこちから集まり、再会を喜んでくれた。参加者の一人は、「ワークショップに参加してから、私は理性的に問題を扱えるようになりました。非理性的な感情を持っている人とそうでない人を判断できます」(#D-2)、雲南省へ行き、日本軍の蛮行に関する史跡を見て、「もし、このワークショップに参加しなかったら、私は向こうに行ってみて、怒りばかり持って帰っていたかもしれません。ワークショップに参加してから、怒りだけではなく、ヒューマニズムとか、これは中日両国のことだけでなく、人類のことじゃないかなと思うようになったんです」(#D-4)と語っている。

ここにあるのは、被害国と加害国の戦後世代が、HWH のワークショップという文脈において、日常的には心の底に沈んでいるかもしれない破壊された関係性を想起するとともに、それを紡ぎ直そうとする姿であろう。中国の参加者のなかには、このテーマに苦痛や孤立感を感じてきたことを表明するものもあった。「参加する前から、深く深く戦争の苦しみと辛さを感じていました。どこから感じたかという、両親から、両親の両親から感じてきました。それは私まで伝わってきたんです。戦争がもたらしたトラウマが心のなかにたまっていました。でもどうしようもなく、どうやってこの気持ちを変えようか、今まで方法がなかったんです」(#10-57)。本稿では詳細を省略するが、ワークショップ中に共有された参加メンバーたちの物語は、歴史のトラウマが具体的にどのような形で戦後世代に影響を及ぼしているかを実感させるものだった。

ワークショップでは南京虐殺というテーマが設定されていることで、それに関する物語や感情をありのままに表現することが許されている。羅萃萃(2010)は、これまで多くの日本人と交流し、親しい関係を築いてきたが、今回得たものは、これまで経験したことがないものであり、「君子之交淡如水」を予期させるものだったと言う。これは、HWH の第一ステップである「タブーや沈黙を破る」の成果を表すものだろう。すでに指摘したように(村本、2010)、ワークショップへの参加を決意した時点で、参加者は最初の一步を踏み出しており、第二ステップである「お互いを集団としてではなく、一人一人が独自の物語と顔を持つ人間として見る」という出会いのプロセスへと導かれていくのである。

このような出会いは、HWH というワークショップの表舞台で繰り広げられ

ただけではない。日中の参加者が共に食事をしたり、夜の街へ繰り出したりという、いわば裏舞台でも繰り広げられていた。「セミナーが終わり、8日の夜の食事会のとき、最初と違う雰囲気を感じた。国籍の違う若者が親友のように冗談話までしていた。食事会の後、みんな湖の畔でギターを弾きながら、うたを唄ったり、思いを分かち合ったりしていた。別れが迫ってきたとき、寂しい気持ち胸いっぱいになった。この四日間、ワークショップのおかげで互いに心を開き、よく知りあうことが出来たからだと思う。セミナーの終わりに、痛ましい歴史のトラウマから抜け出せ、気分が明るくなった。これまで、みんな友好的な雰囲気ですれ違ってきただけ、礼儀正し過ぎて、間の距離感がずっと存在しているような気がしていた。今の雰囲気はいいスタートではないかと思う」(#11-175)、「セミナーの時間外でも一緒に飲みに行ったり、また最終日の夜、南京師範大学のキャンパス内で缶ビールを飲みながら、一緒に歌を歌ったり…。日本人である私たちのことを『ベストフレンド』だと言ってくれた中国の友達。ともに過ごした4日間は決して忘れることのない、本当に幸せな時間だった(#11-146)」などの感想のなかに、その成果を見ることができるだろう。

4) 国境を越える多様な関係の紡ぎ直しへ

アルマンドは、もともとHWHを「和解の行為 (Acts of Reconciliation)」と呼んでおり (ボルカス、2010、p.91)、「謝罪には癒しの力があると信じている」と言っている (ボルカス、2011、p.45)。ワークショップには、「ごめんなさい」vs「ひどいよ」を交互に言う「台詞の繰り返し」や、皆の前で「私は中国人です」「私は日本人です」と言ってみる「アイデンティティのワーク」が含まれ、2011年のワークショップでは、さらに「椅子のワーク」と「謝罪のワーク」が加えられた。「椅子のワーク」とは、「日本の椅子」「中国の椅子」を向かい合わせて置き、日本人、中国人問わず、椅子に座って集合的な声を代弁するというものであり、それぞれの椅子には「表の声」と「裏の声」が置かれた。このワークでは、政府からの謝罪を要求する中国人に対して、日本人は政府に対する圧倒的無力感に打ちひしがれ、中国人はそれに苛立つという構図が現れた (村本、2011)。

日本政府は謝罪をしていないわけではない。このワークショップも日本政府の助成金を得て実現したものである。世界に向けて英語で発信されている外務省のホームページには、「歴史問題 Q&A」があり、「南京大虐殺」を認め、「日

本は、過去の一時期、植民地支配と侵略により、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えたことを率直に認識し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを常に心に刻みつつ、戦争を二度と繰り返さず、平和国家としての道を歩んでいく決意です」と回答している。それにも関わらず、これを反古にするような一部の政治家や右翼の声が大きく、一般の認識になっていない現状がある。このような状況下で謝罪に焦点があてられるとき、ある意味で参加者間の出会いは困難になるかもしれない。日本からの参加者は、政府を変えない限り、中国の人たちと出会う権利はないように感じてしまうし、中国側の思いを受けて日本へ帰れば、孤立感が増し、それだけ苦しみは大きくなる。

小田（2011）は、HWH のワークが「（中国）国民と（日本）国民との和解」という物語に添って組み立てられており、ナショナリズムを再生産することになるのではないかと批判している。イスラエルの社会心理学者ダン・バル＝オンは、ナチ党员の子孫とホロコースト生存者の子孫との共同ワークを組織するにあたり、あえて「和解」という語を使わず、ドイツ人やユダヤ人という集合的アイデンティティに基づく議論を避け、個人的な物語を互いに語り受容することを通じて、集合的アイデンティティとそれに結びつくステレオタイプを解きほぐしていくという。金丸（2011）もまた、日中間にイメージされる「和解」は「善・悪」や「被害・加害」といった二元論的試行に陥りやすく、対立を激化させるベクトルになりえると指摘している。

幸存者証言や揚子江での追悼式の場面においても日本人側から謝罪のテーマが現れてくるが、笠井の調査によれば、第三世代の若者たちは、年長者が膝をつき深く頭を下げている場面を目の当たりにすると、謝罪を強制されているような居心地の悪さを感じるという。思い起こせば、2007 年、国際会議を準備してくれた先達は、追悼式において「日本からの参加者皆で土下座をしましょう」と呼びかけた。これに違和感を覚えた私は「それぞれが自分の気持ちに素直に追悼すればいいのではないかと主張して認めてもらった経緯がある。実際には、回を重ね日本軍の蛮行を知れば知るほど頭は垂れる一方だったが、それでも上世代の謝罪の姿勢にギャップを感じたのは事実であった。若者世代が感じたという居心地の悪さは、おそらくこれと同種のものだろう。今回、日中の溝よりも世代間の溝を大きく感じるようになったのは興味深いことであった。2011 年の公開プレイバックシアターで見てきたテーマは世代交代であり（村

本、2011)、回を重ねるにつれ、日中問わず「戦争の話を直接聞いたことがない」「自分のなかに歴史のトラウマを感じない」と言う参加者が出てきたことに気づく。

振り返れば、このワークショップを通じて紡ぎ直してきたものは、日中の関係だけではなくた。2007年、私は密かに日本の上世代や男性たちとの関係の紡ぎ直しをしていた。2011年には、国境を越える女性たちとの新たな出会いを経験し(村本、2011)、中国の同世代との出会い直しをも体験した。とくに、一緒にワークした羅萃萃の物語は、時代に翻弄され傷つきながらも必死に生きてきた母を思い支える娘の物語として、まるで自分自身と合わせ鏡のような体験であった。後のインタビューで、羅の母と私の母は偶然、同じ呼び名を持っていたことを知る。不思議な縁を感じるものである。同様に、セミナー開催を通じて育んできた臨床心理学を共有する陶琳瑾や沈喻らとの絆があった。

ある中国の参加者は、上世代のサイコドラマに自分の父親を重ねていた。「このような場面を見て、まるでお父さんの子供時代に見えるようだった。……まるで自分も時空を超えて、お父さんと一緒にその時の辛さを体験し、彼が遭った嘲笑い、その時の不公平を経験したようだった。……今、この場にいる私は、昔理解できなかったことの答えを全てワークショップの中で見つけた。私により教育を受けさせ、彼の子供時代の憧れ、実現できなかった夢を私に果たそうとさせたわけだ。」(#11-173)。おそらく、歴史のトラウマ、すなわち、戦争によって破壊された関係は日中の関係だけではなくたのだ。父と息子、母と娘、男と女、世代と世代など、多くの関係が破壊された。私たちのアイデンティティは多様な関係性のなかでその都度立ち上がっていくものである。

もともと、HWHの魅力は多声性の尊重にあった(村本、2010)。歴史のトラウマによって損傷を受けるのは必ずしも国家や民族の関係性だけではない。小田(2013)は、近代国民国家は、明確な国境線とその中に住む均質な国民とで特徴づけられるが、国境線を引くこと自体が自然の流動的な関係性を人工的かつ暴力的に分断することであり、明確な国境線とそれに対応する国民アイデンティティ自体が関係性の分断として原トラウマ的だと言えるとする。HWHの3番目のステップは、「自分の中の加害者になる可能性に気づく」である。自らが、実は、日常的に加害・被害の錯綜する構造的暴力のなかに身を曝していることに気づきつつ、第4ステップである「深い悲哀」へと進むためには、出来事の背景にある歴史・社会的文脈にも目を向ける必要がある。張(2012)

は、第二次世界大戦後、冷戦体制のもとで二つの勢力が妥協する形で戦後処理が進められ、冷戦体制崩壊後、被害諸国のナショナリズムの高揚により、加害国と被害国との間の歴史問題が一気に顕在化したことを指摘している。さらにそれを利用しようとする勢力もあるだろう。このように外から出会いを妨げたり、影響を及ぼす力をどのように認識していけるのか、あらためて学際的な出会いが求められている。境界を越える多様な関係性を紡ぎ直すことで、一人一人を構成する多様な関係性から立ち上がるアイデンティティを尊重できるところへ向かっていけるといい。

5) 今後に向けて

トラウマからの回復の最終段階は、共世界（commonality）の確立であるとすれば、これには歴史の共通認識が不可欠である。今後、私たちのこの取り組みをどのように継続していけるだろうか。いくつかの計画がある。ひとつは、これまでの取り組みと成果をまとめ、日中英の3ヶ国語で出版することを考えている。日中戦後世代の出会い直しと関係の紡ぎ直しの小さな歴史を広く共有したい。張連紅はこれを留学生や学生の国際交流のテキストとして使うことを提案しているが、これまでやってきたことの成果を最大限有効活用する方法を検討してみたい。

ふたつめは、HWHの手法を少数先鋭のセラピーとしてでなく、一般の歴史・平和教育に応用し広めていくことである。セミナーのたびに中国側から提起されてきた「こんな少ない人数でやっても力が足りない。もっともっと多くの人に働きかけなければ」という声に応えることでもあり、今回、日本の若者の参加がきわめて少なかったことをどのように解決していけるのかということにも関わるものである。日本からのある参加者は、「その疑問とは扱っている問題の大きさに対してあまりにも一見さんお断り感が強いのではないかということである。やはり初めて見る人からは明らかに変なことをしている集団に見えるであろうし、それを中に入ってみればまともなことをしていると分かると言うのはどうなのであろうかということである」（#11-163）と言っているが、多くの若者たちが気軽に入ってこれるように間口を広げる必要性を感じている。2013年9月、最初の試みとして、立命館大学国際平和ミュージアムにて、歴史・平和教育に携わる教師やボランティアのためのワークショップを試みた。今後、立命館大学においてどのような展開ができるか検討中である。学部レベ

ルの平和教育や国際交流、教職課程に導入することができるのではないかと考えている。

三つめは、この出会いのワークショップの継続である。南京師範大学の心理学部でも陶琳瑾を中心にこれを検討してくれている。2013年10月には台北にてこの取り組みを紹介する機会があったが、今後、テーマを拡げて実践していくことも可能かもしれない。

最後になったが、専門的技術はもちろんのこと、ずっと大きな愛と配慮で私たちの歩みを支え続けてきてくれたアルマンド・ボルカスに感謝したい。歴史の大きな深淵に飛び込む勇気を与えてくれたのは、アルマンドへの信頼だった。他の参加者たちにとっても同様であることは、どの参加者感想を見ても明らかである。そして、深い理解のもとで私たちを受け容れ続けてくれた張連紅への感謝は尽きない。「南京を思い起こす：負の遺産を共有財産へ」（張、2011）の信念のもと、彼が南京で日中の大きな懸け橋となり続けていることは間違いない。2013年中秋節、彼は月餅を持ってセミナーを覗きに来てくださった。私たちは家族であるというのがそのメッセージである。その他、歩みをともにしてきた共同研究者や協力者、参加者の皆さんにも感謝を表したい。みなさんの理解と協力を得て、このような舞台設定をもって繰り返し南京を訪問することが可能になったことで、日中の参加者たちがあらためて歴史のトラウマを想起し、関係の紡ぎ直しを大きく前進させることができたことは大きな成果であったと考えられる。

<文献>

張連紅（2010）「トラウマを癒す～日中関係における避けられない課題」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす2009」の記録』

Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. （ジュディス・ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1995）

岩井圭司（1999）「被災地のその後」こころのケアセンター編集『災害とトラウマ』みすず書房

金丸裕一（2011）「戦争史研究の諸問題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす2011」の記録』

Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). *Ethnocultural*

- aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.
- マクファーレン (1999) 「自然災害の長期的転帰」 ころのケアセンター編『災害とトラウマ』 みすず書房
- Muramoto Kuniko (2002) Women's trauma and healing in Japanese culture. Dissertation, the Union Institute
- 村本邦子編著 (2010) 『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』立命館大学人間科学研究所ヒューマンリサーチ 19 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)
- 村本邦子編著 (2012) 『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 3 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 村本邦子編著 (2012) 『人間科学と平和教育～体験の心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 5 (<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)
- 小田博志 (2011) 「南京と和解～歴史の深淵に橋をかける」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- 小田博志 (2012) 「物語のタペストリー」『人間科学と平和教育～体験の心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所
- 小田博志 (2013) 2013 年 11 月 12 日付け著者宛電子メール
- Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.
- ボルカス, A. (2010) 「南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- ボルカス, A. (2011) 「『南京を思い起こす 2011』ファシリテーターとしてのリフレクシオン」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- Watters, E. (2010) Crazy like us: Globalization of the American psyche. NY: Sterling Lord Literistic. (イーサン・ウォッターズ著、阿部宏美訳、『クレイジー・ライク・

※引用は過去の報告書からであり、たとえば「(#10-55)」と記載されたものは 2010 年版のセミナー報告書 55 頁を意味する。「(#A-10)」はインタビューデータ A の 10 頁を示している。

2-2 「回忆南京」7 年的成果和今后的展望 ～与历史心理创伤相识的工作坊 HWH ～

立命馆大学 村本邦子

1. 经过

作为临床心理士，在与虐待，性暴力，家暴等的暴力受害者的接触中，追溯一个个案例的话，父母那一代的暴力会出现在我们眼前，再往上追溯一代的话，又能看到过去的战争。我认为要切断暴力的世代间连锁，有必要把微观的心理创伤与宏观的社会・历史的记忆相结合进行修复。2007 通过村川治彦，我与 HWH (Healing the Wounds of History) 相识，并为参加南京大屠杀 70 周年纪念的国际会议，第一次拜访了南京。亲眼看到日本军的所为，我感觉这件事与自己也是有关系的，我和同行的日本伙伴一起为牺牲者追悼并向他们谢罪。南京的友人们亲切地接待了我们，而且学生们对我们说“想和日本的年轻人进行交流。如果能承认事实互相了解的话，我们可以成为朋友。下次请一定带立命馆大学的学生们一起过来”。那时我想一定要回应同学们的呼声。

只是我担心一件事，那就是二次创伤。亲眼目睹自己的祖先所作的过于残忍的事实，我们出现了头疼，发烧，呕吐，身体疼痛等身体症状。为了能让日中双方的年轻人安全地会面，我们运用 Armand Volkas 的 HWH 手法，企划了工作坊。作为前阶段，在京都定期开过学习会，并于 2008 年 7 月在京都举办了为期 4 天的和平教育研讨会（IMAGINE21 制作的「地狱的 DECEMBER ～悲伤的南京」上映，以及 Armand Volkas 的 HWH「用身心思考历史心理创伤～亚洲战后世代继承的战争体验」，2009 年 3 月在旧金山召开了 HWH「修理毁坏的桥～直面第二次世界大战后的日本和中国的文化」。也于 2009 年 10 月在南京首次实现了 HWH。

2010 年 10 月在伦敦，2011 年 8 月在苏州，我和笠井绫试着做了相关的发表和工作坊。2011 年 8 月在南京举办了第 2 次 HWH，2012 年在京都召开了 HWH 和国际研讨会，2013 年 9 月在南京举行了第 3 次 HWH。这期间得到立命馆大学的研究经费和文科省的科学研究经费的大力支持，今年是最后一年，期待成果报告。2012 年 9 月到 2013 年 7 月期间，也实施了评价访谈。还在分析的阶段，虽然只是一部分结果，我想汇报一下经过。

2. 破坏关系性的历史心理创伤

2012 年在京都举行的国际研讨会上，从治疗，教育，运动，研究等的观点探讨了能否把我们做过的事总结成一个定义的问题（村本、2012）。小田（2012）提出，每位参加者分享一下自己的，或是与其他参加者的沟通中出现的跨国界或世代的故事，并把互相沟通中作为和平良好的「开端」的故事，像编织锦绣一样编制成「故事集锦」。并且，他对 HWH 包含的「心理创伤假设」也提出了批判，这次的研讨会以接受这个假设的形式，想对心理创伤进行再定义。

实际上，定义心理创伤并非易事。作为正式定义心理创伤的代表，有由美国精神医学学会编制的 DSM（诊断和统计手册），即便如此，以什么为基准来定义心理创伤有很大的变迁。（Muramoto, 2002）。DSM（1952）中，作为「重大精神压力反应」，列举了战斗和市民生活上的破局（火灾、地震、爆炸等），DSM-II（1968）中，作为「成年人生活的调整反应」，列举了抑郁，不被期待地伴有敌意的怀孕，战斗中畏惧的士兵，面对执行死刑的牢犯。最早出现 PTSD 概念的 DSM-III（1980）是以越南归还兵的症状为基准，写道「明显的精神压力是，无论谁都会引发的重要的症候群」，特别规定了心理创伤反应。「Post-Traumatic」这个词，也是把重心放在区分心理创伤的前后，事件和反应之间的明确因果关系。关于造成心理创伤的事件，DSM-III-R（1987）中定义为，除了对生命和身体安全带来深刻的威胁外，「超过人类经验范围的，给谁都带来显著痛苦的事件」。但是，出现了「战斗体验或强奸是超过人类经验范围的事件吗」的议论，所以在 DSM-IV（1994）中阐明「超过人类生活范围的事件」不是必须的，而强调恐怖、威胁、危险的主观认知。但是定义的模糊再次受到批判，现在的 DSM5（2013）中，明确为「遭遇死亡、重伤、性暴力等，或是暴露可能遭遇的事件」，并把附随的症状作为问题来看。

PTSD 概念的成立背后有战争归返兵的问题。20 世纪之后的战争的特征是把一般的市民卷入进来。第一次世界大战中死伤的市民占 5%，而在第二次世界大战中占 50%，越南战争中则超过 80%。这是为了支配社会利用恐怖的结果，标

的不是领土而是人,心理性的战争是中心的要素(Summerfield, 1995)。这样一来,由于战争造成心理创伤的对象不单是归返兵,也有一般的市民。战争是否是超过人类生活范围的事件,能通过社会·文化来决定。

心理创伤的影响不止停留在 PTSD, 也通过分离、抑郁、身心症状等形式表现出来。但也有人指出有文化差异,比如在西方以外的国家,分离和身体症状很明显(Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996)。批判精神障碍帝国主义化的 Watters (2013), 描写了 2004 年海啸袭击斯里兰卡时,美国的心理创伤治疗师如何灌输欧美的 PTSD 观念。而科伦坡大学的教授们呼吁,要把幸存者的体验当作「心灵的伤痕」,不要把他们当作「心理学的牺牲者」,心理创伤不是大脑自动产生的生理反应,而是传达文化的情报。对于斯里兰卡人来说,心理创伤是毁坏社会关系性的东西,因为体验恐怖痛苦到最后的人,是从社会生活中孤立的人,是在亲戚关系中出现不顺的人。欧美的 PTSD 观念认为,心理创伤引起精神打击,结果引发社会问题,而对于斯里兰卡人来说,在集团中找不到自己的立足之地会引起痛苦,而不是起因于自己的心理问题。

1995 年发生阪神淡路大震灾的日本或许也发生了类似的事情。1997 年、在神户召开的有关灾害和心理创伤的国际研讨会上讨论道,在日本被诊断为 PTSD 的比例非常低(2.5%)。岩井(1999)阐述了原因,他有如下的假设,受到心理创伤的日本人的表象,比起侵入的思考更容易出现身体症状、PTSD 特征的要因在震灾后,并没有产生特别大的影响,一般来说,作为最大的要因是产生无力感和孤立感,但因为是在大都市发生的震灾,受灾者整体得到援助因此有一体感。另外,MacFarlane (1999) 也指出,使用的心理评估不恰当。

实际上,跨文化从事虐待,家暴,性暴力等的女权论者们也提出了,要提防把心理创伤与作为精神障碍的 PTSD 相结合从个人的心理问题来看待。我自身在长年从事心理创伤的临床工作中也对心理创伤概念产生了纠结的情绪。日本在战后的重建上只着眼于经济的复兴,结果导致泡沫经济爆发,迎来了经济萧条和抑郁的时代。1995 年以后,心理创伤, PTSD 概念被引入,加速了心理主义化。这是危险的信号。如果个人只关注被封闭的自我世界,很难注意到,社会被为了个人利益的某些人所摆布。

因此我们从地区社会的心理创伤,历史心理创伤的概念来看,这是因为考虑到个人的心灵可能在社会或历史中敞开。2009 年、在南京实施第一次 HWH 时,我认为「集团引起的暴力会破坏地区社会,并带来消极的打击。如果这样放置的话,这种打击会超越时代被继承,可能会使社会整体产生扭曲」(村本、2010)。暴力

不是物理的破坏，会带来关系性的破坏。所以心理创伤伴随着恐怖体验的压倒性无力感和孤立无援感。历史的暴力，会破坏加害方和受害方的关系。经历过不能共有的非人类体验的人，会破坏与他人的关系，与社会的关系，与世界的关系。Herman（1992）指出，恢复心理创伤的最终阶段是恢复「共世界（commonality）」。

综上所述，我们把暴力对关系性带来的消极打击称为心理创伤。心理创伤的恢复，或是历史心理创伤的修复，需要把被破坏的各种关系重新连接起来。我认为，为了切断暴力的世代间连锁，有必要把被断开的个人与社会或历史重新连接起来。因此要重申，我们立志于把被南京大屠杀这样的历史暴力破坏的关系重新建立起来，为此开展工作坊。

3. 被忆起的历史心理创伤和关系的重建

通过以「回忆南京」为主题的工作坊，历史心理创伤对战后世代造成的影响浮出了水面。最常见的是，中方的不信任感，疑惑，愤怒；日方的不安，恐惧，紧张。这些否定的情绪，总是与回顾工作坊时肯定的变化以对应的方式表现出来。比如，在 2009 年 HWH 最后一天的回顾中，中国的战后世代这样说道，“之前我一直以为日中两国可能不能和解，但是通过这次的活动，我看到了日中两国和解的希望”（#10-55）※、“以前我对日本没有好感。但是在和日本朋友交流几个小时后，我感觉，日本人中，心地善良的人也有很多”（#10-56）。

日本的战后世代这样说道，“来之前我感觉很不安，不知道会发生什么。在我完全不了解的中国，不知道中国人是怎样的。而现在感觉到的是，与之前完全相反的心情，非常安逸。我想这是因为认识了大家”（#10-58），“说实话，来南京之前感觉很可怕。我在澳大利亚留学的时候，认识了一位 15 岁的中国男孩，他说讨厌日本人，还被他骂到滚回去，那件事给我留下了阴影。所以这次来南京我感觉很害怕，想是不是还会被骂，但是，即便是日本做出了那么悲惨的事，中国人还是敞开了心扉欢迎了我，非常感谢。走在大街上，人们也很和气，长相也和日本人没有什么两样，让我感觉很温暖”（#10-60）。

张连红（2010）通过观看现代的体育比赛，消费者调查，国民情绪问卷调查等发现，70 年前的战争留下了深刻的影响，每当报道回忆日本军国主义事件时，就会引发部分中国人民的抵制日货或游行等的强烈反应，他指出这也是心理创伤留下的痕迹。并且，为测试 HWH 的效果，想调查一下参加者对钓鱼岛问题的态度（#F-7）。实际上，2012 年的秋天、因钓鱼岛问题日中关系发生巨大摩擦的时候，我们为访谈来到了南京，以前的参加者们也从四面八方聚集起来，大家都很高兴。

其中一位参加者这样说道，“参加完工作坊后我更理性的看待问题了，能判断非理性情绪的人和理性的人”（#D-2），这位参加者去了云南省，参观了日本军蛮行时的史迹，说道“如果我没参加这个工作坊，去到那边后，我也许会带着愤怒的情绪回来。但是参加了工作坊后，不单是愤怒的心情，而是能从人道主义的角度想，这不仅是日中两国的事，我觉得是人类共同的事”（#D-4）。

这些受害国和加害国的战后世代，通过 HWH 的工作坊，想起了在日常生活中沉浸在心底的破坏关系，但同时又在重建这个关系。在中国的参加者中，也有对这个课题感到痛苦和孤立的人。“一直以来我都深深地感受着战争带来的痛苦。这是从父母，父母的父母那里感受到的。并且这种痛苦也传给了我。战争带来的心理创伤一直积压在心底，我没办法，也不知道该怎样改变这样的心情，到现在为止没有任何方法”（#10-57）。这里省略一些详细的内容，但是在工作坊中，与我们共同分享的参加者们的故事，让我深深感到历史心理创伤以怎样具体的方式影响着战后世代。

工作坊以南京大屠杀为主题，所以也就允许有关的故事，情绪如实的表达出来。罗萃萃（2010）说道，至今为止跟很多的日本人有过交流，也构建了亲密的关系，但是这次体会到了没有过的感受，正如「君子之交淡如水」。这也是 HWH 第一阶段「打破禁忌和沉默」的成果。综上所述（村本、2010），下决心参加工作坊本身就是参加者迈出了最初的第一步，第二步就是「彼此不是以集团，而是以拥有各自的故事和面孔的个人来认识对方」。

这样的相知并不只在 HWH 工作坊这个舞台上展开，日中的参加者们还一起吃饭，一起去夜市。“研讨会结束，8 号晚上的宴会上，我感到了跟刚开始时不同的气氛。国籍不同的年轻人们像亲密的友人一样开着玩笑。宴会后，大家在湖边，谈着吉他唱着歌，分享着彼此的心情。离别临近时，寂寞的心情涌现心头。这是因为 4 天的时间，通过工作坊我们互相敞开了心扉，加深了彼此的了解。研究会结束时，从痛楚的历史心理创伤中走出，心情也豁然开朗了。会中，大家虽然在友好的氛围中交谈，但是太彬彬有礼，之间一直有距离感。而现在的气氛是个很好的开始”（#11-175），“研讨会以外的时间大家也一起喝酒，而且最后一天的晚上，在南京师范大学的校区里我们一边喝着易拉罐啤酒一边唱歌…。中国的朋友们对我们日本人说，是『最好的朋友』。一起度过的 4 天是绝对不会忘记的，这是真正幸福的时光”（#11-146）。等等的感想中，我看到了成果。

4. 超越国界多样的关系重建

Armand 称 HWH 是「和解的行为 (Acts of Reconciliation)」(Voulkos, 2010, p. 91), 说「相信谢罪有治愈的能力」(Voulkos, 2011, p. 45)。工作坊中包含了, 互相说「对不起」vs「太过分了」的「重复台词」, 在大家面前说「我是中国人」「我是日本人」的「自我同一性的工作」, 在 2011 年的工作坊中又增加了「椅子工作」和「谢罪工作」。「椅子工作」是把「日本的椅子」「中国的椅子」相对放置, 不分日本人或是中国人, 参加者坐在椅子上代言, 并且每把椅子又设置「表面的声音」和「内心的声音」。在这个工作中, 对要求政府谢罪的中国人, 日本人面对政府的无力感被打垮, 中国人表现出很着急的样子(村本、2011)。

日本政府并不是没有谢罪。这个工作坊也是因为日本政府的助成金才得以实现。通过英语向世界发信的外务省的网页上「历史问题 Q&A」中, 就承认「南京大屠杀」的事实, 并回答道, 「我们坦诚地认识到日本在过去的一段时期, 由于对殖民地的支配和侵略, 给很多国家, 特别是对亚洲诸多国家的人民带来了巨大的损失和痛苦, 痛切地反省和发自内心的歉意, 时刻牢记于心, 下定决心绝不再发动战争, 今后走和平国家的道路」。即便如此, 一部分政治家和右翼的反抗声音强烈, 使得这样的回答还没有成为一般的认识。这种状况下把焦点对准谢罪的话, 我们两国的参加者要见面可能就困难了。日本的参加者感觉, 如果政府不发生改变的话, 就没有与中国人见面的权利, 而接纳了中国方面的想法回到日本的话, 又会增加孤立感, 痛苦也就变大了。

小田(2011)批判, HWH 的工作是按「(中国)国民和(日本)国民的和解」的故事构成的, 这样会再产生民族主义。以色列的社会心理学者 Dan・Baru = On (日语读音) 在组织德国国社党党员的子孙和大屠杀幸存者子孙的共同工作时, 特意不使用「和解」这个词, 避开德国人或犹太人谈论集合的自我同一性, 而是通过谈论各自的故事互相接纳, 来消除集合的自我同一性和与其相关连的固有模式。金丸(2011)也指出, 日中之间被意象的「和解」容易陷入「善·恶」或「受害·加害」的二元论试行, 也是容易成为激化对立的矢。

幸存者证言或是在扬子江的追悼式上, 出现了日本人谢罪的主题, 但是根据笠井的调查, 第三世代的年轻人看到年长者下跪低头的场面, 有种被强迫谢罪的不舒服的感觉。回想起来, 2007 年准备国际会议的老师们呼吁, 在追悼会上「让日本来的参加者都下跪」。对此感觉不谐调的我主张「每个人用坦诚的心情来追悼就好」, 这个想法得到大家的赞成。实际上, 次数越多, 对日本军的蛮行了解

的越多，头就低得更深，但是对上一代人的谢罪感到有隔阂也是事实。年轻世代感到的不舒服，或许也是同样的心情吧。此次，比起日中的鸿沟感觉世代的鸿沟更大，也是相当有意义的。在2011年公开的即兴演剧中看到了世代替换的主题（村本、2011），随着次数增多，我注意到不论日方还是中方，有的参加者说「没有直接听说过战争的事」「没有感觉到自己有历史心理创伤」。

回头想想，通过这个工作坊重建的不仅是日中的关系。2007年我暗自重建了日本上世代和男性们的关系，2011年经历了和跨国界女性们的相遇（村本、2011），也体验了和中国同世代的重新认识。特别是一起工作的罗萃萃讲述的，女儿支撑着被时代愚弄伤痕累累但拼命活下来的母亲的故事，就好像是我自己的经历的写照。之后的访谈中偶然知道，罗的母亲和我的母亲是同名，这真是不可思议的缘分。而且，通过研讨会的举办，也加深了与同样是临床心理学专业的陶琳瑾和沈喻等之间的纽带。

一位中国的参加者在上世代的心理剧中看到了自己父亲的影子。他这样说道“看到这样的场面，我仿佛看到了父亲的孩童世代。……好像自己也穿越了时空，和父亲一起体验那时的艰辛，经历他所遭遇的嘲笑，和不公。……此时此刻通过工作坊，我找到了以前不能理解的一些事情的答案。（父亲）让我受到良好的教育，是让我来实现他儿时的憧憬，完成他不能实现的梦想”（#11-173）。或许，历史心理创伤，也就是由于战争被破坏的关系，不只是日中的关系。父亲和儿子，母亲和女儿，男人和女人，世代和世代等，很多的关系被破坏了。我们的自我同一性在多样的关系中一次又一次的建立起来。

本来，HWH的魅力是尊重多声性（村本、2010）。历史心理创伤带来的损伤，一定不只是国家或民族的关系。小田（2013）阐述道，近代国民国家的特征是，明确的国界线和居住在里面的均质的国民，但是划分国界线本身就是对自然的流动关系进行了人工的或是暴力的分割，这种明确的国界线和与其对应的国民自我同一性本身就是关系性的分割，可以说是原心理创伤。HWH的第3阶段是，「注意到自己可能变成加害者」。注意到自己的日常生活可能置身于加害·受害的错综的构造暴力中，并为了进入到第4阶段「深度的悲哀」，我们有必要知道事件背后的历史·社会的文脉。张（2012）指出，第二次世界大战之后，在冷战体制下，两大势力以妥协的形式进行战后处理，冷战体制崩溃后，受害诸国高扬民族主义，使得加害国和受害国之间的历史问题一下子表露出来。也有想要利用这种关系的势力。像这样防止外界的进入，怎样认识这样的影响力，还需要跨学科的研究。但愿在跨越国界重建起来的多样关系下，能尊重从构成个人的多样关系建立自我同一性。

5. 今后的展望

在心理创伤的恢复最终阶段，要确立共世界（commonality），对历史的共通认识是不可缺的。今后，我们的工作该如何继续下去。我有几个计划。第一，总结至今的努力和成果，并以日中英3国语言出版。想把日中战后世代的重新相识，和重建的关系，这样的小历史推广开来共同分享。张连红提议把出版物作为留学生或是学生国际交流的教科书来使用，我也想探讨最大限度的有效活用至今的成果的方法。

第二，不是少数先锋的咨询师会使用 HWH 的手法，把它应用于一般的历史·和平教育进行普及。响应每次研讨会中国方面提出的“这么少的人做还是力量不足，要发动更多的人”的呼声，探讨这次参加的日本年轻人过少的问题如何解决。日本的一位参加者这样说道，“问题是这个组织的工作一看就太容易被拒绝。外人第一眼看上去有种这个组织做的事有些不同寻常，但如果走进来知道了做的是正儿八经的事的话，说法可能不一样”，我觉得有必要扩大范围让更多的年轻人容易走进来。作为最初的尝试，2013年9月，在立命馆大学国际和平博物馆，对从事历史·和平教育的教师和志愿者们做了工作坊。今后立命馆大学还会有怎样的活动还在探讨中，我在考虑能不能把它导入学部的和平教育，国际交流的教职课程。

第三，持续工作坊。在师范大学心理学部以陶琳瑾为首的老师们也在讨论这个话题。2013年10月在台北有机会介绍了我们的工作，今后有可能把扩展课题落实到实践上。

最后，要感谢不单拥有专业的技术，而且一直用伟大的爱和关怀支撑我们每一步前行的 Armand Volkas。是因为对 Armand Volkas 的信任我才能有投入到历史深渊中的勇气。看到大家的感想就知道其他的参加者们也同样如此。并且也要感谢理解我们并直接接纳我们的张连红。在「回忆南京：把负的遗产转化为共有财产」（张、2011）的信念下，他矢志不渝地在南京为日中搭建着一座大的桥梁。2013年中秋节，他还拿着月饼来研讨会看望我们。这表示我们是一家人。另外，也要感谢一路走来的共同研究者，协助者，参加者们。因为得到了大家的理解和协助，我们才能有这样的舞台，能一次又一次的拜访南京，也才能有日中的参加者回忆起历史心理创伤，为重新构建关系大步向前。我觉得收获的成果很大。

<文献>

张连红（2010）「治愈心理创伤～日中关系不能逃避的课题」『由于战争产生的心理创伤世

代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录」

Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (Herman, J. L. 著、中井久夫译『心理外伤和恢复』MISUZU 书房、1995)

岩井圭司 (1999)「受灾地区的后来」心理援助中心编辑『灾害和心理创伤』MISUZU 书房

金丸裕一 (2011)「战争史研究的诸问题」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』

Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). Ethnocultural aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.

MacFarlane (1999)「自然灾害的长期转归」心理援助中心编辑『灾害和心理创伤』MISUZU 书房

Muramoto Kuniko (2002) Women's trauma and healing in Japanese culture. dissertation
The Union Institute

村本邦子 (2010)「由于战争加害产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的尝试」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
(http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)

村本邦子 (2011)「续・历史心理创伤和修复和解的尝试」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』
(<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)

村本邦子 (2012)「国际研讨会・工作坊『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』～HWH 的展望」『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』立命馆大学人间科学研究所
(<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)

小田博志 (2011)「与南京和解～在历史的深渊上架桥梁」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』

小田博志 (2012)「故事集锦」『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』立命馆大学人间科学研究所

小田博志 (2013) 2013 年 11 月 12 日发给著者的电子邮件

Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.

- Volkas, A. (2010) 「共同面对南京悲剧历史的日中文化」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
- Volkas, A. (2011) 「『回忆南京 2011』作为 Facilitator 的精神恢复」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
- Watters, E. (2010) *Crazy like us: Globalization of the American psyche*. NY: Sterling Lord Literistic. (Watters, E. 著、阿部宏美译、『Crazy・like・American ～心病怎样输出』纪伊国屋书店 2013)

※引用了过去的报告书，比如「(#10-55)」是指 2010 年版的研讨报告书 55 页。「(#A-10)」是指访谈数据 A 的第 10 页。

2-3 “Remembering Nanjing” Results from the last 7 years and our future plans HWH: A workshop focused on building new relations through examining history and its traumas

Ritsumeikan University, Kuniko Muramoto

1. Sequence of events

As a clinical psychotherapist working with victims of violence, such as domestic violence and sexual violence, I have come to realize that much of the problem can be traced back to the parent's generation and even further back to the grandparent's generation where violence was closely linked to their experiences during the war. In order to prevent violence from being passed down from generation to generation, I found there was a need to work with traumas we carry on both the personal level and a group level, where traumas were linked to our historical and social memory. In 2007, I came in touch with HWH (Healing the Wounds of History) through Haruhiko Murakawa and visited Nanjing for the first time to participate in

an international meeting commemorating the 70th memorial day of the Nanjing Massacre. After personally witnessing the aftermath of what the Japanese Imperial Army had done, I realized that their actions were not unrelated to me, and with my fellow Japanese participants I went on to pay tribute and apologize to all the victims of the Nanjing Massacre. The people of Nanjing welcomed us warmly and the students told us that they “wanted more opportunities to interact with Japanese students. We can be friends if they acknowledge the fact and share the stories. So please bring students from Ritsumeikan University next time you come”. I strongly felt the need to respond to their request.

I had one worry: secondary traumatization. When we confronted the cold-hearted actions of our ancestors many of us had physical reactions such as headaches, fever, nausea, and aches in our body. In order for the younger generations of both Chinese and Japanese to meet in a safe environment, we decided to plan a workshop with Armand Volkas and his techniques known as HWH. As a preliminary step we had many small study sessions in Kyoto, a 4-day peace education program (watching the play “Hell in December ~Sorrow in Nanjing~” by Imagine 21 and a HWH session facilitated by Armand called “Thinking about historical trauma with both your mind and body ~The War experiences in Asia that are passed down to the younger generation~”) in Kyoto during July, 2008, and a HWH session, “Rebuilding the broken bridge ~Japanese and Chinese cultures confronting the aftermath of WWII~” in San Francisco during March, 2009. This all led to the first HWH session to be held in Nanjing during October 2009.

Along with Aya Kasai we had presentations and trial workshops in Toronto during October of 2010 and in Suzhou during August of 2011, which explained and modeled our plans in Nanjing. In 2011, we had our 2nd session of HWH in Nanjing, in 2012, a HWH session in Kyoto and an international symposium, and during September of 2013 we held our 3rd session of HWH in Nanjing. During this time, we were given research grants from Ritsumeikan University and scientific research grants from the Ministry of Education and are therefore responsible for presenting a final report by the

end of this year. For the purpose of our evaluation from these two sources, we worked on interviewing people who attended the workshop between September, 2012 and July, 2013. Although we are still in the midst of analyzing our work, we would like to report back on our progress so far.

2. Historical trauma as a reason for broken connections

In 2012, during the international symposium held in Kyoto, we questioned how to define the work we were doing from different points of views such as, therapy, education, social movement, and research (Muramoto, 2012). Oda (2012) proposed that it was research in which each participant, through their interaction with him/herself and other participants, found stories that had no borders or generation boundaries, which led to the development of peace and positive superstition, which then led to the braiding of polyphonic voices, and to its final representation as “a tapestry of stories”. Also there was criticism against the “trauma hypothesis” that HWH inherently contained, so this time I would like to redefine the word trauma considering all of these factors.

In reality, it is not easy to define the word trauma. The American Psychiatric Association created an official definition for the word in the DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) but even this definition can vary greatly depending on the context (Muramoto, 2002). The first diagnostic and statistical manual that the American Psychiatric Association published included trauma in the category “Gross Stress Reaction” (APA, 1952) and in the DSM-II (1968), GSR was placed into the category, Adjustment Reaction of Adult Life, with three short examples. These were (1) an unwanted pregnancy accompanied by depression and hostility; (2) a frightened soldier in combat; and (3) a prisoner facing execution in a death penalty case. In 1980, Post Traumatic Stress Disorder (PTSD) emerged in the DSM-III for the first time. As a result of psychiatric evaluation and treatment of Vietnam veterans, specificity about reactions to trauma reappeared. The prime criterion of diagnostic consideration was “existence of a recognizable stressor that would evoke significant symptoms

of distress in almost everyone". The important changes were that stress disorders were no longer restricted to acute responses in healthy individuals and that the new diagnosis PTSD was placed in the anxiety disorders section (Brett, 1996). The words "post-traumatic" indicate that there is a change in state of well-being +after injury (Wilson, 1995). The revisions were made to sophisticate language, meaning, and specificity of reactions to trauma in DSM-III-R (1987). The stressor criteria characterized traumatic events as being, "outside the range of human experience that would be markedly distressing to almost anyone". DSM-IV (1994) reflects minor changes from DSM-III-R, but the most significant change was made in the definition of the traumatic event. The new criteria no longer required that an event is infrequent, unusual, or outside of a mythical human norm of experience and the more subjective perceptions of fear, threat, and risk to well-being are stressed. In the most recent DSM V (2013) trauma is more narrowly defined as, "being involved in death, injury, or sexual violence or otherwise being exposed to these circumstances," and there is more focus on the symptoms that are a part of trauma.

The worry for and reemergence of PTSD came from the problem of war veterans. The wars since the 20th century were characterized by the involvement of civilian populations. In WWI only 5% of the death came from civilians, however, in WWII this number went up to 50% and in the Vietnam War it exceeded 80%. This was the result that the primary method to control societies became fear and the main target in the war became civilians and psychological warfare rather than land (Summerfield, 1995). Thus, trauma through war not only became a problem for war veterans but also for the civilian population. Whether or not war exceeds actions taken during normative human lifestyle should be determined by each culture and society.

Concerning the reactions to this worry for PTSD, we must consider that the symptoms of trauma are not only limited to PTSD but also include dissociation, depression, and physical reactions. People also point out the differences between cultures and how excluding Western cultures, dissociation and physical reactions are prominent amongst patients of

trauma (Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996). Watters (2013) who argues against imperializing mental disorders describes how in 2004 when the tsunami hit Sri Lanka, European and American trauma therapists overly emphasized the PTSD view. The professors from Colombo University argued that it was not right to round up the survivors as “psychological victims” and simplify their experiences as a “mental hurt”. They further argued that trauma is not an automatic reaction forged in the brain and that it was a way to pass down culture. For Sri Lankans, the trauma was an event that destroyed social connections and people that continue to suffer from fearful experiences were usually isolated from society and were not able to get along with their family. According to the PTSD view of Europeans and Americans, they tend to believe that trauma triggered the psychological damage and led to social problems, but for Sri Lankans, not being able to find their spot amongst a group is what brings torment and is not exactly caused by their own psychological problems.

The Great Hanshin earthquake in 1995 in Japan is another example as similar situations could be seen amongst the victims of the earthquake. In Kobe during 1997, there was an international symposium on natural disasters and trauma, where the low percentage of patients diagnosed as PTSD was debated. Iwai (1999) hypothesized that the reasons for these low numbers were the following: traumatized Japanese showed symptoms that were physical rather than psychological, the unique characteristics of PTSD did not greatly affect the population after the earthquake, normally the reasons for being diagnosed as having PTSD come from feelings of powerlessness and isolation but since this earthquake hit a major city, the victims had a sense of unity and the clients felt as though they were being supported by everyone. On the other hand, McFaren (1999) commented on this subject saying that the assessment used in this case was inappropriate.

The caution against linking trauma with PTSD, a mental disorder, and a defect in the individual's mind is a subject that crosses cultural borders and has been brought to the attention of society by feminists who work with DV, sexual violence, and assaults. As a psychotherapist who has been

working with trauma, I too, have struggled with the concept of trauma. After losing in WWII, Japan has focused the reconstruction of its nation on economic prosperity, which led to the crash of the economic bubble and to an age of economic depression (economic stagnation and depression). After 1995, the concept of trauma and PTSD were implemented in clinical psychology and the ideology of psychologism is quickly becoming popular. This is a dangerous sign as if we focus too much on the inner and outer world of each individual, we will not be able to realize when society is driven in a certain direction for the benefits of a certain individual.

This is why we chose to focus on the concept of shared trauma within a community or trauma embedded in history. We believed that this would enable us to open up the emotions and thoughts of individuals to society and history. In 2009, when we first implemented HWH in Nanjing, we focused on how; “violence that occurs at a mass scale will destroy communities and leave a negative impact on how a community should be. If this impact is left as is, it will be transferred beyond generations and will have the possibility to distort a whole society” (Muramoto, 2010). Violence not only implies physical destruction but also the destruction of relations. The reason that a trauma becomes a trauma comes from the utmost powerlessness and isolation triggered by an overwhelming experience of fear. Especially in violence related with historical events, there are often times a broken relation between the victims and the perpetrators. For those who have experienced inhumane actions that cannot be shared with others, their relationship with others, the society, and the world would be destroyed. Herman (1992) places “commonality” as the final stage of recovery from trauma.

In this way, I will define trauma as the negative impact that violence brings to relationships. Recovering from trauma or restoring historical trauma is mainly based on rebuilding the many relationships that were destroyed by the certain experience. In order to prevent violence from being passed down from generation to generation, there is a need to rebuild the relation between the isolated individual and society and history. Therefore,

our efforts to work with the Nanjing Massacre can be redefined as a workshop that provided an opportunity for people to meet and rebuild relations destroyed by historical violence.

3. Embracing history and rebuilding relations

As we worked with the theme of our workshop “Remembering Nanjing”, we could see the clear effect that historical trauma had on the post-war generation. The emotions most frequently seen amongst this generation of Chinese was distrust, suspicion, and anger and the most frequently seen amongst the Japanese was anxiety, fear, and nervousness. These negative emotions were always presented in comparison to the positive changes that people perceived in their reflection of the workshop. For example, during the reflection on the last day of HWH in 2009, the Chinese post-war generation said that, “Until now, I was not sure if reconciliation was possible between Japan and China. However, after participating in HWH I began to see hope in of reconciliation between the two countries” (#10-55) ※, “until now I never had a good impression of Japan. However, after hours of interacting with Japanese people I realized that amongst them, there were many kind-hearted people too” (#10-56).

The Japanese post-war generation expressed their thoughts by saying things such as, “before I came here I felt very anxious as I was going to China, a land I was unfamiliar with, and had no idea how the Chinese people were going to treat me. However, right now I feel the complete opposite and am feeling very relaxed. I believe this change was caused by the many people I met during my time in China” (#10-58), and “I was honestly very scared before coming to Nanjing. When I was studying abroad in Australia, I met a 15-year-old Chinese boy who told me he disliked Japanese people, verbally abused me, and told me to go home. I think this experience had become a trauma for me and was a big reason for my fear in coming to Nanjing, as I thought I would be abused again. I would like to thank the Chinese people as, despite all the atrocities that Japan committed, the Chinese people welcomed us warmly and when we went out into the city,

the people there were also very welcoming and this filled me with warmth and happiness" (#10-60).

Professor Zhang (2010) pointed out that the after-effects of the war 70 years ago could also be seen in the modern age in situations such as watching sports, consumer research, and civilian questionnaires. He also pointed out how the symptoms of historical trauma could be seen in situations such as radical Chinese boycotts and demonstrations every time there are events that portray Japanese imperialism. As a measurement for the effects of HWH he suggested that we take a survey revealing the participants' emotions on the problem of the Senkaku islands. In reality, when much friction reemerged between the two countries because of the Senkaku islands during the fall of 2012, we visited Nanjing to interview the people there and at this time many of the past participants rejoiced at seeing each other. One of the participants even said that, "after participating in the workshop I have been able to look at problems more objectively. I am able to tell apart those with a rational mind and those who without" (#D-2), After going to the Yuunan province and observing the barbaric actions of the Japanese Imperial army one participant replied saying, "if I had not participated in this workshop, I probably would have gone to China and left with a feeling of anger. After I participated in the workshop I was taught not to be angry at the Chinese and learned more about humanism and that this sort of problem not only revolved around Japanese-Chinese relations but around humanity in general" (#D-4).

What we have here is an example of how through the context of HWH, the post-war generation of both the perpetrating country and the victimized country discovered emotions and destroyed relations that would otherwise remain unrevealed, and made an effort to rebuild them. Amongst the Chinese participants there were many who expressed emotions of uneasiness and isolation when dealing with this theme. "Even before participating in this event, I had been feeling a deep sense of pain and distress concerning the war, as these were the emotions that could be perceived from my parents and grandparents. The traumas that came from

the war were stored inside of me as well. However, there was no way in which I could deal with these emotions thus far“ (#10-57). In this manuscript I leave out some details, but during the workshop it was possible to perceive the specific ways in which historical trauma has been passed down and affected the post-war generation.

In this workshop we worked with the theme of the Nanjing Massacre and therefore participants had the freedom to express stories and emotions that were related to this theme. Luo Cuicui (2010) had previously interacted with and befriended many Japanese people, but what she gained in her time during this workshop was something she had never experienced and was an experience that foreshadowed the Chinese proverb, “a hedge between keeps friendship green”. Her experience is the result of the first step in HWH “breaking silence and taboos”. As I pointed out before (Muramoto 2010), the participants have taken their first step forward when they made the decision to participate in the workshop and this leads to the second step, “not looking at each other as a group but as individuals who all have different stories and personalities”, which is a process that focuses on meeting each other.

This sort of encounter was not only limited to the time that the actual workshop was going on but also happened at times after the actual workshop was over and the Japanese and Chinese participants had meals together or went out into the city at night. The results of these sort of encounters can be seen from the following thoughts of the participants: “After the seminar was over and we went to the dinner party on the 8th, the atmosphere was very different compared to when everyone first met. Young people of different nationalities were talking and even joking around with each other as though they were best friends. After the dinner party we all gathered at the ridge by the lake to sing, play the guitar, and talk to each other about our feelings on the workshop. When the time for goodbyes was drawing near I was filled with a sense of loneliness. I think this was because I was able to really open up and get to know everyone during the past 4 days of the workshop. At the end of the workshop I was much more optimistic as

I was able to escape the pain of historical trauma. Until now, I felt that although we had a friendly relationship we were still a bit too polite with each other and that this left a little bit of awkwardness. I feel that the relationship we have now is an ideal starting point" (#11-175), and "Even in the time outside of the seminar we would go out drinking together and on the last night we walked around Nanjing Normal University with beers in our hands and sang together... My Chinese friends called us Japanese participants 'best friends.' The four days that I spent with them will be a time of happiness that I will never forget" (#11-146).

4. Crossing borders and rebuilding various relationships

Armand originally called HWH "acts of reconciliation" (Volkas, 2010, p.91), and said that, "I believe apologies have the power to heal" (Volkas, 2010, p.45). The workshop included activities such as "Repeating lines" where participants took turns reciting the lines, "I'm sorry" and "that hurt me" and work dealing with identity where participants stood in front of the group saying "I'm Japanese" or "I'm Chinese". In addition to these activities, in the 2011 workshop we added activities such as "work using chairs" and "work using apologies". In "work using chairs" we would place two chairs facing each other and label them as a "Japanese chair" and a "Chinese chair" and have participants, regardless of ethnicity, sit in the chairs to speak on behalf of the collective voice of the two sides and put additional chairs behind the original two to represent the actual voiced opinions and the unexpressed voices. From this work the irritation of the Chinese became apparent, as they were demanding an apology from the Japanese government and the Japanese were distraught by a sense of powerlessness against their own government (Muramoto, 2011).

It is not that the Japanese government did not apologize. Even this workshop was an event that was feasible only with the grant given by the Japanese government. In the English written portion of "Historical Issues Q&A" on the Ministry of Foreign Relations homepage, they accept the "Nanjing Massacre" as a fact and it is written that, "Japan candidly

acknowledges that during a certain period in its history, Japan, through its colonial rule and aggression, caused tremendous damage and suffering to the people of many countries, particularly to those of Asian nations, and holds a firm resolve to never repeat war again and to advance the path of a peaceful nation with feelings of deep remorse and heartfelt apology always engraved in mind.” Despite this, the voice of certain politicians and right-winged activists that deny the Nanjing Massacre seems to be reflected so much more, causing this understanding and acceptance to be under recognized by the general public. Under these sorts of circumstances it would be hard for participants to attend a workshop that puts a focus on interacting and apologizing of the victims and perpetrators. For the participants from Japan it would feel as though they did not have the right to go and see Chinese people unless there is a change in the government and would therefore feel even more isolated and uneasy when they come back to Japan carrying with them the hopes of the Chinese participants.

Oda (2011) criticized the work done in HWH, as he believed it was based on the storyline of, “the reconciliation of Chinese and Japanese civilians” and that it would recreate a strong sense of nationalism. When facilitating work between the descendants of Nazis and the descendants of Holocaust survivors, Israeli social psychologist Dan Bar-On avoided the use of the word “reconciliation” and the idea that there is a collective identity that German and Jewish people hold. Instead he focused on the personal stories of the people on each side, making them easier to accept and by doing so, unraveled the stereotypes that were linked to their collective identity. Kanemaru (2011) also pointed out that the “reconciliation” imagined by both the Chinese and Japanese side often has the danger of falling into a dualistic way of thinking where there is a “good and bad” and “a victim and a perpetrator” and this would lead to further conflict between the two nations.

In situations such as hearing the stories of the survivors and having a memorial at the Yangtze River for the victims, the theme of apology came up from the Japanese side. According to Kasai’s research, during this time the

younger people of the third generation (the generation that experienced the war being the first generation) felt uncomfortable and thought they were being forced to apologize, as they watched elder people go down to their knees and bow their heads down to the ground. Looking back to 2007, I remember how the leaders of the International meeting told everyone, “all the participants should come together and kneel down” at the memorial event. However, I felt that there was something wrong about this and suggested that, “each person should act in whatever way they feel right during the memorial” and my suggestion was approved. In reality, every time we went to Nanjing and realized more and more the barbaric acts that the Japanese Imperial Army committed my head kept sagging downwards, but nonetheless it must also be stated that feeling a gap with the apologetic attitude of the older generation was also an apparent sentiment. The uncomfortable feeling that the younger generation felt must be something similar to this. The fact that the gap between generations was larger than the gap between the Chinese and Japanese relations is an interesting point that became apparent through this process. I also realized that as the theme for the 2011 playback theatre was the alteration of generations (Muramoto, 2011), as the years passed regardless of Chinese or Japanese there were many participants who, “did not directly hear about war experiences” or “did not feel as though they had experienced historical trauma.”

Looking back, the Japanese-Chinese relation was not the only thing that this workshop was able to rebuild. In 2007, I was quietly mending relations with the older generation and with the men of Japan. In 2011, I was able to create new relationships with women who cross borders (Muramoto 2011), and reestablish connections with Chinese people of the same generation. Especially the story of Luo Cuicui, a daughter supporting her mother who desperately found a way to live despite being hurt and used by the events at the time, seemed identical to my own experiences. In a later interview I discovered that her mother and my own mother coincidentally had the same name, making me feel a strange connection. Likewise, I share a bond with Tao Linjin and Shen Yu who work in the same profession of

clinical psychology and we together developed these seminars.

One Chinese participant overlapped the image of his father with an older generation's psychodrama. "Watching this scene was like seeing my father's childhood. [...] It was as if I slipped through time to experience the pain, the ridicule, and the unfairness that he felt. [...] Through this workshop, I was able to find the answers to everything I was unable to understand in the past. My father wanted to give me a good education so he could have me accomplish the dreams and aspirations of his childhood that he was unable to realize himself." (#11-173). Most likely, the traumas of history, hence the relations destroyed by war were not limited to the Japanese-Chinese relations. Many relations, such as those between father and son, mother and daughter, man and woman, and older and younger generations were destroyed. Our identity is built through each of these multitudinous relations.

Since the beginning, the appeal of HWH lay in the consideration for multiple perspectives. The damage dealt by historical traumas is not necessarily limited to the relations between the country and its people. Oda (2013) claims that the modern nation state is characterized by a homogenous population living within a clearly defined border, but to draw a border in itself violently and artificially breaks the natural relationships. Thus a clear border and the identity of the citizens who try to react to this can become the original trauma relating to the destruction of relations. The third step of HWH is to "realize the inner potential of becoming the perpetrator". We need to pay attention to the historical and social context behind these events, in order for us to move on to the fourth step of "deep grief" while we become aware that we are constantly exposed to the structural violence in which perpetration and victimization are complicatedly mixed up. Zhang (2012) points out that after World War II, the resolution of post war issues were processed by two powers in the midst of a cold war compromising with each other, and when the cold war system got collapsed, the victimized country's elevated nationalism resulted in the historical problems between the perpetrating country and the victimized country suddenly become

tangible. In addition there appeared powers, which tried to use this to their advantage. Thus, there is a need for interdisciplinary encounters to reevaluate and understand how larger scale outside influences may interfere personal relations from developing. I hope that by fixing the multitude of relationships that transcends borders, we are able to respect each individual's identity that arises from these relationships.

5. For the future

If the final step of recovering from a trauma is to establish a commonality, this requires a common awareness of history. How will we be able to continue this effort? We have some plans in order to do this. The first is to summarize our efforts and results, and to publish them in Japanese, Chinese, and English. I want to be able to share this small history of the post Sino-Japanese war generation reestablishing connections and mending relationships with as many people as possible. Professor Zhang has proposed using this as a textbook for international students and for students looking to pursue international relations, and I would like to further investigate a method to utilize the results to its maximum potential.

The second is to incorporate the methods used in HWH in general history and peace education instead of limiting them to smaller therapy sessions. This is a response to the voices of the Chinese side claiming, "Such a small number of participants does not make a big impact. We need to have more people involved", while simultaneously addressing the issue faced this time of the lack of younger Japanese participants. One participant from Japan said, "the problem is that in relation to the size of the issue being faced, the sentiment towards having qualified participants is too strong. For those who see it for the first time, the organization appears questionable and it is not convincing to have to tell them that they will understand the importance of the cause if they join." (#11-163) . I feel the need to widen the scope of our work to increase the accessibility for the younger generation. As the first step towards accomplishing this, in September 2013, a workshop for teachers and volunteers of history and peace education was held at the

Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University. I am currently examining how to further develop this at the Ritsumeikan University in the future. Some ideas include incorporating this in the peace education programs and international relations on the undergraduate level and into the teaching curriculum.

The third plan is to continue this workshop, which provides an opportunity for new encounters. The psychology department at the Nanjing Normal University, led by Tao Linjin, is also considering this possibility. In October, 2013 there was an opportunity to introduce this project in Taipei, and we may be able to expand the themes and practice these workshops in the future.

Lastly, I would like to use this opportunity to express my deep gratitude towards Armand Volkas, not only for sharing his expertise, but also for supporting us with great consideration and love. I was given the courage to tackle such a large and deeply rooted historical issue because I trusted Armand greatly. Through reading the participant questionnaires, I can say with confidence that this sentiment is shared by all of the other participants. I also cannot thank 張連紅 enough for his deep understanding and continued acceptance that he showed us. There is no doubt that he continues his role as the bridge between Chinese and Japanese people in accordance with the beliefs expressed in "Remembering Nanjing: Converting the inheritance of wartime loss into a shared fortune" (Zhang 2011). During the mid-autumn festival of 2013, Professor Zhang visited the seminar, bringing with him some moon cakes. This was a message of treating us as a family. I would also like to express my appreciation towards the participants, collaborators, and fellow researchers of this project. I believe that creating such a stage to repeatedly visit Nanjing for the Japanese and Chinese participants to remember the traumas of history, which resulted in a big step towards mending Chinese-Japanese relations, was a great result made possible through everyone's support and understanding.

bibliography

- 張連紅（2010）「トラウマを癒す～日中間係における避けられない課題」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (ジュディス・ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1995)
- 岩井圭司（1999）「被災地のその後」こころのケアセンター編集『災害とトラウマ』みすず書房
- 金丸裕一（2011）「戦争史研究の諸問題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). Ethnocultural aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.
- マクファーレン（1999）「自然災害の長期的転帰」こころのケアセンター編『災害とトラウマ』みすず書房
- Muramoto Kuniko (2002) *Women's trauma and healing in Japanese culture*. Dissertation, the Union Institute
- 村本邦子編著（2010）『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』立命館大学人間科学研究所ヒューマンリサーチ 19 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)
- 村本邦子編著（2012）『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 3 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 村本邦子編著（2012）『人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 5 (<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)
- 小田博志（2011）「南京と和解～歴史の深淵に橋をかける」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- 小田博志（2012）「物語のタペストリー」『人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所
- 小田博志（2013）Oda, H. email message dated on Nov.12th, 2013

Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.

ボルカス, A. (2010) 「南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』

ボルカス, A. (2011) 「『南京を思い起こす 2011』ファシリテーターとしてのリフレクシオン」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』

Watters, E. (2010) *Crazy like us: Globalization of the American psyche*. NY: Sterling Lord Literistic. (イーサン・ウォッターズ著、阿部宏美訳、『クレイジー・ライク・アメリカ～心の病はいかに輸出されたか』紀伊國屋書店 2013)

※ Citations are from past reports. For example, when written "#10-55", it means the citation was taken from page 55 of the seminar report from 2010. "A-10" means page 10 of interview data A.

3-1. Healing Collective Shame and Guilt

Armand Volkas, MFA, MA MFT, RDT/BCT
Associate Professor, California Institute of Integral Studies
Clinical Director, Living Arts Counseling Center
Director, Living Arts Playback Theatre Ensemble
Founder, Healing the Wounds of History: Center for Peacebuilding and the Arts
armandvolkas@gmail.com
www.livingartscenter.org
(510) 527-5577

Auschwitz/Berkinow, Poland

August, 1995

A group of German students piously till the ground of Auschwitz/Berkinow concentration camp with small digging tools. In a trance, as if involved in a religious rite, they silently search for objects that had been taken from Jews before being sent to the gas chamber to be killed. In their haste to hide the evidence of their evil deeds the Nazis had burned down the enormous warehouses filled with valuables confiscated from camp inmates. The fire had burned so intensely that all the metal artifacts had melted and become buried in the ground. Now 50 years later, young Germans take the objects that they find and place them reverentially inside a protected grid, forming a mountain of twisted glasses, broken watches and melted silverware.

The students dig in the ground in search of historical memory and in the process unearth the ghosts of the 3 million dead who haunt this place. They are filled with tremendous grief for their shattered connection with their German identity while trying to honor the Jewish victims in an almost futile attempt to ease their personal and collective pain.

Berkeley, California, March, 2007

A young Turkish woman stands trembling at the microphone before a packed auditorium in Berkeley, California with tears running down her face. There is a hushed silence from the audience in anticipation of her words. Her fear yet determination to speak her truth are evident in her eyes and on her face. In the aftermath of a groundbreaking all-day Healing the Wounds of History workshop with people from the Armenian and Turkish communities, an evening of interactive theatre, dialogue and reflection on the historical legacies of these two cultures is taking place. "My Armenian friends, I have felt your hurt, humiliation and the degradation of your experience of the Armenian Genocide being denied by my people. I cannot speak for my government. But, I am moved to apologize to you on behalf of my ancestors."

Article 301 from the Turkish Penal Code makes it illegal to call what happened to the Armenian people “genocide” and thus insult and dishonor Turkey and the Turkish nation and this woman could be arrested upon her return to her country. The courage of this young Turkish woman was evident to the middle aged Armenian man whose mother, as an orphan and survivor of the Genocide, was forced to march bare-foot through the Der El-Zor Syrian Desert in 1915. Many of the Armenian immigrants to the United States were the descendants of orphans and their memory and inherited pain about the 1.5 million Armenians who were killed spans four generations at this point. The Armenian man weeps in disbelief, “I never thought I would hear an apology from a Turk in my lifetime.”

Nanjing, China, October 2009

The scene is at The Yangtze River at the end of a ritual below a memorial stone commemorating the Nanjing Massacre. A group of eight Japanese women, huddled together in a cluster of support, are weeping and wailing inconsolably in an expression of profound anguish. The pressure behind their grief has built up over the previous four days of a Healing the Wounds of History workshop and now needs release.

Students and teachers from Ritsumeikan University in Kyoto, Japan and their counterparts at Normal University in Nanjing, China had come together to face the legacy of the War. They had visited the Nanjing Massacre Museum, which documents, in graphic detail, the horrifying atrocities and the pain, cruelty and humiliation that their Japanese ancestors had inflicted upon the Chinese during the Sino-Japanese War. They had listened to a Nanjing Massacre survivor share the story of the murder of his family and the rapes he witnessed by Japanese soldiers as a 9 year old boy fighting for his own survival while trying to save his wounded younger sister’s life. Drama therapy and expressive arts therapy were used to help them move through and emotionally face their difficult legacy. The Chinese participants stand silently around the memorial grounds as

witnesses of the agony of the Japanese women. Their tears of grief and shame seem to stream out of their eyes and hearts and into the fast moving current of the Yangtze.

San Francisco, California

November, 2013

As I reflect upon my recent experience facilitating my third Remembering Nanjing Project encounter in September 2013 and my work with intercultural conflict transformation for the past 25 years, I find myself moved by the courage of the descendants of perpetrators in choosing to face their difficult legacies. The vignette snapshots above, drawn from my experiences with German/Jewish, Turkish/Armenian and Japanese/Chinese encounters I have facilitated, illustrate the emotional complexity of this task. Germans, Turks and Japanese cultures are expressing guilt, shame and grief. As a psychotherapist, drama therapist and peacebuilder I have worked with more than 20 cultural conflicts and collective traumas and have developed an arts-based and psychological model to work with these emotional inheritances which I call Healing the Wounds of History (HWH) (Volkas, 2002, 2009, 2010, 2012), (Miller & Volkas, 2007), (Leveton & Volkas, 2010). Having had the opportunity to return to Nanjing three times has brought up important questions and challenges about my work that I would like to reflect upon here.

At the post-workshop symposium held at Normal University in Nanjing in September 2013 and the report by psychotherapist and expressive arts therapist Aya Kasai on the study she conducted of the 2011 Remembering Nanjing project, it became clear to me that while Chinese participants went home from the encounter reporting that they had had transformative experiences, many Japanese participants went home after the 4-day workshop feeling bad. So much shame had come up during the workshop and many Japanese participants felt like they had nowhere to process it.

At the Nanjing Massacre Museum, Japanese participants reported feeling like targets, hoping that they would not be recognized as Japanese so as not to activate Chinese rage. In private communications with me, Japanese attendees expressed their feeling that they did not have the emotional right to express their pain from a legacy of perpetration. They were concerned that their Chinese hosts would be offended. Japanese participants felt like they had to hide their more complex feelings and only speak about them privately.

As an HWH facilitator, I believe that there is no reason to guide people into exploring their personal and collective trauma unless I am able to help them create some meaning out of their experience. I felt like I was letting Japanese participants down in some way. As representatives of their culture in the Nanjing workshop, participants were courageously exploring the dark side of Japanese history, but were possibly not able to get enough emotional and spiritual support from the process.

Looking back on each of the three Remembering Nanjing encounters I had facilitated, I observed that Japanese participants had a resistance to admitting their difficult feelings or taking up too much emotional space. In the face of coming to understand the extent of the enormous trauma their ancestors had perpetrated upon the Chinese, they seemed to get emotionally stuck.

After many years of working with Germans on their legacy of Nazi perpetration, where I was able to help them work through their guilt and shame to a feeling of redemption, I wondered why the Japanese participants were not able to do the same. Perhaps it was the result of the limitations of working as a psychotherapist with a group of 35-40 participants, where it is impossible to address everyone's emotional needs. Was it possibly the fact that I had to rely on Japanese and Chinese interpreters to help me facilitate the subtleties and nuances of a complex emotional process with a large

group and as a result couldn't go very deep and move past barriers to self-revelation. Perhaps it was the cultural values around saving face that prevented Japanese participants from moving into and then through their shame. I began to wonder if, in fact, HWH was the most appropriate tool for this emotionally complex encounter.

Two Layers of HWH: Micro-level and the Macro-Level

The Healing the Wounds of History encounter is conceptualized on two levels. The first level is the psychological one that looks at the meeting between two groups in conflict and addresses the feelings and needs of the participants that are stirred up by the process. The therapeutic goal is a cultural exchange where the participants get to know and humanize each other and integrate their legacy of victimization or perpetration in a personal and regenerative way. The objective is the psychological integration of their experience in the workshop and to gain insight into their inherited collective trauma and how they carry it in their cultural or national identities. The impact is more personal in nature than collective. The goal is for each participant to be stimulated by their experience and absorb it into their lives with a sense of hope and resilience.

The second layer of the encounter is conceptualized as a therapeutic intervention on society. Society itself is the client. The participants in the workshop are seen as carriers of the collective trauma of their people. They are participating in the workshop as representatives of their cultures. So even though the participants may be doing deeply personal work at the micro-level, the HWH therapist is also tuned in to the macro-level and thinking about how this work may ripple out into the society as social change.

In the fall of 2013, everyone involved in the Nanjing Project was aware of the dangerous tension building between China and Japan. It was the elephant in the room. The Chinese people clearly want, or even demand, an

acknowledgement and an apology for countless atrocities committed by the Japanese military during the Sino-Japanese War, but a series of Japanese governments have struggled with shame and denial. It has been my hope since the beginning of the Remembering Nanjing Project that the HWH process could create a model for how Japan could move through this impasse to reconciliation. It has been my belief that if Japanese participants could move through the steps of apology authentically at the micro-level, then perhaps Japan itself could also find its way to an honest diplomatic apology at the macro-level.

Questions

Since collective shame seemed to be the primary obstacle in the way of working through the micro and macro levels in the Remembering Nanjing process, I decided to take a deeper look into the nature of shame and guilt. I wanted to see if I could learn how to help Japanese people move through these paralyzing feelings and integrate them in a positive way.

As I explored the literature on shame and guilt several questions emerged:

What are shame and guilt and what are their purposes in human psychology, society and cultures?

How do cultures with legacies of perpetration work through guilt and shame to personal and collective psychological health? How do they integrate a legacy of perpetration with a positive cultural or national identity?

Guilt

Guilt is a cognitive or an emotional experience that occurs when a person realizes or believes—accurately or not—that he or she has compromised his or her own standards of conduct or has violated a moral standard, and bears significant responsibility for that violation.

Collective Guilt

Collective guilt is the emotional reaction of a group of individuals who perceive that their family, tribe or society has illegitimately harmed members of another group. It often appears as a result of a shared social identity and where the group's actions represent a threat to the positive feeling of the group. There are several causes of collective guilt: strong group identity, collective responsibility, and perception of unjust actions committed by the group.

An individual has to believe the actions caused by their "perpetrator" group were unjustifiable, indefensible, and unforgivable. If an individual can justify the actions of the hurtful group, this can lessen the feeling of collective guilt. This is a common response by Turks when discovering that their ancestors may have been involved in genocidal actions. Their justification is that the killings occurred during WWI as the Ottoman Empire was collapsing and that modern Turkey need not take responsibility for this. They are therefore dismissive of the accusations of genocide. Only when an individual views the perpetrator group's actions as reprehensible, will that individual feel the collective guilt of their people. (Branscombe, 2004)

An instructive example of dealing with collective guilt can be found in Germany after WWII. In the post-War era, the entire German nation was forced to confront its violent and destructive past and carry its collective guilt. Held for the purpose of bringing Nazi war criminals to justice, the Nuremberg trials were carried out between 1945 and 1949. The defendants, who included Nazi Party officials and high-ranking military officers along with German industrialists, lawyers and doctors, were indicted on such charges as crimes against peace and crimes against humanity. Through this process, the entire German people were metaphorically put on trial. Germany, more than any other nation with a history of perpetration, has

made large gestures of reconciliation: formal political apologies, multiple Holocaust memorials, financial reparation to Holocaust and WWII victims, a rigorous Holocaust education curriculum and the creation of a national Holocaust commemoration day.

Honor

Honor is related to shame. It is fundamentally the public recognition of one's social standing. This is a value that is prevalent in Mediterranean cultures including Turkey. One's basic honor level is inherited from the family or group. Each person takes on the general honor status that the group possesses in the eyes of the larger group, and therefore honor comes directly from group membership. It is not based on something the individual has done. The relationship with the group is important for the identity of an honor-based society. Honor status comes primarily from group recognition. With honor as a primary cultural value in Turkish culture, one can see how an accusation of genocide would be dishonoring. (Moxnes,1993)

Shame

Shame is a painful feeling of humiliation or distress caused by the consciousness of wrong or foolish behavior, shortcoming, or impropriety. It is a condition of humiliating disgrace or disrepute. Shame and humiliation are so unpleasant that human beings have over time established sets of archetypal responses to shame that aim to avoid the negative effect of shame without addressing the original cause. (Nathanson (1992). See Compass of Shame below.

Shame Culture

In cultural anthropology, a shame culture is the concept that, in a given society, the primary device for gaining control over children and maintaining social order is the instillation of shame, often paired with the threat of ostracism. In a shame-oriented culture, every person has a place and a duty in the society. One maintains self-respect, not by choosing what is good

rather than what is evil, but by choosing what is expected of one. In this system, Japan, China and Turkey are considered shame cultures. (Hiebert 1985)

Guilt culture versus Shame Culture

I am aware of the controversy around the discourse about guilt and shame cultures. It first surfaced in the 1940's in **The Chrysanthemum and the Sword**, by Ruth Benedict (1946), when she compared Japan as a shame culture to the United States as a guilt-based culture. In studies and models that followed, individualistic cultures were accused of viewing guilt as “good” and shame as “bad” moral emotions. In reality, shame may be a better adaptation for a collectivist society that operates on a more relational basis. I would like to be clear that I am not making a value judgment about which coping mechanism is better. Rather, my aim is to examine the impact of shame and guilt on the ability of certain cultures to move through the pain from a legacy of perpetration.

Shame and guilt are members of a family of emotions called the self-conscious emotions as they rely on the human ability to reflect on and evaluate the self by reference to a set of internal or societal standards. Societies are classified according to the emotions they use to control individuals, swaying them into norms of obedience and conformity. A guilt-based society is one in which control is maintained by creating and continually reinforcing the feeling of guilt---the idea that you may be punished now or in the afterlife for certain behaviors condemned by society. The primary method of social control is the instillation of feelings of guilt for behaviors that the individual has internalized and believes to be undesirable.

Shame cultures are typically based on the concepts of maintaining pride and honor. Maintaining appearances and “face” are valued in shame-based cultures, as opposed to individual conscience in guilt-based cultures.

Guilt is a feeling that arises when we violate the absolute standards of morality within us, when we violate our conscience. A person may suffer from guilt although no one else knows of his or her misdeed. Guilt is relieved by confessing the misdeed and making amends. Guilt-based cultures rely on an internalized conviction of a shameful offense as the enforcer of good behavior. Shame-based cultures, by contrast, rely on external sanctions. Guilt cultures emphasize punishment and forgiveness as ways of restoring the moral order. (Hiebert 1985)

When people feel shame, they feel bad *about themselves*, whereas when they feel guilt they feel bad about a *specific behavior*. Empirical research supports that this differential emphasis on *the self* (“I did that horrible thing”) versus *a specific behavior* (“I *did* that horrible *thing*”) leads to very different emotional experiences, patterns of motivations and subsequent behavior (Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

Of the two emotions, shame is considered the more painful of the two, since in shame the entire core self is at stake and therefore shame is often associated with a sense of shrinking or of “being small” as well as a worthlessness and powerlessness. Guilt, on the other hand, is deemed less painful because the object of concern or condemnation is a specific behavior rather than the entire self; consequently people experiencing guilt are not challenged to defend the self, but rather are drawn to reflect on their specific behavior and are more able to consider its consequences, especially for others.

On the whole, empirical evidence evaluating the action tendencies of people experiencing shame and guilt suggest that guilt promotes constructive, proactive pursuits, whereas shame promotes defensiveness, interpersonal separation, and distance. (Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

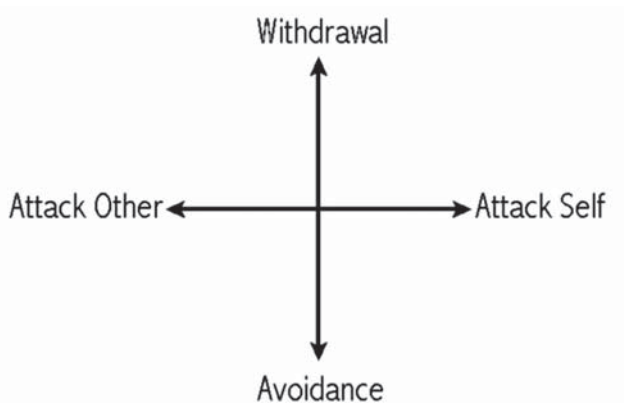
Tangney & Dearing (2002) report that shame is associated with attempts to deny, hide or escape the shame-inducing situation. The act of trying to avoid

dealing with the cause of the shame is articulately described by Nathanson's Compass of Shame (Nathanson,1992). By contrast, guilt has been found to be associated with motivation towards reparative actions including confessions, apologies, and undoing the consequences of the behavior (Tangney & Dearing 2002).

The Compass of Shame

Nathanson (1992) has described the four major sets of responses or “scripts” which he believes that human beings use to avoid dealing with an experience of shame, and which he arranges as the poles on the *Compass of Shame*. Each of the four poles of the compass describe ways of behaving in response to the experience of shame.

Figure



Withdrawal

At the Withdrawal pole of the compass are those behaviors that alleviate the negative effect by severing the connection with others so as to avoid their presumed scrutiny and judgment. The downcast face of the person experiencing shame and the breaking of eye contact with those that they may perceive to be judging them, are typical physiological responses to

shame. Withdrawal alleviates the negative effects of shame by removing the person from the glare of others.

Attack Self

People may respond to an experience of shame with behaviors that range from putting oneself down through humor to masochistic and self-destructive behaviors. The person in pain attempts to regain control of the situation by, at least, controlling their self-condemnation. In other words, they attack themselves first, before anyone else can.

Avoidance

The Avoidance pole of the compass involves behaviors that draw attention away from the cause of the shame experience. This redirects attention onto some aspect of the self that is not defective. The attempt is to restore some status to the individual.

Attack Other

At the final pole of the compass represents behaviors that enable us to feel better by shifting the blame or by making someone else smaller. This set of scripts range from seemingly harmless banter and good-natured teasing, through to malicious and hurtful insults and even physical aggression. In these responses the painful experience of shame is lessened through making someone else the target in order to enhance one's own status.

Nathanson (1992) considers each of the four sets of responses described in the Compass of Shame as maladaptive because it does not enable or require us to examine and address what the spotlight of shame has highlighted about us, or our behavior.

Japanese Collective Shame and Guilt

As the HWH workshop in Nanjing is taking place in September of 2013, the tension between China and Japan over the oil and fishing rights to the tiny

islands in the China Sea is mounting. Incidents have erupted where ownership of the islands is contested between China and Japan and have produced an outpouring of rage against the Japanese. Vandalism of Japanese businesses and protests break out in cities all over China. The issues that are being grappled with are political, historical as well as emotional in nature and are taking place on the global stage. The two powerful neighbors back nervously away from the tension for, left unfettered and allowed to follow through to a logical emotional conclusion, one could imagine the political posturing taking place between Japan and China could eventually lead to war. This tense and dangerous situation, I believe, has its roots in the unresolved and tangled collective memory of WWII.

Japan has not been as repentant as Germany or other countries that have confronted the darker sides of their past. It has apologized for waging aggressive war and oppressing its neighbors. But, those apologies have been fumbling and awkward, and have often been undercut by revisionist statements from right wing Japanese politicians. Japan has offered relatively little compensation to the victims of WWII. And to this day, there are no nationally sponsored museums or monuments that acknowledge Japanese aggression or atrocities. At the same time, the image of the bombings of Hiroshima and Nagasaki are seared into the synapses of Japanese elementary school children who go on field trips to visit the Peace Museum in Hiroshima.

Bitterness in China persists over the brutality of the Japanese during the Second Sino-Japanese War and the atrocities committed by the military like the Nanjing Massacre. The perceived lack of a straightforward acknowledgment of such atrocities, Japanese government employment of known past war criminals, and Japanese historic revisionism in textbooks enrages the Chinese public.

These perceptions are nurtured by the Chinese government. Hatred of

Japan becomes a unifying force in Chinese identity. In elementary school, children are taught about Japanese war crimes in detail. For example, thousands of children are brought to the Museum of the War of Chinese People's Resistance Against Japanese Aggression in Beijing and the Nanjing Massacre Museum was filled with elementary school children viewing the horrific photos of the atrocities the three times that I visited in 2009, 2011 and 2013.

After viewing the museum, the children's hatred of the Japanese people was reported to increase significantly. Despite the time that has passed since the end of the Second World War, discussions about the Japanese conduct can still trigger powerful emotions today, in part because most Japanese are aware of what happened but their society has never engaged in the type of introspection that was common in Germany after the Holocaust. (Forney 2005, 2008), (Lague, 2013)

With this history as a backdrop, I have enormous respect for the Japanese graduate students and faculty who have created and participated in the Remembering Nanjing Project since 2007. They are the conscience of their people and are bravely and willingly diving into uncharted emotional waters. Coming to Nanjing is to face the ghosts of World War II. Japanese participants are inviting shame to visit them and to face the immoral choices that their ancestors made on the very soil upon which they are standing. Making the choice to come to Nanjing, it is not possible to feel "good" at the end of a 4-day workshop with the descendants of the Chinese victims. One making this pilgrimage must expect to feel shame. However, an important value in the HWH process is to be able to move through the guilt, rage, shame and grief that is a part of this work to a place of meaning, integration and restoration.

How do cultures with legacies of perpetration work through guilt and shame to personal and collective psychological health? How do they integrate a

legacy of perpetration with a positive cultural or national identity?

Human beings are tribal in nature and have a need to feel good about the tribe to which they belong. When this pride of association is disrupted through a history of war trauma, humiliation, defeat, or perpetration, it negatively affects the collective self-regard in the form of internalized oppression. Members of a culture can begin to shame themselves. This can influence the way individuals view or value their own culture. This is clearly happening for the Japanese participants.

My HWH approach usually involves direct apology and it seems that the Chinese people want a direct acknowledgement of their suffering. However, it also seems clear that direct face-losing apologies are not commonly offered in Japanese culture. So, I would want to explore in future workshops what the steps are in a Japanese apology. Does apology need to be indirect and nonverbal? Is weeping visibly an apology? Is bowing silently an apology? Is coming to Nanjing at one's own expense to be a witness to the atrocities and hear the Chinese people's pain an apology?

In the end, I wonder if HWH, which is based on Western individualistic psychological and emotional value systems around working through shame and guilt, the appropriate approach to working with the collectivist Japanese and Chinese?

If I am invited back to Japan or China these are some of the questions I would want to explore.

References

- Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin.
- Branscombe, Nyla R.; Bertjan Doosje (2004). *Collective Guilt: International Perspectives*. Cambridge University Press.
- Forney, M. (2005, December 10). *Why China Bashes Japan*. Time Magazine.

- Halvor, M. (1993). Honor and Shame. *Theology Bulletin: A Journal of Bible and Theology*, (23), 167-176.
- Hiebert, P. G. (1985). *Anthropological Insights for Missionaries*. Grand Rapids: Baker Book House.
- Lague, D., & Lanhee Lee, J. (2013, May 25). Special Report: Why China's film-makers love to hate Japan. Reuters.
- Leveton, E. & Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Germans and Jews Facing the Legacy of the Holocaust. In *Healing collective trauma using sociodrama and drama therapy*, Leveton, E (Ed.), (pp. 127-146) New York, NY: Springer.
- Miller, R. & Volkas, A., (2007) Healing the wounds of History. In A. Blatner & D. Wiener (Eds.), *Interactive and improvisational drama: Varieties of applied theatre and performance* (pp. 34-44). New York: iUniverse.
- Nathanson, D. L. (1992). *Shame and Pride: Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York: W W Norton & Company.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Steuwig, J., & Mashek, D. J. (2007). Moral Emotions and Moral Behaviour. *Annual Review of Psychology*, 58, 345-372.
- Volkas, A. (2002). Armand Volkas keynote address. *Dramascope: The Newsletter of the National Association for Drama Therapy*, 23 (1), 6-9.
- Volkas, A. (2009) Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution. In D. Johnson & R. Emunah (Eds.), *Current approaches in drama therapy* (pp. 145-171), Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Japanese and Chinese Cultures Facing the Legacy of the Nanjing Massacre., In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 130-156), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A., (2012) A Facilitator's Reflections on Remembering Nanjing 2011, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 350-364), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A. (2013). Drama therapy in the repair of collective trauma. In D. Johnson & N. Sajjani (Eds.), *Trauma-informed drama therapy: Transforming clinics, classrooms, and communities*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.

3-2 集団的な恥辱感と罪責感を癒す

アルマンド・ヴォルカス MFA, MA MFT, RDT/BCT

カリフォルニア統合学大学院准教授

Living Arts Counseling Center 所長

Living Arts Playback Theatre Ensemble 代表

Healing the Wounds of History: Center for Peacebuilding and the Arts 創設者

armandvolkas@gmail.com

www.livingartscenter.org

(510) 527-5577

アウシュヴィッツ / ビルケナウ、ポーランド 1995 年 8 月

ドイツの学生達の一団が、小さなシャベルやスコップで敬虔な態度でアウシュヴィッツ / ビルケナウ収容所の地面を掘り起こしている。まるで宗教儀礼に参加しているかのような普段とは違った意識状態で、ガス室に送られ殺害されたユダヤ人たちから奪われた持ち物を黙々と探している。悪魔の所行の証拠を急いで隠滅するために、ナチスは収容者たちから没収した貴重品でいっぱいの巨大な倉庫を燃やした。炎のあまりの強さに、金属はすべて溶け、地面に埋まってしまった。50 年の時を経てドイツの若者たちが見つけたへし曲がった眼鏡や壊れた腕時計、溶けた銀食器を拾い上げ、保護された格子にうやうやしく入れると、それらは堆く山のように積み上げられた。

学生たちが歴史的記憶を探し求め地面を掘ることで、この場所に漂う三百万もの死者の霊が明るみにだされる。彼らは、ドイツ人としてのアイデンティティとの結びつきを粉碎され、途方もない痛みを抱えながら、ユダヤ人犠牲者たちに敬意を表することで自らの個人的、集団的な痛みを和らげようと無駄にも思える試みを重ねていく。

カリフォルニア州バークレー 2007 年 3 月

頬を涙で濡らせたトルコ人の若い女性が、満席になったバークレーの講堂で震えながらマイクに向かって立っている。聴衆は、ただひたすら沈黙し彼女の言葉を待っている。恐怖におののきながらも断固として真実を語ろうとする彼女の決意は、その目や顔つきにはっきりと見て取ることができる。アルメニア

とトルコの人々が参加し、まる一日をかけた「歴史の傷を癒す」ワークショップの直後に、観客と演者が交流する劇を通して二つの文化が抱えてきた歴史的な遺産についての対話や振り返りを行う夕べが行われている。「アルメニアの友人たちよ、私はこれまでわがトルコの人々が否認してきたアルメニア人の大量虐殺であな方が受けた傷、屈辱、そして体験の風化を感じました。私は政府のために言葉を発することはできませんが、祖先のためにあなた方に謝罪するために行動を起こします。」

トルコの刑法第 301 条はアルメニアの人々に起こったことを「大量虐殺」と呼ぶことは、トルコ人とトルコ国家を侮辱し不名誉に陥れる犯罪だとしている。この女性は国に戻ると逮捕されるかもしれないのだ。この若いトルコ人女性の勇気は、中年のアルメニアの男性にははっきりと伝わっていた。大量虐殺の生き残りであり孤児だった彼の母親は 1915 年シリアのデリゾール砂漠を裸足で横断させられた。米国に渡ってきたアルメニア人移民の多くが孤児の子孫であり、150 万人ものアルメニア人が四世代に渡って殺害されてきた記憶と痛みを受け継いでいた。そのアルメニア人の男性は「生きている間にトルコ人から謝罪の声を聴こうとは夢にも思わなかった」と驚きのあまり嗚咽の声をあげた。

中国南京市 2009 年 10 月

それは、揚子江岸にある南京大虐殺記念碑の下での儀式の最後だった。八人の日本人女性のグループが輪になって互いを支えながら、ここからの苦しみの表現として咽び泣きながら嘆き悲しんでいる。彼女たちの悲嘆の根底には、四日間に渡る「歴史の傷を癒す」ワークショップで積み重なった重みがあり、それが今ようやく解放されている。

京都の立命館大学から来た学生と教員たちとそのパートナーたちが南京師範大学に集まって、戦争の遺産と一緒に向かい合った。彼らは日中戦争の間に日本の祖先が中国人に犯した身も凍るような虐殺と痛み、恥辱、残酷さを目に見える形で詳細にドキュメントしてある南京虐殺記念館を訪れた。南京大虐殺の生存者が語る家族の殺戮や日本兵による強姦、そして九歳の少年が生存をかけた傷ついた妹の命を救おうと必死に戦う話に耳を傾けた。ドラマセラピーや表現アートセラピーを使って、困難な遺産に感情的に立ち向かい、それを乗り越えようとした。中国の参加者達は、その記念碑の下で日本人女性達が苦しむ姿をじっと黙って見守っている。彼女たちの眼からとめどなく流れる悲しみと恥

辱の涙は、やがて揚子江の激しい流れとひとつになっていくようにも思えた。

カリフォルニア州サンフランシスコ 2013年11月

2013年9月の「南京を思い起こす」は、私がファシリテーターとして関わる三度目の機会となった。このプロジェクトでの出会いと、過去25年に渡り関わってきた異文化間の衝突を変容させる仕事を振り返って私は、加害者の子孫たちが自ら受け継いできた困難な遺産に直面する勇氣にとっても感銘を受けてきた。上に書いた短いエピソードは私がファシリテートしたドイツとユダヤ、トルコとアルメニア、そして日本と中国の出逢いのなかで遭遇した体験から引用したものだ。これらはこの仕事の感情的な複雑さを示している。ドイツ、トルコ、日本の文化は、罪責感、恥辱感、悲嘆を表現している。心理療法師、ドラマセラピスト、平和構築に携わる者として私は、これまで二〇以上もの文化間の対立、集団的トラウマに取り組み、こうした感情的に継承してきたものと取り組むために芸術をベースにした心理学モデルを開発し、それを「歴史の傷を癒す(HWH)」と名付けた。(Volkas 2002、2009、2010、2012; Miller & Volkas, 2007; Leveton & Volkas, 2010) 南京を三度も訪問する機会をもつことができたことで、私の開発したモデルに関する重要な問いと挑戦が浮かんできた。それをここで振り返ってみたいと思う。

2013年9月に南京師範大学で行われたワークショップ終了後のシンポジウムでは、心理療法師であり表現芸術療法師でもある笠井綾が2011年の「南京を思い起こす」プロジェクトについて行った調査結果を報告した。それを聞いて明らかになったのは、中国人の参加者は帰宅後大きな変化をもたらす体験をしたと報告しているのに対し、多くの日本人参加者は四日間のワークショップを終えて帰宅すると不快な気持ちになっていることだ。ワークショップの間にたくさんの恥辱の気持ちが沸き上がり、多くの日本人参加者はそれをどうにも処理できないと感じていた。

南京虐殺記念館を訪れた日本人参加者は、まるで自分が標的になっているかのように感じ、中国人の怒りを誘発しないように、できれば自分が日本人だと分からなければ良いのにと願っていたと報告している。個人的に話した日本人出席者は、加害の遺産から自分たちの痛みを表現する感情的な権利をもたないと感じていることを吐露してくれた。中国のホストたちを傷つけるのではないかと気にしていたのだ。日本人参加者たちは自らのより複雑な感情を隠し、プ

ライブートにだけそれについて話すべきだと感じているようだった。

HWH のファシリテーターとして私は、人々が個人的集団的トラウマを探るように導くためには、そうした体験から何か意味を見出すように彼らをサポートすることができなければならないと信じている。私は日本人参加者がある意味落ち込ませるようにしてしまったように感じた。南京ワークショップではそれぞれの文化の代表者として参加者は勇敢にも日本の歴史の暗黒面を探っていた。しかし、そのプロセスから十分な感情的精神的サポートを得ることができなかったのかもしれない。

「南京を思い起こす」での出逢いをファシリテートした三回の経験を振り返って、日本人参加者は自分の感情を認めたり感情的なスペースを十分にとることに抵抗があるように思う。彼らは自分たちの祖先が中国の人々に犯した加害からくる膨大なトラウマの程度を理解するようになると、彼らは感情的に身動きがとれなくなるようだ。

ナチスの加害の遺産についてドイツ人と長年関わり、罪責や恥辱に直面しそこから救い出される感情に至る手助けをしてきたが、なぜ日本人参加者は同じことができないのだろうと不思議に思う。おそらく心理療法家として三十五〜四十人も参加者がいるグループワークをするという私自身の限界のためだろう。全員の感情的な必要性を引き出すことなど不可能だから。あるいは大きなグループで複雑な感情プロセスの微妙なニュアンスをファシリテートするのに、日本人と中国人の通訳に頼らなければならないことで、結果的に十分に深くいけずに自分のなかにあるものを発見する壁を打ち破れなかったかもしれない。おそらく面目を保とうとする文化的価値観のために、日本人参加者は恥の体験に直面しそれを乗り越えることができないのかもしれない。HWH はこの感情的に複雑な出逢いの一番相応しいツールなのかも疑うようになってきた。

HWH の二つの層：ミクロとマクロのレベル

「HWH：歴史の傷を癒す」での出逢いは二つのレベルに概念化できる。第一のレベルは心理学的なもので、対立する二つのグループが遭遇することに注目し、そのプロセスによってかき乱される参加者の感情や必要性を表面化していく。治療的な目的は、文化的な交流で参加者たちが互いに知り合い、人間であることを確認し、個人的に被害と加害の遺産を統合し、修復していくことである。目標とするのは、ワークショップでの体験を心理学的に統合し、自分たち

が受け継いできた集合的なトラウマや、文化的国家的アイデンティティにそれがどのように受け継がれてきたかの洞察を得ることだ。こうした影響は個人的であるよりも、集合的な性質をもつ。参加者一人一人が自分の体験に刺激を受けてそれを自らの生き方に受け入れ希望と回復の力を実感することが目的である。

出逢いにおけるもう一つのレベルは、社会への治療的介入と概念化できる。社会そのものがクライアントであるということだ。ワークショップに参加する人たちは自分の国の人々の集合的トラウマを担った者とみなすことができる。つまり、自らの文化の代表者として参加していると考えなのだ。だから参加者が極めて個人的なワークをミクロのレベルで行ったとしても、HWHの治療家はマクロのレベルに注目し、どうすればこのワークが社会にさざ波のように伝わり変革をもたらすかについて考える。

2013年の秋、南京プロジェクトに関わっているものはみな、日中間の危険な緊張状態を意識していた。まるで部屋に巨大な象がいるかのようだった。中国人たちは日中戦争の間に日本軍が犯した数え切れない虐殺をはっきりと認め謝罪することを要求している。しかし、日本政府はずっと、自らの面目を保つために否認に終止してきた。この「南京を思い起こす」プロジェクトの初めから、HWHのプロセスによって日本がこの行き詰まりを乗り越え和解に移る一つのモデルを作りだしたいというのが私の望みだった。日本人参加者たちがミクロのレベルで真剣に謝罪するステップを経ることで、日本全体がマクロレベルでの真摯な外交的謝罪への道を見出すことができると信じてきた。

様々な問い

「南京を思い起こす」のプロセスにおいて、集合的な恥辱感がミクロとマクロのレベルで主な障壁になっているように思われる。そこで恥辱感と罪責感の本質についてもう少し深く考えてみたい。日本人がこうした麻痺の感情を乗り越えそれらを肯定的に統合するにはどのように関わっていけばよいかを学べるかどうかを検討してみたいと思う。

関連の文検を読み進めていくと、いくつかの疑問がわいてきた。

- 恥辱感や罪責感とは何であり、人類の心理や社会や文化においてどのような用途があるのだろうか？
- 加害の遺産を抱える文化が、個人的、集合的に心理的な健康に至るには

どのように罪責感や恥辱感と取り組めばよいのか。加害の遺産を肯定的な文化的国家的アイデンティティとどのように統合するのか？

罪責感

罪責感は認知的感情的体験であり、人が正しかろうがそうでなかろうが自分の行動基準に反したり、倫理的規範を逸脱したり、そうした違反に重大な責任を負っていると信じたり実感する時におこる。

集団的罪責感

集団的罪責感とは、自分の家族や仲間、社会が法に反して他のメンバーを害したことを認めたときに、集団のメンバーがそれぞれみせる感情的な反応である。その集団の行動が肯定的な感情に脅威を及ぼすときに、共有された社会的アイデンティティの結果として現れることがよくある。集団的罪責感を引き起こす原因にはいくつかある。集団のアイデンティティが強い場合、集合的責任感、その集団によって行われた不正な行為の認知などである。

それぞれの個人は「加害者」の集団が引き起こした行為が不当で、弁護のしようがなく、容赦できないものであると信じる必要がある。もし危害を加えたグループの行為が正当化できるなら、集合的罪責感を弱めてしまう。これは自分の祖先が大量虐殺に荷担していたかもしれないことに気づいたトルコ人に共通に見られる反応である。彼らは殺戮はオスマン帝国が崩壊した第一次世界大戦の間に起こったものであり、現代トルコはこれに責任をもつ必要はないというように正当化し、大量虐殺への非難を無視する。加害者集団の行為が不届き極まりないと見なされるときにのみ、自分たちの集団的罪責を感じる。

(Branscombe, 2004)

集合的罪責感についての対処で示唆的な例が、第二次大戦後のドイツで見られた。戦後ドイツは国家全体でその暴力的で破壊的な過去に直面し、その集団的罪責感を担わさせられてきた。ナチスの戦争犯罪人たちを裁きの場に立たせるために、ニュルンベルク裁判が1945年から1949年まで行われた。被告であるナチス黨員や軍の高官、それにドイツの実業家、弁護士、医師たちは平和への罪と人道に反する罪で告発された。このプロセスを通じて、比喩的にはドイツ中の人々が裁判にかけられたといえる。ドイツは、加害の歴史をもついかなる国よりも和解のジェスチャーを見せた。公式の政治的謝罪、ホロコースト

の記念館をいくつも建て、ホロコーストや第二次大戦の犠牲者への経済的賠償、ホロコーストについての厳格な教育カリキュラム、それに国家レベルでのホロコースト記念日も制定している。

名誉

名誉は恥辱感と関係しており、基本的には社会的な立場の公式な認知である。トルコを含む地中海諸文化に広くみられる価値である。基本的なレベルの名誉は家族や親族から受け継ぐ。一人一人は一般的な名誉のステータスを身につけており、それはより大きな集団において所有されるもので、個人が成し遂げたことに依拠しているわけではない。集団との関係は、名誉を基盤とする社会のアイデンティティにとっては重要である。名誉のステータスは集団のなかでどのように認められているかによることが多い。トルコ文化では名誉が文化的価値の主要なものであるので、大量虐殺を責めることがどれほど不名誉なことであるか理解できる。(Moxnes,1993)

恥辱感

恥辱感とは間違った行動や愚かな行動、あるいは弱点や不正行為だという意識が引き起こす屈辱やストレスによる痛みを伴う感情である。自尊心を傷つけるような不名誉な状態あるいは人の評判を落とす状態である。恥辱感と屈辱はあまりに不快なので、人類は進化の過程で恥辱感にある元型的な反応を構築してきた。それによってたとえば元々の原因が何であったかを問うことなく恥辱感の否定的な影響を避けようとする。

(Nathanson 1992).

※下記の「恥辱感のコンパス」を参照

恥の文化

文化人類学的にいうと恥の文化は、ある文化で子供をコントロールし社会秩序を維持するための主要な方法であり、しばしば追放の強迫と一緒にあって恥辱感を与える。恥辱感が中心の文化では、あらゆる人は社会である立場と義務をもつ。悪ではなく善を選択することではなく、ある期待されることを選択することで人は自尊心を維持する。こうしたシステムの観点からいえば、日本や中国、トルコは恥の文化と見なせるだろう。

(Hiebert 1985)

罪責の文化 対 恥の文化

罪責の文化と恥の文化についての議論が論争になっていることはもちろん知っている。こうした論争は、1940 年代にルース・ベネディクト（1946）が「菊と刀」で日本を恥の文化、米国を罪責の文化として比較した時に最初に表面化した。それ以後の研究や様々なモデルでは、個人主義の文化は罪責感を「善き」とするのに対し恥辱感を「悪しき」倫理的な感情として追究してきた。現実には、恥辱感の関係性を基盤とする集合的社会によりフィットするものである。ここで明確にしておきたいのは、私自身はどちらかの対処メカニズムが良いという価値判断をしているわけではないということだ。むしろ私の目的は、恥辱感や罪責感がある文化において加害の遺産に由来する痛みを乗り越える力にどのような影響があるかを吟味することにある。

恥辱感と罪責感は自己意識の感情と呼ばれるある感情群に属する。どちらも内的、社会的基準を参照しながら自己を振り返り評価する能力に依拠している。個人をコントロールし服従と適合の規範に向けるためにどのような感情を用いるかに応じて社会を分類することができる。罪責感を重視する社会は、罪責感を生みだし継続的にそれを強化することでコントロールを維持する社会である。そうした社会では、社会が非難するような行動に対して、現在あるいは死んだ後も社会が罰を与えるかもしれないと考えられ、個人が内面化し望ましくないものと信じている行動に罪責感を抱かせることで社会をコントロールする。

典型的な恥の文化では、誇りと名誉を維持するという概念に基づくことが多い。罪責感を重視する文化では個人の良心に価値がおかれるのに対し、恥辱感を重視する文化では、外面を保ち「顔」をたてることに価値がおかれる。

罪責感は、内なる絶対的な倫理規範を犯したり良心に反する時に生じる。その人が悪いことを行ったことを知る人が誰もいなくても、人は罪責感に苦しむ。罪責感は、悪行を認めて、補償することによって軽減される。罪責感に基づく文化では、恥すべき罪をこころの中で確信することによって、善なる行動が強化されていく。恥辱感に基づく文化では、それとは対照的に、外的な制裁に依拠する。罪責感に基づく文化では、倫理的秩序を再構築する方法として懲罰と許しが強調される。

(Hiebert 1985)

人が恥辱を感じる時に悪いのは自分自身であるのに対し、罪責を感じる時には特定の行動が悪いだけである。実証的な研究によれば、自己（「酷いこと

をした私』)と特定の行動(「私がしてしまったあの酷いこと」)のどちらを強調するかで、感情的な経験や動機のパターン、それに伴う行動も大きく違ってくる。(Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

二つの感情のうち、恥辱感の方がより痛みを伴うとされている。というのも、恥辱感においては核となる自己のすべてが悪いとされ、それゆえに恥辱感は一歩しば自分を「取るに足らない存在」と矮小化したり価値のない人間と感じさせ、無力感ともつながる。それに対し罪責感、それほど痛みを伴わないものだと考えられている。なぜなら非難の対象となるのは自己すべてではなく、特定の行動だからである。結果的に罪責感を体験する人は自己を守らねばならないような挑戦を受けることなく、特定の行動を反省するように仕向けられるし、特に他者に対するその影響を考慮することができる。

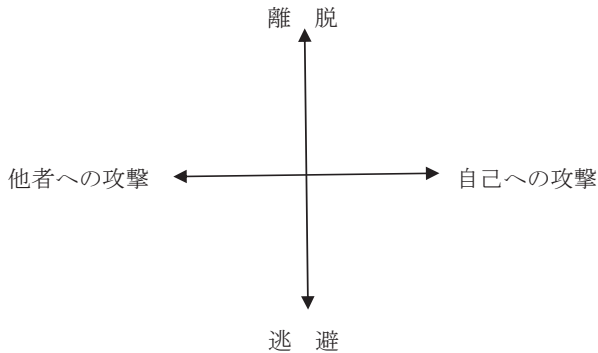
概して、恥辱感と罪責感を体験する人の行動の傾向を評価する実証的研究が示しているのは、罪責感は建設的で能動的に進むのに対し、恥辱感により防衛的で人との距離を深めるように進む。(Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

タンゲニーとデーリング (Tangney & Dearing 2002) は、恥辱感恥を生じさせた状況を否認したり、隠蔽したり、逃避しようと試みることにつながると報告している。恥の原因に対処することを回避しようとする行為は、ナサンソンの著作「恥のコンパス」(Nathanson, 1992) に明瞭に述べられている。対照的に、罪責感はその行動の告白や謝罪、あるいはその結果を取り消すような修復的行為への動機につながっている。(タンゲニー及びデーリング 2002)

恥の羅針盤

ナサンソン (1992) は、人間が恥の体験に対処することを回避するために用いる反応の四つの主要な集合あるいは脚本について述べている。彼はそれらを「恥辱感の羅針盤」に四つの極として配置した。羅針盤の四つの極はそれぞれ、恥辱感の経験に応じて取られる行動を述べている。

図：



離脱

羅針盤の「離脱」の極にあるのは、ありうる詳細な調査や審判を避けるために他者との関係を断ち切ることで、否定的な影響を軽減するような行動である。恥辱を経験した人が顔を下に向けたり、自分を審判していると感じる人と視線を合わせることを避けるのは、恥辱感に対する典型的な生理的反応である。離脱は他者の厳しい眼差しを取り除くことで、恥辱感の否定的な影響を軽減する。

自己への攻撃

人々は、ユーモアで自分を卑下することから、マゾヒスティックなあるいは自滅的な行動に至るまで様々な行動で、恥辱の経験に対応する。痛みを感じる人は、少なくとも自己非難をコントロールすることでその状況に対するコントロールを取り戻そうとする。つまり、他の誰よりもまず自分自身を攻撃するのだ。

逃避

羅針盤の「逃避」の極には、恥辱の体験の原因から注意を引き離す行動がある。自己の不完全ではない側面に注意を向け直すことで、その個人の地位を回復しようとするのだ。

他者への攻撃

羅針盤の最後の極には、責めをすり替えたり他の誰かを低く扱うことで、気分を良くするような行動がおかれる。こうした台本には、一見無害な冗談とか悪気のないいじめから、徹底的に悪意のある人を傷つけるような侮辱、場合によっては身体的な攻撃までがある。こうした反応において、自分自身の地位を強化するために他の誰かをターゲットにすることで、恥辱のつらい経験は軽減される。

ナサンソン（1992）は、「恥の羅針盤」で述べた四つの反応はいずれも適応不全だとみなしている。というのは、いずれも恥辱感が自己や自己の行動についての何を明るみに出しているのかを吟味したり明らかにすることを妨げるからである。

日本人の集合的な恥辱感と罪責感

南京での HWH のワークショップが2013年9月に行われている時、東シナ海の小さな島の石油と漁業権を巡る日中の緊張が高まっていた。その出来事が勃発したとき、島の帰属を巡って日本と中国は対立し、日本人に対する怒りがあふれかえり、日本企業への暴行と抗議が中国中の都市で起きていた。取り組まれている問題は、政治と歴史の問題であると同時に、感情的なものであり、地球のあちこちでみられるものだ。二つの強大な隣人の関係が神経質な緊張感をもって悪化し、論理的感情的対立のままにほっておかれたら、日中間の政治的なポーズがいずれは戦争にまで至るであろうことは想像に難くない。この緊張した危険な状況は、第二次大戦の未解決でもつれ合った集合的記憶にその根を持っていると、私は考えている。

日本はドイツや過去の暗黒面に直面してきた他の国々のように悔いていない。侵略戦争を行いその隣人を圧迫したことを謝罪はした。しかし、それらの謝罪はぎごちないもので扱いにくく、右寄りの日本の政治家たちの修正主義的言動によってしばしばその価値を下げられてきた。日本が第二次大戦の犠牲者に対して行ってきた補償は比較的少ない。そして今日まで、日本の攻撃性や極悪さを認める国立の博物館や記念碑はない。同時に、広島や長崎への原爆投下のイメージは、広島 of 広島平和記念資料館を遠足で訪れる日本の小学生の脳裏に焼き付けられている。

中国における苦い思いは、南京大虐殺のように軍隊が行った残虐行為や第二次日中戦争における日本人の残虐性に対してずっと抱かれている。そうした残虐行為を率直に認めないまま、日本政府には過去の戦争犯罪者がおり、教科書には歴史的修正主義者たちが関わることで、中国民衆の怒りに火を注いでいる。

こうした受け取り方は、中国政府によってさらに助長され、日本に対する憎悪が中国人のアイデンティティを強める力になっている。小学校では日本の戦争犯罪について詳細に教えられる。例えば、何千人もの子供達が北京の中国人民抗日戦争記念館に連れてこられ、南京の南京大虐殺記念館にはたくさんの小学校の子供達が残虐行為の怖い写真を見ている。私もそこを 2009 年、2011 年、2013 年と三度訪れた。

博物館を見学した後、日本人に対する子供達の憎悪の感情はとても増加することが報告されている。第二次大戦が集結してから長い時間が過ぎているにも関わらず、日本人が行った行為についての議論は、今でも強い感情を引き起こす。その原因の一つは、たいていの日本人は何が起きたかに気づいているが、社会全体はホロコーストの後にドイツで共通して見られるような内省に取り組むことがなかったからだろう。(Forney 2005, 2008), (Lague, 2013)

こうした歴史を踏まえると、2007 年から南京を思い起こすプロジェクトを立ち上げそれに参加してきた日本人の大学院生と教員たちに、大いなる尊敬の念を覚える。彼らは日本人の良心であり、海図のない感情の海に勇敢に飛び込んできた。南京に来ることは第二次大戦の亡霊に直面することでもある。日本の参加者たちは、恥辱感をかき立て、記念館を訪れ自分たちが立っているまさにその土地の上で祖先が行った不道德的な選択に直面しようとしている。南京に来ることを選択しても、四日間のワークショップ終了後に中国の犠牲者達の子孫と心地よくいられるわけではない。この巡礼を行う人は、恥辱を感じることを予想しなければならない。この巡礼をしている人は、恥を感じるのを予想しなければならない。しかし、HWH プロセスの重要な価値は、罪責感、怒り、恥辱感、それに悲嘆を体験し通すことで、意味や統合や回復の場に至ることができることにある。

加害の遺産を引き受ける文化がどのようにして罪責感と恥辱感をに取り組み、個人的集合的に心理的な健康に至ることができるのか。加害の遺産を肯定的な文化的国民的アイデンティティに統合できるのだろうか。

人間は本質的に同族的で、自らが属する民族について肯定的な気持ちでいる

必要がある。このつながりへの誇りの気持ちが戦争のトラウマや屈辱、敗北あるいは悪事の歴史で崩れる時、集合的自己愛に否定的な影響を与え、内在化された抑圧の形をとる。そうすると、その文化の構成員は自らを恥ずかしく思うようになり、自らの文化に対する視点や価値観に影響を与える。日本人の参加者にこうしたことが起きていることは明らかだ。

私の HWH のアプローチでは、直接の謝罪を必要とすることが普通であり、中国人は自分たちの苦しみを直接認められることを求める。しかし、直接に面目を失うような謝罪は日本文化では一般的ではないのは明らかである。だから、将来のワークショップでは、日本人の謝罪がどのようなステップとなるのかを探っていきたいと思う。謝罪は直接的ではなく、非言語で行われる必要があるのだろうか。人前でむせび泣くことは、謝罪なのか？静かに跪くことは謝罪なのか？南京に自ら赴き残虐行為を目の当たりにし中国人の痛みを聞くことは謝罪なのだろうか？

つまるところ、恥辱感と罪責感と取り組むという西洋の個人主義的心理学と感情に価値を置くシステムに基づく HWH は、集合的な日本人や中国人が行うのに適したアプローチなのだろうか。

もし私がまた日本や中国に招待されるなら、こうした問いを探っていきたいと思う。

参考文献

- Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin.
(邦訳「菊と刀」講談社学術文庫 2005)
- Branscombe, Nyla R.; Bertjan Doosje (2004). *Collective Guilt: International Perspectives*. Cambridge University Press.
- Forney, M. (2005, December 10). Why China Bashes Japan. *Time Magazine*.
- Halvor, M. (1993). Honor and Shame. *Theology Bulletin: A Journal of Bible and Theology*, (23), 167-176.
- Hiebert, P. G. (1985). *Anthropological Insights for Missionaries*. Grand Rapids: Baker Book House.
- Lague, D., & Lanhee Lee, J. (2013, May 25). Special Report: Why China's film-makers love to hate Japan. *Reuters*.
- Leveton, E. & Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Germans and Jews Facing the Legacy of the Holocaust. In *Healing collective trauma using*

- sociodrama and drama therapy, Leveton, E (Ed.), (pp. 127-146) New York, NY: Springer.
- Miller, R. & Volkas, A., (2007) Healing the wounds of History. In A. Blatner & D. Wiener (Eds.), *Interactive and improvisational drama: Varieties of applied theatre and performance* (pp. 34-44). New York: iUniverse.
- Nathanson, D. L. (1992). *Shame and Pride: Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York: W W Norton & Company.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Steuwig, J., & Mashek, D. J. (2007). Moral Emotions and Moral Behaviour. *Annual Review of Psychology*, 58, 345-372.
- Volkas, A. (2002). Armand Volkas keynote address. *Dramascope: The Newsletter of the National Association for Drama Therapy*, 23 (1), 6-9.
- Volkas, A. (2009) *Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution*. In D. Johnson & R. Emunah (Eds.), *Current approaches in drama therapy* (pp. 145-171), Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Volkas, A., (2010) *Healing the Wounds of History: Japanese and Chinese Cultures Facing the Legacy of the Nanjing Massacre.*, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 130-156), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A., (2012) *A Facilitator's Reflections on Remembering Nanjing 2011*, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 350-364), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A. (2013). *Drama therapy in the repair of collective trauma*. In D. Johnson & N. Sajnani (Eds.), *Trauma-informed drama therapy: Transforming clinics, classrooms, and communities*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.

4-1 南京を思い起こす 2011 参加者インタビュー経過報告

カリフォルニア統合学研究所
イースト・ウェスト心理学博士過程在籍 笠井綾

カリフォルニア統合学研究所の笠井綾と申します。戦時中私の祖父は中国で憲兵をしていました。祖父は中国で何をしていたのか、私に話してくれたことはありませんでしたが、2007 年にはじめて中国を訪れた時は日本が中国で行なった事を知り深い悲しみを感しました。私の父は戦争が終わる一週間前に中国で生まれ、祖母は産まれたばかりの父と二人の子どもを連れて歩いて日本に帰りました。中国と朝鮮を通して帰るのに一年かかりましたので、途中で中国や朝鮮の人々に食べ物をもらったり、寒い時には家庭や学校などに泊めてもらったりしたと聞いています。そうして繋がれた命を受け取って今自分がここに生きているので、平和のために何かできたらという思いもあって 2007 年から関わらせていただいて、南京に来るのは今回で 7 回目になります。このワークに関わらせていただいて、またいつもあたたかく迎えていただいて本当に感謝しています。

私は 2011 年の参加者、主に戦争体験者の 3 世にあたる若い世代の学生の方々に去年の 10 月、ワークショップが終わって約一年後にインタビューをさせていただきました。

この「南京を思い起こす」の試みは、アルマンド・ボルカス氏が開発した Healing the Wounds of History（歴史の傷を癒す、以後 HWH）という心理／ドラマセラピーのアプローチを中心とした、約 4 日間の対話プログラムです。HWH は 6 つのステップによって和解が促されるとしています。6 つのステップとは、①タブーや沈黙を破る、②一人一人が物語と顔を持つ人間であることを認識する ③すべての人の中にある加害者になる可能性に気付く ④深い悲哀の共有 ⑤パフォーマンスや儀式など、統合としての表現や共同作業 ⑥社会的奉仕や創造的活動への変換、です。

実際の参加者の体験やワークショップの効果とはどのようなものだったのか、また参加する事の難しさは何か、個々の体験の多様性を記録したり、この試みの意図と参加者側の実際の体験の間に生じるギャップを理解したり、共有したりして今後に活かしたいと思いました。これまでに 40 名程の参加者の中

から学生を中心に 15 人の方へのインタビューを行ないました。天津から夜行列車に乗って来てくださった方もいて、みなさんのご協力にとても感謝しています。15 人の内訳は、中国人 8 名、日本在住の中国人 1 名、日本人 5 名、在日朝鮮人 1 名です。

まだ分析中なので経過報告ですが、三つのテーマ、①ワークショップの効果、②ワークの中で体験した難しさ、③謝罪、について簡単にご紹介したいと思います。これは 2011 年のことで、今年のワークショップは参加者も内容も変わっていますから、その体験や影響はまた違ったものであると思います。2011 年のワークショップの特徴は、参加者のストーリーを即興で演じて共有するプレイバックシアターという手法を、日中の劇団が協力して行なったこと、謝罪のテーマを探索するエクササイズや、お互いの声を演じる椅子のワークをグループ全体で行なったことなどです。

①ワークショップの効果

まず、中国人参加者の方です。ワークショップは主に国や国民についてのイメージに変化を与えたようです。日本人とあまり交流したことがなく、主にメディアと歴史教育などを通じて日本や日本人に対するイメージを持っていた参加者の方々からは、ワークショップで日本人と対話をしてから、メディアに流れる日中関係の報道に影響されにくくなった、また、歴史に向き合おうとする日本人と交流することで、国や政府と一般市民を分けて考えるようになった、という声が多く聞かれました。参加者の中には、自分の周りの人々が日中関係について明らかに報道に影響を受けていると思われる話し方をしているときには、その会話に参加しなかったり、または理性的になるよう論したり、ワークショップの中で自分が出会った日本人や自分の体験について伝えるようになった人もいました。また日本企業で働いた経験がある、またはもともと日本の学生と交流があった参加者からは、日本人との間で歴史のテーマがタブーでなくなった、日本人に対して遠慮なく意見を言えるようになった、また、これまでよりも日本人との関係が深くなったという声が多く聞かれました。参加者には歴史、心理、日本語の学生さんがおられましたが、心理または日本語が専門の参加者は歴史の大切さや、自分と歴史の関係について以前より感じたり考えるようになったりした方が多かったようです。逆に歴史が専門の方は、心理的な視点を自分の研究に取り入れたり、より中立的な立場で研究を行なうよう

になったりしたという方がおられました。インタビューを受けてくださった方全員が機会があったらまたこのようなワークショップに参加してもよいと言ってくれました。

次に日本人参加者の効果の実感です。南京大虐殺の史実や犠牲者の数字について、頭で考えることから少し離れて、日本兵達が行なったことや、生存者の個人のストーリーや気持ちを受けとめることができるようになった。一人でも何万人でも殺してはいけないという思いをあらためて確認した。中国の人々が感じたり考えたりしていることを実際に体感して、お互いに受けた教育の違いから来る考え方の違いに気付いた。思想が違っていても関係はずっと続いていくものなので、お互いを変えようとするのではなく、違いを受け入れて共存していく姿勢を大切に、その器の深さを日中関係に限らず普段の生活や仕事の中にも取り入れたいなど、歴史をこれまで史実としてとらえていた参加者は、相手の気持ちを受け止める、または、考え方が異なってもそれに耳を傾け共存して行こうという、受容と共存に関する変化が実感されているようでした。また、集団が暴力に向かって行くのは実際にあることだということを実感して、今の日本の政治についてよく考えるようになった、メディアで日中関係についての報道を見る時に、やはり過去のことが色々影響しているということを意識して見るようになった、など、歴史と今現在の状況との繋がりをより意識している方もおられました。これらは日本人男性のインタビューからまとめたもので、日本人女性の体験について現在分析中です。一つ言えることは、このワークショップは、南京大虐殺という暴力の中の、日本の加害と中国の被害の関係を扱うことが多いのですが、私達が南京で見聞するストーリーの中では女性や子供が被害者であることが多く、女性は被害側にも強く共感し、受容的な態度で参加しながら、同時に加害の責任を感じることも引き受けていることが多いようです。このことが日本人女性参加者の体験を複雑にしているのではないかとインタビューを通じて感じています。

② ワークショップの難しさ

ワークショップの中での難しかった体験についても聞いてみました。例を一つ挙げます。2011年のワークショップの中には日本と中国の立場から対話をするという椅子のワークがありました。その中で日本人参加者が、中国側の役を演じて、日本に向かって怒りを表現するというシーンがありました。それは、

多くの中国人参加者にとっては、変化のきっかけになったと認識されている大切なシーンでした。中国人参加者が日本人参加者に向かって直接表現しにくいことを日本人が代弁した事がとても印象的だったようです。

このような重要なシーンだったのですが、それは日本人にとっては重く感じられる場面でもありました。一人の参加者は、「何もできない。何も言えない。しんどくて、その場にいられなくなるような感じがあった。その時が一番しんどかった。」と感じ、また別の参加者は、このシーンに限らず、四日間の間に、日本の加害と向き合うことで、深い罪悪感を感じて、何を見ても、何をやっても、申し訳なくて、涙がとまらなくなってしまう、中国人の学生の方々に「あなたがやったことではないのだから」と、慰められるけど、それに対して申し訳ない、という辛さを体験しました。これらは問題意識を持つことに繋がる貴重な体験だという側面もあるかもしれませんが、負担が大きすぎると、統合に時間がかかったり、せっかく持った問題意識や関わりを持続する妨げになる場合があります。このような体験をした二人の日本人参加者は、そのような気持ちを他の参加者とシェアしたり、参加者達とワークの外でも楽しい時間を過ごせたことや、日本に帰っても参加メンバーと繋がっていることが助けになったそうです。インタビューをした時には、社会に対して無力感を感じるけれど、出会った仲間達との関係を大切にしていきたいという思いを持っておられました。

これは加害に向き合うプロセスの中で体験するチャレンジの一つの例ですが、このワークに限らず、歴史と葛藤に個人として向き合う時には、圧倒的な体験をすることがあります。ボルカス氏は、ユダヤ人とドイツ人のワークの経験から、加害側の参加者は、自分のアイデンティティーの加害の側面だけでなく、アイデンティティーの多層性を維持することが助けになると言います。例えば、この難しさを体験した男性参加者も、書道を通して中国人参加者との交流があり、日中の関係を書道での繋がりと精神性でとらえることが大きな資源となっていました。このようなアイデンティティーと歴史の多層性をどの瞬間にもある程度維持していられるような、レジリエンシーを促すエクササイズや、加害と被害の二極に集約しない対話ワーク、日本の被害についても触れるワークがもっとプログラムの中に組み込まれることが非常に重要なのではないかと思います。

また、ワークが終わってすぐにはわからなかったワークショップ効果の実感

を、インタビューを通して両国の参加者に伝えることで、参加者の難しさの感覚が薄れるところも見られました。日本政府と国民を分けて考えるようになったという中国側の声を聞いて、日本人参加者は嬉しく思う様子が見られましたし、自分達が難しいと感じたシーンがとても意味があったことを聞いて安堵感を示した人もいました。ですから、インタビューを通してお互いのその後の様子やワークショップの効果をすることもワークの続きになっていると感じました。

③謝罪のテーマ

2011 年のワークでは、謝罪のステップについて体験的に考えるエクササイズがあり、謝罪についての探求は一つのテーマでした。その体験の多様性と葛藤について触れてみたいと思います。

まず中国側から見ますと、9 名中 4 名の方は、一般市民が過去の歴史について謝罪することに疑問を持ったようです。この中には、民間の和解の努力は意味があるが、日本政府の謝罪が広く一般に認識されることの方が両国の関係を良くするためになると思うという方が 2 名、大切なのは政府の謝罪で、市民の謝罪はまったく必要ないと思う方が 1 名、また、民間がいくら努力しても政府がそれを軽視する態度を取れば、民間の謝罪は意味がないと言う方が 1 名おられました。また、政府からの謝罪がなくても、民間の謝罪があれば、政府と国民を分けて考えることに繋がるため、民間の謝罪はやはり必要であるという人が 9 名中 2 名おられました。政府が軽視するなら民間の謝罪は意味がないと言われた方も、日中が共同で行なった追悼式で一緒に献花し死者を慰めたことが一番心に残ったと言われていました。殆どの方は政府からの謝罪がほしいと言われており、これは 2011 年の日本人参加者の多くがワークショップの中でも無力感を感じた部分でした。

次に、これに対する日本人側の体験と葛藤の例です。日本人男性参加者の 2 名は、日本人の参加者グループの中でも、ワークショップの中でも、謝罪のプレッシャーを感じたと言います。参加者の一人は、日本人も中国人もこの戦争で亡くなったので、両国の死者に対してお参りをするという気持ちで参加しており、謝罪に関する文化の違いや、お互いにとってそれが何を意味するかについて十分な対話をする前に形式的に謝罪を表現することは、逆に中国の人達に対して失礼になると感じ、葛藤したと言います。彼は中国側参加者との交流か

ら、安易な謝罪よりは同世代としての対話を求められていると感じており、一度謝罪して終わるのではなく、これから何度もお参りと対話をしに来ることを大切にしたいそうです。またもう一名の参加者は、謝罪するべき歴史があったことはよく理解できるが、自分がやっていない事に対して膝をついてまで謝るべきかと悩みました。ワークショップは日本人参加者に、中国人に対する謝罪を強要するものではありませんが、年長の他の参加者が膝をついて謝罪を表現したり、深く頭を下げている場面を目の当たりにすると、強要はされていなくても、目上の人よりも軽い姿勢で表現することがはばかれる。この二名は、追悼式で目上の参加者に習って膝をついてみた場面もあったが、後に後悔を感じたそうです。

在日朝鮮人の参加者とのインタビューの中でも一緒に謝罪について考えました。謝罪とは何のために、誰のためにするものなのか。それぞれの文化にとって謝罪とは何か考え、対話してさらに意識化していく必要があります。謝罪をすると、被害側の参加者に許しや癒しを与えなければならないというプレッシャーが発生します。実際、ナムムの家でも謝罪をする日本人訪問者に対して「許す、癒す」役を引き受けている元従軍慰安婦がいるそうです。辛いのは女性のほうであるにも関わらず、日本側の参加者が謝ってスッキリし、これで解決したというような感覚を持ってそれで関係が終わってしまいそうなことに疑問を感じるそうです。誰のための、何のための謝罪なのか、許しや癒しを安易に求めるのではなく、加害と被害の二極性を乗り越えて、一緒に問題意識を持ち続けることを大切にしたいほうが良いのではないか、という問いが浮かび上がりました。

ワークの中でよく謝罪が表現される場面は二つあります。一つは生存者の証言を聞くと、もう一つは揚子江で共同で追悼式をするときです。2011 年の時も、証言をしてくださった夏さんに対して参加者が膝をついて個人的な謝罪の気持ちを表現する場面がありました。夏さんは、それを阻止し、「あなた達がやった事ではないのだから、日中の若者達は仲良くしてください。」と、参加者を救うような言葉をかけてくださいました。

揚子江の追悼式の捉え方は様々で、「一緒に死者を慰める」と思っている中国人参加者もいれば、「お参り」ととらえている日本人、または悲しみや謝罪の気持ちを表現したい日本人参加者もいます。しかし確かに、日本人学生にとっては、中国の方々に見守られながら年長者が深々と頭を下げている横で、それ

以下の姿勢でいることは、いくら「好きなようにやりなさい」と言われても難しいでしょう。若い世代の参加者がこのように感じていることや、文化間、世代間のスタンスの違い、謝罪や追悼の意味などを考慮して、これからも対話を続けていく必要がありそうです。

2013年の今回はこの部分に配慮して、参加者にも意見を出してもらい、どんな風に追悼式を行なうかを話し合って決めました。これまでとは、お花の種類も追悼のスタイルも変わり、日中韓米混合のこれまでより自由な雰囲気 of 式になりましたが、参加者のみなさんはどんな感想をお持ちになったのでしょうか。また感想を聞かせていただけることを楽しみにしています。

簡単ですが、三つのテーマについてお話ししました。私自身参加して思うのは、このようにしてワークで浮かび上がって来た様々なテーマを、共に模索し続けていくことに意味があるとあらためて思っています。今回のワークショップでは世代間の感じ方の違いによるテーマも多く浮かび上がったように思います。これまではボルカス先生の HWH をどのように日中間やアジアの問題に適用していけるか、その「型」を模索して来たように思いますが、そうではなくて、様々なエクササイズを応用しながら、毎回異なる参加者が、グループと個人の課題を探索しながら、ファシリテーターと協力して毎回みんなでワークショップそのものをつくりあげていくことが良いのではないか、と思うようになりました。決まったレシピがあるのではなく、みんなで材料を持ち寄って、その時その場でしか作れない、味わえないものを料理長と協力して作っていくようなイメージです。いつか日中の参加メンバーがチームで料理長となって、このようなワークショップのファシリテーションができるようになればいい、と思っています。

今回のワークでは、私はどちらかというと一参加者として体験させていただき、色々な学びがありました。村本邦子さん、村川治彦さん、アルマンド・ボルカスさん、張連紅先生、羅萃萃先生、陶琳瑾さんをはじめ、今までこの試みに関わってくださった名前をあげきれないたくさんの方々や参加者のみなさんに、本当に感謝しています。ありがとうございました。

4-2 Remembering Nanjing 2011 Participants Interview

Aya Kasai

California Institute of Integral Studies, East West Psychology Student

My name is Aya Kasai. I'm a student at California Institute of Integral Studies. My grandfather was a military police officer in China. He never told me what he did but in 2007, I visited Nanjing for the first time and learned what the Japanese military did. I felt deep grief. My father was born in China a week before the war ended, and my grandmother walked back to Japan with three children. It took them a year to walk from China to Korea and to take a boat back to Japan, they were given food and shelter along the way. I am here today because they survived and I feel grateful for the help they received. So I wish to do something to build peace. This is the 7th time that I've visited Nanjing. I truly appreciate being part of this project and your warm welcome every time.

I interviewed participants of the 2011 gathering who are the third-generation of Sino-Japan war. Most of the interviews were conducted about a year after the workshop. This Remembering Nanjing project is a dialogue program that applies Healing the Wounds of History developed by Armand Volkas. HWH facilitates reconciliation by focusing on 6 steps: 1. Breaking the taboo, 2. Recognizing humanity in each other, 3. Recognizing the potential perpetrator in all of us, 4. Sharing grief, 5. Act of creativity and integration, 6. Working together to create ritual, performance, 6. Transforming trauma into acts of service or creativity.

My interest is in finding out how the participants experienced the workshop, what the challenges were. Documenting and understanding the wide range of experiences and the gap between the intention and experience can help us in creating the next steps. From approximately 40 participants, more than 15 people have participated in the interview. Someone had taken a night train from a distant city just for the interview and I truly appreciate your cooperation. The 15 participants include 8 Chinese, 1 Chinese resident

in Japan, 5 Japanese, and 1 Korean in Japan.

I'm still in the midst of analyzing the data but here, I would like to share my findings on 3 themes; 1. Perceived outcome of the workshop, 2. Challenges, 3. Theme of apology. What I am going to share is from 2011. Every year the content of the workshop as well as the participants changed, so my sharing is only specific to 2011. Some characteristics of the 2011 workshop was an incorporation of playback theatre, exploration of the theme of apology, chair work that encouraged participants to act as the other.

1. Effect of the Workshop

For Chinese participants, the workshop seemed to have changed the image of Japan and its citizens. For Chinese participants who had little or no interaction with Japanese people before but gained impressions only from the media and history education, dialoguing with Japanese people helped their attitude toward Japan be less affected by the media. They also said that it helped them to think of nation/government and its people separately. Some of these participants stated that when people around them are making general comments about Japan and Japanese people, they either don't participate, suggest people to be rational, or share their experience of the workshop and interaction with Japanese people. Some participants who have had interactions with Japanese people through work or their study stated that the subject of war history became easier to talk about, and their relationships deepened. Participants included students of psychology, history and Japanese language. Some psychology and Japanese language students stated that they think about history and how they relate to it more. On the other hand, some history students stated that they bring a psychological point of view to their history studies as well as take a more neutral stance. All interview participants stated that they would participate in a workshop like this again if they have a chance.

Some Japanese participants stated that they moved away from thinking about history in terms of historical facts and numbers of victims, but accepted the fact that the Japanese soldiers committed violence, and the

personal stories and feelings of the survivors. One participant stated that he renewed his belief that even one person should not be killed. He got to see how Japanese and Chinese people think differently about things because of the different education they received. He thought that no matter how differently they think, instead of trying to change one another, we can perhaps value the capacity to accept the difference and to bring that capacity beyond a China-Japan relationship but to his life and his work as a clinician. This person mainly experienced change in his capacity for acceptance and tolerance for the differences. One person also stated that he is more aware of the fact that a group can collectively move toward violence and thinks often about current Japanese politics. Another person became more clearly aware that the current political problems he sees on the media are affected by the past. These are from the interviews with the Japanese male participants and I am working on the women's interviews. One thing I might be able to say is that perhaps women participants identify more deeply with the victims because the stories they encounter in Nanjing often contain violence against women and children by male Japanese soldiers. Women participants can empathize strongly with the victims but also accept responsibility of the perpetration and this complicates their experience in the long term. This is my impression from the interviews so far.

2. Challenges

In the past, participants often shared with me their challenges personally so I wanted to document these as well. Here I will share one example from the interview. In the 2011 workshop, there was chair work that encouraged the participants to step into each other's role. Japanese participants took on the role of the Chinese participants and expressed anger toward Japan. This was remembered as a transformational moment for many Chinese participants. People were impressed to see Japanese participants expressing what Chinese people felt but was difficult to express.

This was an important scene for the Chinese participants; it was also

experienced by some Japanese participants as one of the most difficult scenes. One participant reflected, "I couldn't do anything, I couldn't say anything. It was difficult to stay present. That was the hardest moment." Another participant stated that during the four days, she felt deep guilt as she faced Japan's perpetration and there were moments when she became flooded with tears no matter what she saw or what she did. Many Chinese students offered her consolation by saying, "You did not do this, it is not your fault," but she felt sorry for burdening them with the effort to console her. This kind of experience may be important in recognizing an emotional connection to history but when it is strong, it may take a long time to integrate or becomes the cause of being overwhelmed that inhibits further interest. Fortunately, these two participants were able to share their feelings with other participants within the four days and were able to receive support. They recognized that the fun time they were able to spend with other participants during the four days and being connected to other participants helped them as well. At the time of the interview, they felt powerless against the society at times but also felt committed to nurture their personal relationship to people they are now connected to.

This is an example of challenges experienced by the participants when facing perpetration. When facing history and conflict as an individual emotional experience, a feeling of being overwhelmed is inevitable at times. Learning from his work with Germans and Jews, Volkas suggests that it helps the participants to sustain a multi-layered nature of their own identity in order to be able to face the history. The male participant who experienced difficulty interacted with a Chinese participant through their common interest in calligraphy. He recognized that being able to see a China-Japan relationship through the calligraphy culture served as a great resource. So it may help the young Japanese participants if we bring in more exercises that foster resiliency in maintaining the multiplicity of their identity throughout the workshop, as well as more dialogue work that does not focus on the bi-polar relationship between perpetration/victimhood.

In addition, it seemed important that participants should know how

others are doing and what impact their efforts made on the others in the long term. Interviewing them and communicating to each group what others had experienced seemed to alleviate some of the unfinished feelings the Japanese participants experienced. They seemed happy to hear that their presence had helped Chinese participants see the nation/government and people separately. They also experienced relief in learning that the scene they experienced as difficult, had a great impact on the Chinese participants. So I felt that keeping in touch with the participants and learning about each other's experience is an important continuation of the work.

3. Apology

In 2011, there were exercises that encouraged the participants to explore the steps of apology and forgiveness. Here I will attempt to capture the variety of their experiences and some of the themes that arose.

For the Chinese participants, four of the nine interviewed enquired about a citizen expressing the feelings of apology personally. Within them, two people felt that even though the attempt for reconciliation by citizens has meaning, the apology by the Japanese government being widely recognized would be more helpful. One person felt that the citizen's effort is meaningless if the government does not recognize or act as if they do not care. Two people expressed that even if the government does not give an apology, the citizens effort will help people to think separately about the government and its people, therefore the citizen's apology is important. Even the person who felt that the citizen's effort is meaningless unless the government acts differently stated that his most memorable moment of the four days was the memorial service when they went up the steps in pairs of Japanese and Chinese and offered flowers to the memorial site. Most people expressed that they wanted a government apology and this was also one of the things that some Japanese participants felt helpless about in the workshop.

On the other hand, two Japanese male participants named their

challenges as feeling pressured to apologize in the workshop itself and among the participants. One of them shared that he recognized both Chinese and Japanese people died in the war, so his stance in participation is that of commemoration for all victims. He also stated that apologizing without enough dialogue about what that means and our cultural difference in apology is more disrespectful to Chinese participants. When he interacts with the Chinese participants he receives spoken and unspoken messages that they just want to connect as young generation. Instead of apologizing once and feeling done he would rather come back again and again to dialogue and to commemorate. Another participant understood that there was history that deserves an apology but questioned the degree in which to express, i.e., kneeling. The workshop does not force the Japanese participants to apologize to the Chinese but when older participants kneel down to express apology and when they bow deeply, they hesitate to go any lighter. Both of these participants have an experience of kneeling at the memorial service to go along with the other participants but regretted it afterwards.

In an interview with a Korean woman in Japan, we thought about the meaning of apology together. What is apology and who is it for? Further discussion and exploration of apology in each culture is needed. When apology happens, there is a pressure for forgiveness. In fact, at The House of Sharing in Korea, there are comfort women who are obligated to give forgiveness to the Japanese visitors who come and apologize. If Japanese people apologize and feel healed as a result, the relationship may end there even though it is the comfort women who continue to be in pain and this issue needs continued interest from people. Is it more important that we overcome the polarity of perpetrator and victim and to continue to have awareness of these unresolved issues rather than acting out apology and forgiveness among citizens? It is a question that keeps arising.

There are two places where apology is usually expressed in Remembering Nanjing Workshop. One is when we listen to the survivors and the other is when we conduct the memorial service. In 2011, some

participants tried to kneel to express apology personally. The survivor prevented the participants from going down on the floor and said, “You didn’t do this. Young people please learn each other’s language and be good friends.” I felt the survivor said this as if to save us from feeling bad. At the memorial service, the stance of participation varies from consoling the victim’s spirit, prayer for peace, expression of grief and apology. However for the young Japanese students, when they are being observed by the Chinese participants and older participants are bowing deeply, it may be difficult to express freely even though they are told to express their feelings however they want to. We may need to continue discussing this, considering how young participants feel, the meaning of apology for different cultures and age groups. In 2013, we took these into consideration and asked the participants to co-create the rituals. The ritual felt more free style this year and I wonder how participants experienced it. I look forward to hearing the voices of the participants.

I talked about the three themes. I think it is important for us to continue to explore these themes that were stimulated in the workshop. During this year’s workshop, I witnessed a big generational gap. Up till now, we have been exploring how we can apply Volkas’ method to China-Japan problems and in other Asian context and I was in search of a form. But perhaps what we need to do is for the participants to have a more collaborative stance with the facilitator in co-creating the workshop. We cannot have a recipe because the participant’s age and how they think and feel about the history changes every time. So I imagine a facilitator is like a chef and we bring different ingredients and co-create something unique every time. I hope that one day Chinese and Japanese people will be able to take on the role of the chef and facilitate workshops like this in future.

During this workshop I was more of a participant and learned so much. I would like to thank, Kuniko Muramoto, Haruhiko Murakawa, Armand Volkas, Zhang Lianhong, CuiCui Luo, Linging Tao and many other people who have participated in making these gatherings possible. I truly appreciate your effort.

5-1 直面创伤 共同成长

陶琳瑾 南京师范大学心理学院

大家下午好！我叫陶琳瑾，来自南京师范大学心理学院。2009 年的这个时候，我参加了为期四天的 HWH 工作坊，当时我在备战博士论文，正因为论文的主题“宽恕”跟工作坊主题的相似性，我才决定参加，没想到体验了一次奇特的旅程。5 年来，与工作坊和这个团队的不断深入的联接，让我觉察到自身与此有关的成长。

第一个方面，我对这个工作坊和这个课题的防御心理降低，感受到内心的开放。

在此之前，我已经有好多年有意无意地让自己避免过多地卷入战争的残酷画面了，因为来到南京，自然就背负起了历史的沉重。也许这可以用荣格的集体无意识概念来解释。刚知道有这样一个活动时，我仅仅是被活动主题的附属因素所吸引：Aya 研究表现性艺术治疗，而我此前对绘画治疗产生了兴趣；我的研究课题“宽恕”跟这一活动似乎有些关联。但我心存疑惑，人为的灾难总会带来仇恨、排斥，对于这样一类涉及政治、历史、社会的事件，我不确信心理学能在这其中起到多大的作用。事实上，我参加的时候，因为他们的这个主题，其实我的内心是一种隔离的状态，只是抱着想看到底是怎么回事的想法和心情。

但是第一次的工作坊以后，我的这种隔离状态就在慢慢被内心的柔软所替代。印象深刻的一个细节是，当 Armand 要求一名日本学生和一名中国学生面对面玩“‘You hurt me!’、‘I’ m sorry!’”的游戏时，我对着我的 partner 大声喊着“你伤害了我！”，可是我发现我的声音越来越小，原因是，我盯着对方小姑娘那双清澈的眼睛，这双眼睛明亮、纯净、善良，没有一丝遮掩，它触动了我内心最柔软的部分。最后两个人竟然是调皮的语气，虽然语言不通。安全感从此开始在心底悄悄蔓延。在工作坊最后，我们有个小组讨论，我就表示了一个疑惑，就是说，这样一个吃力不讨好的事情，就像星星之火一样的，以后怎么去做下去，我一直有这样一个困惑。是好事，但是这个力量好像很小。当时我们小组里的高原瑜加则说，至少我们可以做一些力所能及的事情。当时我印象很深刻。这个也是我从工作坊以后，也是自己的心里增加的一个内容。

一开始 09 年我参加工作坊的时候，我参加活动的投入程度其实不是那么高的，没有办法控制自己完全投入，但 5 月份参加日本的工作坊，也是阿曼德带领团体，我就感觉自己真的是完全投入进去了。而且我还上去做了表演，每一个组表演一

个故事，当时我演了一个日本老兵，当时的情景是，这个日本的老兵在医院里面受到中国女孩子的友好对待，可他心里面一直埋藏着一件心事：他年轻的时候在中国干过坏事。但在养老院里，却得到了中国女孩的悉心照顾，我演了这样一个日本老兵的角色，我很少演角色，但觉得自己投入程度非常高。我确实体验到那种犯了错误，却又感受到友好的那种矛盾心理，一方面要掩盖所犯的错误，因为这种否认是人最基本的也是不成熟的防御机制，一方面要去否认这样的一些罪行，然而另一方面，自己又开始良心发现，所以就产生矛盾的心理。

我去年暑假去了一趟云南腾冲，在那里参观了国殇墓园，这是当年云南人民保卫自己的国家不受侵略的见证。当时边境的人们，男的去参军，女人和孩子、老人参加修建滇缅公路，在国殇墓园里，埋着这些因战争而死亡的灵魂，一个人一个碑，大概有 8000 个墓碑，我是第一次看到这么大的墓地，非常震撼。还看到一些雕塑，用石头做成的妇女和儿童拉石头、铺路的情形。旁边还有一个坟墓，叫倭冢，当时那边的人解释，是为了显示人道主义，当时的日本兵阵亡之后，也埋了，碑是给他们立的。就像我们回忆历史的时候，心里面所放的东西，里面的这种庄严、悲伤，但也有这样一种人道的情怀吧。我现在回忆这个历史时，心里面也有一个国殇墓园，把一些东西放在里面，它会跟我有联结，如果以前没有参加这么一个活动，可能就只有纯粹的愤怒，或者是同仇敌忾的那种气势，但是现在我的情感会在另外一个更高的、超越的一个层面来看待和体验这些。这是人类共同的课题。

第二个方面，我发现自己能接纳与这个课题联接时内心所涌现的认知和情绪。

我跟工作坊的结缘源于我当时要做的论文，因此我在工作坊里的几次发言和访谈都提到了我的论文，但一直没有机会展开讲。今天，我想花一点时间解释一下让我跟工作坊发生联系的这个另外的研究。我做的论文题目是《高特质愤怒青少年的宽恕干预》，针对那些比一般人更容易愤怒、更容易跟身边人发生冲突的青少年，帮助他们去宽恕生活经历中对他们产生重要影响的冒犯者，最后发现，经历宽恕的历程，他们不仅宽恕的程度变多了，而且在一项衡量对内心和他人和谐性的指标也显著增高，同时，对理解他人的想法和体验他人的情感的指标，比如：人际敏感性和共情都有显著改善。甚至有研究对象报告，在干预期间，跟同伴发生一次激烈冲突，正想狠狠反击时，脑子里面想到了我们的宽恕团体，于是他抑制了自己的冲动攻击，而当他停止了攻击之后，对方也开始出现一些友好和补偿的行为，我的研究对象也开始注意到这些友好的反应，这是以往他没有觉察到的。

在对这部分研究结果进行解释时，我发现美国研究者 wilkowski 的一个对反应型攻击者的理论模型，当个体遭遇敌对情境时，容易愤怒的个体更可能将这些情境解释为是针对自己的冒犯情境，进行敌意解释，进而引起气愤、攻击，或者反复沉思，放大这种愤怒和攻击的情绪和行为，但是在这种敌对情境中，其实还能启动一种认知资源，叫努力控制资源，当个体能够运用这种资源时，就能对敌意解释进行重新评估，进而可以抑制愤怒表达和攻击行为。现在的研究者还没有找到公认的办法如何来增加一个人的努力控制资源，但我认为，我在宽恕干预时给研究对象所提供的宽恕视角，就可以帮助他们增加原有的努力控制资源，因为他们获得了应对日常人际冒犯、冲突、敌对的另一种有效的办法。

我在上面提到，说我在参加工作坊之后心里增加了一个内容，这是说，至少我从认知上，会多了一种看问题的视角。有些人会陷入一种非理性，像去年有段时间的非理性排日现象。当然现在中国已经比以前好了，去年五月份我去日本之前，我中学同学知道了我要去日本，他们在 qq 群里面，我是回来之后才看到的，他们就说不要买日货啊，抵制日货啊什么的，会有这样的一些言论。然后我会跟他们说，要理性的爱国，不要情绪化的什么都抵触。有的时候很多人就是一种从众，而且也是一种习惯，一种条件反射，听到日本人就会抵触。但是生活中也不全是这样的人，包括日本人里面也不是全部是不友好的人。我这样在想法上的改变，也许可以解释为，我在这几年跟这个项目的联结中，也增加了自身的努力控制资源。

在参加这个工作坊的过程中，我发现自己曾一度被一种矛盾的情感所包围，感觉自己的内心被搅动了，我想在座也会有人有同样的感受。作为一个中国人，面对另一个集体对本集体犯下的罪行，不堪回首，难掩愤怒，而作为一个人，面对同样善良、无辜的下一代，我也没有办法掩饰自己心里自然流露出来的温情。这种我自己深刻体验到的正反两种情感共存的状态，在我写论文的过程中，我在我的研究对象身上也捕捉到了，通过两个月的干预我也没有让研究对象从憎恨伤害他们的人转而完全宽恕或和解，于是我专门用一章内容来讨论这样一个状态，也就是我的研究对象心里的恶和善、内心仇恨和柔软共存的状态。当时我一直在思考，我的这种状态算不算已经宽恕了或者正在宽恕呢，最后我觉得宽恕应该是一个过程，就是像我们这样的一种体验，善恶共存的一种状态，应该算作正在宽恕的路上。这实际上就来自我从工作坊的受益，否则的话我会更纠结或遗憾于研究对象那些依然消极的认知和情绪。其中描述宽恕到底是什么，它不一定非要指最后的结果，比如像我们这样的活动，最终也不可能达到完全和解的结果，而是

善恶共存的很长的一个阶段，这也可以是治疗的目标。我想，宽恕的确不是一件容易的事，但至少我可以有随时迎接它到来的开放心态，而且我也不必掩饰内心的真实感受。

我在第一次活动后的感想里写到的，我们参观南京大屠杀纪念馆，当时村本老师在门口，看到那个大的石像，她就已经忍受不了在那边哭，在那一瞬间会有抵触心理，我就想里面的比这个外边的惨烈多了，里面的是真的，外边的只是石像，当时就那一刹那，会感觉她有点不真实。慢慢深入的了解之后，尤其是去了日本之后，看到他们立命馆大学有个博物馆，据说日本好多的博物馆都是国内的立场，但是他们那个和平馆，各种立场都有，包括有很多的中国的立场，也有一些大屠杀的资料，所以他们还是一个相对公平的立场。而且我也听那边的学生讲，村本老师在日本做了很多这样的工作，我从心里面由衷的佩服。我也由衷感觉到他们在国内开展这样的工作很不容易。尤其是这次听说这次工作坊是最后一次了，心里面会有些遗憾。但我就在想，任何的这种技术上的治疗，可能都比不上让人看到，在恶和仇恨中间所浮现出来的这种善和真诚，这是最重要的。我想这是最重要的疗效因子。

刚才说的认知方面，情感方面有的时候会有一种担心，当然更多的会是一种牵挂。中国有一部电视剧叫【大宅门】，里面讲到抗战时期，有两家人，一家中国人，一家日本人。他们之间是世交，建立了深有的友谊，但是仗打起来了，这个日本朋友的后代跑到中国来，他也是一个士兵，他也有自己的立场。当这两种立场代表两个民族、国家利益的时候，就开始有了激烈的冲突。就像他们去年十月份过来访谈时，中国当时的那个形势，因为钓鱼岛事件，很多中国人特别愤怒，也有一些过激的行为，所以从一开始我就会有点担心，他们出行时会不会遇到什么麻烦。那天他们去郑和公园，我把他们送上出租车，当时心里面还担心这个出租车司机不要发泄什么情绪。但我发现我们酒店的保安还挺好的，还用简单的日语跟他们会话。所以我还是选择相信人和人还是有分别的。我真诚的希望，在日本，像立命馆大学里这样的立场和声音会更多一些，也希望日本政府能像德国一样，减少自己的一些防御，承认历史上的错误，面向未来，共同发展。因为我不希望看到我们民间建立起来的这份友谊有一天遭遇两难的情境。18号晚上在Aya的房间参加了她的表达性艺术治疗团体，最后我的作品是一个女子划着一条船，我说这叫“飘扬过海去看Aya”我希望这是个浪漫的象征，而不是一个无奈的象征。

在第一天晚餐时，张连红老师提到，我将来可以设法去开一门与此有关的课

程，找机会邀请村本教授一行来给更多的同学讲座，虽然我目前会面临一些困难，但我想这个约定我会记在心上，在将来创造机会，朝这个目标努力！

最后的最后，我祝愿大家能因为这个工作坊，与内在的自我相连接，直面内心原本不愿意面对的东西，迈出成长的一步！世界永远不是我们理想的那样，但会是我们相信的那样！

谢谢大家！

5-2 ト라우マに直面しながら共に成長していく

陶琳瑾 南京师范大学心理学院

皆さん、こんにちは！私は南京師範大学心理学院からきたもので、陶琳瑾と申します。2009年の今頃は、私は4日間にわたったHWHワークショップに参加しました。当時、ちょうど博士論文を書いていました。論文の研究テーマは「許し」で、このHWHワークショップの内容と関連性があると思って参加させてもらうことにしたのです。意外なことに、HWHワークショップで、私はとても奇妙な旅を体験させられました。5年来、このHWHワークショップとこのプロジェクトのグループとの付き合いが深まっているうちに、私自身もこの研究とともに成長してきていることに気がつきました。

まず一つ目は、このワークショップとこのプロジェクトに対する心理上における警戒がなくなり、オープンにするようになりました。

このワークショップに参加する何年も前から、意識的に無意識に残酷な戦争画面に多く巻き込まれることを避けてきていました。なぜかというと、南京に来てから、歴史的な重荷を自然に背負ってしまうようになったからです。多分、これは「ユング的」集団無意識的概念で説明することができるかもしれません。このワークショップのことを知ったばかりの時に、ただ、このイベントのテーマと関連している付属の要素に惹かれただけです。

一つは、綾さんの表現アーツセラピーという療法です。これまでは、絵画の療法に興味がありました。

私の「許し」という研究テーマはこのプロジェクトとなにか関連性があるの

ではないかと考えてきたのですが、やはり疑惑を持っていました。人的な災難には常に憎しみや排斥がついています。ですから、このような政治的、歴史的、社会的災難事件に対して、心理学はどれぐらい役に立つのかと、とても半信半疑な気持ちでした。事実上、参加していても初めの時は、こんなテーマのため、内心はずっとある種の隔離状態となって、ただ、HWH ワークショップとはどういうものなのかとずっと観察したいという気持ちを抱えていました。

しかしながら、一回目のワークショップを体験した後、内心の隔離状態は徐々に柔らかな状態に変わってきました。特に印象に深く残ったささやかなことがあります。それは、アルマンド先生が「You hurt me !」、「I'm sorry !」というゲームをしなさいという指示に従って、中日の学生は互いに見合いながらゲームをしている時に、私は、私の partner に大声で「あなたが私を傷つけた！」と叫び続けました。しかし、私の声がだんだん小さくなっていくことに気がつきました。どういうわけなのか、実は、相手の女の子の澄んだ目を見つめたときに、あの目はとても澄んで、単純で、優しく、すこしも偽りはありませんでした。あの目こそ、私の内心にある最も柔らかなところに触れたと思います。結局、二人とも、なんとやんちゃな口調で遊んでしまうようになりました。互いに言葉が通じなかったけれども、その時から、安全感はそれぞれの胸の底から知らないうちに湧いてきたのだと思います。

ワークの最後に、小グループのディスカッションというステップがありました。その場で、私は1つの疑問を出しました。つまり、こんな骨折りで効果の出てこないことはまるで小さな一つの火花のようなものですが、これから如何にして、広く展開していこうかという疑問でした。実は、この疑惑をずっともっていました。このプロジェクトは確かに素晴らしい事ですが、あまりに力弱いものではないか。私の疑問に対して、グループメンバーの高原瑜加はこう言いました。「私たちは少なくともできる限りのことがやれるのではないか。」と言いました。高原瑜加の話はとても印象的でした。これもワークショップに参加してから、自ら増えた一つの内容です。

2009年に、初めてこのプロジェクトに参加する時、それほど投入していなかったと思います。なぜかという、どうしても自分を完全にワークに投入させることができなかったのです。しかし、その後、その年の5月に日本に行って、そこで行われたワークショップに参加させてもらいました。あそこのグループも、アルマンド先生が指導しているグループです。その時、自分が本当に完

全にワークに投入したと感じ、しかも、私も、一つの演技を示しました。グループごとに一つのストーリーのパフォーマンスを表現するときに、私は元日本軍の老兵を演じました。

そのストーリーは次のものです。ある老兵は病院で中国の女の子がやさしく介護してくれたが、老兵の胸の底にずっと一つのことを秘めていました。つまり、彼が若い時に中国で悪事をしたことです。しかし、それでも老人施設である中国の女の子が行き届いた介護してくれたというストーリーです。私が演じた役はこの日本老兵でした。私はあまり演技をしたことはなかったが、その時の自分は、その役を演じるのに無我夢中でした。その罪を犯したが友好に取り扱われたという複雑な心理をその時、確実に体験しました。

犯した誤りをひたすら隠そうとする否定行為は、人間の持っている最も基本的で未熟な防衛的メカニズムです。だから、犯した罪をひたすら隠そうとします。一方、自分の良心が働き、葛藤する心理が生まれてきたのです。

去年の夏休みに中国雲南省の騰衝というところに見学に行きました。そこで国難墓地に参拝にいきました。それは、雲南省民が侵略から国を防衛した証です。当時、国境に住んでいた人々は、男は軍隊に入り、女、子供と老人は雲南・ミャンマー道路建設に参加しました。その戦争で犠牲になった人々がその国難墓地に埋められ、それに、一人に一つの石碑があり、約 8000 個の墓碑がそこに立っています。こんな巨大な墓地を見たのは初めてで非常に驚きました。また、いくつかの彫像を見ました。それは、石作りの女性と子どもの彫像で、石を載せた車を引いたり、道路を舗装したりして働いている場面です。そのすぐそばに、もう一つ墓があり、石碑に倭冢と書いてあります。ガイドの説明によると、人道主義を示すために、その戦争で戦死した日本兵も埋めたそうです。石碑は死んだ日本兵のために立てたものです。このことは、まるで、歴史のことを思い起こすときに、いろいろなものが湧いてくるのですが、厳かなもの、悲しいもののほかに、人情というものもあるようなことでしょう。

今現在、私はその歴史を振り返る時も、心には常に、国難墓地があり、いろいろなものを中に入れておき、それらのものは、私と繋がってくると思います。もし、このようなワークショップに参加しなかったら、心には、おそらく、単なる怒りしかない、あるいは敵愾心ばかりが燃えるかもしれません。しかしながら、今の気持ちはまたもっと高くても今までの層面を超える視野から、この歴

史のことを体験し、見るようになりました。これは人類共通の課題だと思うようになるからです。

二つ目は、この課題に触れる時に内心から湧いてきた認識と情感を受け入れられるようになったことに気付きました。

このワークショップと縁を結んだのが博士論のため、グループ活動において何回も発言をし、インタビューを受けた時に、すべて博士論に言及しました。しかし、研究内容についてはずっと展開して話す機会がなかったので、この感想で、少し時間をかけて私とこのワークショップを繋げる研究内容について説明しようと思います。

私の博士論の研究課題は『高特質憤慨青少年への寛容による介入』です。研究対象は普通より怒りやすい、周りの人と衝突を起こしやすい青少年です。狙いは、普通の生活経験の中で彼らに重要な影響を与えた、つまり彼らを侵害した者を寛容にするように助けることです。

結局、寛容の過程を経験して、彼らが他人に寛容になる程度は高くなり、しかも、自ら他人と協調する程度を測る指標も明らかに高くなったことがわかりました。それと同時に、他人の考え方を理解することや、他人の感情を体験する指標、たとえば、人間関係に対する敏感程度と同感も著しく改善されたことがわかりました。

さらにある研究対象からの報告によると、介入の期間中、仲間との間に、衝突が発生し、その相手をさんざん反撃しようとする時、寛容グループのことを思いだすと、自ら衝動的攻撃を抑えたとのことでした。そうして、一旦自分からの攻撃をやめたら、相手からもいくらか友好を示してくれて、補償的行為さえしてくれたとのことでした。本研究の研究対象も相手からの友好的反応にも気づき始めたようです。いままで彼がこのことに気づいたことはなかったようです。

このような研究結果について分析する際に、アメリカ研究者 wilkowski の反応型攻撃者の理論模型を見つけました。すなわち、一人が敵対的環境に置かれた時、怒りやすい人間はこのような環境が自分に向かって犯す環境だと思い込みがちなので、敵対的環境だと思ってしまい、結局、怒ったり、攻撃したりするようになります。あるいは、繰り返して考え込んだりして、怒りと攻撃の情感や行為を拡大してしまいます。それにしても、実は、このような敵対環境に

おかれても、ある認知資源というものを呼び起こすことができます。これは、「努力制御資源」というものです。すなわち、個体はこの資源が運用できるようになると、敵意に対する解釈を見直すことができ、そして、怒りの表現や攻撃行為を抑えるようになるということです。ただし、如何にして個体の「努力制御資源」を増やすのかについて、今の研究者はまだ公認の方法を見つけていません。

しかし、容赦介入研究にあたる研究対象に容赦という視野を提供すれば、研究対象の中に既存する努力制御資源をさらに増やすことができますと思います。というのは、彼らは普段の人間関係にある侵害、衝突、敵対に対応する別種の有効的手段を獲得したからです。

また、ワークショップに参加してから、私は自ら一つの内容を増やしたと前に言いました。これは、少なくとも、今の私は物事を認識するにあたって、もう一つ新しい視点を持つてみるようになるということです。

一部の人々は非理性的な境地に陥りがちです。例えば昨年起こった、彼らが起こした非理性的日本製ボイコット現象です。もちろん、今の中国は、前よりずっと良くなりました。昨年5月に、私が日本へ行く前に、中学校のクラスメートは、私の訪日のことを知って、ネットのQQコーナーで、「日本のものを買わないでよ」とか、「日本製ボイコットをしてね」とかと言ったようです。でも、彼らの議論は私が帰国してから見たのです。見てから、愛国はいいですが、理性的でなければならないとか、なんでもかんでも区別なしに抵抗するように感情化してはいけないよと彼らに言いました。

人が多く集まったらみんな流れに従いがちになることがあります。これは一つの習性であり、一種の条件反射でもあるでしょう。中国人には日本人だと聞くと抵抗するようになってしまう人々がいます。でも、全てそうではないと思います。日本人もそうでしょう。全て不友好な人ではないでしょう。

私の考え方はこのように変わってきました。この原因を探ってみれば、ここ数年来、このプロジェクトと連結しているうちに、私自身の「努力制御資源」も自ら増えてきたと説明してもよいのではないかと考えています。

このワークをしている過程に、私自身は、一時、ある葛藤した気持ちに包まれ、内心がかき回されたように感じました。さぞ、参加者のみんなも私と同感だろうと思います。中国人として、本集団を侵害した別の集団の罪に直面する時に、

過去を振り返るのに忍びなく、怒りを隠せない。しかし、一人の人間として、自分と同じように善良で、また、無罪の次世代に向かう際に、自分の中から自然に湧いてきた温情をごまかすこともできません。このような私自身が深く体験した表裏の感情が共存している状態を、論文に書いているとき、研究対象からとらえたこともあります。しかしながら、二ヶ月をかけて介入しても、研究対象を彼らを侵害した人への憎しみから完全に容赦や和解に転じさせることはできなかった。それで、一章で専らこのような状態、つまり、研究対象の中に共存している善と悪、憎しみと柔軟な状態を分析しました。

その時、ずっと考えていたことがあります。つまり、私のような状態はすでに許した状態なのか、あるいは許している途中の状態なのか。最後、許すという行為は実は一つの過程だと思います。まるで、今の私たちのような体験で、つまり善悪が共存している状態で、許しに向かっている途中だといえるでしょう。この認識は、私がこのワークから得た収穫だと思います。そうでなければ、私はもっと纏れこんでしまうか、あるいは、研究対象が持っている依然として相変わらず消極的認知と感情に対して残念な思いをするほかないと思います。

許しとは一体何であろうかということを述べる一節があります。つまり、許しはかならずしも最後の結果を指すのではない。たとえば、今、私達がやっているワークのような活動は、最後になっても、完全和解という目的に辿り付くことは不可能でしょう。ただ、善悪共存という長い段階にとどまるのではないかと思います。しかし、これも、治療の目標だと考えてもいいのでしょうか。許しということは確かにたやすいことではありませんが、少なくとも、私自身はいつでもそれを迎えるオープンにする心理を構えており、それに、本当の気持ちを隠す必要もなくなりました。

初めてのイベントの後、次のような感想を書きました。南京大虐殺記念館を見学したあとの印象です。その時、村本先生は記念館の玄関で、ある大きな石の彫像を見たとき、もう堪えられずに、像のそばで泣いてしまいました。その場面を見た瞬間、違和感がして抵抗的心理になってしまいました。なぜかという、外の彫像より、部屋にもっともっと悲惨なものが多いし、しかも、外のただの石像より、部屋にあるのは、すべて真実なものだからです。だから、その一瞬湧いてきたものは、彼女のちょっと不真実さへの感じでした。しかしながら、村本先生のことを少しずつ深く理解した後、特に日本に行ってから、

立命館大学にある平和博物館を見学してから、村本先生に心から感心するようになりました。

なぜかという、日本のミュージアムはほとんど、日本国の立場にたつてものを展示しているそうですが、立命館大学の平和博物館だけは、いろいろな立場も含められ、中には、中国の立場に立って展示するものも多いし、南京大虐殺の資料までもあります。だから、立命館大学の平和博物館は相対的に公平な立場だと言えます。さらに、学生の話によると、村本先生はこのような仕事をたくさんやってきたそうです。また、日本でこのような仕事を展開することは本当に難しいことだとしみじみに感じます。だから、心から先生のことをとても感心するようになりました。

今度のワークはもう最後になると聞いて少し残念に思いますが、いかなる技術上における治療よりも、悪の憎しみの間から浮かんできた善と真摯のほうがもっと大切で、これこそ、もっとも重要な医療効果をもたらす要素だと思います。

前に書いたのは、認知面のことです。感情面については、少し気がかりなところがあります。実は、気がかりより、気になることでしょうか。中国では、【大宅門】「大きな屋敷」というテレビドラマがあります。それは、抗日戦争時期の物語です。ストーリーは二つの家庭があり、中国人家庭と日本人家庭です。二つの家庭は、代々つきあって、深い友情が結ばれています。しかし、戦争が起こってから、日本人の子孫が兵士として中国にやってきて、彼なりの立場があります。二つの立場は二つの民族や国家利益を代表する時にあたって、激しい衝突が起こってしまいました。まるで、昨年10月にHWHワークショップのみなさんが中国に来てインタビューをするときの事情とよく似ていると思います。

当時、中国では、尖閣諸島事件のため、多くの中国人がとても憤慨して、過激な行動までしていました。それがために、最初、プロジェクトのメンバーが出かける時に、私は少し心配していました。何かひどい目にあうのではないかと思いましたから。その日、日本側のみなさんが鄭和公園へ行きたいと言ったので、彼らをタクシーに乗せました。しかし、その時、タクシードライバーが自分の怒りを彼らに発散するのではないかと私は心配していました。しかし、ホテルの門番の態度は友好的で、簡単な日本語で話しかけるまでしました。こ

れを見て、やっぱり人と人は違うと信じたほうがいいと思いました。

日本に立命館大学のような立場と声がもっと多くなること、日本政府はドイツ政府のように自己防衛を少なくし、歴史上の誤りを認め、未来に向かって、共同発展を図るようになることを期待します。なぜかという、民間人がやっと築きあげた友好的な絆を板挟みの境地にさせることを見たくないからです。

今回、18 日夜、綾さんの部屋で彼女のアーツセラピー活動に参加させてもらいました。一番最後に、私は自分の彫刻作品を披露しました。一人の女の子が船に乗って向こうに漕いでいる彫刻でした。この彫刻に「海を渡って綾に会いに行く」という名前を付けました。これは無力の象徴ではなくてロマンチックなシンボルになってほしいです。

初日の夕食の時に、張連紅先生から、このプロジェクトと関連するコースを設けなさいと言われたが、これから、なんとかして必ずコースを設けようと思います。それに、チャンスを作って村本教授一行を招き、もっと多くの学生に受講をするようにと約束しておきます。現在、いくつかの困難があるので、すぐにはコースは出来ません。でも、このことをしっかり約束します。これからこの目標を実現するように努力します。

最後に、皆さんはこのワークショップのおかげで、自分の内心と繋がるようになり、もともと直面したくない内心にあるものに直面できるように、成長の一步を踏み出すことをお祈りします。世界はいつまでも理想のようなものにならないが、きっと私たちが信じるようなものになると思います！

ありがとうございました！

6-1 文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方

村川治彦（関西大学）

1. 7 年間の振り返り

私たちは 2007 年以来、東アジアの戦争記憶と暴力の問題にドラマセラピストのアルマンド・ボルカスが開発した Healing the Wounds of the History (HWH) の手法を応用する試みを続けてきた。この間、領土問題や従軍慰安婦

についての政治家の発言をきっかけに日本と中国、韓国の関係は戦後最も危険な状態にまで至ってしまった。過去の紛争に関する集合的記憶が、現在の紛争プロセスにどのような影響を与えるのかを検討した Paez と Liu (2012) は、Bar-Tal の主張を引用しながら、「過去の紛争、特に戦争に関するさまざまな感情に彩られた集合的記憶 (collective memory:CM) は、人々に恐怖や不信を植えつけ、協調的解決を目指した交渉を事実上不可能にしてしまう」と指摘している。「過去の紛争に関する CM は内集団と外集団のカテゴリー化や区別を明確にし、内集団の優位性を高める」が、Paez と Liu が述べている次の一節は過去の紛争の影響が反映された日本の現状を端的に表現したものと言えるだろう。

どのタイプの文化においても、人々は自分たちの戦争を神話化する一方で、外集団犠牲者のことは忘れがちである。社会は内集団の英雄や兵士を記憶し、自集団の犯罪行為や悪行は忘却するので、内集団成員を被害者、外集団成員を攻撃者・加害者として定義し、それを反すうし続ける。こうして、暴力こそが報復の正しい形式であると解釈するようになる。過去の社会的表象は、攻撃行動を活発にし、戦争や集合的暴力を、外集団による過去の攻撃に対する合理的で正当な反応だとみなし、互いに競い合うように被害者意識を強めるといった悪循環を生みだす。(p.126)

第二次世界大戦の終結から 70 年近く経つが、これまで日本でも戦争体験の継承 (福間 2009) や戦争責任のあり方 (熊谷 2009) についての様々な議論が行われてきた。また暴力問題や戦争題材を扱う狭義の平和教育から構造的暴力や異文化理解、人権問題、環境問題を扱う広義の平和教育も幅広く行われてきた (村上 2009)。にも関わらず東アジアにおいて戦争の記憶はこのように非常に緊張を生みだしている。こうした状況のなかでは第一に、「敵対集団の非人間化をやめて人間化を行い、彼らの苦しみを理解することが和解を前進させる重要なステップである」と Paez と Liu は指摘しているが、2007 年以来アルマンド・ボルカスの協力を得ながら私たちが行ってきた「南京を思い起こす」プロジェクトは、日本人と中国人が信頼と友情関係を基盤に歴史の事実をふまえて共に手を携えて未来の関係を築いていく土台作りを目指して進められてきた (村川 2012)。2011 年からは科学研究費の助成を受けてきたが、その最終年度

である今年を一つの区切りとして、これまでの成果と今後に向けての課題をまとめていく作業に入っている。詳細なデータの分析はまだ中途であるので、ここでは 2013 年 9 月に南京師範大学で行われた国際会議で報告した仮の成果と課題について簡単に述べておきたいと思う。

京都と南京ではほぼ隔年のペースで東アジアの問題にフォーカスした HWH を行ってきたが、成果としては次の 3 つが考えられる。

① 人間としての共感を共有する：

この HWH では、南京大虐殺記念館の訪問や生存者の話を聞いた後で、参加者がそれぞれの感じたことを表現するエクササイズを行った。また最終日に燕子磯の記念碑で追悼セレモニーを行い哀悼の気持ちを表現してきた。悲惨な歴史の事実に対して、日中の参加者が哀しみや怒りなど様々な感情を率直に表現しあうことで、互いの理解が進み、親密な感情を共有することができた。

② 歴史を自分の問題として捉える：

日本と中国のそれぞれの教育の違いを乗り越え、共感をベースに自らが直接関わったものではない加害や被害の体験を自らの感情を励起する直接的な体験とすることができた。また戦後の歴史教育によって東アジアの人々と戦争体験について共通理解が欠如している日本人にとっては、日本人家族のつながりのなかで伝えられてきた戦争体験をてがかりに戦争体験を過去のものではなく現在に生きる自分の問題として捉えることができた。

③ 世代間伝達的重要性：

日本と中国の間の社会的文脈の違いだけでなく、それぞれの社会においても様々な戦争体験伝達のパターンがあることが明らかになった。特に日本も中国も時代の変遷のなかで戦争体験に対する世代間の違いが大きくなっており、世代間の体験伝達的重要性が明らかになった。

またこれまでの参加者の感想やスタッフの振り返りなどから、以下の課題が浮かび上がってきた。

① 参加人数の限定による影響力の小ささ：

心理療法の枠組みで行う HWH では、参加者が安心できる安全な空間を作り上げることが必要不可欠な条件とされている。このため、毎回の参加者は 20 - 40 名に限定して行ってきた。3 - 4 日という長い時間をかけて

こうした少ない人数を対象に行う心理学的ワークショップには、こうした時間的、空間的制約が大きく、日中間で現在大きくなっている対立に与える影響はほとんど皆無に等しい。

② 成果の社会還元と個人のプライバシー保護の葛藤：

参加人数の制約を乗り越えるためには、直接 HWH に参加した人たちの体験を学会発表や論文はもちろん、印刷物などを通して広く社会に伝えていく必要がある。しかし、体験型のワークショップの内容を公開していくことは、個人やその家族のプライバシーの問題にも関わり容易ではない。

③ 文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方：

ドイツとユダヤの和解をモデルにした HWH は、西洋近代自我を前提にした心理的プロセスに基づいており、東アジアにおける和解のプロセスに当てはめる際には、文化的自己の特徴についての慎重な考慮が必要である。特に、国民国家の枠組みに基づくアイデンティティを前提にした罪責感や謝罪のあり方を目的としている HWH のあり方について改めて検討する必要がある。

以上の成果と課題報告のなかで、特に課題の三つ目としてあげた「文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方」については、HWH の前提やエクササイズのあり方に対する批判として小田（2012）があげた問題とも密接に関係しており、この稿でもう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

2. 国家的アイデンティティの強化と戦争責任

ボルカスは「HWH 歴史の傷を癒す」のモデルの中心にある前提の一つとして「歴史的トラウマは否定的な影響を文化国家的アイデンティティや自尊心に与える可能性がある。人間は本質的にある集団に属する存在であり、自分が所属する集団を肯定的に感じる必要がある」をあげている（ボルカス 2012）。この前提に基づき HWH では文化国家的アイデンティティの肯定的な面を自覚することで、そうしたアイデンティティを強化することを目指している。しかし、現在の東アジアの紛争状況を考えたときに、この前提は HWH がもつ最大の難点を浮き彫りにしている。すなわち Brewer（2012）が指摘しているように、「アイデンティティー特に、集団的アイデンティティもしくは集合的アイデンティ

ティーは集団紛争の起源と維持に重要」であり、しかも「諸悪の根源は集団的アイデンティティそれ自体ではなく、むしろ個人の愛着と所属への複雑さを単純なわれわれ—彼らという区分に還元してしまう単一アイデンティティ」である。ボルカスの前提は、戦争加害の責任主体として自らが「日本人」であることを積極的に引き受けることを求めるが、それはたとえアイデンティティを肯定的に変化させることを目的として設定されているにしても、そうした加害を生み出す根源としての集合的アイデンティティを強化してしまう危険性を孕んでいる。

この HWH に参加する「日本人」は第二世代、第三世代であり、直接加害に関わった経験をもたないが、戦争被害者の経験に耳を傾ける「日本人」としての集合的責任を引き受けることで、「自分が所属する集団を肯定的に感じる」ステップを進むことが求められる。しかし、ドイツのように戦前と戦後の政治体制が明確に断絶しておらず、しかも政府の高官や一部の政治家が戦争責任を否認する言動を繰り返している日本では、自らを（加害者である）「日本人」としてアイデンティファイすることは、自らを肯定的に感じるどころかそうした加害を生み出した集団主義に結びつくというジレンマを抱える。そうした矛盾に陥るのを避け自己肯定感を抱くためには、歴史修正主義者たちのように戦争加害の側面を否認し恣意的に美化した「日本」に同一化するしかない。そうすると HWH で暗黙の前提とされている「(主体的に戦争責任を引き受ける)日本人」への帰属強化することは、現在まさに直面している東アジアの紛争の根底にある国民国家主義の強化につながってしまうのだ。

こうした「日本人」というアイデンティティと戦争責任の複雑な問題について、1995 年の加藤典洋の「敗戦後論」を契機に「歴史主体論争」をめぐる様々な議論が起こった（安彦他 2012）。ここではその中でも斉藤純一（2012）による論考「政治的責任の二つの位相—集合的責任と普遍的責任」を手がかりに戦争責任のあり方について整理を試みる。

斉藤はまず、従軍慰安婦や南京虐殺の幸存者など戦争の被害者たちを（ハンナ・アーレントのいう）「暗闇」に追いやってきた時間の経過は、実際に暴力が起こった半世紀前の時間にもまして重要であり、『暗闇』に沈んだ半世紀をもたらしたのは、被害者自身の声に耳を傾けようとする用意の欠如であり、忘却もしくは『忘却の忘却』というよりもむしろ、アテンションの端的な不在である」と指摘している。このアテンションの偏りこそ、斉藤が日本社会にお

ける戦争責任のあり方において最も問題視する点である。このアテンションの偏りを是正するために、斉藤は集合的責任に加え普遍的責任を担うことを提起し次のように述べている。

戦争責任をめぐる近年の言説には、集合的責任を担う主体の形成を急務の課題と見なすあまり、『日本人』という集合的アイデンティティを強調する傾向が見受けられるが、そうした立場は、『国民的アテンション』の修正という他者の求めに対して適切に応じうるだろうか。私たちには、集合的責任への問いのみならずアテンションを脱一集合化する普遍的責任への問いも同時に提起されているのではなかろうか。

(斉藤 2012、p.79)

斉藤はこのアテンションを（日本という）国家・国民に内向的に向けることが戦後の戦争責任論議の中で一貫しており、例えば一億総懺悔のような責任の所在すら明確にしない曖昧模糊な論は言うまでもなく「国民を能動的な責任主体へと形成する」ことで戦前の超国家主義への反省とその乗り越えを目ざした丸山眞男を典型とする戦後デモクラシーさえも戦争に対する自己反省のあり方という点では同じ問題を反復しているという。同じ問題すなわち他者の不在である。斉藤が問題視しているのは、戦争責任を担う責任主体を形成するという点において、「日本人」であることにアテンションが向けられることは、「他者」を排除することにつながってしまうという点にある。つまり、「強調されるのは、責任主体に向けての能動的な自己形成であり、国民の他者との関係において、自らを問いかかけられ、呼びかけられる受動的な位相に置くことは、歴史的責任を省みるうえで不可欠の事柄とは考えられていない」点において、戦後の戦争責任論はいずれも「内向きのアテンションをもつ国民的主体のモノローグの構造」なのだ。

このHWHでは参加者がひとりずつみんなの前に立って、「私は日本人です」「私は中国人です」と発言するエクササイズがある。HWHに参加している中国人にとって私は、村川治彦という個人である前に、「日本人」参加者として受け止められる。もちろんこのエクササイズの意図は「まず第一に、文化的国家的アイデンティティを明らかにし、それを解体すること」であるが、「私が、他者から一方的に（私自身の行為や意見とは無関係に）何者か（what）とし

て集合的に括られるとすれば、それは明らかに私に加えられる暴力である」(斉藤 2012、p.88) と感じる参加者もいるに違いない。

しかし一方で、親族が日本兵に殺された経験をもつ幸存者のお話を聞いている私が、一方的に自分が日本人として受けとられることを拒否することはできない。斉藤が言うように、「他者による名指しを私が拒否することが、他者が私に加える以上の暴力を他者に対して遂行的に行使することにならざるをえない関係性が、私を『日本人』と名指す他者との間には現に存在している」からだ。いみじくも斉藤が指摘しているように、アジア太平洋戦争において日本が中国大陸を侵略し多くの中国人を殺戮した「関係性においては、他者による名指しを拒むことは、その他者対話の関係性を結ぶことの拒絶を意味し、翻ってそうした拒絶は、私が『日本人』として集合的に括られざるをえないような既存の関係性を再び強化する効果を生まずにはいないだろう」(p.88)。日本と中国(あるいは他のアジア諸国との) こうした「関係の非対称性」は歴史的なものであり、「戦後世代が集合的責任を負うべき理由は、私たちが、数多くの不正義を刻んだ歴史的関係性を先行する世代から継承し、私たち自身もそうした関係性をすでに生きてしまっているという事実」(p.89) を拒否することはそのまま今ここの関係性を拒否する暴力となるのだ。

しかしこうした整理を踏まえたうえで斉藤は、他者から「日本人」として名指しされた場合、それを拒否するべきではないと同時に、それが自らを「日本人」として定義することに結びつく必要はないことを強調している。斉藤がいうように「私たちを『日本人』と呼ぶとき他者が名指しているのは、「国家への帰属 (citizenship) そのものではなく、被害者との間にあるこうした歴史的関係性にほかならない」のだ。「日本人」としての名指しを受け入れるべきなのは、「そのように問いかける他者との間で再－交渉 (re-engagement) のプロセスを開始するためであって、加害者集団のアイデンティティをもって被害者集団に向き合うためではない」(p.90) のだ。重要なのは、「集合的主体をアイデンティファイすることではなく、自－他の間にある問題をアイデンティファイすること」である。そしてまた、そうした呼びかけのベースとなる歴史的関係性の非対称性は、そこで固定されるべきものではなく、自己と他者の双方に新たな語りを生み出す機会となるべきだと斉藤は指摘し、次のように述べている。

他者の立場にたつということが根本的に不可能であるという自覚を求める

けれども、そうした歴史的経験の違いは、双方の間に私のものでも彼らのものでもない公共の認識や記憶を形成していくことを妨げるものではない。むしろ、それぞれの国民が自らの過去を排他的に所有するのではなく、国民の境界を横断する記憶や歴史認識を共有していくためには、同じ出来事をまったく違った仕方でも経験してきた他者との語り（narrative）の交換こそが不可欠である。（p.91）

このような新たな語りの可能性を実現するためには、「ある特定の他者との歴史的関係性のゆえに、そうした他者によって問われる」ものとしての「集合的責任」とは区別される「普遍的責任」（Ardent 1994）について考えなければならない。なぜなら、「（南京虐殺や従軍慰安婦だけでなく）私たちの生は現在へと引き渡されている過去の不正義の上に築かれており、私たちは—私たちの生を形づくりながらも、私たち自身には記憶されていない—そうした不正義を生きてしまっている。過去の不正義を知らないということが、あるいはまた特定の仕方では知らないということが、私たちの生、現在の『生活形式』をつくりあげ、私たちと他者との関係を歪んだ仕方でも規定している」（p.95 - 96）からである。この認識のうえに立ってアテンションを特定の国民や国家から世界や人類、あるいは生命一般にまで広げるところに普遍的責任への視座が成立する。

たとえ周囲の支配的な判断に抗してでも自ら自身が悪をなさないよう自己を条件づける「個人的責任」や、自国による過去の犯罪にたいして謝罪と補償を果たす「集合的責任」は、必ずしも「世界への配慮」をもたらすわけではない。普遍的責任は、「われわれの関知するところではない」という「暗闇」の領域を世界のなかにつくらないようにする配慮、誰かを「見捨てられた境遇」に放置しないアテンションのあり方を求める。それは、私たちのアテンションをある閉域のなかに鎖さないという意味で「普遍的」なのである。（斉藤 2012、p.94）

斉藤が集合的責任から普遍的責任に言及するのは、集合的責任から眼を背けるためではなく「集合的責任を引き受けることの緊要さを力説する言説の多くが、他者にではなく『われわれ』に方向づけられた関心を遂行的に再

生産しているように思えるから」(p.96-97)である。戦争被害者からの「日本人」という呼びかけに呼応するのは、その呼びかけに応えることで『日本人』としての誇りを回復する」ためではない。それは「『国民の他者』の苦難に眼を閉ざさないことによって信頼を形成する」ためであり、さらにはそうした信頼を基盤に同時代を生きる人間としてともに普遍的責任を果たしていく道を探るためでもある。集合的責任を抜きに普遍的責任を語ることはもちろん論外であるとしても、生まれる以前の行為に対する個人的責任をもたない私たちが普遍的責任への視座を抜きに集合的責任の境界に留まってしまうと、意に反してアテンションを国民国家の境界へと限定することになってしまう。そうした時に、「『過去の暴力の亡霊』一人種主義、植民地主義、性差別といった亡霊—は、国民の境界を跨いで徘徊しており、集合的責任を成立させる加害者と国民との結びつきはほとんど妥当しない。加害者と被害者の境界が国民と国民の境界に一致するとは限らない」(p.96)という普遍的責任という視座を導入することで、アテンションを国民国家に限定する自己愛的な内向化の危険性を回避できる。

3. 今後に向けて

能動的な責任主体としての「日本人」にアイデンティティを固定することによってではなく、他者に向き合い他者からの名指しに応えることで集合的責任を果たしていく姿勢は、Brewer (2012) が紛争の鎮静化に有効な方法として提示した次のようなアイデンティティの複雑性の認識につながるだろう。

他方、自己のアイデンティティを多くの愛着側面から成るものとみなすと、ある側面は民族の過去と結びついているが、他の側面はそうではない。ある側面は宗教的伝統と結びついているが、他の側面はそうではないということに気がつくと、・・・その人は、他の人々とも、また自分自身の「仲間」ともこれまでとは異なる関係に入っていく。もはや「彼ら」と「われら」という問題は存在しない。・・・そうしてみると、「われわれの」側に存在する人々と私はほとんど共通点がないということがある一方で、「彼らの」側には私が非常に親密に感じる人々がいるという・・・。

(Maalouf 2003, Brewer 2012 p.145 に引用)

2009 年から 2013 年まで京都と南京でワークショップを重ねてきたが、参加

者の感想からはワークショップの終了後、Maalouf が示唆するような異なる集団への親密感に基づく「交差的連帯」が自然発生的に生じていたことが伺える。そうした連帯感を感じることは、Paez と Liu のいう「内集団と外集団のカテゴリー化や区別」を曖昧にすることで、「内集団の優位性」を解体することにつながり、ひいては「過去の紛争に関する CM」を書き換えることにつながるだろう。（これができたのは、ひとえにアルマンド・ボルカスの心理療法師としての深い技量と存在感があったからこそである。彼が創り出してきた安全な場においてこそ、日本人・中国人の参加者が互いに深い感情を表現することができ、信頼を醸成することができた。）

2014 年度からはこれまでの成果や課題を踏まえ、HWH の諸前提やエクササイズのある方を検証していく予定である。この稿で検討した集合的責任と普遍的責任という視座も含め、日中双方の参加者が共有できるような新たな平和教育の枠組みを構築し、戦後最も危険な状態にまで至ってしまった東アジアの情勢に何らかの寄与をしていきたい。

参考文献

- 安彦一恵・魚住洋一・中岡成文（編）（1999）「戦争責任と『われわれ』—『歴史主体論争』をめぐる」 ナカニシヤ出版
- Brewer, Marilynn B.（2012）アイデンティティと紛争「紛争と平和構築の社会心理学—集団間の葛藤とその解決」バル・タル, D.（編著）熊谷智博・大淵憲一（監訳）所収 北大路書房
- 福岡良明（2009）「『戦争体験』の戦後史：世代・教養・イデオロギー」中公新書
- 熊谷伸一郎（編）（2009）「私たちが戦後の責任を受けとめる 30 の視点」 合同出版
- 村上登司文（2009）「戦後日本の平和教育の社会学的研究」 学術出版会
- 村川治彦（2012）一人称から歩み直す「戦争体験」—体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて「共同対人援助モデル研究 3」立命館大学人間科学研究所
- 小田博志（2012）南京と『和解』—歴史の深淵に橋をかける 「共同対人援助モデル研究 3」立命館大学人間科学研究所
- Paez Dario R. and Liu, James Hou-fu（2012）紛争の集合的記憶 「紛争と平和構築の社会心理学—集団間の葛藤とその解決」バル・タル, D.（編著）熊谷智博・大淵憲一（監訳）所収 北大路書房
- 斉藤純一（1999）政治的責任の二つの位相—集合的責任と普遍的責任 「戦争責任と『われわれ』—『歴史主体論争』をめぐる」安彦一恵・魚住洋一・中岡成文（編）

所収 ナカニシヤ出版

竹内久顕（編著）（2011）「平和教育を問い直す―次世代への批判的継承―」法律文化社
ボルカス、アルマンド（2012）「HWH 歴史の傷を癒す」プログラムの基礎と応用 「共
同対人援助モデル研究 5」立命館大学人間科学研究所

6-2 Cultural and National Identity and Responsible Subjectivity

Haruhiko Murakawa (Kansai University)

1. Reviewing the past seven years

Since 2007, we have continued to apply the method of Healing the Wounds of History (HWH), created by drama therapist Armand Volkas to the issues of violence and war memories of East Asia. Recently the relationship between Japan, China and Korea have become the worst since World War II, due to territorial disputes and statements made by politicians in regards to comfort women. Paez and Liu (2012), examining the effects of collective memories of past disputes on current dispute processes by citing Bar-Tal's argument as support, claimed "past disputes, especially those collective memories filled with wartime emotions implant fear and distrust in people making it practically impossible for negotiations aimed at a coordinated solution." He further maintained, "Collective memories regarding past disputes are categorized and clearly distinguished between internal and external groups, while prioritizing the internal groups." The following excerpt from Paez and Liu clearly expresses the effects of past disputes reflected in the current state of affairs in Japan.

In every culture there is a tendency to glorify their wars and to forget about the foreign victims. Society will remember the heroes and soldiers from their own group while forgetting the crimes and evil acts they

committed, which results in a repeated process of defining their own members into victims and those opposing into perpetrators and assailants. Thus, violence becomes interpreted as the correct method of retaliation. Past social representations resulted in actively increasing aggressive behaviors by justifying war and collective violence as a proper and logical response to past attacks by others. This resulted in a vicious cycle of mutually strengthening their sense of being victimized. (P.126)

It has been almost 70 years since the end of World War II, and in Japan there have been numerous discussions in regards to the inheritance of wartime experiences (Fukuma 2009) and the proper ways of taking wartime responsibility (Kumagai 2009). There have also been specific peace education movements focusing on violence and wartime subject matters to broader peace education movements focusing on structural violence, intercultural understanding, human rights, and environmental issues (Murakami 2009). Despite this, wartime issues and memories in East Asia have created extreme tension. In such a situation Paez and Liu claim that “the important step to promote a peaceful settlement is to first stop the dehumanization of opposing groups and to begin humanizing them by understanding their pains.” However since 2007, what our project “Remembering Nanjing” has been trying to accomplish with the help of Armand Volkas, is to create trust and friendship between Japanese and Chinese people and using this as a foundation to create a mutual understanding of history and a relationship for the future (Murakawa 2012). Since 2011 we have received a research grant for this project, and as we are in the final year of this grant, we are in the process of summarizing and reviewing our past efforts and examining our tasks for the future. As we are still in the process of examining the detailed analysis of our data, I would like to present the results and future tasks presented at the international meeting, which took place at Nanjing Normal University in September 2013.

There are three major results that have been a product of the HWH workshops focusing on East Asian issues, taking place in Kyoto and Nanjing.

1) Sharing humanly sentiments:

In this HWH, we performed an exercise where participants expressed their feelings after visiting The Memorial for compatriots killed in the Nanjing Massacre by Japanese Forces of Aggression and listening to stories told by survivors of the Nanjing Massacre. Subsequently, on the final day, participants expressed their sympathy after offering condolences at the Yanziji. Japanese and Chinese participants were able to share intimate emotions and increase mutual understanding after expressing and sharing their honest feelings of anger and grief about the tragic wartime realities.

2) Grasping history as a personal issue:

By overcoming the differences of Japanese and Chinese education and using their shared sentiments as a foundation, participants were able to perceive experiences of violence and victimization that they did not directly take part in as a more personal emotional experience. Additionally, Japanese participants who lack a mutual understanding of the wartime experiences with the rest of East Asia due to postwar educational agendas, used wartime experiences passed down through Japanese family relationships to grasp the perception of wartime issues as a personal, current issue.

3) The importance of generational transmission:

It became apparent that the transmission of wartime experiences differs not only between Japanese and Chinese social contexts, but also within both societies. Especially as times changed, the generational gap increased regarding the wartime experiences, and the importance of transmitting experiences between generations became apparent for both the Japanese and Chinese.

Through the responses and reflections of past participants and staff members, the following tasks became apparent for the future.

1) Limited influence created by limited number of participants:

For HWH, as a psychotherapy workshop, it is of utmost importance that there is a safe and comfortable environment for the participants. For this reason, we have limited the number of participants to between 20 and 40 every time. For a psychological workshop that targets a few members for an extended period of 3-4 days, time and spatial limitations are great. For a Japanese-Chinese relationship that is currently increasing in opposition, the influences these small groups have are close to none.

2) The conflict between making a social impact and maintaining personal privacy:

In order to overcome the issues presented by the limited participant numbers, there is a need to spread social awareness through presentations and publications of the experiences of those who attended HWH programs. However, to release the contents of an experiential workshop would mean to enter the realms of not only personal privacy, but those closely affiliated with the individual, and is not an easy topic to resolve.

3) Cultural and National identity and the way of responsive subjectivity

HWH uses German and Jewish reconciliation as a model and bases its psychological processes with the premise of the existence of the modern Western ego. However in order to apply this to the reconciliation processes in East Asia, there is a need for careful examination of the characteristics of cultural self-awareness. There is especially a need to reexamine the way of HWH, which sets its objective on guilt and apologies straining from an identity based on the nation-state.

Especially the third task presented of "Cultural and National Identity and the way of responsive subjectivity" is one, which is closely related to the criticisms and problems raised by Oda (2012) towards the premises and method of exercises of HWH. As such, I would like to examine this issue further in this paper.

2. A dilemma between reinforcement of national identity and war responsibility

One of the "HWH" premises Volkas (2012) suggested is "Historical

trauma can also have negative effects on cultural or national identity and self-esteem. Human beings are tribal in nature and have a need to feel good about the tribe to which they belong." Based on this premise, HWH aims at helping the participants aware of the positive side of cultural or national identity and accordingly reinforcing such an identity. However, taking the current conflict in the East Asian regions into consideration, this premise may highlight the difficult point of HWH. Because, as Brewer (2012) suggests, "identity, especially group identity or collective identity, plays an important role to originate and maintain the conflicts among groups." Moreover, "what is the worst is not the group identity itself, but rather a simplified identity which reduces the complexity of individual attachments and belongings to the simple distinction of we-they." The premise Volkas takes may ask for the Japanese participants to accept actively "the Japanese identity" as a responsible subject for the war perpetrator, which, though aiming at transforming their identity positively, may be in danger of reinforcing the collective identity which might be the origin of such perpetrations.

Japanese participants in these workshops, who are second or third generations and have no direct experiences of perpetrations, are encouraged to take a further step in order to "feel good about the tribe to which they belong," especially in accepting the collective responsibility as "Japanese" who are listening to the stories of war victims. However, for a Japanese, accepting an identity of "Japanese" brings about a problem to connect to the collectivism, which was an origin of such perpetrations rather than finding the positive side of their identification. This is because, in Japan, different from Germany where the political system was interrupted between pre and post war, some high government officers and politicians keep denying the war responsibility. Avoiding such a dilemma and feeling positively towards "Japan" we need to deny certain part of Japan and identify with arbitrarily idealized "Japan" which is exactly what the historical revisionists have done. Therefore, as the result of a HWH premise, reinforcement of identification with Japanese, even if they are actively accepting the war

responsibility, may reinforce the nationalism which is exactly the origin of conflicts in East Asian region we are now facing.

Regarding this complex issue of "Japanese" identity and war responsibility, in 1995 "After the lost war" by Norihiro Kato brought about serious discussions on "Historical Subjectivity" (Abiko and others 2012) Following those discussions, especially "Two Aspects of political responsibility-collective responsibility and universal responsibility" by Junichi Saito, we will examine this issue.

What Saito viewed as the most serious problem was the deflection of attention. He first pointed out that those war victims (i.e., comfort women and Nanjing massacre) have been put into a position of "obscurity", in terms of Ardent, over a half century, and such a course of time was as important as the time itself such violence was originally conducted. Then he stated "what put them into that position of "obscurity" for a half century was the lack of willingness to listen to the voices of those victims, which was caused by the absence of attention, rather than forgetfulness or forgetfulness of forgetfulness." In order to correct this deflection of attention, Saito proposed that we should accept not only the collective responsibility but also the universal responsibility. He explained this in the following:

In the recent discussions on the war responsibility, some people emphasize the establishment of the subjectivity, which can take the collective responsibility, and the collective identity of "Japanese." However, I am wondering if such a position can respond to a claim by others who request the reformation of "attention on the nation." I think that we are asked for not only taking the collective responsibility but also the universal responsibility which requires the de-collectivization of attention." (Saito 2012, P.79)

As Saito pointed out, this attitude of focusing the attention inwardly on nation/citizen (of Japan) has been in common among the discussions on war

responsibility after the war; this is shared by not only an obscure "national confession of Japanese war guilt" but also after war democracy, exemplified by Masao Maruyama who aimed at reflection on and overcoming the pre-war ultra-nationalism by driving the Japanese citizens to establish the active responsive subjectivity. What Saito claims as the problem here is that focusing on "Japanese" lead to the elimination of "others" even if their intention was establishing the subject who can take war responsibility. In sum, all the discussions on war responsibility after the war have the same "structure of monologue by the citizen subject with inward attention" in that "they emphasize the active self-establishment towards responsive subject, and do not put themselves in the passive position in which they are questioned and called by the national others."

In an exercise of this HWH, the participants are encouraged to state, "I am a Japanese and I feel...." or "I am a Chinese and I feel..." in front of the group members. In this exercise, I am regarded as a "Japanese" not as an individual, i.e., Haruhiko Murakawa, by Chinese participants. Although the purpose of this exercise is good in "recognizing and deconstructing cultural or national identity" (Volkas 2012), but some participants may feel "the obvious violence forced on me, if others one-sidedly bind me in a category without considering my personal behaviors or opinions." (Saito 2012 p.88)

On the other hand, if I was listening to survivors whose family was killed by Japanese soldiers, I cannot reject one-sidedly being called as Japanese. As Saito suggests, "In a relationship between me and others who call me "Japanese" my rejection of the calling by others results in stronger violence than by others. Saito furthermore points out that "in the relationship (in which Japan invaded China and killed numerous Chinese during the Asia-Pacific War) if we reject the calling by others, it means the reject of making the relationship with those others. That is, such a rejection inevitably reinforces the existing relationship in which I am forced to be categorized into Japanese." (p.88)

This "asymmetry of relationship" between Japan and China (or other Asian Nations) is historical in nature and if we reject "the fact that we

ourselves have already lived such a relationship which we succeed to the historical relationship from the previous generations who have engraved numerous injustice and therefore we post war generation should take collective responsibility (p.89)," then that brings about the violence to reject our current relationship.

Based on such an examination, however, Saito also emphasizes that even if others call us as "Japanese," it does not have to be tied to defining myself as "a Japanese." He claims, "When others call us "Japanese," what they call is not our citizenship or belonging to the nation itself but this very historical relationship with the victims." The reason that we should accept the calling for "Japanese" is that "it is a start of re-engagement with others who call, but not that we with an identity of a group of perpetrator face with a group of victims." (p.90) What is significant is "to identify the issues between me and others, not the collective subjectivity." Saito further suggests that the asymmetry of historical relationship which is a basis of such calling should not be fixed as it is, but should be an opportunity to make new narratives both for others and me. He explains this as:

Although we require ourselves to acknowledge that it is fundamentally impossible to be in the place of someone else, these sorts of differences in historical experiences does not get in the way of forming a mutual understanding and memory that is neither explicitly ours nor theirs. If anything, people should not hold the past of their country as something exclusive, but rather exchange their narratives as experiences that resulted in similar emotions but were experienced in different ways, in order to create a mutual historical understanding and memory that crosses national borders. (p.91)

In order to realize the possibility of such narratives, there is a need to think about the "universal responsibility" (Ardent 1994), which distinguishes itself from the "collective responsibility" presented by "the questions posed by a certain individual who has a specific historical relationship". This is

because “ (in ways not limited to the Nanjing Massacre and comfort women) Our current life is built upon the injustices of the past that are passed down, and having our lives shaped by these injustices which we do not even remember ourselves is in itself an injustice which we live with everyday. The fact that we do not tangibly know of these past injustices, or know of them only in very specific ways, creates our lives and our current lifestyles and regulates our distorted relationships with others” (p. 95-96). By realizing this and expanding our attention from specific citizens and nations to the world and humanity, or even to life in general is a way to form the viewpoint of universal responsibility.

Both “personal responsibility” and “collective responsibility” do not necessarily result in “universal consideration”. Universal responsibility requires a consideration to not create an area of “obscurity” where we dismiss things as none of our concern, and an attention to not leave someone as a “lost cause”. This is “universal” in the sense that we do not chain our attention into a closed system. (Saito 2012, p.94)

The reason that Saito switches his focus from collective responsibility to universal responsibility is not to look away from collective responsibility but because, “it seems as though much of the discourse on the importance of taking collective responsibility is focused not on others but more on reproducing the concerns that ‘we’ align ourselves with” (p.96-97). When war victims refer to us as “Japanese”, the reason we respond is not to “regain our pride and honor as ‘Japanese’”. Rather, we respond in order to, “Constitute trust through keeping our eyes open to the hardships of the ‘non-Japanese people’.” Furthermore, we use this trust as a basis for finding a way to accomplish universal responsibilities with people living in the same generation. Although it would usually be impossible to talk about universal responsibilities without talking about collective responsibilities, if we, who have no personal responsibilities for actions taken before we were born, are stuck in the boundaries of collective responsibilities without a viewpoint on

universal responsibilities, we end up limiting our attention to the boundaries of nation states. When this happens, "the ghosts of past violence' – such as racism, colonialism, and sexism – wander without regards to national borders and the ties between perpetrators and a nation, which is at the basis of collective responsibility ceases to exist. Thus, the boundary between victims and perpetrators and the boundary between two nations is not always consistent" (p.96), and by introducing the viewpoint of universal responsibilities, it is possible to evade the dangers of narcissistic introversion caused by limiting our attention to nation-states.

3. Towards the future:

What is important is not to fix our identity on "Japanese" who plays an active agent fulfilling one's responsibility, but rather to take an attitude to fulfill the collective responsibility by facing the others and responding to the calling from them. This might lead to the proposal of Brewer (2012) in which recognizing the complexity of identity is an effective way to resolute the conflicts and showed the citation from Maalouf as follows:

On the other hand, if we regard our identity as consists of various aspects of attachment, we can see that some aspect might relate to the past of our nation but others might not. If we realize that some aspect is related to the religious tradition but others not, that person may get into the different relationship with other people, or even his/her own "peers". Then, the issue of differentiating "them" from "us" does not exist anymore....I might realize that while those who belong to "us" do not share anything in common with me, I might feel very intimate with some people on "their" sides. (Maalouf 2003, citing in Brewer 2012 p.145)

From 2009 to 2013, we have organized workshops both in Kyoto and Nanjing. The participants of these workshops reported that after the workshop, some "social solidarity" based on the intimate feeling with others-

group as Maalouf suggested had spontaneously emerged. Feeling such "solidarity" may dismantle "the primacy of in-group" by making ambiguous "the categorization and distinction between in-group and out-group," and in turn may lead to rewriting the "collective memory of past conflicts." (I should emphasize here that this totally owes to the deep presence and professional skills of Armand Volkas. Without the safe space he created, Japanese and Chinese participants could not have expressed the deep emotions nor established the trust to each other.)

From 2014, we will proceed to examine the results and issues of these workshops and verify the premises and exercises of HWH. Taking the theme of collective responsibility and universal responsibility I discussed here, we will make more effort to establish the new framework for the experiential based peace education method in which we hope that both Chinese and Japanese participants can make some contribution to change this most critical situation after the WWII in the East Asian region.

7-1 「南京を思い起こす 2013」に参加して

中村 正（立命館大学）

私の両親は幼い時に戦争を体験しています。その上の世代である祖父母たちからも戦争体験はよく聞きました。もちろん公害問題に代表されるような高度経済成長の矛盾が噴出していた若い頃、社会問題にも敏感でした。ですので、社会改革への関心は高く、高校の頃には平和運動に参加していました。特に原水爆禁止の運動です。その過程で、第二次世界大戦の全体像を勉強する機会がたくさんありました。世界平和の構築に戦争加害者の末裔として何ができるかを考えていた日々でした。そのことが今回初めてのセミナー参加へと私を駆動した遠因です。

さらに日々の研究と教育と実践がそこに重なります。私の関心は「対人暴力の研究」です。そして性犯罪、ドメスティック・バイオレンス、子どもや高齢

者への虐待、ハラスメントなどの加害者臨床も試んでいます。その研究と実践で心がけていることは、暴力を振るう個人の人格の特性に還元せずに暴力を社会問題と関連づけていくことです。特に男性の暴力として対人暴力を位置づけていくと、社会全体のもつ暴力性がみえてきます。ジェンダーとしても、世代としても、職業的地位としても、そして地政学的な日本の歴史的な位置からしても、どちらといえば加害の側に傾斜することになる自分の立ち位置から、個人や対人関係における暴力から国家間関係における暴力までの多様な形態の暴力の相互関連を把握することに主要な関心があります。

また、私の個人史をとおして、歴史のなかの暴力と加害の責任の理解について、過去をきちんと知ることと、その過去が十分に責任の所在も含めて整理できていない現在を生きるものとしての責務があるので、そのことの自覚のためにも多様な機会を逃すことなく体感してみることが大切だと思っていたからです。

今回の参加をとおして印象に残ったことは、修復・和解と相互理解について世代を重ねて地道に取り組むことの重要性でした。中国で日本語や日本文化を勉強することがもつ大学生たちの苦労と意気込みを実感したのです。若い大学生たちの祖父母の世代は直接の戦争被害者たちです。その孫たちが侵略国であった日本のことを勉強しているのです。その背後には急速にすすむグローバル化があります。日本には中国製品があふれています。比較的安い商品の背景に中国の労働事情を考えざるを得ません。相互依存は歴史や戦争のこととは別次元で進行しています。さらに日本文化を好む中国の若者たちも多く存在しています。いまや文化と経済は急速に相互に浸透しています。それとは対比的に冷たい政治の状況があり、緊張があります。このはざまに日本語や日本文化に関心をもつ若者が置かれていることを実感しました。世代間関係があることがよくわかりました。

他方で、日本の若者はその緊張を受けて、歴史や戦争や責任のことについての無関心を形成しています。これは緊張や葛藤を回避して生きているともいえます。しかし経済の相互依存の恩恵は受けています。双方の若者の置かれた異なりをとおして、その媒介をすべき50歳代の私たちの世代ができることは何であるのかについて直面させられたセミナーとなりました。

こうした意味で考えたことは、教師でもある自らにできることの大きさでした。それは教育のもつ重要性ということです。この種のセミナーに参加するこ

とはもちろんその一環でもありますが、無関心さが支配的な日本の若者へのフィードバックです。しかも押しつけでないようにしてアプローチする工夫が要と思いました。あくまでも＜現在＞を起点にしていくことを重視し、歴史や戦争や責任という過去とのつながり方を工夫して教育すべきことです。とくに、脱暴力の実践や加害者臨床をしているので、そのこととの重なる工夫をすべきことについて学びがありました。具体的には男性性ジェンダーと暴力の関連においてこの工夫をすべきだということです。兵士たちは男性でした。日本の加害行為も多くは沈黙のなかにあります。社会の暴力への直視ができていないので個人もできにくいのです。社会の脱暴力への臨床と個人の暴力の直視は重なります。ジェンダーの暴力と男性性のあり方は戦争と責任と和解と修復にとっても意味のある取り組みの視点だと実感できたことはとても有意義でした。

7-2 参加「回忆南京 2013」

中村 正（立命馆大学）

我的父母经历过战争，我也听祖父母讲过战争的经历。当代表公害问题的高速经济成长的矛盾喷发的时候我对社会问题很敏感，因此对社会改革越来越关心，高中的时候参加了和平运动。特别是在禁止使用原子武器运动的过程中，获得了很多学习第二次世界大战整体面貌的机会，也因此那段日子一直在想作为战争加害者的后裔，我能为世界和平的构建做些什么。这也是驱使我参加这次研究会的间接原因。

并且我平日的研究，教育，和实践的重心也放在这里，主要做「对人暴力的研究」。除此之外我还尝试着做，性犯罪，家庭暴力，对儿童或老年人的虐待，骚扰等加害者的临床。在研究和实践中我会注意，不把问题还原于施加暴力个人的人格特性，而是想它与社会问题的关联。特别是对男性的暴力，把它定位为对人暴力，从社会整体具有的暴力性的角度考虑。不论是从性别，世代，职业地位，还是地政学的日本历史的位置的角度，把重心放在从加害方倾斜的自我定位，从个人或是对人关系中的暴力，到国家间关系中的暴力，把握其多样形态以及相互

的关联。

并且，通过我个人的成长史，对历史中的暴力和加害责任的理解来看，要了解过去，了解过去里包含着责任之所在，而且还有活在未被整理好的当下的人的责任和义务，因此为了自觉这一点，不要错过各种各样的机会，通过身体去感受是件重要的事情。

参加这次研究会，修复·和解和相互理解是需要几代人踏实努力的事，以及其重要性，留下了深刻的印象。也深切体会到在中国学习日语和日本文化的大学生们的辛苦，感受到他们的干劲。年轻的大学生们的祖父母是战争的直接受害者，而他们的孙子在学习侵略国日本的东西，这背后存在着急速增长的全球化现象。在日本到处都是中国制品，我们不得不去思考在比较便宜的商品背后，中国劳动力的现状。相互依存与历史和战争不同，以另次元的方式进行着。并且喜欢日本文化的中国年轻人也有很多。现在已经是文化和经济急速的相互的渗透着。而与此相对比冷淡的政治状况，紧张气氛也存在着。通过这次研究会，对日语和日本文化抱有感兴趣的年轻人深处这样的缝隙里的现状深有感触，也明白了世代间的关系。

而与此相反，日本的年轻一代对这样的紧张气氛，历史，战争，责任的事毫不关心，也可以说是在回避紧张气氛和纠结，但是却接受着经济相互依存的恩惠。这次研究会作为媒介的 50 年代的我们更加思考，在双方的年轻人所处的位置不同的情况下我们该做些什么。

这样的思考是作为教师的我能做的，也是教育所具有的重要性。当然参加这样的研究会也是教育的一环，把毫不关心的现状回馈给被支配的日本年轻人。但是并不是把这些强硬地施加给他们，而是在传达上下功夫。应该重视以<现在>为起点，如何与历史，战争，责任的过去链接的方法上下功夫进行教育。特别应该把它与我做的脱暴力的实践和加害者的临床相结合来考虑。具体来说应该在男性性和暴力的关联上下功夫。士兵们是男性。日本的加害行为大多也是在沉默中进行，因为不能直视社会暴力，所以个人也难以做到。社会的脱暴力的临床与个人直视暴力是有关联的。通过这次研究会，我觉得非常有意义的是，深切地感受到性别暴力和男性性的方式也是理解战争，责任，和解，修复的视点。

7-3 “Remembering Nanjing 2013” Participant’s Report

Tadashi Nakamura Ritsumeikan University

Both my parents have experienced war as children. I have often heard war stories from my grandparents. When I was young, a downside of rapid economic growth such as environmental pollution became apparent. I had a strong interest in social change issues, and as a high school student, I participated in the peace movement, especially the anti-nuclear weapons movement. During my participation I had many opportunities to learn about the overall picture of World War II. During those days, and as a descendent of the war perpetrators, I thought very hard about what I could do to contribute to peace. These are some of the reasons why I decided to participate in this seminar for the first time.

My research and my work as an educator also influenced my participation. My interest is in interpersonal violence, which includes clinical work with perpetrators of sexual offence, domestic violence, child and elderly abuse, and harassment. What I try to keep in mind in my research and clinical practice is not to distill violence to the individual personality traits but to relate violence to social issues. When attempting to place male violence within a larger social context, violence within the larger societal system becomes visible. I realize that I am placed in a potential perpetrators’ position sexually, generationally, occupationally, historically and geopolitically. From this standpoint of a Japanese man, I am interested in understanding the inter-relatedness of all forms of violence that occurs on all levels, from personal, interpersonal to international.

In addition, I think it is very important for me to have the opportunity to experientially learn and to understand through my own personal history, the responsibility of violence and perpetration within history. I have a responsibility as a person living in the present where past history and the issues of responsibility remains unresolved.

Participating in the seminar made me realize again the importance of

continuing to work at reparation, reconciliation and mutual understanding over many generations. I saw the enthusiasm as well as the difficulties of University students willing to study Japanese and Japanese culture in China. Grandparents of these young students are the generations with direct war experience. The grandchildren of these people are studying Japanese, a language from a country that invaded them. Behind this phenomenon is a force of rapid globalization. Japanese life is filled with made-in-China products. When looking at inexpensive products, I cannot help but think of working conditions in China. This economic interdependency is growing on a whole different dimension from war and history. There are also many Chinese people who like Japanese culture. Culture and economy are rapidly and mutually infiltrating. In contrast, there is coldness and tension in our political situation. I was able to grasp that young Chinese people who are interested in Japanese language and culture are placed within this paradox, as well as the fact that there are intergenerational issues.

On the other hand, in general, young Japanese people in the face of this tension seem to be forming growing disinterests in history of war and responsibility. Perhaps we could even say that they live avoiding tension and conflict. However, they still benefit from the interdependency of our economies. In this seminar, facing the situations that these young people are in, I had to think very hard about what we, as people in 50's, can do as mediators for the younger generations.

I realized that there is a lot I can do as an educator and the important role that education plays in this issue. Attending seminars like this is part of these educational efforts but giving feedback to young Japanese people with prevailing disinterests could be another. Of course we need to be crafty in approaching them non-imposingly. It is important to originate the discussion in the current issues, and to educate about the connection between the current and the past that includes history, war and responsibility. Because I practice non-violence and clinical work with perpetrators, there are many overlapping issues and things that I would

like to exercise. In particular, when working with the theme of male sexuality and violence, I would like to use the inspiration gained from this seminar. These soldiers were men. Much of the acts of perpetration in Japan lie in silence. Our society cannot look straight into the eyes of violence and therefore individuals have difficulty doing so. Clinical work for the purpose of creating nonviolence in society has much to do with looking into personal violence. For me looking at gender violence and masculine / male sexuality throughout this seminar gave me a useful standpoint in tackling the issues of war, responsibility, reconciliation and reparation.

8-1 参加《回忆南京》项目随想

南京大学 桑志芹

和村本教授见面有三次以上了，第一次我是在苏州表达性技术会议上我们同台工作坊，谈南京大屠杀历史创伤治疗，那是我知道村本教授在做关于南京大屠杀的研究；第二次是今年7月去日本京都立命馆大学学术访问，我们一起聚餐一起见面，一起上课相互交流学习，第二次见面，在一起有一种亲切感，不知道为什么像一个久违的朋友，那是我就告诉村本教授我回去要联系捐赠南京大学张宪文教授的72卷《南京大屠杀史料集》给立命馆大学和平博物馆，那是我感觉我们俩有一个共同的理想：就是让中日人民记住这段历史，让人间悲剧不要重演，让和平传递永远；第三次见面是2013年9月20日在南京师范大学南山宾馆三楼，《回忆南京》座谈会。

七年来村本教授致力于《回忆南京》的研究，致力于还原南京大屠杀的真实，致力于透过治疗南京大屠杀的历史创伤，不再让创伤代际传承。这是最让我感动的部分，特别是在当前日本右翼否认南京大屠杀历史，歪曲历史真实的今天还有像村本教授这样的学者能够站出来，致力于告诉大家南京大屠杀这个不争的事实时，让我很感动。能够正视历史的人，能够承认历史事实的人，是内在强大的人！我相信像村本教授这样的人在日本不是少数。

因为我工作在南京，生活在南京，我曾经采访过南京大屠杀幸存者，我经历

过聆听幸存者悲惨故事心痛的感觉，我目睹过那一张一张幸存者家中仅存照片的痛苦记忆……对日本军队惨无人道的罪恶行径感到深痛恶绝。

在座谈会上中日学者以理性的态度分析讨论南京大屠杀的事实，以人道主义精神倡导世界和平；看到中日的年轻人在一起泪流满面、依依不舍的分手的情景，让我看到的希望，看到了未来。《回忆南京》是一个非常好的项目，是一个值得去做去推展的项目，希望有更多的中日学者参与进来，希望有更多的中日年轻人参与进来。尊重历史，维护世界和平！

8-2 「南京を思い起こす」に参加した随想

南京大学 桑志芹

村本邦子先生には今回で3度お会いしました。最初は蘇州で開かれた表現性心理療学会で、私たちが南京大虐殺のもたらした歴史トラウマ治療について大会講演を行った時です。私は、その時、村本先生が南京大虐殺について研究を行っていることを知りました。2度目は今年、2013年7月、京都にある立命館大学を訪問した時です。私たちは一緒に食事し、お互いに勉強し合い、交流を深めました。そのとき私は、村本先生に対して、久しぶりに古い友人に会ったような深い親近感を覚えました。中国に帰国し、南京大学張文憲教授が書かれた72巻もある「南京大虐殺史料集」を立命館大学国際平和ミュージアムに贈呈するように働きかけようと考えました。それは、私が村本先生と同じ考えを持っており、日中両国がこの歴史を忘れず、人類悲劇が二度と起こることなく、平和が永遠に後世に引き続くよう願っているからです。3度目は今年の9月20日南京師範大学南山賓館で開催された「南京を思い起こす」の座談会の時です。

この7年間、村本先生は「南京を思い起こす」の研究に尽力されてこられました。南京大虐殺の真実を還元し、南京大虐殺の歴史トラウマを治療することによって世代間の伝達を断ち切ろうと考えています。私が最も感動したのは、日本の右翼が南京大虐殺の事実を否定し、歴史の真実が歪曲されている今日において、村本先生のような研究者が、力強く南京大虐殺という紛れのない事実

をみんなに伝えていることです。歴史を真正面から見つめ、歴史事実を認めることのできる人は、内面的に強い人だと思います。そして、私は村本先生のような人は日本で決して少数派ではないと信じています。

私は南京に暮らし、南京で長く仕事をしてきました。私は南京大虐殺の生存者をインタビューし、彼らの悲惨なストーリーを聞いた時の心の痛みを……また生存者が持ち続けているあの一枚一枚の貴重な写真を見た時の辛さを覚えております……私は日本軍の非人道的な犯罪行為を深く嘆きました。

座談会において、日中の研究者たちは理性的な態度で南京大虐殺の事実について分析・討論し、人道的な精神を持って世界の平和を提唱しました。日中の若者たちがともに涙し、別れがたい場面を目にした時、私は希望を見出し、未来を見ました。「南京を思い起こす」というのは非常に良いプロジェクトであり、広く広げる価値のあるプロジェクトです。

もっと多くの日中に関わる研究者、日中の若者たちに参加していただきたいと思います。

歴史を尊重し世界平和を維持し、守っていきましょう！

インクルーシブ社会研究 1 Studies for Inclusive Society 1

日中の戦後世代を対象にした
新たな東アジア型歴史・平和教育プログラム開発
～国際セミナー「南京を思い起こす 2013」の記録と HWH7 年の成果

开发以中日战后世代为对象的新型东亚历史与和平的教育方案
- 国际研讨会“记忆南京 2013”的记录和 HWH7 年的成果 -

An innovative Peace/History Education Program
for the Chinese and Japanese Post-War Generation:
Report on “Remembering Nanjig 2013” and Achievement
and Prospect of a Seven Year HWH Project

編集担当：村本邦子
(立命館大学大学院応用人間科学研究科教授)

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた修復的支援の研究チーム

2014 年 3 月 20 日印刷 2014 年 3 月 25 日発行

発 行	立命館大学人間科学研究所 http://www.ritsumeihuman.com/ 〒 603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 TEL (075) 465-8358 FAX (075) 465-8245
印 刷	株式会社田中プリント 〒 600-8047 京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町 677-2 TEL (075) 343-0006 FAX (075) 341-4476

